

四葉のもう一人の後継
者

fallere

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔法科高校、日本の九か所に設置された国営の魔法師育成機関。

そのうちのひとつ、『国立魔法大学付属第一高校』に、

アンタッチャブルと呼ばれる家から一人の少年が入学した・・・。

とか何とか言ってますけど、この話は追憶編から始まります。

あと、深夜さんも健在ですし真夜さんも原作と違って明るいです！

その他、原作との違いもあります。ですが話は原作沿いです。

初投稿で至らぬところもあると思いますが、よければご覧になってください。

安定した投稿ができるかはわかりません・・・。

なを、自己満足で書きだしたもので質は期待しないでください。

いや、ホントに・・・。

目次

プロローグ（というよりオリキャラ等の紹介）	1
番外編	
ある年の迎春会	7
魔法の無い成人式	13
Dead End	27
bad	bad
追憶編	23
追憶編 一節	31
追憶編 二節	37
追憶編 三節	44
入学編	
追憶編 四節	53
追憶編 五節	67
追憶編 六節	75
追憶編 七節	86
追憶編 八節	97
追憶編 九節	107
追憶編 十節	118
入学編 一節	132
入学編 二節	140
入学編 三節	153
入学編 四節	165
入学編 五節	176

九校戰編	九校戰編	九校戰編	九校戰編	九校戰編	入学編								
四節	三節	二節	一節		十三節	十二節	十一節	十節	九節	八節	七節	六節	
317	306	292	282		272	260	249	238	227	211	199	189	

九校戰編													
十七節	十六節	十五節	十四節	十三節	十二節	十一節	十節	九節	八節	七節	六節	五節	
446	436	428	421	411	401	389	380	369	360	349	337	327	

九校戰編	二十五節		516
九校戰編	二十四節		510
九校戰編	二十三節		503
九校戰編	二十二節		495
九校戰編	二十一節		487
九校戰編	二十節		476
九校戰編	十九節		464
九校戰編	十八節		455

プロローグ（というよりオリキャラ等の紹介）

四葉 昼夜（ヨツバ チュウヤ）

本作品の主人公。十師族『四葉』の現当主の息子であり、

2095年4月、十五歳で第一高校へ首席で入学を果たした。

誕生日は4月1日で、ギリギリこの学年である。

又、国家より認められ、世界にも知られている『戦略級魔法師』の一人でもある。

特殊な魔法技能を複数持つっており、通常の魔法も難なく使え、CADのメンテもできる、

up主的には有り難い『チート級魔法師』でもある。

いくつかある魔法技能でも有名なのは『キャストジャミング』『キャストアクティベーター』、

そして戦略級魔法『永光熱線』グロリアス・レイ。

本人の得意（特異）魔法は『光』であり、光と該当（認識）すれば大抵何でもできる。

身長は160強、体つきはやや筋肉質。

容姿は黒髪に銀色の瞳、顔は深雪に劣らない位にイケメン。

偽名を使うときは『白爪 中也（シラツメ ナカヤ）』で通している。

国防軍一〇一旅団の特尉でもあり、その際の名前は上の偽名で登録されている。中学までは学校に行っておらず、四葉家本邸で勉強していたが、母と叔母の願いもあつて高校に入ることにした。

欠点と言えば鈍感なことくらいしかない。自分へや自分の事に鈍感なことくらいしか・・・。

以下、原作キヤラ

司波 達也

言わずと知れた魔法科高校の劣等生の主人公。原作との変更点は特にならない。

今作では出番少な目となる予定である。up主の文才がないから・・・。

昼夜は信頼できる仲間であり、弟というところな感じなのか、と言う感じ印象。

自分と深雪の真の関係については追憶編前に教えてもらった。

深雪^{シンス}LOVE^ンは相変わらず。

司波 深雪

追憶編の前に達也に『再生』で命を救われており、既に達也を慕っている。

昼夜の事は少し憎たらしく思っていたが、今（2095）となつては昔の話。

今では弟のように想っている（誤字にあらず）。

昼夜は魔法技能を競い合ってきたライバルでもある。

自分と達也の真の関係はまだ知らない。

達也^{ッラ}LOVE^{コソ}は達也^尊LIKE^敬になった。

四葉 深夜

2095年、まだ万全とは言えないが、かなり健康体に回復してきた。

司波 龍郎とは既に離婚したため四葉姓を名乗っていて、真夜の手伝いを本邸ですいている。

達也にしたことは反省している。

しかし、反省した時には達也の成長もあり、元に戻せる力は残っていないかった。

達也自身もそれを望んでいなかったため元気になった今でも戻していないが、

達也に負い目を感じている。

昼夜は真夜との関係を直す手伝いをしてくれたこともあり、

又、『キャストアクティベート』により回復が進んだこともあり感謝している。

四葉 真夜

十師族のトップ二家の一つ『四葉』の現当主。

ものすごく昼夜を愛している。もはや親バカ、モンスターペアレンツ。

最近の悩みは昼夜の高校入学による巣立ち。

間もなくの悩みは昼夜のお嫁さん選び。

深夜と同じく達也にしたことを反省している。

因みに昼夜が十二歳になるまでずっと隣で寝させていた（八歳ごろから本人は嫌がっていた）。

無論、大漢の事件は起こっており、生殖機能は失われている。

昼夜は事件以前の冷凍卵子と最適な男性の精子によって、人口子宮で育てられた。

桜井 穂波

深夜のガーディアン、沖縄戦では原作と違い死亡していない。

今でも現役で深夜の身の回りの世話などをしている。

桜井 水波

穂波の遺伝子上の姪。

昼夜の進学の際に住む東京の別宅での身の回りの世話をする、昼夜のガーディアン。因みにその間、近くのお嬢様学校に通っている。

七草 弘一

十師族のトップ二家の一つ『七草』の現当主。

昼夜が産まれてから真夜の雰囲気さがらりと変わったことで四葉との関係もよくなかった。

そのことから、過去のしがらみをほぐしてくれた昼夜には感謝しており、ことあるごとに真夜や昼夜に「うちの娘を相手にどうかね？」と尋ねてくる。企みが全くない訳じゃないが、根はいい人。

七草 真由美

七草家の長女。一校の生徒会長。

昼夜が一校に入学すると聞いた妹二人を鎮めるのに必死。

かく言う本人も、（玩具として）昼夜の入学を楽しみにしている。

七草 香澄

七草の双子の姉。2095年現在中3。

父親の影響もあり昼夜を過剰に意識してしまっている。

とは言え、昼夜がたまに遊びに来てくれるからこれから楽しくなるだろうと思っ
る。

七草 泉美

七草の双子の妹。

父親の影響関係なしに昼夜を意識している。

昼夜の写真をコレクションしているのは七草家では周知の事実。

五輪 滯

日本の公開されているもう一人の戦略級魔法師。

その接点から昼夜とは仲がいい。年の離れた弟みたいな感じ。

昼夜に『滯姉さん』と呼ばせようと頑張っている。

九島 烈

かつて『世界最巧』と言われた魔法師。

すでに引退しているが今でも『老師』と呼ばれている。

十師族のバランスを保つのに四葉の戦略級魔法師が産まれて荒れるかと思いきや、

四葉がかなり融和的思考になったことで、冷や汗で済んだと喜んでいる。

深夜と真夜との関係もそれなりに戻ったが、昼夜とはまだ会ったことがない。

番外編

ある年の迎春会

俺は今超絶に暇だ。

四葉家の慶春会。要するに顔合わせだ。

俺は叔父様叔母様に頭を下げて回った。

時折何故か嫌味を言われるがお母様はそれを返すという現場が何度かあった。

お母様は過保護だ。既に小四の俺を隣で寝させる。

そのせいか、俺は親離れできない子供呼ばわりされる。いや子供だけど。

今も、子供同士でも遊んでなさいとは言われたが会場を出ていいとは言われてない。
い。

一体トイレに行きたくなければどうすればいいというのだろうか？

目的もなくぶらぶらと会場を歩く。

そんなことをしていると、俺の目に一人の美少女が映った。

美少女以外の形容法がわからない位の美少女だ。

俺は無意識に目が奪われていた。自分の喉元に何か近づいているとは知らずに。

「!?」

「動くな。深雪お嬢様を見ていたな、何が目的だ？」

声は俺の丁度耳元で聞こえる。俺と同じくらいの身長だろう。

「お前、何者だ？」

「答えないつもりか？ それでもいいがな。」

大人は睨み合いと称え合い。子供は無邪気に食事中だ」

ゆっくりとどのど元に感じる冷たさを見る。

「バターナイフ？」

「バターナイフでも剣筋とパワーで頸動脈を切れるぞ」

確かにこいつの言う通りだ。体を軽く動かすが全て押さえられる。

声を上げたらすぐやられるだろう。

「降参だ。俺はただその・・・深雪？ を見ていただけだ」

「・・・そのようだな。で、御当主様の息子がなぜこのようなところにて？」

首元からバターナイフが離れる。そして俺は向き直る。

この様なところと言うのはここは会場の端っこだからだろう。

それはそれとして俺は遺伝子を見る。魔法に関する遺伝子はほぼゼロ。

ある二つを除いて。それ以外は平均をはるかに超えている。

「四葉の忌子か……」

「なんででしょうか？」

しまった、口に出していたか。

「すまない。叔父様たちがお前たちの事をそう言っていたんだ。

かといって俺は言うつもりはないぞ。そう言うのも無理はないと思うが……。

さっきの口が滑ってしまった。許してくれ」

頭を下げる。するとこいつは少し慌てたように……

「そんな、一ガーディアンの人に頭を下げないでください。気にしてませんから」

そう言われて頭を上げる。そう言えば質問に答えていなかった。

「一応、さっきの答えだ。ただぶらぶらしてただけだよ。」

それと、敬語やめろ。俺に勝ったんだ。呼び方も昼夜でいい。」

「……わかった、司波達也だ」

「達也は確か……深夜叔母様の息子だったな？ それじゃあ深雪は？」

「俺の妹だ」

それにしては年に差はないように見えるが……。

「深雪お嬢様は三月生まれ、俺が四月生まれで一応同じ学年だ」

「そうか、俺は小4なんだが達也は？」

「俺とお嬢様も同じ学年だ」

ほうほう、意外と話してくれるもんだ。

「魔法の実力は？」

「俺がすっぽんなら月、泥なら雲だ」

「それはお前の力がどちらかと言うと異能だからか？」

「その通りだ。因みに、四葉家次期筆頭候補と戦つても負けなれと思つている」

それほどか。そして筆頭候補などと言われている人がいるのか。

俺も一応次期候補だから誰かは知っておきたい。

「その次期候補って誰だ？」

「・・・知らないのか？」

「ああ、少なくとも大人の話には出てこなかった。この会場にいるのか？」

「ああ、今俺の目の前に」

達也の目の前、俺しかない。

「まさかとは思うが俺じゃないよな？」

「そのまさかだ」

・・・マジか。

「どうにも御当主様が昼夜の自慢ばかりしているので次期にするのではとの事だ。

御当主様の自慢のせいで裏では陰口も多少飛んでいる」

「嫌味を言われたのはそのせいかな．．．」

「俺も今会うまで甘やかされて生きていると思っただが．．．」

「昼夜、お前殺ってるな？」

「そこまでわかるのか？ 流石だな。ただのガーディアンにしておくのが勿体ない」

「俺はお嬢様以外に付くにはないぞ」

．．．

「念のために聞くが、いかがわしい理由で見えていたら？」

「さっきのバターンナイフで首をはねていた」

「さて、さっき頸動脈を切るだったのに首をはねる事が出来るのか。」

「達也は重度のシスコンだ。治る見込みは低い．．．」

「待て、俺が見ていただけでナイフがあつたな？」

「そうだぞ、もう忘れたのか？」

「訂正、治る見込みはないだろう。」

「仮に俺が死んで、他の家も当主と合わせてお前たちを消しにかかったら？」

「全員殺すか屈服させてお嬢様を当主にする」

「さらに訂正。治そうと考えるのすらおこがましい。これが自然だと認識しろ。」

「んで、出来れば深雪の事を聞きたいんだが・・・」

達也がそこまで言う妹だ。きつと、ものすごくいい人だろう。

それから、凄く丁寧に深雪の話をさせられた。

クラスで友達を助けたとか、そんな小さなことでもどンドン話してくれる。

「こんなものでは足りないが・・・今日はここまでだな」

「ん？ ああそうか。もう時間だもんな。」

携帯は持つてるか？ LONEやってるならID交換しとこうぜ」

「わかった、俺もお前と話せて楽しかった。今度はお前の話を聞かせてくれ。」

お前しか知らない御当主様の秘密でも何でもありだ」

「それ話すところなことなさそうではあるけどな・・・」

そうして交換して俺たちは別れた。

これが俺と達也との馴れ初めだった。

魔法の無い成人式 b a d√

深雪 s i d e

遂に私もお兄様や高校時代の仲間と成人式を迎えた。

だけど、その中に私や他にも皆が愛した従弟の姿はない。

彼は死んだからだ。この世から魔法と言うものを消し去って。

「深雪、大丈夫か？」

「ええ、お兄様。少し昼夜の事を考えておりました・・・」

「ああ、昼夜は一体何を思っていたのだろうか」

お兄様は、ある程度感情を取り戻している。これも昼夜のお陰だ。

「何故、昼夜は今まで生きることが敵わなかったのでしょうか・・・？」

「俺にもわからない・・・」

だが、昼夜が生きていればもつと賑やかな成人式だったと思う」

お兄様はそれを言うてから黙っている。

私の中には昼夜を奪った世界に対する憎しみがあふれている。

昔なら、それだけで周りに冷気が発生した。

でも今は、冷気どころか想子さえも感じることはできない。

「……すまない。昼夜じゃなくて俺が犠牲になればよかったのに……」

それは考えなかったことではない。

でも、それはどんなに考えても無駄だと思った。

お兄様と昼夜はとある計画で宇宙に連れ去られそうになった。

だがその計画は、魔法師を道具として扱うものだった。

その計画に、お兄様は勿論、昼夜も合意はしなかった。

だが、国は、世界は、二人の参加を求めた。

お兄様は魔法師が道具や兵器であることを良しとしない。

そして昼夜は、自分の事を兵器であると言っても、

他の魔法師を、特に周りの仲間を兵器や道具にしようとは思わなかった。

昼夜は、さらに自分が仲間や家族を守れなくなることを恐れた。

ある種の自己中かもしれない。だけど、昼夜にとって自分の扱いは二の次であった。

彼は、個人として世界に宣戦布告をした。

魔法師の未来を守るために、仲間の未来を守るために。

「深雪……きつと私たちが心配をかけすぎたせいだよ……」

「ごめんね、深雪．．．私たちが昼夜さんの仲間だったばっかりに．．．」

皆はそんな風に自分の責任であるというばかりだった。

自分が昼夜の傍ににいるのにふさわしくなかったから．．．。

自分が昼夜の傍ににいるには力が足りなかったから．．．。

でも、私でさえも彼の隣ににいるには力不足だったのだろうか．．．？

お兄様でさえも、私たちを支えるのには力不足だったのだろうか．．．？

仲間の中で一番長く付き合いがあった私たちでさえ、認められなかったのに、

一体誰なら、彼は自分の横に立つことを、

代わりに仲間を支えることを許したのだろうか？

成人式が終わり、高校時代の仲間たちと食事に向かった。

だが、このメンバーだと矢張り、昼夜がもういないのを痛感してしまう。

「深雪、とりあえず注文しよ？」

「エリカ、今は別にいいわ。ドリンクバーだけお願い．．．」

「ん、分かった」

皆だつてシヨックを受けなかったわけじゃない。

この場にはいない他の仲間、

年下では水波ちゃんや泉美ちゃんや香澄ちゃん、亜夜子ちゃんと文弥君。

年上では中条先輩や市原先輩や服部先輩、七草先輩や十文字先輩に渡辺先輩。とにかく全員が彼がいなくなったことに多大なショックを受けた。

叔母様も、昼夜がいなくなつてから部屋にこもつてばかりだ。

「取り合えず、皆、ジュースは持った？　じゃあ乾杯!!」

「「「乾杯!!」」」

全員が、昼夜の事を思い出さないように注意して会話する。

それだけ昼夜は私たちの中で大きなものになつていた。

だけど・・・完全に隠しおせるものではなかつた。

このメンバーだとしても高校の話になるのは分かり切つていた。

思い出すのが嫌なら、このメンバーで集まらなければよかつたのだ。

なのに、仲の良かったメンバー全員が集まつた。

集まらないことは、逃げることだと思つたから。

昼夜は、世界を相手にしても逃げなかつたから。

「なんで・・・昼夜は自分の命より私たちの未来を取つたのでしょうか」

つい口から出てしまった。これは私の失態だ。

「(い)めんなさい・・・」

全員が首を横に振る。許さないではなく、仕方ないと。

「昼夜は分かっていたんだ。」

自分たちが計画に乗れば、今後も魔法師は道具として扱われると・・・

そう。きつと一度許してしまえばあの時勢力の強かった反魔法派は、

それを成功例として同じことを続けるだろう。

「でも、それは他の魔法師たちも分かっていたはずだと思います・・・」

「きつと、大きな国に立ち向かう勇気がなかったんだよ。」

私も人の事言えないけど・・・」

他の国、そして日本の魔法師にも、昼夜の賛同者はゼロではなかった。

だが、反対意見を持つ魔法師はすぐさま投獄された。

四葉家さえ、ほとぼりを埋められ動けなくなるほどに。

私たちも抵抗しようとしたが、あらゆる魔法師が国などの管理下に収められた。

魔法師のひな鳥であっても例外ではなかった。

結果、昼夜は私たちをお兄様に任せて一人で戦場に向かった。

その時の昼夜は、人体構造干渉と@・*+Φ▽によつて、魔法師としてほぼ完成していた。

ありとあらゆる世界の事象を自分の起こしたいときに起こせるレベルで。

「昼夜は、力をつけたのは皆を守るためだって言っていた……」
「でもさ、少しくらいは私たちを頼ってくれてもよかったのね……」

戦闘は太平洋で行われていた。

昼夜は封印された伝説の魔法により、ムー大陸を呼び起こした。

そこを自分の要塞として、ありとあらゆる敵と戦った。

それでも、昼夜は劣勢だった。一人で世界の戦力全てを相手にするのは不可能だった。

いざとなれば『グロリアス・レイ永光熱線』を世界の主要都市に撃つこともできた。

だが、昼夜はそれでは関係ない人まで巻き添えになるからとしなかった。

昼夜は悪魔で自分に手を出した相手だけと戦った。

上層部の司令官などは遠隔魔法で仕留めたりしていたが。

昼夜の兵士は、@!\$*&・として覚醒したペットのナルとホロだけだった。

二羽は、動物でありながら魔法を使い、昼夜とともに戦っていた。

「あの時、昼夜の奴は何度も世界中に計画の真実を言っていたのにな……」

「きつと、新ソ連とUSNAが組んでいたから何処も抵抗できなかったんだ……」

「そうですけど、あの戦いが終わってどっちの国も解体しましたしね……」

あの戦いが終わり、世界から魔法が無くなると、

新ソ連やU S N A、大亜連合のような巨大な国は分裂を抑える事が出来なくなった。魔法は抑止力でもあつたからだ。

技術が魔法に置き換えられようとしていたところだったから、その影響は甚大だった。

結果、今の地図は100年前とほとんど同じになつてしまった。

戦いの末期、昼夜はペットのナルとホロを憑代に@・*+Φ▽を発動した。

@!\$*&・であるナルとホロを憑代に使われた@・*+Φ▽の効果は、

世界との@・*+Φ▽であつた。

その情報量は、人間一人の精神で耐えきれぬものではなかつた。

だが、昼夜は@・*+Φ▽によって既に一人ではなかつた。

昼夜はそれらの情報を複数の精神で処理して、@!\$*&・のようなものになつた。

近づくものには爆雷を、業火を、烈風を、大滝を・・・。

想子切れを狙つて、各国は核ミサイルなどを次々に放つた。

だが、昼夜の想子はもはや人の量ではなかつた。

どんなにミサイルを放つてもやられない。魔法は発動し続ける。

全世界が諦めかけたその時だった、昼夜は情報を処理しきれなくなつていた。

いくら精神を複数持つて処理能力が異常でも、世界を支配するのは無理があった。各国は、魔法師、非魔法師に限らず攻撃をし、あと一步まで追い込んだ。

しかし、ある意味ではその形が最後に昼夜を満足させたのかもしれない。

魔法師と非魔法師が協力し、一つの巨大な敵と戦った。

その結果で満足したのか、昼夜は最後の魔法を発動する。

それは、人体構造干渉であり、精神構造干渉であった。

まず、世界の自分以外の生物から魔法に関連する遺伝子を抜き去った。

そして、世界の精神の構造に干渉し、人の世界を改変する手段を消し去った。

この二つの魔法によって、この世界からは魔法は消えた。

昼夜が一人立っていたムー大陸は沈み、昼夜の死体も見つからなかった。

そして、世界は魔法師を失い分裂する。

日本の十師族なども解体され、表の仕事が本業となった。

魔法に関するデータは全て謎の事故で失われ、魔法師開発のデータも同じく。

推測される彼の情報を聞いた吉田君は、

『@・\$*・&・を憑代にしたから、きつと彼の魂は冥界と言われるところにもいかず、

さらには輪廻転生の輪からも外れているだろう』

と言った。八雲先生も同じ意見だった。

昼夜の魂は、もうこの世界で芽生えることはない。

例え、私たちが死んでもあの世で昼夜と会うことはできない。

例え、他の生物、鳥、魚、虫、草花・・・そのどれとしても昼夜は戻ってこない。

名前だけを残して、四葉昼夜はこの世界から完全に消えたのだ。

昼夜は、最後の魔法の前に世界中に声を送った。

『もしかしたらこの先も@!:\$* & ■ が降りて人間に魔法を授けるかもしれない。

その時は、今回と同じ運命を紡ぐことはないように願うよ』

私たちが聞いた声も、その声が最後だった。

日本は被害を受けなかったかと言うと、昼夜が最初に個人として宣戦布告したこと、

それによって日本を責めるのを筋違いと言う事を始めに宣言した。

だから私たちは、傷ひとつ受けることなく今生きている。

お兄様に出兵の声がかからなかったわけではない。

だが、昼夜は再生を封印したうえでお兄様に大怪我負わせて帰らせた。

結果、お兄様は途中で戦線離脱して今ここにいる。

そして、昼夜の言う新しい魔法を授ける神はまだ現れていない。

私たちは、きっと昼夜に世界を託されたのだろう。

私たちは昼夜が生きていた方が世界はいい方に向かったと思っています。

だが、過去はどんなに嘆いても変わらない。

世界ではこのわずか一年足らずの戦争を『第四次世界大戦』と呼ぶ。

Dead End 27 bad√

達也と深雪は巳焼島、水波は眠らされている。

誰という疑問は、同じ部屋に彼がいる以上彼以外ありえない。

四葉昼夜、彼は外の状況を享受しながらごく普通のように立っていた。

数多のパラサイトが舞い、強大な魔法行使も理解している。

それで尚、彼はごく普通にいる。それが迫ることを理解しながら。

「やはり来たな。心配することはない。とつとと入って来い」

病室の扉が開く。そこにいるのは九道光宣^{パラサイト}だった。

「昼夜さん、あなたは・・・」

光宣は頭の回転も非常に早い。水波が眠っている状況も離解した。

「勘違いするな魔物、水波が見るべきは光宣だ」

「僕は九道光宣だ！ 水波さんを救う気持ちも何も変わっていない！」

「そりゃパラサイトは元の人間の重要思案を優先させるからな」

それは事実であり、光宣でさえ反論は不可能であった。

「それに、前は俺や達也を殺す気なかっただろ？ 今じゃ殺気ビンビンじゃねえか」

そこで気付く。大小にしろパラサイトの影響を受けている事を。

「俺ならそれを切除できる。お前が望むならするし、体質の改善も死力を尽くす。水波の現状も同じだ。だから気を収めろ」

「・・・ダメだ、僕が・・・僕が水波さんを救うんだ!」

その回答は予想していたものだ。自分のやり方で達成するのがパラサイトだ。

「なら、閣下との約束を果たすでしょう」

重力操作、流星群ミレティアライインと命を奪う攻撃を昼夜は開始した。

（お祖父様は・・・万が一の際に昼夜さんに僕を殺させようと・・・）

まだ光宣でもあったそれは、彼にそれなりの傷を与えた。

重力操作で地面に叩き付けられたが、流星群は発動前にかき消された。

「もう眼に慣れてきたか。だが死ぬ」

彼は『才』を見れる。パラサイトとの統合で覚醒したのは想像出来た。

精霊エレメンタル・サイトの眼で魔法式が理解できるなら術式グラム・デイスバージョン解散も可能だろう。

可能だけで、実行できるのは光宣の処理力のレベルが高いからだ。

スパーク、熱線、空気弾等あらゆる攻撃手段を開始した。

「水波は防音や光度制御で起きることはない。遠慮の必要はないぞ魔物。

俺は光宣を救わなければならない。

それが水波に対する報酬であり、閣下に対する礼であり、俺にとって証明であり、光宣に対する謝罪である」

それらの一部は術式解散が使われるが、追いつかないだけの攻撃である。

流星群を絡めるので障壁魔法は定義崩壊させられる。術式解散での対応を余儀なくされる。

「お前が俺の魔法を打ち消すなら、打ち消しきれない数を用意するまでだ」

「くっ……ふざけるな！」

水波にかけている以外のこの空間の魔法が全て無効にされる。

『喰い縛るモノ』『魔法は引裂く』『獅子は不死身たる』

魔法式ではなく想子から構成した攻撃手段を開始した。

グレイプニルは想子の鎖であり、精神体を捕縛するものである。

構成されている以上、構造はあるが、彼の異常な気質は把握を許さない。

「お前がどれだけ俺の手を潰そうと、俺はお前が防げない手を使おう。

だから魔物、諦めて死ね。そうでないと俺は何も果たせない」

「なら僕は全部を理解して貴方を終わらせよう。

だから死んで道を開けろ、四葉^{全ての原因}昼夜！」

狭い室内で激しくなる争い。互いに駆除なくして進展はない。

であればある種当然の結末である。

あらゆるを理解する眼と魔物バグサットによるバックアップ。二人の通常時の才は同等。

それを無理矢理本人の技術だけで補っている方が異常なのだ。

「やはり、こうなるのが自然か」

光宣の腕は、昼夜の胸部を・・・心臓を貫いていた。

「貴方の負けだ。そして、死だ」

彼の回復も、ここまでの重傷を直すことはできない。

どんな治療魔法師も治療不可。可能性のある達也は已焼島。

光宣の知りえるあらゆる手段を用いても不可能だろう。

「ふむ・・・確かに俺の死は確定的だ。だが、勝利を確信するには早すぎないか？」

風の刃、塵の弾丸、異常重力、異常温度、光宣はそれらの事象を理解、だが対応が出

来ない。

「これは一体!?! 魔法式が存在しない事象改変!?!」

「簡単な話だろ・・・俺が改変できないなら・・・世界に改変させればいい・・・」

「精霊魔法!?! だとしても魔法式は存在するはずだ!?!」

「なに・・・俺の命と魂全部捨てれば世界を支配下に置くことはできる・・・」

光宣は眼で理解しているのに、昼夜の言葉を把握できなかつた。

「俺はどうせ死ぬが・・・魔物の命くらいは冥土の土産にさせてもらおう・・・」

今この世界は俺は不死身で、お前は絶対悪だ。そういう世界だ・・・!

魔法なら光宣はいくらでも対応出来るだろう。

だが、彼が今敵対しているのは『世界の意思』である。

その事象改変に『魔法式』はなく、防ぐ『魔法式』を世界は認可しない。

時間を稼げれば昼夜の命が尽きるだろうが、世界はかなりの延命措置を施している。

昼夜のやるべきことを眺めるように、嘲笑うように、比較するように。

「そんな・・・そんな馬鹿げた話が・・・」

九道光宣は這いつくばっていた。確かにあまりにも馬鹿げた手段だ。

存在全てをかけて、自分を消し去るなどそこまでの価値があるのか疑問ばかりだ。

「生憎と・・・お前との差は理解していたんで・・・」

最後の最後の切り札だが、切らされるつもりはなかつたんだが・・・」

「何で僕を相手のするのにそこまで・・・貴方なら逃げることもできただろう?」

「言っただろう・・・? 俺は勝たないと何も果たせない・・・」

ならどんな手段を用いても勝たないといけない」

パラサイト浸食のように想子で光宣に干渉する。

「パラサイトを切除、侵食し他の全パラサイトの機能停止。

同時に内部魂魄、周公瑾を削除。遺伝子情報問題を訂正。

エラーチェック・・・問題なし。九道光宣は問題ない。

続いて桜井水波の精神構造体の修復を開始。

過剰負荷によるダメージを多数確認。通常の治療は不可能。

魔法演算領域に封印を施し、徐々に解凍することで再生を促進。

修復成功確率演算・・・97%。俺にできるのはこれまでか・・・。

光宣、後はお前達の手伝い次第だ。魔法は意志の力だ。

なら残りの3%どれだけ支え、どれだけ努力するかだ」

「なんで・・・昼夜さんはお祖父様に僕を殺すように言われたんじゃ・・・？」

「閣下は・・・九道烈はお前を可能な限り救ってほしいと言われた。

全く、可能な限りって命をかけて可能なやららないといけなくなるだろう？」

「平然としていたのは・・・処分することに躊躇いがなかったからじゃ・・・!？」

「精神構造干渉の手術情報は少ないからな。些細な情報をひたすら見ていただけだ。

全く、その回る頭はもう少し方向性が合えばな・・・」

とは言え、パラサイト化していた光宣は暴走を止められないだろう。

昼夜はゆつくりと体を壁に預けた。

「さて、達也が間に合ってもどうせ助からんしな．．．。

四葉昼夜の英雄譚はここで終わりか．．．。俺の器に合わんだろ．．．?」

「そう言えば、命も魂も捨てたって．．．」

「この調子じゃ死体は残らん．．．塵になつて消えるつてところか．．．

水波の目覚めは30分後だな．．．お前はそこにいろ．．．文字通りの命令だぞ?」

言いたいことはいったのか、昼夜の話がそれで終わる。

「昼夜さん、貴方の命はあとどれくらいですか?」

「持つて5分か．．．安心しろ．．．部屋は修復してるし、この血も残らない．．．」

「水波さんはもう貴方の部下じゃないでしょう? なぜそこまで?」

「水波は深雪たちには必要な人材だ．．．俺みたいな破壊しかできない奴より．．．。

そしてお前は俺と同等の奴だ．．．破壊以外ができるなら必要なのはお前だ．．．」

「遺言はないんですか?」

昼夜は不敵に笑う。山ほどあるからか、無いから聞くだけ馬鹿らしいのか。

「遺言はない．．．とは言わんが言わないぞ．．．

叶わん夢をつらつら綴つたところだな．．．最後の争いは楽しかったか．．．」

昼夜の体は末端から灰のようになり、煤のように散っていく。

「水波さんには何も言わなくていいんですか?」

「水波を救ったのは結果だ．．．俺は閣下との約束を果たしただけだ．．．お前を救うのに水波が助かってなかったらまた同じ道に堕ちかねんだろ．．．？」
そういうことにしたいのか、それが真実なのか、四葉昼夜は崩れていく。

「また同じ人生を送るなら．．．もつと自由に生きるとしよう．．．」

四葉昼夜は死んだ。死体も残らなかつたため嘘という話もはやつたが後の祭りだ。

恐ろしい怪物の消失を喜ぶ者、偉大な英雄の死を悲しむもの。

どちらにしろ言えるのは、この#\$△"くであつたということだけだ。

追憶編

追憶編 一節

今日からしばらくの家族旅行。飛行機で沖縄まで。今はその移動中だ。それも去年までとは違いお兄様が私の隣に座っている。

「深雪、そんなにニコニコしてどうしたんだ」

「いえ、お兄様が私の隣に座ってくれるのがうれしくて」

そう、今私はとてもうれしいのだ。

ただ、

従弟さえいなければもつと嬉しいのに。

四葉 昼夜、私の従弟。

ものすごい魔法力を持ち、想子保有量も多い、私と同じ魔法師の卵。それだけのはずだ。なのに妙にお母様や叔母様と仲がいい。

今もお母様と話している。あんな従弟の何が面白いのだろうか？

お兄様への待遇も少しずつ良くなってきているのに、息子よりも甥の方が大事なのだろうか？

そんなことを考えている間に飛行機は沖繩についた。

私たちは荷物を預かって買ったばかりの別荘に向かった。

「いらつしやいませ、奥様。深雪さんに昼夜君に達也君もよく来てくれたわね」

別荘で迎えてくれたのはお母様のガーディアン桜井穂波さんだ。

あげてもらってまづは冷やしておいたという麦茶をいただいた。

しばらくして外に出ることにした。折角来たのに引き籠もっているのは勿体ない。

「お母様、少し歩いてきます」

「そうね、深雪、昼夜と達也を連れて行きなさい」

まただ、私か何か行動をとろうとすると従弟を連れて行かせようとする。

お兄様と二人で行きたいが、多分前のようにしつこく説得させられるだろう。

「——わかりました」

私は声をとがらせないように、内心嫌々承諾した。

本人が断つたら、とは思ったけどそう上手くはいかず従弟は散歩に付いてきた。

昼夜 side

「ねえ、達兄い？」

「どうした？」

俺は達也兄さんに深雪姉さんが日焼け止めを塗ってる間に質問をする。

「俺って深雪姉えに嫌われてるのかな？」

「いや、そんなことはないと思うが・・・ただ羨ましいんじゃないか？」

「羨ましい？うくん・・・」

しばらく深雪姉さんに羨ましがられる理由を探すが・・・。

「だめだ、なんで俺が羨ましいのかわかんない」

全く思い当たらない。達兄いに疑問の目を向けてみる。

「お前がお母様や叔母様と仲良くしているのが羨ましいのだろう。」

お二人とも中々人に優しくしたりしないからな」

「ふくん、なんだか思ってたより小さな理由だね」

「それを小さなって思えるお前はホントに何様なんだって驚いているぞ」

お母様たちに認められることがそんなにすごいことなんだ。

そう考えていると深雪姉さんがやって来たので散歩に行くことにした。

深雪 side

「深雪！危ない」

散歩してしばらくすると、お兄様が私の腕を引っ張って抱き寄せた。

私は一瞬何が起こったか分かりませんでしたでしたが目の前に大男が立っているのに気付いた。

「どこ見て歩いてるんだ？あ？」

その大男は軍服をだらしなく着崩した黒い肌の軍人だった。

彼らは恐らく20年戦争が激化した際に沖繩に駐留していた米軍ハワイに撤退して置き

去りにした

取り残された血統と称される人達だった。

「詫びを求めるつもりはない、来た道を引き返せ」

お兄様が私を庇うように前に立ち、およそ少年とは思えない落ち着いた声で言い放った。

私の不注意にお兄様を巻きこんでしまった事に罪悪感を抱きながらも、守つてくれる兄に嬉しさを抱いた。

そして次の瞬間、何の前触れもなく大男が殴りかかって来た。

私は反射的に目をつぶった。

しかしそんな必要はなかった。お兄様はその攻撃を両手で防いだのだ。

しかし男は腕を引いて、さらに後ろにいた三人もお兄様に殴りかかってきた。

それをお兄様はあつという間に三人をしとめたのだ!!

・・・三人?

お兄様の影から見てみると、倒れているのは四人。

でもお兄様が倒したのは確かに三人だった。

と言うことは・・・

「達兄い、手伝い要らなかつた?」

「いや、助かつた」

また従弟(お前)か・・・!お兄様一人で充分だったのに。

「しかし『疑似瞬間移動』で蹴りを入れるのはやり過ぎじゃないか?」

「・・・まあ、死なない程度にやったから気にしない!」

「良い訳ありますか!早く治療しないと・・・ここなら証拠は残りません、『再生』」

を・・・」

「それこそ良い訳ないからね、俺がやるよ」

「は？何言っているのうちの従弟は？治癒魔法でも使えるのだろうか？」

「昼夜は指を銃の形にして自分の遣った一人に向ける。」

「指先から一つの魔法式が生み出され、それが軍人崩れに吸い込まれる。」

「!!」

すると見る見るうちに頬にあつた痣が消えていく。

「今のは・・・何？効果はお兄様の『再生』に似ているけど過程が違う？」

「これで大丈夫、達也兄さん、深雪姉さん、こいつ等が起きないうち帰ろう？」

「昼夜にそう言われたのでとりあえずこの場は放置して帰ることにした。」

追憶編 二節

私は今ものすごく憂鬱だ。

バカンスとは言え世間とのしがらみを切れるわけじゃない。

沖繩に来て初日だというのにそのしがらみに引き寄せられたのだ。

お母様の従弟に当たる黒羽 貢さんにパーティーに招待された。

お母様は大事を取って家で休まれるとのことなので私が行くことになった。

でもそれはこの際どうでもいい。パーティー自体は嫌いではないし。

それに何より、お兄様が一緒に来てくれるのだから。

ただ……。

「深雪姉さん、準備は整いましたか？」

やっぱり従弟はついてくることになるのだ。

彼はこれでも（叔母さまの親バカもあり）次期当主筆頭候補だ。

当然、私と呼ばれるのだから彼も呼ばれるだろう。

「今準備しています、女性の準備をせかすだなんてデリカシーがありません!!」

つい大きな声を出してしまう。

騒動の後、帰る時にお兄様と従弟が仲良く話していたのが羨ましいのだ。

「そうですね、ごめんなさい」

私の八つ当たりに従弟はあっさりと謝ってきた。

これでは私はまるで嫌な子じゃないか・・・。

少し罪悪感を憶えたので早々と準備して部屋から出た。

するとそこには私を呼びに来たのか穂波さんがいた。

「おや、もう準備は済んでいるみたいですね。」

つと、不機嫌な顔をしていると、せっかくのお召し物が台無しですよ」

「・・・わかりますか？」

そこまでわかりやすいような顔をしていたつもりはないのだけど。

「いいですか深雪さん、うまく隠したつもりでも気持ちはどこかに出ています。」

必要なのは自分の気持ちをうまくだませるようになること、でしょうか。

建前と言うのはまず自分自身を納得させるためにあるんですよ」

その後もう出ないと間に合いませんよ、と言われコミュニーターに乗り込んだ（お兄様と従弟はすでに乗り込んでいた）。

数分でコミュニーターはパーティー会場についた。

「はぁー」

「どうしたんだ昼夜？」

従弟のため息にお兄様が反応する。無視したっていいのに。

「間違いない黒羽の叔父様は亜夜子ちゃんと文弥君の自慢話するでしょ。」

それに俺は次期当主筆頭候補だなんて言われているから目の敵にするし」

「まあそう言うな」

愚痴を言う従弟を、私はざまあみろと思った。

パーティー会場に入ると黒羽の叔父様があいさつに来てくれた。

「やあやあ、これは深雪くんよく来てくれた・・・昼夜君もこんばんは」

従弟が言った通り、目の敵にしているのかはわからないけど私とは態度が違う。

「黒羽の叔父様、本日はお招きありがとうございます。」

申し訳ないですがお母様は大事を取って休ませていただきました」

「何、気にすることはないよ」

私に続いて挨拶するように従弟に目を向けると、嫌な顔一つせずに挨拶した。

「黒羽の叔父様、こんばんは。この場に」招待いただきありがとうございます。」

ところで、亜夜子さんと文弥くんにも挨拶したいのですがどちらに・・・」
多分この言葉の副音声は『自慢話はいいから二人に会わせてくれ』だろう。
そして『いらっしやいますか?』を言い終わる前に・・・。

ドンッ!!

「おっと・・・」

何かがすごい勢いで従弟に飛びついてきた。それを従弟は難なく受け止める。

「亜夜子ちゃん、何やってるの?」

「飛びついているんです、昼夜お兄様」

従弟が当てた通り、飛びついてきた人物の正体は再従妹はとこの亜夜子ちゃんだ。

「いや、それは分かるけど、なんで飛びついてきたの?」

亜夜子ちゃんはお兄様と従弟に得意魔法を教えてもらい、四葉での地位を確保した。

だからと言ってこれは馴れ馴れし過ぎないだろうか?

「姉さん、何やってるんだよ。昼夜お兄さん抱き着いたりして」

走ってきたのは亜夜子ちゃんの双子の弟の文弥君。

恥ずかしいからやめてと言う視線を姉に向けるが、睨まれて引き下がった。

「取り合えず、亜夜子ちゃん、文弥君、元気そうで何よりだ」

従弟が亜夜子ちゃんを引きはがし挨拶をしたのでそれに続いて私も挨拶する。

「亜夜子さん、文弥君、お二人とも元気そうね」

「深雪姉さま！昼夜兄様！お久しぶりです」

「お姉さま、お兄様もお変わりないようで」

二人は元気に、いつもの笑顔で答えてくれた。

そこからは叔父様の自慢話が始まってしまった。

私はそれなりに話を聞きながら、文弥君の服装は季節にあつてないのでは、と考えたが

親子が好きで着て（着せて）いるのだから別にいいだろう、などと考えていた。

しばらくすると何時ものように、文弥君がそわそわし始めた。

視線も何かを探してさ迷いだす。そして……

「深雪姉さま、達也兄様はどちらに？」

「お兄様ならあちらにいらっしやるわ」

私が視線を向けた方向を探して、お兄様を見つけると……

「達也兄さま！」

「もう、仕方ないわね」

二人はお兄様のところに行ってしまった。

それを良い目をしないで見ている人が一人。

「叔父様はやつぱり達也兄さんと一緒に遊んでいるのは嫌ですか？」

それをストレートに聞くバカ従弟も一人。

「昼夜君も彼と仲がいいみたいだね」

「従兄と仲良くするのに理由がいりますか？それに……」

そう言うに従弟は叔父様にしやがんでもらって耳打ちする。

「き、貴様ツ……何故それを……！」

するといきなり叔父様は顔に怒りを浮かばせた。

「お母様たちの仲を取り持ったのは私なのですから、

知ってたとしても何の不思議もないでしょう？」

一体、何の話をしているのだろうか？

「今更後悔しているわけでもないでしょう？」

第一、自分たちの望みが叶った途端に掌を返した臆病者だということを忘れてないですよね？」

叔父様の顔色の变化も無視して、言葉を投げつける従弟。

従兄がお兄様と仲がいいのは知っていたが、分家の当主に反発するほどに仲がいいとは思っていないかった。そして、兄を庇う姿に私は感謝を憶えた。

「さて、深雪姉さん、僕らも達也兄さんの所に行こうか？」

「え、あ、はい。では、黒羽の叔父様、また今度」

私は従弟に連れられてお兄様たちのところに向かった。

生憎、叔父様のせいでお兄様は少し見回りに行ってしまったけど、

それでも嫌な感じはしなかった。

追憶編 三節

昼夜 side

俺が朝起きて着替えなどを終えて庭に出ると、達兄いが訓練していた。

「達兄いおはよう、朝から頑張るねえ」

「深雪のガーディアンだからな、訓練は毎日欠かさない」

さすがシスコン、何があつても深雪のためと言い続ける。

「達兄い、俺と組手しないか？あ、勿論魔法ありで」

多くの才能を持つていると言われる俺だが、体術は型を覚えるので精いっぱいだった。

魔法を組み合わせればなんとかなるからまだよかつたが。

「それは俺も使つていいのか？」

「勿論。あ、でも『雲散霧消』ミスト・デイスバージョンとか止めてよ、冗談抜き

で死ぬから」

「当たり前だ。お前の先手でいいぞ、体術では俺が何段も上だからな」

「言ったな．．．」

達兄いはすでに構えている。言われた通り体術だけでは敵わない。

とは言え魔法は『術式解体』や『<rb>術式解散</rb><<rp></rp><</rp』で迎撃される。

><<rt>>グラム

デイスバージョン</rt>><<rp></rp>><</rp>><</ruby>>』で迎撃される。

ならまずは．．．。

「
!!」

体術の奥義の一つ。体内の想子の操作による人体の強制操作。

体術の才には恵まれなかったが、強い想子感受性を持つ俺はこの技術を習得できた。

運動能力、神経も羨ましがられる位にはあるので速さも常軌を逸している。

「そー！」

からの渾身の貫き手、だが一撃必殺など夢のまた夢で．．．。

「甘いな」

あつさり躲されました。

「ツチー！」

だがここで止まったらあつという間に遣られる。

俺はすぐさま自己加速術式を組み立て連撃に入る。

次々と攻撃を繰り出すが一向に当たらない。

正直達兄いならいつでも術式解体をいつでも使えるだろう。

つまり、相手にされてない。むかつく。

『疑似瞬間移動』を発動してかく乱攻撃を繰り出そうとした矢先に、

非物理の暴風が吹き荒れる。想子を体内で圧縮して放つ対抗魔法、『術式解体』だ。

攻撃の出鼻をくじかれた俺はあつという間に詰められ顔に寸止めの拳を食らった。

「あちゃー、ダメだったか」

達兄いが拳を開いて手を差し出してきたのでそれを握り立ち上がる。

「達兄い余裕だったでしょ？」

「まあな、この程度やられては深雪は守れない」

「じゃあ、本格的に魔法使ってもう一度やる？」

「何度やっても結果は同じだぞ」

「よし、んじゃもう一本！」

折角なのでもう一度手合わせしてもらおう事にした。

上から感じる視線には気づかないふりをして。

深雪 side

私が目を覚ますと一階の庭から物音が聞こえたので見てみると、お兄様が昼夜と組手（魔法あり）をしていた。

いくら昼夜が魔法では私と同程度の才を持っていたとしても、お兄様にはかなわないだろう。

そう思ってる間に昼夜が発動しようとした魔法は無効化され、お兄様の勝ちが決まった。

?、そういえば私は何時から従弟の事を昼夜と呼ぶ（考える）ようになったのだろうか？

たしか・・・昨日のパーティーでお兄様を庇ってくれた後から？

あれ、何かこれデジャブ？私ってブラコン（含：従弟）だったの？

確かに家族ぐるみの付き合いではあったけど、あの昼夜よ。

小学校卒業まで母親と一緒に寝ていたマザコンなお子様よ。

ありえない、絶対にありえない。

そう考えていると昼夜は立ち上がって、お兄様は再び構えをとる。

もう一度やるつもりだろうか？何度やっても結果は同じだと思うけど。

お兄様の左右に魔法式が発生する。それを迎撃するため術式解体を発動するが、

そう考えればつじつまが合う。そして、恐らくお兄様は『精霊の眼』エレメンタル・サイトで見破った。

お兄様が『眼』を持っていなければ昼夜の勝ちだった。

想子光も見えず、もう勝負ありかと思つた・・・その矢先！

何も無いところから氷の弾が打ち出される。

「嘘ッ！今の魔法、想子光が一切見えなかつた！」

確かに魔法式に注入する想子を限りなく減らすことで想子光は消せる。

だがそれは、余程使い慣れた魔法でないと加減ができない。

ましてや、先ほど同じ魔法を使ったときは確かに想子光が発生していた。

ならば・・・実力を隠していた？

否、お兄様相手に手を抜いたら確実に負ける。それを昼夜は分かっている。

攻撃も今まですべてが全力だった・・・と思う。

なら一体、どんな方法を使ったというのだろうか？

そう考えている間に、氷の一つがお兄様の体に当たり勝負ありとなつた。

「あのお兄様に・・・勝つた・・・？」

無論、子供のお遊びの中ではある。(遊びと言うには過激すぎたが)

お兄様は『分解』すらも使っていないし、まだ切り札を持っている。

だが、お兄様が負ける姿など初めて見た。

今度は昼夜がお兄様を立ち上がらせた。

そして、こつちを見て優しく微笑みながら手を振ってきた。

私はそれに対応できずに、カーテンを閉めてしまった。

昼夜 side

氷の弾が一発当たり、達也が倒れた。

「うっし、勝ち!!」

なんとか達兄いに勝てた。無論、まだ達兄いは本気を出していないが。

「達兄い、大丈夫か〜?」

「ああ、大丈夫だ」

俺は手を差し伸べる。さつきとは逆だ。達兄いは俺の手を握り立ち上がる。

そこで今まで気づいてなかったふりをしていた従姉をみて、手を振る。

すると、何故かカーテンを閉められた。

「達兄い・・・俺、やっぱり深雪姉えに嫌われてるのかな・・・?」

「いや、今のは気づかかれてないと思ってたから焦っただけだろう」

「それならいいんだけどね・・・」

なんかものすごく拒絶された感があるのは気のせいだろうか？

「ところで昼夜、さっきのは何だ？

魔法式が見えなくなっただが・・・？」

この言い方は見えなかったけど視えた、と言う事だろう。

「俺の秘術、『術式消失』^{プログラム、ハッキング}。想子光に干渉する魔法だよ。

光の振動を0にするのと同じ原理さ」

「成程、お前の特性あつての魔法つてことか」

「ところでさ、視えてたならなんで躲さなかったの？」

一番の疑問をぶつける。達兄いの眼なら知覚できたはずなのに。

「それがな、見事に少し緩んだ隙に魔法式の構築を知覚してな、

初めて見る魔法だったからつい分析に時間を取られた」

・・・要するに、戦闘モードじゃなかったから勝てたってこと？

「まあいいや、勝ちも勝ちだし。100を超える必定よりも1の偶然が勝るらしいし」

「そうだな、100回のうち99回負けるなら、1回を持ってくればいい」

「それって100回やったら俺はもう勝てないってこと？」

「どうだかな？」

むかつく、ものすごくむかつく。だけど・・・
「今はまあいいや」

俺の仲は初めて達兄いに勝った満足感でいっぱいだった。

俺達はそろって室内に戻るのだが、叔母さまにもものすごく怒られた。

追憶編 四節

深雪 side

「奥様、深雪さん、今日のご予定はどういたしますか？」

桜井さんが食後の紅茶をいただいている私たちに聞いてくる。

「暑さがやわらいだから沖に出るのもいいわね」

「ではクルーザーを？」

「そうね・・・あまり大きくないセーリングヨットがいいわね」

お母様の提案で午後の予定はクルージングとなった。

「深雪さん、午前中はビーチにでも行かれたらどうでしょうか？」

寝転んでいるだけでもリフレッシュになると思いますよ」

そういえば昨日は襲われるわ叔父様の自慢話を聞かされるわで気が休まらなかった。

「ここは桜井さんのお言葉に甘えさせてもらおう。」

「そうですね、せっかくなのでそうさせてもらいます」

「では日焼け止めをぬらないといけませんね。うふふ、

夏の日差しは強力ですから水着の下までしつかり処置をしないとイケませんね」
え、なんだか桜井さんが怖い……。

「し、支度くらい一人で出来ますから……」

そう言つて部屋に行こうとすると桜井さんは私の手をつかんで、

「折角の綺麗なお肌が日焼けしたら大変ですから、ね？」

「は……はい」

私は生理的に感じた恐怖で思わず頷いてしまった。

昼夜 side

「うっわ……桜井さんの少し悪いところが出ちゃったよ……」

「まあ、桜井さんの立ち位置から考えると仕方のないことだ」

俺と達兄いは黙つて深雪姉えが連れられて行くのを見ていた。

無理もない、あの状態の桜井さんに逆らつたら遣られる。

「叔母様、桜井さんにもう少し自由な時間をあげては？」

正直この発言は四葉としてふさわしくない。

桜井さんはガーディアンであつてボディーガードではないのだ。

「これでも前よりは増えてるわよ。わざわざ部屋にこもったりまでして」

だが、叔母様は俺の事を理解してくれる人だ。

この意味は安全な室内にこもってまで桜井さんに時間を作ってくれてるという事。

「深雪姉え連れ去られたんじゃねえ・・・」

桜井さんの悪い癖とは深雪姉えに憧憬してしまっていることだ。

幼いころの思い出は訓練ばかりだったであろう桜井さんは、

深雪姉えが羨ましいのかこういう時には世話役を買って出る。

子供の肌に触れて自らの過去の穴埋めを無意識にしているのだろう。

増してや深雪姉えの美貌もそれを駆り立てているのだろう。

「さて、昼夜さん、あなたも出かけるなら先に治療をお願いしたいのだけど」

「わかってますよ。俺もそうしようと思ってきましたし」

「あら、そう」と言って叔母様は微笑む。

この様に笑うときは何故か毎回、俺と深雪姉えが一緒にいることが決まった時だ。

そんな雑念を追いやり、携帯端末汎用型CADを取り出し魔法を発動した。

発生するのはただの想子の波^{サイオン}。だがその波はものすごく複雑だ。

達兄いととの戦闘では一切CADを使わなかったが、これの構築ばかりは厳しい。

発生したのは『キャストジャミング』の対極、『キャストアクティベート』。

ジャミングと違い柔らかい想子の波が発生し、この部屋を包み込む。

本来の効果はジャミングを相殺する波を発生させる。故に『<rb>術式有効化</rb><rp></rp></>』

ティベート</rt><rp></rp></>キャストア

しかしこの場に限り、別の効果を持つ。

この波は魔法師の精神を安定・回復する副次効果がある。

魔法とは即ち、精神の力。

叔母様は特異魔法を酷使した影響で今はかなり虚弱になっている。

魔法演算領域の消耗、それすらも少しづつではあるがこの波は癒す。

唯一の難点は波の構造が複雑すぎるために俺と達兄い位しか使えないこと。

俺は波の発生を3分ほど続けた。

「ありがとう、もう大丈夫よ」

「わかりました」

キャストアクティベートを解除する。

「昼夜、達也、あなたたちも準備に行ったら?」

「そうさせていただきます」

そうやって俺たちは水着に着替えにそれぞれの部屋に向かった。

深雪 side

私が桜井さんに体の隅々まで日焼け止めクリームを塗られていた間に、お兄様と昼夜も一緒に行くことになったらしい。

昼ご飯は昼夜が文弥君達に美味しい店を聞いたそうなのだ。

用意周到だと思つたが、お母様も行って来たら？と言うのでそこに行くことにした。

午後までの予定が決まり、私たちは別荘最寄りのビーチに向かった。

ついでみると、既に何組か客が来ていた。

「喰らえ達兄い!!」

後ろから声がしたので振り向いてみると、昼夜がボールをお兄様に投げていた。

無論、お兄様はそれを楽々キャッチする。

「昼夜、いきなり投げつけるな」

「いやあ、海に来るのなんて初めてだから舞い上がっちゃって」

「それなら泳いで来い」

それを昼夜は釣れないなあ、と言う顔+ジト目で睨みつける。

と言うか海に来るのが初めてなんて、今までどれだけ本邸から動かなかつたのだろう

?

「それに俺は深雪のガーディアンと言う大事な仕事があるんだ」

「俺たちの『眼』相手じゃ誘拐もできないでしょ。」

特に俺相手は宇宙規模の誘拐でも起きない限り」

昼夜もお兄様と同じように知覚系魔法を有しているのだろうか？

「それはそうだが・・・」

抵抗しようとするお兄様から昼夜はボールを取り返して・・・

「今度こそ、喰らえ!!」

人間には不可能な速さでボールが投げつけられる。

そのボールはお兄様の顔に吸い込まれて行き・・・

バンツ!!

「あ・・・」

流石のお兄様も魔法で限界まで加速されたボールに間に合わなかったようだ。

そのまま当たって倒れてしまう。

「あの・・・お兄様大丈夫ですか？」

私はお兄様のそばによる。すると・・・

「く・・・ふふ・・・ははは・・・」

「え?・・・あの・・・お兄様?」

お兄様は不気味に笑いながら立ち上がる。

「昼夜、俺を本気で怒らせたな」

「あ・・・ヤバ、こういう時は・・・」

昼夜は何やら術式を組み立てる。

「逃げるが勝ち!!」

自己加速術式で海の方に逃げていった。正直なさけない。

「こら、待て昼夜!!」

お兄様は全力でボールを投げつける。それは昼夜の後頭部をとらえた。

「だあークソ、やってくれたな!!」

それを拾ってまた昼夜がボールを投げるの繰り返し。

でも何故か、お兄様は少し楽しそうだった。

昼夜 side

達兄いマジで怖い!!あそこまで怒ると思つてなかった!!

「逃げるが勝ち!!」

すぐさま自己加速術式を発動して海に逃げだす。

深雪姉えのなさけない・・・という視線を視たがそんなのにかまつてる暇はない。

殺られる。それだけが俺の頭を支配していた。

「ふぎゃや!!」

後頭部に衝撃を感じる。いや、マジで痛い。

ていうかおかしいだろ。反撃を予測してわざわざ逃げたのに。

普通に考えて中学生が本気で投げても届かない距離だぞ。

そこで俺は思い出した(ここまでの時間、0コンマ05秒)。

達兄い普通じゃないや。

「だあ!クソ、やってくれたな!!」

俺は海に逃げながら、回収したボールを加速魔法で投げつける。

それを達兄いはキャッチして同じく加速して投げ返してくる。いや、今の止めれるの

?

「ならこれでどうだ!!」

俺は『ダブルバウンド』を発動。

襲ってくるボールが倍速になって達兄いを襲う!!・・・はずだった。

何が起こったかと言うと・・・ボールがはじけた。

よくよく考えれば始めの加速魔法もボールが壊れないギリギリで投げたのだ。

そりや倍速になったらのはじけるよね。

つて、そんなことを考えてたら殺られる!と思つてた時期が俺にもありました。

達兄いは俺を追いかける足を止めて深雪姉えの方に振り向いた。

深雪 side

お兄様は昼夜を追いかけに行つたと思つたら昼夜が投げ返したボールがはじけた。

見たところ抵抗に耐えられなかったのだろう。

お兄様はやつぱり楽しそうに追いかけている。

なんだか羨ましい。もし私が弟ならあんな風に追いかけてつこをしたりしたのだろう

か?

そんなことを考えていたせいか、近づいてくる人に気づくのに遅れた。

背中に衝撃を受ける。何か落ちる音。

当たってしまったのは怖い顔した見た目20台程の男の人。

音の先を見れば、あるのは壊れたスマホだった。

「おい、何処突っ立ってやがんだよ。おかげで俺のスマホ壊れちまったじゃねえか！」

何言ってるの！私は立ってただけでぶつかって来たのはあなたじゃやない！

しかも、地面は砂浜なんだからスマホが壊れてしまうはずがないじゃない！

そう頭では思うのに声が出ない。それをいいことに男は勝手に話しを進める。

「どうした？反省の言葉もなしか！」

こっちが反省して欲しいくらいです！！

「まあ反省の言葉はいいや、おい、持つてる金出せ。弁償だ弁償！」

これは当たり前と言うやつなのだろうか？

そもそも最近のスマホは耐衝撃性も優れていてコンクリートに落としても壊れない。

だがやはり声は出ない。私はなんとか首だけを横に振る。

「ああ？金もねえのか、なら仕方ねえ。体で払ってもらうしかなさそうだな！」

体で払うって・・・もしかしなくてもそう言う事よね？

いやよ！そんなの絶対に通じない！

そう思うのに体が動かない。男の手が伸びてくる。確実に迫ってくる。

しかしその手は途中で止まる。そしていつの間にか男の後ろに人が立っていた。

「中学生相手に体で払えだなんてずいぶんなロリコンさんだねえ」

一瞬お兄様かと思ったが、声でそれは間違いだと知る。

「深雪姉えに手をだし

てただで済むと思ってるの？ロリコンのお兄さん？」

昼夜は余裕綽々と挑発を始めた。

昼夜 side

「おやおや？深雪姉えが絡まれてる？」

達兄いのように眼を向けるといかにも怖そうな男に何やら文句を言われていた。

「昼夜、行くぞ」

「え？深雪姉えなら大丈夫じゃないの？」

「深雪は視線ならともかくこういう直接的なのはまだ耐性がない」

意外だ。あの美貌ならいつでもナンパを受けそうなのに。

「昼夜、お前が行け」

「なんで？疲れたなら疑似瞬間移動で送るし、達兄いの方が喜ぶでしょ」

俺が行くメリットは一体何だというのだろうか？

「簡単だ、深雪を助けてお前の好感度を上げる。

俺がすぎすぎした空気を何とかする必要がある。それだけだ」

「うーん、まあいいや。達兄いが深雪姉えとの好感度を上げていい、か」

あれ？あとで殺されるんじゃない？

「お前が持つていいのはあくまで従弟の関係だ、いいな？」

「そう言うと思ってました」

まったく、このシスコン兄貴は・・・

ため息をつきたくなるのを我慢して、疑似瞬間移動を発動する。

近づくに変態（決めつけ）が深雪姉えに手を伸ばしていたので、

ディレイレーション・ゾーン
『減速領域』を発動して手を止めさせる。

そして男の後ろに着地する。

「中学生（前略）（中略）ロリコンのお兄さん？」

「ああ？テメエ・・・魔法師か？さてはレフトブラッドの子供か？」

「あ、いいえ、全くの無関係です。どこからどう見ても日本人でしょう？」

そんなのも解らないんですか？ロリコンで変態で当たり前なお兄さん？」

「ダメ！昼夜、怒らせたら・・・」

深雪姉えが俺を止めようとするが、止まるつもりは毛頭ない。

「おい！ガキが偉そうに言うのもたいがいしろよ!!」

「そのガキに真実言われて逆上してるのはどこの、

ロリコンで、変態で、当たり前屋で、沸点が低い、お兄さんなのかなあ？」

これでもかと挑発したしもういだらう。

「はてさて、ところで僕の特異魔法何か深雪姉え知ってる？」

「え？確か光波振動系だったはずだけど・・・？」

「惜しい、俺の特異魔法は『光』、光を粒子としても扱えるから光波じゃないのよ」

「おいガキ、いつまで俺を無視してるつもりだ!!」

何か聞こえたような気がするが無視しよう。

お兄さんが体を動かそうとするとエネルギーも増えるし。

「んで、もう一つが『エネルギー』。」

エコに使うのは勿論、エネルギーの種類の変換もできる。

例えば、今お兄さんが体を必死に動かそうとしてるわけだけど、

この奪った+の運動エネルギーを+の電気エネルギーに変化すれば・・・」

男の前で放電が発生する。

「こんな事が出来る。流石に+から-への変化は無理矢理反発するしかないけど、

お兄さんがホントに必死に動かそうとしてくれたおかげで、

人一人気絶させるほどの電気エネルギーは十分だ」

そして男に『スパーク』をぶつけて気絶させる。

「さて深雪姉え、大丈夫？」

俺は自分でできるとびっきりの笑顔で深雪に微笑みかけた。

追憶編 五節

深雪 side

私の頭の中には一人の男の笑顔が残って離れない。

四葉昼夜、四葉家次期当主筆頭候補にして、私の従弟。

でも、従弟なのに私は昼夜の事をほとんど知らなかった。

当たり前だ。私は昼夜を四葉家次期当主候補としてしか見ていなかったから。

従弟としての昼夜を私はほとんど知らない。

さつき私を助けてくれたが、もしかしたら貸しを作って、

候補戦で優位に立つつもりかもしれない。

でも、私にはどうしてもそうは思えなかった。

その後に向けられた笑顔があまりにも優しかった。

演技だなんて思えない、純粹な優しさをそのまま形にしたような表情。

「……って！これじゃあまるで私が昼夜の事を好きみたいじゃない!!

「……きねえ、みゆきねえ、深雪姉え？」

「ひやつ、ひゃい!!」

しまった、意識してるところに声かけられたせいで変な反応に……。

「?、大丈夫? 深雪姉え、ぼーつとしてたけど?」

「え、ええ、大丈夫です。少し考え事をしてただけです」

「そう、無理はしないでね」

ああ、またこの笑顔。私はいままで昼夜の何を見てきたのだろう。

とりあえず注文は全部済んだ。伝統料理は初めて見るものばかりで新鮮だ。

「ねえ、深雪姉え」

「なんですか、昼夜?」

「できればでいいけどさ、その敬語辞めて欲しいんだけど、従姉弟なんだからさ」

「え? でも……」

いや、もしかしたらいい機会かもしれない。

言葉を直せば自然と昼夜を従弟として見れるようになれるかもしれない。

「わかったわ、昼夜。これでいい?」

「うん、やつと表情も柔らかくなったね」

え? 私そんなに固い顔してた?

「ところでお前たち、俺が置いてけぼりなんだが」

「!!」

お兄様の方を見ると少しあきれたような顔をしているが、

昼夜に何やら威嚇の感情が多分に含まれる視線を向けている気がする。

「あ、お兄様！これは別に無視してたわけじゃなくてですね・・・!!」

つて、私はなんで昼夜を庇おうとしているの!!

「そうそう！深雪姉えと話してたのは事実だけど決して無視してたわけでは・・・!!」

私たちがお兄様を何とか昼夜に向ける視線を止めさせようと努力しているところに、

「お客様、ご注文の品です」

丁度料理が運ばれてきて、気をそっちに向かせる事が出来た（かは分からない）。

「でもよかったの、昼夜？ここは全部払うことにしてもらって・・・?」

「気にしなくていいよ、お小遣いは嫌というほどもらってるから。」

それに、深雪姉えのバックに財布は入ってなかったんでしょ」

そうだった。確かバックを用意したのも桜井さんだったはずなのだが。

桜井さんがこんな初歩的なミスをするなんて思ってもいなかった。

ということ、今私は一銭たりともお金を持っていない。

お兄様持っているが、最低限の分しか持っていないそうだ。

「まあ、桜井さんも人だから失敗もするさ。」

それに、俺がこの店を選んだんだから気にするなつて」

そう言つてもらえると安心するのは何故だろう？

え、お兄様は、つて？さつきからずつとご飯を食べてるわ。

「昼夜、ここはホントにお前のおごりなんだな？」

「え？だからそう言つてるじゃん」

「そうか、そう聞いて安心した」

不器用なお兄様だが、私は確かに（悪く）笑つたのを見た。

「すみません、追加お願いします。」

ソーキそばとラフテー、ゴーヤチャンプルーに海ぶどうのお造り、それから・・・」

するとお兄様は次から次へと注文を始めた。

「え・・・えつと、達兄い？どうしたのかな？」

確か暴食は嫌いなんじゃないやなかつたつけ・・・？」

「何を言つている？ここには育ち盛りの男が二人、これでも足りないんじゃないか？」

「え？俺つて結構小食な・・・」

「そうかそうか、やつぱりデザートは必要だもんな。」

「そうだな・・・サーターアンダギーも追加しようか」

「え、話聞い……」

「ああ、分かっている。一人前じゃ足りないよな。」

「今まで言ったやつ全部二人前でお願いします」

「かしこまりました」

店員は良客を逃がしてなるものかと昼夜の反論の前に厨房に戻った。

「あ……ああ……た、達兄い……」

「昼夜、店の中大声を出すのはマナー違反だぞ」

「……（怒りの視線）」

「どうした？まだ足りないか？」

ブルンブルン（全力で首を横に振る）

どうしてだろう？足りないか、がいくつもの意味があるのではと思ってしまう。

結局昼夜は、大量の食べ物に口突つ込まれた挙句、多額の料金を請求された。

昼夜 side

今は別荘に帰った。うぷツ、気持ち悪い。

これからクルージングなんて行きたくないが、達兄いに嫌でも来いと言われた。

ていうか自分で注文しておいてほとんど俺に擦り付けてきやがったし!!
うぷツ、だめだ。怒ろうと思うとサーターアンダギー出てきそう・・・。
どうでもいいことだが、俺は甘党だ。甘いものは別腹だと思っっている。
けれど、あれだけ食べさせられた後でサーターアンダギー三人前は無理だ。
嫌でも笑顔で無理矢理入れられるし、それを見た深雪からは嫉妬の目線を向けられ
る。

あの後深雪が部屋に戻ると、『深雪は誰にも渡さん』って言われた。

俺が何をしたっていうんだ・・・。

「昼夜、じご・・・クルージングの時間だぞ」

「達兄い、今明らかに地獄って言いかけたよね？」

「準備はできてるか？あまり深雪を待たせるな」

見事なまでにスルーされた。

「はあ、もういいよ。すぐ行くから」

簡単に荷物の確認をしてからすぐに外に出た。

海の風は思ったより気持ちのいいものだ。

酔うかも思っていたが、逆に気分が楽になった。

「昼夜、大丈夫か？何なら酔い止めを・・・」

「大丈夫、何時かの胃もたれは潮風で楽になったから」

「そうか・・・チツ！」

「もう達兄い隠す気もなく口撃してくるね!!」

「一体何が達兄い怒らせる原因になったのだろう？」

「お兄様、昼夜はどうですか・・・って、元氣そうね」

「お、深雪姉え、潮風のおかげでね」

「あの、昼夜、私達誕生日も大して変わらないのだから『姉え』もやめてくれない？」
「え？」

「あんなに嫌ってたのに呼び捨てしていいの？」

「いや、きつと僕の事を従弟と思いたくないからだよね・・・」

「あれだけ嫌ってたんだもん。きつとそうだ。」

「とは言え断つたら余計嫌われるだろうからな、ここは呑むのが正解だろう。」

「別に従姉弟じゃなくても仲を改善できればいいのだし。」

「何故かにはらみを利かせてきた達兄いは無視することにした。」

「ところで昼夜、気づいてるか？」

「ん、ああ、あれね。どうする？俺が沈める？」

「いや、念のため撃たせて正当防衛の形を取ろう」

「お兄様？ 昼夜？ いったい何を・・・」

「深雪、俺の後ろにいるんだ」

「え、はい、お兄様」

丁度そこにこの船の船長から声が聞こえてきた。

「潜水艦から魚雷が発射されたぞ!!」

「達兄い、種類は？」

「発砲魚雷だ、向こう沈めれば機能を失う」

「了解」

俺は二種類の魔法を発動する。マルチはともかくパラレルはまだ3つが限度だ。

一つ目は、魚雷の速度を奪う減速系統魔法『減速領域』デイスレーション・ゾーン

そして2つ目は、母を世界最強と謳わせる魔法『流星群』。

減速領域が魚雷を受け止める。

同時に展開される夜。流星のような光は海上から水を気化させ、

潜水艦の甲板も気化させ穴だらけにし、海に沈めた。

「ふう、こんなものか」

これは四葉昼夜の戦略級魔法師としての前哨戦だったのかもしれない。

追憶編 六節

「魚雷を撃たれたそうですね。何か狙われた理由に心当たりは？」

「そんなものではありません！」

桜井さんはかなりイラついている。それも当然だろう。

いきなり防衛軍の大尉を名乗る方が来たと思えば、昼の件について問い詰められているのだから。

「君等は何か気づかなかったかい？」

俺と達也（深雪が直せと）に視線を向ける。大方雰囲気をやわらげるつもりなのだろう。

達兄いにと目で合図を合わせて、俺が言う事になった。

「目撃者を残さないために俺等を拉致しようとしたと考えるのが定石でしょうね」

「その理由は？」

「撃たれた魚雷は発泡魚雷、加えて通信妨害の併用」

説明の終了と同時に達也は深雪と桜井さんに発泡魚雷と併用の理由の説明をする。

「兵装を断定する根拠としてはいささか弱いのでは？」

再び達也に加えて叔母様ともアイコンタクトを取る。

「そんな簡単に兵装を断定するわけがないでしょう」

「ではその根拠は？」

「回答を拒否する」

「……」

あつさりと回答を拒否されて目が点になる風間と言う名の大尉。

目が点になったのは桜井さんと深雪も同じだけど。

「根拠が必要？」

「……いや、不要だ」

どうにも俺を持って余しているように見える。

「大尉さん、そろそろよろしいのではなくて？これ以上大尉さんの役に立てないと思

いますよ」

ずつと沈黙を守っていた叔母様が、退屈そうな声で仰った。

それでいて抗いがたい声。そこに込められた明確な拒絶に風間大尉はすぐ気づいた。

「そうですね、ご協力感謝します」

風間大尉は立ち上がり敬礼して言い放った。

大尉さんの見送りには俺と達也と深雪が出ることになった。

表通りに車が止めてあつて、兵隊が二人立っていた。

そのうちの一人が俺と達也の顔を見て目を見張った。

間違いない。昨日の夕方、遊歩道で絡んできたレフト・ブラッドの不良軍人だ。

「なるほど」

その兵の顔を見て風間大尉は訳知り顔で頷いた。

「ジョー達を殴り倒した少年たちとは君達だったのか」

深雪が反射的に身構えるが大尉さんの顔を見て力を抜いた。

「その年で裏当てを習得している少年と、高度な疑似瞬間移動を使う少年か……」

二人とも恐るべき天分だな」

俺等の体を頭からつま先まで繁々と観察される。

「松垣上等兵！」

怒鳴るような大声で名前を呼ばれて不良兵がビクツと体を震わせる。

強い視線を向けられ、風間大尉の前に走ってきた。

敬礼して固まった上等兵に、風間さんは一瞥くれる。

そして俺等に向き直り、頭を下げる。

「昨日は部下が失礼した。謝罪を申し上げたい」

「桧垣 ジョセフ上等兵であります！昨日は大変、失礼しました!!」

上等兵も大尉に続いて鯨張った顔で頭を下げる。

「どうやら根まで悪い人ではないようだ。」

先に達也が、

「謝罪を受け入れます」

と。俺の方はと言うと・・・

(これを理由に猿轡をかけて鼻の穴にからしをねじ込んでみるのも一興かな・・・)

などと考えていたら・・・

「おい、昼夜」

などと催促されたので、まあ、そこまでやる気はないし、適当にでも返す。

「ん、ああ。俺も別にいいですよ」

「ありがとうございます!」

と言うよりもともと達也の意見に口をはさむつもりなどなかったが。

上等兵を従えて大型車に向かった風間さんは三歩歩かぬうちに振り返った。

「司波達也君に白爪昼夜君だったか？」

自分は現在、恩納基地で空挺魔法師部隊の教官を兼務している」

風間さんは時間があれば来てくれと言葉を残して、車に乗り込んでいった。バカンス三日目の空はどんよりした雲に強風という、まさしく荒れ模様だった。どうにも東方に熱帯低気圧が発生したようだ。

台風になることはないようだが、マリンスポーツは危険だろう。

「今日の予定はどうします?」

「こんな日にシヨッピングもちよつと、ねえ・・・」

チヨコンと少女のように首をかしげる。ホントにお若い方だよな・・・。

「そうですね・・・琉球舞踊の観覧なんて如何でしょう?」

デイスプレイ公演の案内が表示される。

「よさそうですね、これ女性限定みたいですわ」

「そう・・・じゃあ、達也と昼夜は今日は好きにしていいわ」

俺の言葉に叔母様は仕方なくと声を発した。

その気になれば魔法でいくらでもごまかせるのだが。

「まあ、せつかくだからあの大尉さんの言っていた基地にでも行くか」

「それはいいわね。もしかしたら訓練に参加させてもらえるかもしれないわ」

「・・・お母様、私もお兄様たちについていいですか?」

すると深雪が驚きの提案をした。

「ふうん・・・ええ、いいわよ」

いつも通り、叔母様と桜井さんはニヤニヤしているが、気にしたらきりがないだろう。

恩納基地に着くと、風間さん直属の部下が迎えに来てくれるようだ。

「防衛陸軍兵器開発部の真田です」

階級は中尉だそうで、それを聞いて達也が少し驚いていた。

「どうかしましたか?」

達也の驚く理由は間違いなく階級と所属についてだろう。

「いえ、士官の方にご案内していただけたとは思っていませんでしたので。」

それに、空軍基地と聞いてましたので」

真田さんは口元を綻ばせた。少し態度に親密感が増した気がする。

「君は軍の事に詳しいんですね」

格闘技の先生が元陸軍と説明すればあっさりとな納得した。

「空軍の基地に陸軍の士官がいるのは、本官の専門が少々特殊だからです。」

案内を下士官に任せなかったのは・・・君たちに期待しているから、ですね」

要するに軍に引き抜ければいいなど、本当のこと知ったら驚くかな?」

とは言え、少し警戒した方がいいか・・・。

しばらくすると開けた場所に出た。高さが大体五階建てのビルくらいか。

「風間大尉、司波達也君、白爪昼夜君が来てくれました」

声をかけられた風間さんは、こちらに振り向いて歩いてきた。

「早速来てくれたということは軍に興味を持っているということではないのかな？」

「軍に興味はあります。ですが、軍人になるかは決めてません」

同じく、と頷く。と言つても立場考えると普通に軍人にはなれそうにないが。

「私は兄たちの付き添いです」

流石に深雪は訓練に参加するのはきついだらう。

「まあ、そうでしような。まだ中学生でしたか？」

分かりやすいほどに掌返しありがとうございます。

そこからの質問に無難に答える。

見てみると、松垣上等兵が魔法を駆使して訓練をしていた。

「君も参加してみるかい？」

「いえ、魔法は自分より昼夜の方が圧倒的に得意ですし」

「おい達也、あんまり褒めるなって・・・」

「あの、どうして兄が魔法師と分かったのですか？」

深雪が疑問に思ったのだろう。達也は今のところ魔法を見せていないから。

「そうですね・・・勘ですか。何百もの魔法師を見ていると自然に、

魔法師か否か、強いか否かが雰囲気でわかるのです」

「そ、そうですねか・・・」

風間さんの視線が俺に向いたのと、深雪の反応で嫌な予感がした。

「ところで、なぜそのような質問を？」

矢張り来た。少し踏み込み過ぎた質問だったのだろう。

深雪も答えあぐねている。

「深雪は魔法が苦手な達也の事を気にかけてるんです。

風間さん、深雪は大人の男性との会話になれてないのでお手柔らかにお願いします」

「・・・それは失礼しました。いい妹さんですな」

「はい、自慢の妹です」

達也が答えてこの話は終わった。

少し違和感が残ったようだが、とりあえずは誤魔化せたようだ。

「見ているだけではつまらないだろう？達也君も組手に参加してみてはどうかね？」

風間さんも深雪が退屈そうにしているのを感じたようだ。

それを考慮すると達也が断る理由はない。達也は組手に交じっていった。

「これは・・・達也無双だね。ゲーム一本出来るんじゃないかな」

「昼夜つたら何言ってるの。まあ、否定はしないけど」

「ふむ・・・ここまでとは・・・」

言葉通り、松垣や国体出場経験ありの奴も、達也には敵わなかった。

当の達也はその軍人に囲まれて人気者だ。

「昼夜君はやらないのかな？」

「いや、俺は体術は型ばかりなので・・・もつと頻繁に魔法を使えるなら」

「それならあの訓練はどうかな？」

ついていった場所では、十人の軍人が魔法で戦っていた。

「この訓練に味方はいない。自分以外は全員敵だ。どうだい？」

「そうですね、ぜひ参加させてもらいます」

俺は演習場に入り、軍人の方々に挨拶をした。

余談だが、達也と深雪も見ている。つまり、恥をかくことはできない。

審判は真田さんがするらしい。

「それでは・・・始め!!」

その合図とともに軍人全員が魔法を発動する・・・はずだった。

「これは・・・!」「魔法が発動しない!」「領域干渉か!」

「いや、このノイズは．．．!」

それらすべての魔法は俺の発動したキャストジャミングによって妨害された。そしてそのすぐ後、俺のドライブリザードが完成し軍人たちを襲った。

一人ずつ、膝を折って倒れていった。

「そ、そこまで」

それを合図に魔法を停止し、全員立ち上がってから礼をして演習室から出た。

「いったい何をなさったのですかな．．．?」

風間さんが恐る恐る聞いてくる。

「風間さんほどの方なら聞かなくても分かるでしょうが．．．」

キャストジャミングを発動してドライブリザードを発動しました」

「しかし、アンティナイトを所持しているのですか?」

「いえ、完全に魔法式で組み立てました」

「．．．．．」

達也と俺以外が沈黙する。その沈黙を破ったのは、やはり風間さんだった。

「失礼ですが承知で質問を、昼夜君、君は何者かね?」

恐らく達也無双などで溜まっていた疑問が爆発したのだろう。

達也に目を合わせると、『ここらで名を売ってもいいんじゃないか』、

とアイコンタクトが返ってきた。

「では、俺は四葉昼夜。四葉家現当主、四葉真夜の息子です」
ここで初めて、俺は親戚以外に本当の名前を名乗った。

追憶編 七節

お茶でも、と言われたが実際のところ出されたのはコーヒードット。

こっちに子供三人、向こうに大人二人と五人でコーヒープレイク。

なのだがとりあえず・・・

「角砂糖もらつてもいいですか？」

「ああ、あまり遠慮しないでください」

遠慮すると言われたので、とりあえず砂糖を入れていく。

ボト、ボト、ボト

「……………」

ボト、ボト、ボト

「ん？どうしたんですか？風間さんに真田さん、深雪までそんな目で見て？」

「いや、何でもない……………」

「？、そうですか……………ならいいんですが……………」

俺はそこにミルクを入れようと……………」

「昼夜、それ以上はやめておけ。俺でさえ口の中が気持ち悪い甘さに支配されそうだ」

達也に止められた。

「……いやね、ブラックも飲めないわけじゃないんだよ。でも苦いじゃん。

大人がおいしそうに飲んでる理由って我慢比べだよね？」

作者はブラック好きだけど強がってるだけだよね？」

俺の味覚がおかしい訳じゃないよね？」

とりあえず雑念は振り払って……飲む。……うん、甘くておいしい。

「そう言えば、三人の関係はどういったものなんですか？」

四葉殿と一緒にいるということはお二人も四葉の方で？」

深雪から痛い視線が飛んでくる。だが、こんな程度の対応は朝飯前だ。

でも、その前に……。

「四葉殿はやめてもらえますか？まだ次期当主でもないんですから。

さつきまでと同じで昼夜君でいいですよ」

正直、型苦しい感じがしていい気がしない。

「わかった。で、よければさつきの質問に……」

「達也は四葉が本邸近くでやってる道場の門下生なんですよ。深雪はよく付き添いに。

今回は偶々、達也の家の旅行に連れて行ってもらえるようになりまして」

そう言うのと案外簡単に納得してくれた。

恐らく達也の師匠が軍人だったというのが、四葉ならあり得ると判断したのだろう。

「達也君、先ほどの想子波動は矢張り・・・」

達也は風間さんに話しかけられ、そちらを向いている。

「昼夜君、さっきのキャストジャミングだけ・・・」

俺は真田さんに話しかけられていた。

「魔法式の提供ならする気はないですよ」

「・・・即答だね」

「第一、あれは失敗作もいいところですよ。」

自分で言うのもなんですけど、俺並の処理速度とキャパシティあってやっとなんか
ら」

少し誇張し過ぎではあるが、実際お母様も発動にかなり難儀した。

「うくん、うちならもう少し改良できると思うけどね・・・」

「真田さんほの方があの魔法式の抜け目のなさに気づかないはずがないですよね」

真田さんはうつ、と黙ってしまふ。

「これ以上の話をして無駄ですよ。他の話をしましょう」

因みに深雪は俺等の話を聞いてるだけで楽しそうだ。

「ところで、達也君も昼夜君もCADを使わなかったけど、

補助具は何を使ってるんですか？」

「特化型のCADを使っていますが、なかなかフィーリングに合うものがなくて……

僕はCADを使った魔法の使い分けが苦手ですから」

「ほう、そうですか……あれだけ想子の操作になれていればCADも難なく扱えそうだが」

「俺は一応汎用型を持ち歩いてますけど、違和感と言うか……ラグですかね？」

「とは言え特化型だとバリエーションが少なすぎますし」

「そうだね……達也君は僕が開発したCADを試してみませんか？」

「真田さんはCADをお造りで？」

「僕の仕事はCADを含めた魔法装備全般の開発です。」

「ストレージをカートリッジ化した特化型CADの試作品がありますよ」

「達也が目を輝かせている。珍しいこともあるものだ。」

「深雪に聞いたが、あまり見たことのないレベルだったようだ。」

「そう言う仕事をしている真田さんなら、あれを渡すのもいいかもしれない。」

「試してみたいです」

案内された研究室は、かなり整頓された部屋だった。

それはもう深雪が意外感を隠しきれなくて大人二人が微笑まし気にそれを見ている、
と言う構図が出来上がるほどに。

達也が試作品を触った後、

風間さんがライフル型武装一体型CADの説明をしてるところで真田さんを捕まえる。

俺は、ある設計図を真田さんに渡した。

そろそろ家に帰る時間になり、家に帰る。

帰っても四葉を名乗ったことは秘密にしておこうと思ったのだが、

何故か帰った瞬間にそのことで叔母様に怒られた。

俺の服に盗聴器でも仕掛けてるんじゃないだろうか？

深雪 side

初日から波乱含みだった沖繩のバカンスも昨日は平穩を取り戻した。

今日も今のところは無事に過ぎている。

私たちは沖繩到着から四日目で漸く、南国の休日を満喫できるようになった。

ただ、その『私たち』にお兄様が含まれているかどうかは疑問だった。

時刻は午後一時、お昼寝代わりに部屋で読書中。

桜井さんが見つけてきた珍しい紙の魔導書をボンヤリと眺めているところだ。わざわざ紙の文書にするものは専門性が高い物ばかりなので、ボンヤリ眺めることしかできないのだ。

「昼夜ならどうなのかしら？」

なんでもそつなくこなす私の従弟。

文武両道で魔法も得意、本邸に引き籠もってばかりなのに社交性もある。

いつの間にか私は昼夜の事を気にかけていた。

気づけば昼夜の部屋の前に立っていた。

自然と手がノックするために上がって行つて・・・

「見つけたー！ー！ー！」

昼夜の声が聞こえた。いったい何があったというのだろうか？

私はそつと扉を開け、中を覗いてみると・・・

「何ですかこれは？」

思わず叫んでしまうくらい、部屋が服で散漫していた。

「あ、深雪。やったよ、俺はついに成し遂げたよ」

一体何をしたのだろう。とりあえず聞いてみると・・・

「これを見てよ……」

ポケットから小さなマイクのようなものが山ほど出てきた。

「これ全部盗聴器、きつと母さんからの差し金だろうね」

なんで叔母様は実の息子にこんなことをしているのだろう？

「きつとこれを叔母様も聞いていたんだ。だから昨日怒られたんだよ」

そしてお母様もこれに便乗しているのか……。

その時、昼夜のスマホの着信音が鳴った。

「あ、ごめん、用事は少し待ってね」

そう言うとき昼夜はスマホを確認した。何か重要な案件があるのだろうか？

すると昼夜はすごい速度で返信を打った。

「ちよつと俺今から基地に行くけど、深雪はついてくる？」

「？、何か用事でもあるのですか？」

「それはついてからのお楽しみ」

そう言われると余計に気になってしまっではないか。

私は本を眺めていても暇だったのでついていくことにした。

お兄様は昼夜がいれば心配ないだろうと言って、部屋でCADをいじくっていた。

お母様たちも、達也がそう言ったなら問題ないと言って行かせてくれた。

この後、お母様と桜井さんの間で、

「また新しくしかけといてね、桜井さん。私も怒っておくから」

「あれ大変なんですよ……」

「仕方ないじゃない。逐一昼夜の行動がわからないと不安だつて真夜が言うんだもの」と言う会話が あつたことは、私たちの知る限りではなかつた。

道中、共通の話題となると自然に魔法かお兄様かになる。……のだが。

「そう言えば深雪とこれ以前にあつたのは正月か」

私はとりあえず頷く。

四葉家では慶春会と言うのがあつて、大雑把に言うとお兄様の身内のパーティーだ。

「あの、昼夜つて苦手なこととかあるんですか」

とりあえず当たり障りのなさそうな会話で返す。

「そうだね、体術に関しては型を覚えるのが精いっぱいだったかな」

意外だ。お兄様と組手で互角に渡り合つたのに体術が苦手だなんて。

「後はね……深雪が絡んだ時の達也……かな？」

「え？」

「深雪が絡むと達也は急変するからね・・・」

三年前の慶春会で深雪に話しかけようとしたら喉元にバターナイフがあった」

お兄様、そんなことをなさっていたのですか・・・」

「まあ、そこから仲良くなつていったんだけどね・・・」

お兄様は昼夜の事を信頼している。昼夜もお兄様の事を信頼している。

なら私の事はどう思つてるのだろうか？

聞こうと思つたのだが・・・これは何か告白と聞き間違えられそうだ。

そうだ、こう聞いてみることにしてみよう。

「私の事でお兄様から聞いたのと、実際に話して何か違いがありましたか？」

「うくん、達也から聞いた第一印象はすごく優しいって感じだったかな。」

実際会つてみたら綺麗だし優しいと思つたかな？」

「ふえー！」

しまった、変な声が出てしまった。

で、でも今、綺麗つて・・・でも昼夜もかなりの美形だし・・・って何考えてんの!!

「それから、何か羨ましかったな・・・」

「？」

それが何か聞こうとしたところで、道程はすべて消化していた。

案内してくれたのは真田さんだった。

昼夜が用があるのも、風間さんではなく真田さんのようで、

この前とは違う研究室に案内された。

その部屋には簡素的なと、机の上にアタッシュケースが一つあった。

「さて、昼夜君。これが完成品だよ」

真田さんがカギを使ってアタッシュケースを開ける。

そこには、リボルバーのようなものがあつた。

それを昼夜さんは持って軽く引き金なども引く。

「うん、ものすごく手に馴染みます」

「それはよかつたよ」

「あの、昼夜？それは何？」

その言葉を聞いて、昼夜は不敵に笑う。

「その言葉を待ってました。これはリボルバー式CAD。」

シリンダーに弾丸型のカートリッジを入れて使うんだ。

これは六弾倉だから六種の系統の起動式を一つの特化型CADで使う事が出来る」

「ただ弾丸型のカートリッジは容量が少なくてね、一弾倉に六種しか詰めない」

「だけどこれにより、六弾倉×六種で36種の魔法を使う事が出来る」

これについてもかしなくても凄い事なんじゃないだろうか・・・。

「ただ、やっぱり特殊な構造にしたせいで完全な特化型よりは遅いよ。

でも、汎用型よりも早いのはこの僕が保証しよう」

そうと決まれば早速試し打ちと、昼夜は室内にある的に魔法を発動した。

加速、加重、移動、振動など、次々に系統の違う魔法が射出される。

昼夜は瞬く間に的をすべて撃ち落とした。

「真田さん、最高ですよこれ。ラグがありませんし魔法のバリエーションも十分」

「そう言ってもらえると作った甲斐があるよ」

真田さんも仕事があったので私たちもその後帰った。

昼夜は自分に合ったCADを手に入れてご機嫌だった。

家に帰ると昼夜は、お母様に理不尽だろう怒りをぶつけられて、

そのあとさらに、桜井さんから「私の仕事を増やさないでください！」と怒られた。

追憶編 八節

特製CADをもらってから二日が経過した。

CADの調整はほとんどなかったが、入れる魔法で結構悩んでしまった。

とは言えもうやることもないのだから、残りの一週間は深雪と仲良く過ごそう。

そう思って朝食を済ませた矢先に、警報機が鳴りだした。

情報元は国防軍、潜水ミサイル艦が主力の敵に侵攻されているとのことだ。

その時、スマホが鳴った。相手は・・・案の定お母様だった。

「もしも・・・」

『昼夜！大丈夫！怪我は無い！！今すぐお母さんがそっちに行って・・・！』

まだ相手は本島に上陸していないのに俺はケガをしないとイケないのか？

「お母さん、落ち着いて・・・とりあえずお願いがあるんだけど」

『何かしら？お母さんにそばにいて欲しい？なら今すぐ仕事を葉山さんに押し付けて』

この母が当主で四葉は大丈夫なのだろうか？

「そうじゃなくて、単純に便宜を図ってほしいの。」

「そうだね・・・恩納基地にでも連絡しておいてほしい。」

『分かったわ。私もできる限り早く行くから』

「うん、別に来なくても大丈夫だから。」

これくらい乗り切れないと四葉家次期当主筆頭候補は名乗れないでしょ？
それと、服に仕掛けられていた盗聴器の件だけど……」

ツーーー ツーーー……

電話を切られたか。まあ仕方がない。

暫くすると風間大尉から連絡がって基地のシエルターへのお誘いが来た。

俺たちは手配してもらった装甲車で基地に向かう事となった。

装甲車の中で俺は視界を広げる。

水際で押しとどめていると言っていたが、どうにも劣勢のようだ。

この調子だと数時間もすれば本島への上陸を許すことになるだろう。

「……昼夜？その目、どうしたの？」

話しかけてきたのは深雪だった。

「どうしたって？」

「いえ、さつきまで目が透明になっていたから……」

「ああ、そのことか。それは俺の魔法『光学の眼』オプティカル・サイトの効果だね。

光を媒体にする遠視系の魔法だよ。発動中は光を取り込みやすくするため目が透明

になる」

俺の眼は別にこれ一つではないのだが・・・それはそれとして、この眼による捜査力と、圧倒的魔法力で俺はいくつもの難題をクリアしてきた。だから・・・もし深雪たちが殺されそうになったら俺が・・・殺サナイト。

基地に入ると、既に数百人の人が避難していた。

俺たちは待機部屋の一つに、ほかの家族五人とともに入れられた。

その部屋で暫く待っていたが・・・

「・・・達也、桜井さん、聞こえました？」

「ああ、銃声だ。それも恐らくフルオートのアサルトライフル」

「敵が侵入してきたのでしょうか？」

「それならまだいいんですが・・・」

もしもそれと異なる答えならここはかなり危険だ。

俺は情報を得るために視界を広げてみるが・・・

「ダメだ、どうにも壁に魔法を妨害する結果があるみたいだ」

「昼夜に同じく、室内で使う分には問題なさそうだが・・・」

そこで俺は、震えた手でCADを持っていてる深雪に気づいた。

「深雪、落ち着いて。とりあえずこれでも食べなよ」

俺は持つてきていた果物を魔法でフローズンフルーツにして渡す。

「あ、ありがとう昼夜」

「何かあつても、俺と達也が絶対に守るから、深雪はドンと構えてればいいんだよ」
スプーン？当然持つてきている。ついでに達也たちの分も作った。

腹が減つては何とやらだ。そこに・・・

「おい、君たちは魔法師なのかね？それなら外の様子を見てきたまえ」

・・・俺の最も気に入らない人種が話しかけて来やがった。

「俺たちは基地関係者じゃないけど？」

「それがどうした？魔法師は人間に奉仕するために作られた『モノ』だろう？

だったら軍属かどうかなんて関係ないはずだ」

・・・呆れた。と言うか今時こんな思想の人がいるのか。

ここで言い返さないわけにはいかない。魔法師の将来のためにも。

「確かに俺たちは作られた存在かもしれない」

現に俺は半分作られた、もう半分は自ら作った魔法師だ。

「それでもあんた個人に奉仕する義務はない。

魔法師は社会に奉仕する存在であつて一個人奉仕する義務はない。

それよりあんた、自分の子供の前でそんなこと言つて恥ずかしくないのか？」

こいつは慌てて自分たちの子供を見る。

子供たちはこいつを軽蔑のまなざしで見つめていた。

そこに達也が追い打ちをかける。

「それに、この国の魔法師の約八割は血統交配と潜在能力開発です。

生物学的に作られたのは二割にも満ちません」

「達也」

「この場を沈めたのは意外にも叔母様だった。

「達也、悪いけど外の様子を見てきてくれるかしら？」

「ですが、今の俺の実力では離れたところから深雪を守ることは……」

「……達也、深雪は俺に任せておけ。絶対に傷ひとつさえつけない」

「昼夜まで……わかった、深雪を任せたぞ」

そう言つて達也は部屋から出ていった。

「……とは言つたものを、かなりヤバい予感がするんですが……」

言うならば……王手つてところですよ」

「確かに嫌な予感はあるけど、ここには飛車角より強い駒があるから大丈夫でしょ？」

「まあ、お母様とも約束しましたしね……」

何があっても死にはしない。そもそも俺はそう簡単に死ねない。自分でそういう体にした。自分で殺すための魔法を身につけた。

迷いはない。後悔もない。あるのは、最強であるという決心だけ。自分の周りを守るための最強の強さ。それだけでいい。

その時、扉から声が聞こえてきた。

「失礼します！空挺第二中隊の金城一等兵であります！

皆様を地下のシエルタワーにご案内に参りました！」

この声に俺と叔母様を除いて緊張感が緩んだ。

逆に俺たち二人はむしろ今まで以上に警戒した。

金城は扉を開けて入ってきた。さて、どうしたものか……？

「すみません、連れが一人外の様子を見に行つてまして……」

なるほど、その手があったか。達也には悪いがここはこの状況を利用してもらう。
う。

「しかし、すでに敵の一部が基地の奥深くに侵入しています」

「なら、こつちのオジサンたちだけ連れて行つておいてください。

あいつを置いて行くことなんかできませんから」

深雪は安心したような顔を浮かべている。

俺もだが、達也を置いて行くという選択肢はないからだろう。

「しかし……」

金城たちは三人の仲間たちと相談を始めた。

「達也君でしたら風間大尉に頼めば合流できると思いますか？」

「勿論達也のことは心配だけど、これは十分の一以下は建前だよ」

「では？」

「勘よ」

俺の代わりに答えたのは叔母様だった。

その言葉一つで、桜井さんと深雪も警戒を取り戻した。

なんとたつて忘却レテ・ミス・トレスの川の支配者と言われる叔母様の勘だ。

「申し訳ありませんがこの部屋に置いて行くわけにはいきません。

お連れの方は我々が責任をもって案内しますので……」

しつこく言ってくる金城、次はどう断ろうと考えたとき扉が開いた。

「ディック！」

部屋に入ってきたのは松垣だった。そして金城は松垣に発砲した。

それと同時に金城グループの一人が指輪を突き出す。

「させるか！」

予想通り、指輪はサイオンのノイズを発生させた。

そしてそれが俺たちに届く前に、キャストアクティベートが完成する。

ジャミングは相殺され、桜井さんは障壁魔法で叔母様と深雪を守る。

「チツ、ガキが！」

金城グループは俺に銃口を向ける。

俺はベクトル反転の障壁魔法を発動して弾丸を防ぐ。

俺は攻撃用の魔法を組み立てようとするが、何分アクティベートは複雑な為手を抜けない。

比較的容易なドライブリザードを発動するが、アクティベートと障壁が弱まる。

俺の後ろに深雪がいる。桜井さんの障壁はあるがあまり負担をかけたくない。

俺は防御を最低限にした。具体的には障壁を頭部と胸部に限定した。

腕に弾が当たる。それを引き抜くと弾丸で空いた穴が治っていく。

その間にも俺のドライブリザードは敵を制圧していく。

「チイツ！死ぬエエ！！」

金城はマシンガンを俺に向けた圧倒的な数の弾が来る。

それらは防いだはずだった。しかし、跳弾が障壁の横から弾丸が俺の胸に命中した。

それと同時に、ドライブリザードは完全に金城グループを制圧した。

深雪 side

昼夜はキャストロジャミングと防御、攻撃をすべて同時にこなして敵を制圧した。しかし、それと同時に昼夜は倒れてしまった。私はすぐに昼夜に駆け寄った。

「昼夜！大丈夫！！」

「ああ、ヤバいなあ．．．さすがにこれは直せないわ．．．」

よく見ると、昼夜は所々に傷があるが、それらはたちまち治っていく。

だが、胸の傷だけは治らない．．．。そこから血があふれてくる。

「流石に．．．ここだけ．．．は、無理がある．．．みたいだね．．．」

「昼夜．．．だめ．．．しゃべっちゃだめよ．．．お兄様が来たら治るから！」

「深雪が無事なら．．．大丈夫．．．だ．．．よ．．．」

昼夜の眼が閉じられていく。何故だかこの目が閉じてしまったら全てが終わる気が

し

た。

「深雪！」

その時、あらゆる事象改変を元に戻せるあの人の声が聞こえてた。

「お兄様！昼夜が！」

使わせてはいけないとわかっていた。それでも、兄の力に頼るしかなかった。
「よくやった、昼夜！」

お兄様は昼夜に左手で握った拳銃型のCADを向けていた。

追憶編 九節

昼夜 side

もはや胸の傷の痛みすらも無くなり、ただ生ぬるい感覚と、
視界狭まっていくのを待つことしかできないと思つたが……。

「……ん?」

しかし、意識が急にはつきりする。

「昼夜!!」

すると深雪がいきなり俺の胸に頭を預けてきた。

「おわっ!……ええと……」

目線を上げると、達也が立っていた。右手のCADを向けて。

「達也助けてくれたのは嬉しいけど右のCADは分解用じゃなかったっけ!!」

俺は恐怖を感じて息継ぎ一つもせず言い切った。

「全く、これで気を失ってたら強度最高の分解を使うところだったぞ」

もう少し遅ければ確実に殺られるところだった……。

「そうだったら俺の気分がよくないからな」

あ、一応気分は害することになるんだ。まあそれほどではないだろうけど。

「それより昼夜、お前の情報がずいぶん小さくなってるぞ?」

「あゝ、そういうおなかすいたな・・・」

俺はバッグに入れていた大量のチョコレートバー出す。

それを深雪にかからないようにどんどん食べる。

「んでモグムシャ・・・風間さん、これは一体どういうことですかムシャゴク?」

達也に遅れて入ってきた風間さんに話しかける。

「・・・わが軍から反逆者が出たようだ・・・申し訳ない。

罪滅ぼしにはならないだろうが、望むことはなんなりと言ってくれ。

国防軍として出来る限りの便宜を図ろう」

風間さんにそこまでの権限がムシャムシャあるかどうかは疑問だがモグモグ、取り合

えず・・・

「正確な状況を教えてください。敵は大亜連合ですね?」

俺の代わりにムグムグに達也が聞いたゴクンゴクン。

「確証はないが、恐らく間違いないだろう」

風間さんが答えると同時に俺も大量のチョコバーを食べ切った。

「敵を水際で食い止めてるといふのは、嘘ですね？」

達也が矢継ぎ早に質問する。口がチヨコの味になったので次は水がぶ飲みする。

「そうだ、名護市北西の海岸に敵がすでに上陸している。」

慶良間近海も敵に制海権を握られている。兵員移動も妨害を受けた」

結構ガボガボ酷い状況ゴクゴクだなゲツホツゲツホ・・むせた。

「だが案ずることはない。ゲリラについてはさほどの数ではなかった。

軍内部の反逆者も間もなく片付くだろう」

「・・・プハア、上陸地点の確保が終了したからゲリラとかは用済みだろ。

捨て駒失ったって『国民多すぎワロタww』とか言ってる大亜連合には痒くもないだ

ろう」

「・・・・・」

水を飲み終えた俺の言葉に風間さんは黙ってしまふ。

凶星だったから・・・だけではいようだがそれはどうでもいい。

「んじゃ次、深夜さんと桜井さん、そして深雪を指令室にでも保護してください。

どうせ民間人用のシエルターよりも強固なんでしょう？」

「分かった。防空指令室の装甲の強度はシエルターの二倍だ」

やっぱりな。

「では最後にアーマースーツと歩兵用装備一式を貸してください。と言つても、消耗品はお返しできませんが」

その時スマホが震える。電波はギリギリはいるようだ。

そこにはお母様からのメールが・・・

『思う存分暴れて構わないわ。』

昼夜に歯向かう事の恐ろしさを存分に教えてあげればいいわ。

あなたを愛する母より』

「何故だ？」

風間さんは達也の要求に疑問を上げる。

「彼らは妹に手をかけました。その報いを与えなければいけません」

それが達也の決断。無論俺も・・・。

「俺は装備入りません。この身とCAD一つ?・・・二丁で殲滅します」

お母様からの連絡の意味は要するに目立てという事だろう。

と言う事なんでスーツもいらないだろう。

一応、画像にはある程度魔法でぼかしておこう。水蒸気でも纏えば十分だろう。

「君が戦う理由は？」

戦う理由?そんなもの決まっている。

「俺が四葉だから。四葉は手を出したものに容赦はしない。

俺個人の理由が必要なら、俺がその思想に染まっているから。

俺も、自分の日常を壊すものは叩き潰す」

「・・・二人だけで行くつもりか？」

「自分がなそうとしているのは個人的な報復です」

「俺が出るのは報復に加えて一厘の十師族の義務だ」

「それでも別にかまわん。感情と無縁な戦争などありはしない。

復讐心を持つて戦うにしても、制御されていれば問題ない。

無論、非戦闘員や投降者の虐殺を認めるわけにはいかないが」

「投降する暇など与えない（ません）」

「ならばよし、今回の任務は侵攻軍の撃退、降伏の勧告をする必要はない」

風間さんも俺たちとは違う闘志を見せる。

「司波達也、及び四葉昼夜、君たちを我々の戦列に加えよう」

「俺は軍の指揮に従うつもりはない」

「自分は敵が同じ以上、肩を並べて戦います」

風間さんは真田さんに達也の装備を持って来させる。

俺は俺で先に基地から出ようとする。

「お兄様！昼夜！」

その時、後ろから深雪の声が聞こえる。

「どうかした、深雪？」

「どうかしたじゃありません！お兄様はきつと止まりません。」

でも……昼夜はお願いだから行かないで！」

「深雪……」

まさか、ここまで言ってくれるようになるとは思つてなかった。

だけど、ここにとどまるわけにはいかない。

「止めてくれてありがとう、深雪。でも、俺はここにいるわけにはいかないんだ。」

達也の目標は魔法師が兵器ではなくなること。

でも、俺は自ら自分の体を兵器にした。だから俺は戦わないといけない。

それがただ強くあることを望んだ俺の義務。

……安心して、俺は必ず敵を殲滅するし、使い捨てで終わるつもりもない」

使い捨て、自分を道具と割り切った考え方。

深雪は残念そうな顔をした。俺はとりあえず頭を撫でる。

「深雪、さっき言った通り俺は帰ってくるつもりだ、無論達也と一緒に。」

だから、深雪は俺たちが帰る場所について欲しい。深雪の場所は達也ならわかるから」

深雪は顔を上げてくれて・・・

「分かりました、必ず帰ってきてください」

勿論、とだけ答えて俺は戦場に向かった。

深雪 side

お兄様と昼夜は角を曲がって行ってしまった。

「あら、昼夜も行ってしまったのね・・・」

「お母様・・・」

私は話の中で言っていた一つの言葉を思い出した。

「お母様・・・昼夜が言っていたのですが、自分を兵器にしたと・・・」

お母様は少し困ったような表情をする。

「・・・そうね・・・昼夜が言ったって言う事は知られてもいいという事でしょう。

でも、まずは安全な場所に移動しましょう」

私たちは防空指令室に向かった。

指令室は装甲扉を五枚抜けた先にあつた。

中ではたくさんのオペレーターが大型スクリーンに向かっていた。そのスクリーンには戦場が映っている。

敵兵や戦車が霧のように消える。けが人はすぐに無傷に戻る。

お兄様の魔法、『分解』と『再生』だ。

そして別のスクリーンには、夜の中で敵が閃光に飲まれて消え去った。

恐らく昼夜だろう、いや、夜を使えるのはこの世で叔母様と昼夜だけだ。

昼夜に向かう弾丸は全て跳ね返される。その弾丸は全て敵の胸を突く。

「そろそろ、話をしましょうか」

「あ・・・はい」

お母様は桜井さんに防音シールドを展開させた。

「昼夜は今でこそ『流星群』や『回復』を使えるのだけど、

生まれた時からと言うわけではないわ」

魔法と言うのは生まれつきの才能がモノを言う。

お母様の行ったことは元はそれらを使う事が出来る才能がなかったということだ。

「昼夜の本当の魔法、それは『生体構造干渉』、要するに遺伝子操作。

ある意味私の精神構造干渉の対極に位置する魔法ね」

遺伝子操作、その言葉一つで昼夜の言った言葉の意味を理解した。

「昼夜の魔法師としての才能のキャパシティは常軌を逸していた。

『流星群』『回復』『エネルギー』それらの魔法を得てもまだ余りあるわ。

昼夜がそれらの魔法を得たのはただカッコいいから、強いから、面白そうだから。

そんな些細な理由、でも後になって昼夜は魔法が戦争に使われていることを知った。

昼夜は強くなるうとした結果自分が兵器になったと感じた」

「ですがそれは……！」

「ええ、すべての魔法師が魔法と言う兵器を持っている。

だけど、昼夜が得た魔法はとりわけ強力な魔法ばかり。

だから昼夜は自分を兵器と呼ぶ。人を殺すために作られたモノ。

そう割り切って、四葉の人間として生きていくことを決めた。

四葉はかつて国一つを滅ぼした。だから自分にはびつたりだと」

魔法師は元々兵器として開発されたことも気にしてゐるのでは、と話を締めくくった。

桜井さんも驚いている。昼夜はただ無邪気に強さを求めた。

それが人を傷つける力になると知らずに、殺す力になると知らずに。

昼夜はそれを知った時どう思っただろう？

私は元から使える魔法が決まっていた。才能と言う範囲が決められていた。

でも昼夜は遺伝子进行操作をすることでその範囲を広げる事が出来る。

そしてその範囲を広げた価値に気づいてしまった。
魔法師としてそれらの強力な魔法を使う価値を。

それに気づいてしまった時のショックはどれだけだったのだろうか・・・？

昼夜 side

世界は夜に包まれている。敵が閃光に飲まれる。消える。

『流星群』派生『ファイクスト・スター恒星』。

空間内の光を光球と闇に分けさらに一定の空間の光透過率を100%にする。

その空間に光球を発生させ、対象内の個体、液体を気体にする。

要するにただ線か空間かの違いだ。

昼夜は一人でここ一帯の敵全てを光に変えた。

念のため眼を広げる。一人茂みの中に隠れている。銃を俺に向けていた。

銃弾が俺の下腹部に当たる。数発食らったが障壁魔法で残りを防ぐ。

弾丸を移動魔法で抜く。そして『回復』を発動する。

撃たれた傷がふさがっていく。

この魔法は食べることで得たエネルギーを情報次元の自分に張り付ける。

傷を受けた時、そのエネルギーを使って細胞を超速で分裂を繰り返す。それによって傷を回復させる。

ただ、心臓の近くなどは傷が治るよりも先に血流がさらに傷を作る。

だから心臓などは最優先で守らないといけない。

腕がちぎれた、とかは治す方法はある。

因みに、俺が少食なのはエネルギーを情報次元に張り付けるため、

肉体的におなかが減っていても、情報的にエネルギーは足りている状態だからだ。

銃を撃った兵士は茂みごと光に飲まれた消え去った。

「やっぱ、人を殺すのは楽しいな．．．」

何時からそう思うようになったのかはわからない。

四葉としての任務を始めた後だというのは分かる。

兵器として生きることを決めて人を殺した。始めから抵抗はなかった。

始めから楽しいとは思わなかったけど、慣れたからだろう。

まあ、今はそんなことを考えても仕方ない。ただ敵を殲滅するだけだ。

追憶編 十節

ナレーション side

侵攻軍は完全に潰走していた。その原因は明らかだった。

小柄でアーマースーツを身にまとい、侵攻軍を霧のように消し、さらには致命傷を受けた味方を再生させる『魔人』『摩醯首羅』。

同じく小柄な自らの周りに霧を纏い、

夜を展開し人を光に消す『天界の番人』、『蘇摩』。

この二つ名の親は、ともに前者は日本軍、後者は侵攻軍である。

敵兵を消し、味方兵をよみがえらせる究極の魔人であり、戦神。

夜を支配し、光の下に敵を消す天界の番人であり、月と光の神。

侵攻軍に二柱の神にあらがうすべなど残されていなかった。

侵攻軍は武器を捨て、白旗と大亜連合の海軍旗が上がった。

戦神は止まろうとしなかったが、月と光の神の説得により武器を収めた。

昼夜 side

「まあとりあえず、お疲れ様。大黒特尉」

「お前もな、白爪特尉」

この名前は俺たちの偽名、大黒竜也と白爪中也と、与えられた特尉の称号である。

対亜連合軍は風間さんの部隊が拘束していつている。

「さて、どうにもこれだけじゃ終わらないみたいだね・・・」

「? どういうことだ?」

俺の視界は光があるならどこまでも視れる。

対して竜也は自分に関係性のあるものを視る。

故にこれに関しては気づいたのは俺が先だった。

「司令部より伝達!」

後ろにいた通信兵が風間さんに通信機を渡す。

「中也、どういうことだ?」

竜也は風間さんに聞くよりも俺に聞いた方が早いと判断したようだ。

「栗国島北方から敵艦隊別動隊が接近中。」

高速巡洋艦一隻、駆逐艦三隻の先行部隊に、

後続巡洋艦一隻、駆逐艦一隻の後続部隊。

どうにも強力な魔法師がいるとみて安心の二段構えにしてきたみたい。

後続との距離は結構あるから一発で沈めるのは難しいけど・・・やるんでしょ?」

「当然だ」

「じゃあ遠慮なく打てば? 敵の攻撃と後続は俺がやるし」

「任せたぞ」

この後風間さんに作戦を端的に話して、実行が認められた。

ただし、風間さんと真田さんがお目付け役で残ることになった。

竜也の作戦に必要なライフル型CADが来た時には先行部隊は三十キロまで近づいていた。

竜也はCADを発動する。銃口の先に加速領域が展開される。

構築された領域の規模に真田さんは満足げに頷く。

だが、それで終わるほど達也は甘くない。

「なんと・・・!」

さらにその先にもう一つの魔法領域が展開される。

先ほどの加速魔法と仕組みは同じ。違いは変数だ。

始めの慣性質量低下が上昇に、速度倍率が等倍、慣性質量の復元が無効化に。

これにより加速された弾丸は、さらに慣性の増加で減速しにくい状態になった。達也は目で追えるはずのない弾丸を見つめ、首を横に振る。

「ダメですね、二十キロまでしか届きませんでした」

「んじやま、計画通りに。お二人は基地に帰ってください。」

「ここは竜也と俺で何とかしますんで」

「ここで風間さんたちは基地に戻ると言いそうだったが、その意味を理解した。」

「いや、我々もここに残ろう」

「いいんですか？ 俺が防御に失敗したりしたらみんな仲良くあの世行きですよ？」「百パーセント成功する作戦などあり得んし、戦死の危険がない戦場もない。」

勝敗が兵家の常ならば、生死は兵士の常だ」

「いいですね・・・そう言うの好きですよ」

俺はこの時、笑っていたそうだ。正直理由は分からないが。

敵艦はこの後すぐに砲撃を開始した。相手の巡洋艦の砲撃の推定距離は二十キロ。

だが、この距離は確実に二十五キロ弱飛んでいる。

「チツ、竜也！ 悪いが少し急いでくれ！」

「分かった」

だが、相手の砲撃は一度掃射すると間隔がある。

「どうやら普通のより大きめのフレミングランチャーを積んでるみたいだな……」
恐らく間隔は射撃後の反動を沈めるためのようだ。

今の時代、連射速度が武装の最重要項目となっているが、
恐らく先制攻撃して敵を一撃で仕留めるためにだけ用意した船だろう。

こんな札を切ってくるとは、どうにも本気で侵略しに来たらしい。

一方竜也も、既に弾丸の起動を推測し終えたようだ。

その間に飛んでくる砲弾は、力の向きを縦に90度回転させて下に向けることで防いだ。

「……達也、手をつなぐぞ。俺たちの眼を合わせる」

「それしかなさそうだな」

四葉の秘術の一つに視覚情報を重ねるものがある。これには身体的接触が不可欠だ。
達也の情報を見る『精霊の眼』、俺の光媒体の遠視能力『光学の眼』。

この二つの眼により、俺たちは今情報と物質の二つの次元を重ね合わせていた。

「悪いな、お前の魔法ならこんなことしなくていいのに」

「気にするな、兄の意地って奴だろう？ ならどんとかませ」

「兄と言うより、この場合男の意地だな……」

達也は今までの弾丸の軌跡、風の状況、すべてを再計算した。

「よし、行けるー!」

敵との距離はまだ二十三キロ、最高射程が二十キロ。つまり・・

「行けえええええええええ!!」

達也の放つ弾丸は、最高高度に達した時さらに加速した。

俺の加速領域だ。情報が見れるため設置場所には迷わなかった。

そして弾丸が敵の上空に飛来した時・・

ドカアアアアアン!!!

弾丸はエネルギーに分解され、強力な爆発が発生する。

これが達也の推定戦略級魔法『質量爆散』マテリアル・バースト。

それは敵艦隊四隻をすべて巻き込んだ。

「さて、俺も仕事するか」

「昼夜、想子をかなり消耗している。大丈夫か?」

正直なところけだるい感じは否めない。

だが、次の艦隊にも同じことをするのはナンセンスだ。それに・・

「達也、分かってるだろ? 俺は自分の事を知った日から・・

止まるつもりは一切ないって!!」

既に俺の視覚はある星に繋がっている。太陽だ。

そして同時に敵の後続部隊もとらえていた。

『グロリアス・レイ永光熱線』、俺の推定戦略級魔法。

永が意味するのは永遠、人の知る限りで消えたことのない永遠の炎。

グロリアスはそのまま栄光、太陽はその光で栄えすらも自在に操る。

正直ネーミングセンスはどうかとも思う。

それは、俺を作り出した神のせいだから仕方ない。

だがそんなことはどうでもいい。

魔法領域が太陽の一部と敵艦隊の上空に発生する。

太陽で発生したエネルギーのごく一部が切り取られると同時に、

そのエネルギーは敵艦隊上空に発生した。

ドゴオオオオオオオオオオン!!!

転送したエネルギーは太陽のごく一部。

だが、そのエネルギーは人間の運命を容易に決める事が出来るほどだ。

永遠の象徴であり栄光の象徴でもある太陽の劫火、

それを超至近距離食らって残ったものは・・・なかった。

「うわっ・・・!」

敵が消えたのを見届けると、急に体の力が抜けた。

想子がほぼ枯渴したのだろう。眩暈と強烈な疲労に襲われる。

「昼夜！」

俺その後呆気なく倒れ、意識を手放した。

「さて昼夜、お話があります」

皆さん、俺は今、本家にいます。

どうやら三日ほど寝ていたそうで、昨日目を覚ましてお母様に抱き着かれました。他にも、昨日のうちに分家の方々が（お母様の影響力で）やってきて、

お見舞いしてくださいました。

そして今、ベットの上的の俺の眼の前には、

四葉家現当主であるお母様、その補佐をしている叔母様、葉山さんと桜井さん、そして風間さんと真田さん、達也と深雪がいました。

「・・・なんですか、お母様？」

「まず、風間さんからお願ひ、いえ、要求があるそうよ」

「成程、まずは戦略級魔法絡みですか」

昨日のうちに情報を集めていて、戦略級魔法承認の動きがあるのは察していた。

「まずは四葉殿、あなた方のご子息を危険の伴う戦場に送り出したこと、

申し訳ございませんでした」

「いえ、昼夜たちが選んだことなら私は気にしません」

ポーカーフェイスを保ってはいるが、四葉他関係者には心底心配したのは分かり切っている。

「では、本題に入らせていただきます。

四葉君の『グロリアス・レイ永光熱線』、または司波君の『マテリアル・バースト質量爆散』、

そのどちらかを戦略級魔法、及び戦略級魔法師として登録させていたきたい」

「まあ、そうなりますよね」

後続のが二隻とはいえ、艦隊を二度も吹き飛ばした劫火は、

明らかにやりすぎと言っていていいだろう。

ここで誰かが立たなければ日本は国際的に批判される可能性が高い。

あと、お母様たちの前だからか俺の事を四葉君で呼んでいるのは仕方ないだろう。

「ですが！ お兄様も昼夜もまだ中学生ですよ！」

深雪の言う事も確かである。

中学生が戦略級と言って信じるかと言われたら普通は信じない。だが・・・

「各国は間違いなく信じるだろうなく、大亜の情報漏れか、

小柄な魔法師に状況を翻されたというわさが出回っているから」

そしてもう一つの問題は負担の大きさだ。こればかりは・・・

「四葉君、司波君、そして君達は私が隊長に就任する独立魔装大隊に入らないか？」

聞くところによると、『銀狐』と呼ばれる女性士官の旅団の設立の柱になるそうだ。

「我々なら彼らほかの軍部に比べてと少なからず交流があります。」

なので、我々の力で彼らの負担を少しでも軽くしてやりたいのです」

「……………」

お母様たちは黙っている。その後、叔母様と少し話した後・・・

「本人の意思の前に四葉としての判断を言わせてもらっていいかしら？」

「お母様の仰せのままに」

「同じく」

「まず、戦略級魔法師の件について。

これに関しては昼夜と『永光熱線』を発表してもらいます。

そして、独立魔装大隊には二人とも参加してもらいたいわ。

但し名前は達也は大黒竜也、昼夜は白爪中也で登録してください」

恐らく、軍と接点を持つておくのがお母様の狙いではあるだろう。

だが、お母様の考え読もうとすると（強烈な息子愛によって）空回りする。

「で、昼夜たちはどうかしら？」

「・・・俺は構いません。俺が出ることによって、俺の周りを守れるなら」

「自分も構いません」

俺と達也が賛成して、少しは気が緩んだ。

深雪も、風間さんたちの事は何気に信頼しているようだ。

「ただし、俺から一つ条件があります。

俺も出来れば顔バレはしたくありません。少し手を打たせて頂きます」

この策によって、戦略級魔法師、四葉昼夜の素顔は高校時代まで捏造された。

いや、誰もが知らないうちに捏造するように誘導されていたのだった。

そこからの話は風間さんたちからの感謝などであった。

そして、何故か最後には深雪が部屋に残っていた。

「えーと、深雪？　なんでここに残ってるの？」

「……………」

深雪は黙ってうつむいている。

そして手を挙げたかと思うと、頬が熱くなっていた。

「バカッ！」

「え？」

ここで俺は頬をはたかれたのに気づいた。

「私の前であれだけ心配させて！　そのうえ三日も寝てしまうなんて！」

私がどれだけ心配したと思ってるの！」

「深雪……………」

そうか、深雪はそんなに俺のことを心配してくれてたのか…………。

なら俺も、ちゃんと答えを返さないといけないだろう。

「深雪、心配してくれて、ホントにありがとう」

あのときと同じ、俺にできる最大限の笑顔でそう伝えた。

「……………バカ……………!!」

それだけ言うと、深雪は部屋から出ていった。

さて・・・疲れたし寝るか。何気に疲労もまだ残ってるし。

入学編

入学編 一節

昼夜 side

皆、どうも。四葉昼夜だ。今年で魔法第一高校に首席入学、
そして新入生総代として答辞を読む・・・予定だったのだが。

「・・・お母様、叔母様、これはどういうことですか？」

「・・・・・・・・」

一応今日の日にちを言っておこう、2095、3、31、先負だ。

先負は陰陽道の考え方で急用に悪いと言われている。

俺の後ろでは、俺のガーディアンになった桜井水波が無言で立っている。

「はあ、お二人に聞いても仕方ありませんね」

そこで俺はこの部屋のクローゼットを開ける。

そこには、テープで固定された桜井さんと葉山さんがいた。

「・・・・・・・・(汗)」

因みに水波は（；・・・、口・・・）↑まさにこんな感じだ。

とりあえず桜井さんたちのテープを魔法でほどく。

「ぜえ……ぜえ……ありがとうございませう昼夜様……」

「ほん……とに……助かったわ……」

俺が来る直前に縛られたようで、空腹で死にそうとかではない。

「もう一度聞きますよ？」

何故四葉の今年度の目標録、四月五日提出なのを一切できてないんですか?!

お母様たちはビクビクしている。『極東の魔王』に『忘却の川の支配者』が、だ。

「それは……」その……」

「桜井さん、葉山さん、説明お願いします」

「承知しました」

「!!」

「要するに、俺と達也、深雪の誕生日プレゼントを迷ってたら忘れてたと」

「・・・はい」

うん、とりあえず言う事は・・・

「バツカじゃねえの?!?!」

!!!?!?!

「バカとは失礼ね!」「そうよ! 自分の子供の高校入学年の誕生日プレゼントよ!」

うん、一つ言っておこう。叔母様もお母様のモンペ菌に感染した。

四葉家をこのモンペ菌は着実に侵していつている。

この前亜夜子ちゃんと文弥君が『最近お父様が怖いんです』と言っていた。

「はあ、これじゃ心配して東京にも行けない」

「え?」

「桜井さん、葉山さん、この書類片づけるから手伝って。」

水波も俺たちのアシスト、まずはコーヒーを全員分入れてきて」

「「承知しました」」

「え・・・えと・・・昼夜・・・?」

「なんですか、御当主様」

「ヒヤッ?!」

「真夜?!」

「ちゆ・・・昼夜・・・私たちの事は心配せず東京に・・・」

「ほかにも近々期限の書類が山ほどありましたよね」

「う・・・」

「あ、それから一校と深雪に連絡入れないと」

「昼夜、なんでかしら・・・？」

「深雪に新入生総代理をやってもらうんです」

「ヒョエエエエエエ!!」

「ま、真夜あああああああ!」

そこから俺たちは缶詰で書類の処理に追われた。

気を失ったお母様には（葉山さんさえも）手を差し伸べず、

翌日目覚めてから猛ダツシユで仕事をこなしていた。

そしてそれらが終わったのは4月3日の日の出る前だった。そう、入学式の日である。

「ちゆ・・・昼夜・・・今すぐ車で・・・」

「執事もメイドも酷使過ぎて車は使えませんね」

「ならバイクがあるから乗ると・・・」

「正直二徹してるから移動中は寝たいので、

駅までバイク使わせてもらって電車でいきます」

「ええ・・・行つてらっしゃい・・・」

俺はバイクの後ろに水波を乗せて駅まで向かった。

水波にはあらかじめ昨日寝させておいたから駅になれば起こしてくれる。

「はあ~~~~~」

「昼夜様も意外と大変なんですね・・・」

「全くだよ・・・」

真「は！ 用意していた誕生日プレゼント渡しそびれたわ！」

深「無理・・・もう寝かせて・・・zzz」

桜・葉（もう昼夜君（様）が当主になった方がいいんじゃない（のでは）？）

深雪 side

3月31日、明日は昼夜の誕生日だ。

予定では今日は本家で月越しして叔母様から誕生日プレゼントをもらい、

その後、車で東京までやってくるとのことだったので、こっちに來たらプレゼント渡すのだ。

すると、スマホが鳴った。差出人は昼夜だ。早めに來るとかだろうか？

『用事が出来て明日そっち行けなくなった。』

入学式に間に合うかも怪しい。新入生総代理として頑張ってくれ。

学校には伝えたとし答辞の文章は考えて下にファイルしておいたから。

原因も同じく下にファイルしている。大変な仕事を任せて悪い』

私の心は意気消沈だった。折角昼夜の答辞が聞けると思っていたのに……。

一応当時の原稿を見たが、これなら問題なさそうだ。

そして原因は……

「バツカじゃないの?!?!?!」

!!!!?!?!?

その後、部屋が凍り付いてお兄様が降りてきた後のことは覚えていない。

昼夜 side

「さま……やさま……ちゅうやさま……昼夜様!」

「フアッ！」

水波のおかげで目が覚めた。

「うう……水波……ふあ……」

とりあえずあくびをして眠気を飛ばす。

「ふう……水波、次の駅？」

「はい、指示通りに」

「さて、行きますか」

本家で制服に着替えておいた荷物も大してないし、住む家には水波に行ってもらおう。

さて、高校生活の始まりだ。

高校に着くと、門は閉鎖されていたので飛び越えた。

体育館では深雪の答辞の最後の部分を聞く事が出来た。

取り合えず、俺はこの絶妙に死角などところで水波のおにぎりでも食べよう。

わざわざ出る前に作ってくれたそうだ。魔法瓶にはカフェラテが入っていた。

さつきから感じる視線、達也は俺の存在に気づいたようだ。

さて、朝食もとったしさらつと戻っていった百山先生を追いかけますか。校長室の前に来て、一応ノックする。

「入ってきなさい」

ノックだけだれかわかるかと思ったが、

いたるところに監視カメラがあるのを思い出した。それはどうでもいいことで、

「失礼します。今年入学しました、四葉昼夜です」

「うむ、君が四葉君か」

「はい、僕がああの四葉昼夜です」

「ふむ、事情は聴いている。」

「ここでの三年間が有意義なものになるよう、頑張り給え」

「ありがとうございます」

それだけで会話は終わってしまい、クラスだけ聞いて廊下に出た。

クラスは・・・B組か・・・。

今日は入学式だけでおしまいだったし、小悪魔にも捕まらずに済んだ。

そのまま家に帰るとしよう。

入学編 一節

2095.04.04

昨日は家に帰ったらすぐに寝ようとしたのだが、お母様からの電話が来た。

ましてや昼に始業式終わって13:30に昼食を食べ終わった後電話が来たのだが、それから反省やら愚痴やら延々と相手をさせられ続け、今日の02:00になつていた。

俺のお母様は自分のせいで息子が寝不足なのがわからないのだろうか。

水波はいつの間にか晩御飯を用意して眠っていた。

ちよつとむかついたので水波の部屋の前に猫のぬいぐるみを置いてみた。

起きたらどんな反応か気になるので、カメラも仕掛けた。

飯、風呂、寝る。

朝、目覚ましで起きてみるとカメラを確認した。

すると・・・一瞬ドアが開いたかと思えば猫のぬいぐるみが無くなっていた。

その後何事もなかったかのようには水波はキッチンに向かっていた。

「……俺は何をしているんだ？」

母親が眠らせてくれなかった八つ当たりには自分の護衛の観察。

うん、やっぱりおかしい。作者の状態もだが俺の状態もおかしいようだ。寝不足で頭がしつかり動いてないのだろう。

取り合えずリビングに行こう。水波が食事を用意してくれてるはずだ。

「あ、昼夜様、おはようございます」

「おう、おはよう」

「食事ならできていますのでお運びしますね」

「それくらい自分でやるって、一緒に食べようぜ」

「！……は、はい……／＼／＼」

一体なんだというのだろうか？水波の顔がやけに赤い。

「水波？ 何かあったか？」

こういう時はピンポイントに着くと逆効果かもしれないから大雑把に聞いてみた。

「あ／＼／＼……はい、朝起きると私の部屋の前に猫のぬいぐるみがありまして、

自分が昔欲しかった物のリメイク版で、もらえなかったものなので……

忘れてて焦った季節外れのサンタクロースかなーと……」

「ふーん・・・」

えっ！マジ！確かにあのぬいぐるみ桜井さんが何か言っただけだ、思い出せない！とりあえず違和感の無いように話を進めないと。

「サンタクロースか、無法者の侵入者は勘弁だけど、

いい人だったから俺も水波も気づかなかつたんだろっね」

「そ・・・そうですね／＼」

・・・なんでさつきからちんちんこつちを見てくるんだ？

俺のポーカーフェイスが見破られたか？いやその可能性は低い。

そこで俺は時計に気づく。

「まずい、入学式遅刻で初日も遅刻は少しまずい。水波、行ってくる！」

「あ、はい！」

恐らくクラスに入るのは時間ギリギリになりそうだ。

水「昼夜様は一体なぜ猫のぬいぐるみを・・・？」

1—Bクラスルーム

このクラスでは、今まさに一つの嵐を待ち受けようとしていた。

そう、戦略級魔法師であり四アンタツチヤブル葉の直系である、四葉昼夜を。

デモムービーがそれぞれのディスプレイで流れている。

だが、生徒の意識はそこにはなかった。

(四葉君って、家は怖いけど顔はかなりいいよね！なんとというかハンサムで！)

(分かる！ しかも身長も170cmあつて運動神経も抜群だつて！)

(しかも勉強もできて魔法もできるなんて反則だよね！)

以上、主に女子の意見。

(おい、四葉つてやつ実は司波さんの答辞が見たかっただけらしいぞ？)

(まじか？ まああんな野郎の答辞を聞いても嬉しくはないが・・・)

(俺のきいた噂ではモンペの親にモンチの子供らしいぞ)

以上、主に男子の意見。

しかし、これらの意見はまさにそこに現れた嵐によって吹き飛ばされた。

教室の扉が開く・・・。そこに現れたのは・・・。

(((((ええええええええええ!!))))))

身長160cm強、身長相応に男らしさは出ている美形の顔立ち。

(ま、まだこいつが四葉つて決まったわけじゃ・・・)(でも制服だぞ・・・)

(き、きつと先生のドツキりだよ……)

「はあく、お母様のせいで要らない仕事やらされたし寝不足だし……」

(モンチでマザコンじゃなかったのか!)(おい、誰か声かけるよ……)

(そうだ、十三束! お前なら話せるんじゃないか?)

(ええ! なんて僕!)(お前有名な百家だろ?頼むよ!)

(なんか人形まで作りだしたし……!)

十三束は勇気を振り絞って声をかけた。

昼夜 side

イライラするイライラする……。なんで俺がこんな目に合わなきやいけないんだ。

さんざん我慢してたけどもうたくさんだ。口から何かこぼれた気がするが気にしない。

ストレス発散に人形でも作ろう。可愛いのが出来れば気も和むし武器にもなる。

歩きながらバッグから布と針と糸を出す。モデルは……一校制服水波にしよう!

「あの、君……!」

「うん?」

何か声が聞こえたので方向を向くと、一人の男子生徒が立っていた。

その顔には見覚えがあった。直接ではないが写真を見たことがある。

「えくと、十三束鋼だっけか．．．？」

「あ、うん。僕の名前知ってるんだ？とところで君の名前は？」

「ああ、失礼した。四葉昼夜だ」

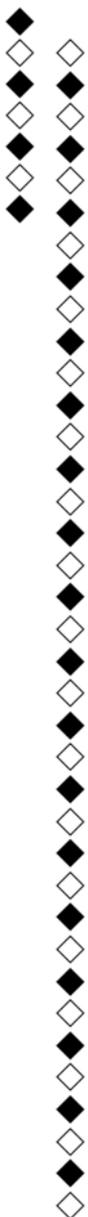
．．．．．

「「「「ええええええええ!!」」」」

あ、しまった。細かい説明忘れてた。

この調子だと先生が話してくれることなさそうだし．．．

「はあ、こっちもこっちで面倒だ．．．」



「要するにだ、皆が四葉昼夜だと思っていた人は俺の護衛で、

皆が護衛だと思っていたチビが俺、四葉昼夜だったわけ。

そうなるように服とかで誘導してみたけど、ここまであつきりかかるとはな。

しかも護衛の一人言も自分が四葉昼夜だなんて言つてないし」

「「「「「.....」」」」」

クラスのほとんどが沈黙状態だった。そんな中・・・

「へえー、やつぱり四葉つてすごいんだね！」

声を上げたのは赤い髪にモスグリーンの瞳を持った女子生徒だった。

「あ、あたしは明智英美、よろしくね四葉君」

「すまないが学校でくらい家の事を忘れたいんでな、昼夜で頼む明智さん」

「なら私もエイミイで」

「わかった、エイミイ。それからさつき声をかけてくれた鋼君！」

「！ 何かな？あと良ければ君付けは無しでいいよ」

「OK鋼、なんなら三人で専門授業の見学一緒に行かないか？」

「え？ まあ、僕でよければ」

「じゃあ決まりだ」

「.....」この三人以外は気づいた。

女子は主に、想像とは違ったがイケメンではあると。

男子は主に、こいつは間違いなく四葉の直系であり、そちらにつくことの意義を。

そう、この後教室ちよつとした暴走状態になる。

とりあえずはこのクラスの指導教官がやってきて挨拶と、軽い説明がある。その後は勝手に帰っていった。

さて、エイミイと鋼と行くか、と思つた矢先。

「四葉君、僕らと一緒に見学行かないか？」「私も私も！」
もみくちやにされそうになる。

「まあ、こうなるわな・・・」

出来れば問題なく突破したい。ので・・・

「今から紙吹雪を放つからその中で当たりがあれば僕たちと一緒に来ていいよ」
そう宣言して幾多の色で当たりと書かれ紙を見せてから、

紙の破片を視界がふさがれるほどに撒く。

有象無象は必死に紙の山を探し出し始めた。

「エイミイ、鋼、今のうちだ！（小声）」

そう言つて三人で集合場所まで走つて行つた。

「ねえ、よかつたの？」

「なにが？」

エイミイは何の心配をしているのだろうか？

「あの紙見つけられたらついてこられるんじゃないかな？」

鋼は少し苦笑い気味に聞いてくるが・・・

「大丈夫だ、あの中にはあたりがない」

「え？嘘ついたの？」

「ついてないさ・・・おれは当たりがあればと言ったんだ。」

「当たりがあるとは一言も言っていない」

「なかなかやるね・・・」

「これくらい序の口だ。そういうところの駆け引きも含めて勝負だぜ」

先生の先行でそれからいくつかの施設を回った。

いくつか回った先の施設は放出系魔法の実験室だった。そこで・・・

「放出系魔法性質を説明できる人はいますか？」

と言う質問が出た。皆が戸惑う中一人が手を上げる。

「森崎君ですか、どうぞ」

森崎とやらは一瞬目をそらす。その先には深雪がいた。

(そーいや、A、B組、C、D組は同一グループだっけ?)

まあ、それは今どうでもいいことだ。きっと後でシバかれるから。

「放射線を操作する魔法ですか？」

え・・・？

「間違いではありませんが不正確です。

それから回答に疑問形を用いるのはやめましょう。

自分の考えに自信がなくてもそれを相手に見せるべきではありません」

「こんな単純な問題を間違えるか普通？」

「ねえ、昼夜、この答えはどうなの？」

エイミイが聞いてきたので答えてやる。

「簡単だ素粒子及び複合粒子の運動と相互作用に干渉する魔法だ」

「へへへ」

それと全く同じ回答をする女性の声。深雪だ。

「簡潔にまとめられられた良い回答です」

「ありがとうございます」

流石だ、礼までちゃんと欠かさない。

その後休憩時間になり皆は主に深雪の周りに集まっている。

「俺は雉を打ってくるね」

俺はそう言うって消えていく。鋼たちとはLONEですでに連絡を送っているから大丈夫だ。

用を足して食堂に戻ってみると、何やらめんどくさそうな空気が漂っていた。

取り合えず中で鋼たちと合流すると、ちょうど特等席だった。

「二科は一科の『ただの補欠』だ。

授業も食堂も一科生が使いたいと思えば席を譲るのが当然だろう？

実力行使をしてもいいんだが、学内ではCADの使用を禁じられているからな
言っていたのは先ほどの森崎君だった。

「ああ、昼夜……」

「大体わかった、俺に任せろ」

「とさうわけだ、席を譲ってくれないか？補欠君？」

「そうそう、実力行使をしてもいいんだから、嫌ならちゃんと決着をつけないと」
俺も楽しそうに混じっていく。

「おお、お前も分かるか？」

「当然だ、と言うことで森崎君、俺とタイマン張ろうよ？」

「そう言う事……ってなんで俺なんだ！」

「え？君が俺より弱そうだから。実力行使していいんでしょ？さあ、ヤロウヨ？」

「何言ってる！ウイードの奴等を全員どかせばいいだろ！」

「うん、じゃあそのうえで君にもどいてもらおう、それがいい！」

「この野郎！お前は「あと……口は慎め」!!」

今の一瞬で森崎は委縮した。ただ昼夜は想子を放出しただけ。

だが、その想子は絶対的な二面性を持っていた。

魔法師は想子を光として知覚するが色はない。だがこの二面性は色を持っていた。

光を飲み込むような黒い想子。全てを照らすような白い想子。

そしてそれらの想子が近づくだけで肌がひりつく。

他者の想子は有害だ。だが魔法師は常に情報強化を纏っている。

だがまるで、それすらも飲み込むように昼夜の想子は蝕んでくる。

喰われる、森崎はそう思った。だがその瞬間……

「やっぱやめだ。勝負にならない」

二面性を持つ想子はまるでそこになかったかのように消え去った。

「な……何をした？」

「？ ただの想子操作だよ。これに喰われる情報強化じゃ俺と戦っても死ぬだけだ」

この場にいるほぼ全員が畏怖した。想子だけで花冠フルームの情報強化打ち破る。

そしてここにいるそれが出来るような魔法師は。

「そういえば名乗ってなかったな。俺の名前は四葉昼夜、『永光熱線』の使い手だ」

説明はその場に居合わせたA—B生徒に任せる。

「申し訳ないことをした、彼の代わりになるとは思えないが、この通りだ」

俺は補欠と呼ばれていた二科生、達也たちに頭を下げる。

「いや、こちらこそ手間をかけさせたな昼夜」

「[[[[えー]]]]」

「達也君、四葉君と知り合いだったの？」

「ああ昔ちよつとな」

「達也、その他の皆さんも、申し訳ないがここは早くとんずらした方がいい。」

面倒ごことがぶり返さないためにもな」

「悪いわね」「ありがとうございます」「恩に着るぜ」「じゃあ、またあとでな」

達也の仲間も仲面白そうだ。

「さて、実力主義なら俺が誰と座るか決めていいよな」

この言葉に反発する者はいなかった。

入学編 三節

取り合えず達也たちがいた席に座っているのは、

俺、鋼、エイミー、深雪と、深雪が仲良くしていた女子二人・・・なのだが。

「えーと・・・そんなにこわばらなくてもいいぞ」

「ひゃっ・・・ひゃい！」

女子二人のうち髪を二つに分けた子の方がものすごく怯えていた。

「深雪もどうにかしてくれ・・・」

「昼夜？ どうしてこつちに來てたのに連絡の一つもよこさなかったのかしら？」

・・・うん、彼女が怖がつてる理由は深雪にもあるんじゃないかな？

そして俺の服に霜が立つ。こっそり魔法で昇華させているが。

「悪い、こつちに來るときは二徹明けでもものすごく眠くて・・・」

昨日は家に帰ったらお母様に十二時間くらいぶつ通しで電話させられてたんだ・・・」

嘘はついてない。だからこれで満足してくださいお願いします深雪さん。

「・・・はあ、わかったわ。昼夜も色々大変でしょうし・・・」

良かった、取り敢えずは収まってくれた。

「で、お願いだからその子どうにかしてくれない？」

「ほのか、大丈夫よ。昼夜は自分の仲間とかが傷つけられない限り何もしないわ」
「え？・・・司波さん・・・今なんて・・・？」

だめだこりゃ・・・。

「ごめんなさい、四葉さん。彼女は思い込みが激しいから」

「あ、成程。あと、出来れば四葉さんはやめてくれ、昼夜でいい。」

呼び捨てでいいぞ。えーと・・・」

「北山雫。で、こっちのビクビクしてるのが光井ほのか」

「ありがとう。で、光井さん、怖がらせたように申し訳ない。」

俺にできるようなことなら何でもやるから許してくれないか？」

何故か深雪がビクツとする。自分の冷気にでもやられたのだろうか？

「え、でも四葉さんを自由にできるって・・・」

「さつき北山さんにも言ったが昼夜でいい。呼び捨てならなおありがたい」

「昼夜、私も雫でいい」

「了解だ、雫」

「あ、えーつと、とりあえず私もほのかでいいです、昼夜さん」

「おう、ありがとう、ほのか。と、こっちも取り敢えず自己紹介か。」

「こつちの赤髪の女子が明智英美、エイミイでいいんだよな？」
「勿論！よろしくね！」

「んでこつちの背が低くて童顔なのが十三束鋼」

「僕も鋼でいいよ。よろしく。」

それと低身長は昼夜には言われたくないな、顔も身長相応だし」

「それで俺がさつきも言ったが四葉昼夜だ。改めてよろしく頼む」

「私は司波深雪、よろしくね、鋼君、エイミイ」

「北山雫、こちらこそよろしく」

「光井ほのかって言います。よろしくお願いします」

取り合えず自己紹介は終わった。

「んじゃ、取り合えずお願いを聞くよ。何がいい？」

「え、えくと……」

かなり真剣に悩んでいる。しばらくして顔を上げて……

「先程の魔法は何ですか？」

「魔法？魔法は使っていないはずだけど……ってあれか」

「ちよつとほのか、魔法の詮索はマナー違反よ」

「ああ深雪、気にするな。それに知ったとしても真似出来ないだろうし」

まあ、一応少しは怯えてたけどそこまでじゃなかったよな。

それでも言っても仕方ないだろうしそっちの方を知られる方が危険だろうし・・・

「全部は言えんがそう言う術を使ったただけだ」

「それってかなり危険なんじゃないの？」

「だから言いたくなかったんだ」

「・・・ごめん」

「気にするな。だが覚えておいた方がいいぞ。『Curiosity killed the cat』」

「好奇心は猫を殺す、だね！」

「おや？ 説明しようとしたらエイミィに先に言われた。・・・そう言う事か。」

「成程、英国のクオーターか・・・」

「あれ、言ったつけ？」

「いや、だが何となくクオータなのはわかってたから」

「でもほかの英語圏かもよ？」

「俺の発音はイギリス式だ、違和感なく答えたのはそれが理由だろう？」

「ホントにすごいね・・・」

「ことわざは語源から覚える主義なんだな。観察眼も半分は直観だ」

話していると食事も終わり、次の時間になったので六人で集合場所に向かった。



その後色々あつて見学が終わり、六人で帰ろうと思つたのだが、

エイミイは乗馬部に行くとのことで鋼と取り合えず校門前まで向かった……のだが、

「またやつてるのか……」

「みたいだね」

また深雪と達也の仲間の事で言い争つてるみたいだ。

これがあるか、『鶏は三歩歩けば忘れる』と言うやつか。

「今回は少し様子見だ」

「え？ 止めに行かないの？」

「いいものが見れそうだから……」

「？」

そこに眼鏡の子が大声で反論したところで殺気と同じく森崎君が……

「ウイードとブルームを同列に語るな。その差を思い知らせてやろうか？」

「昼夜!」

「まだだ」

「二科生風情がああああ!!」

素早い動作でホルスターから特化型CADが抜かれ、魔法式が構築される。ゲルマン的な顔の男子が手を伸ばそうとするがその前に・・・

ガギイ!

「この間合いでは二科生の私の方が早いみたいよ」

明るい栗色の髪的女子生徒が警棒型CADで弾いていた。

「な? 言っただろ?」

「これは面白い事なのかな?」

そこから一気に一科生たちは湧き上がる。その多くがCADから魔法を発動しようとする。

その中にはほのこも含まれていた。

「はいはい、こんなものは消しましょう」

白と黒の光条がそれらの魔法式の前提条件を意味する部分が撃ち抜き、

魔法式は安定しなくなり消え去った。

「はあ、お前たちは中でも外でも騒ぎも起こさないと気が済まないのか」

「今回放置してたのは昼夜だけどね」とは鋼は口に出さなかった。

「四葉……！　なんでお前は二科生の味方をする！」

「なんで……？　だって普通に考えてお前たちより強いよ？」

特に達也に関しては遊びでしか勝つビジョンが見えない。

「俺ね、強い奴が好きなの。それも何でもできる強さじゃなくて特化した奴が。

確かに魔法だけで戦えば一科生が勝つだろうな。

でも、戦場ではそうはいかない。その状況ではこの四人にお前ら皆殺しだぞ」

眼鏡の子が偵察、栗毛の子とゲルマン顔の奴が近接戦、達也がフオロー、

それだけで十分一科生全員を相手にできる。

そして俺の立場から、その言葉の重さを全員が理解した。

「んで、どうする？　これ以上やるって言うなら俺も本気で相手になるけど？」

「よ、四葉……！　英雄だからって調子に……」

「四葉いうな、言われるたびお母様のこと思い出して頭痛がする」

お母様はちゃんと仕事が出来ているだろうか？

昨日は十二時間以上電話してたし……。

「……英雄？　それって俺の事？」

「お前しかいないだろ！」

「英雄ねえ、そんな称号欲しいならくれてやるよ。英雄、森崎様」

森崎はCADを拾おうとする。

「そこまでだ!」

あ・・・これは小悪魔に捕まったな。面倒ごとは嫌いなのに。

「はあ、なんですか? 小悪魔生徒会長に渡辺摩利風紀委員長?」

「ちよつと?! だれが小悪魔よ?!」

「真由美、自覚があるならそれでいいだろう?」

それはそれとして、魔法による対人攻撃は校則違反以前に犯罪だぞ。

たしかその1—A女子! 最後に魔法を発動していたな。

それに四葉昼夜! 君たち二人には詳しく話を聞きたい。

風紀委員室まで来てもらうぞ!」

因みに女子はほのかのことだ。ほのかはひぎを折ってしまう。

ほのかが発動しようとしていたのはただの閃光魔法だ。まあここは達也に任せよう。

「すいません、悪ふざけが過ぎました」

「悪ふざけ?」

「はい、森崎一門のクイックドロウは有名ですから見せてもらおうと思ったのですが、

それがあまりに真に迫っていたものですからつい手が出てしまいました」

「君の友人はその彼女に魔法で攻撃されそうだったのだが？」

「驚いてすぐに魔法式を起動プロセスを実行できるのは流石一科生ですね。

それにあの魔法は目くらまし閃光魔法です。視力障碍が出るほどでもありません」
思ったがこの辺りまでわかつてる当たり結構の間見ていたのだろう。

大方、その小悪魔に面白いものが見えなくても言われたのだろう。

全く、そんなことするくらいなら始めから出てくればいいのに。

自分の事棚に上げてと思った奴、一人の夜道には注意しろ。

「ならその四葉君は？」

「彼はただ大騒ぎなるのを嫌ったのでしよう。」

魔法式を無効化したのを見せればもう手は出さないと判断したのでは？」

「そういうことですね、森崎君もただ自分のCADを拾おうとしただけです」

俺が睨みを入れると首振り人形のように森崎君は首を縦に振る。

「・・・君は魔法式が読み取れるのか？」

「実技は苦手ですが、分析は得意です」

「・・・誤魔化すのも得意なようだな」

そこでしばし渡辺風紀委員長は黙考する。

「もういいじゃない、摩利。」

生徒同士で教え合うことが禁じられているわけではありませんが、細やかな制限があります。このことは一学期中に習います。

それまで魔法の発動を伴う自習は控えた方がいいでしょう」

俺は今感動している。あの小悪魔が生徒会長らしいことを言っているからだ。
「……会長がこう仰られているので今回は不問とします。」

以後このようなことがないように」

「昼夜君、またねっ！あと近いうちにおうちに戻って来てね？」
「分かってますよ」

まあ、東京に来るにあたり避けられないことだろう。

俺の服に霜が立つ。それをこっさり魔法で昇華させる。

「君、名前は？」

委員長は達也に名前を聞く。

「司波達也です」

「覚えておこう」

そうして会長と委員長は帰っていく。

「おい！」

いつの間にか立ち上がっていた森崎君。

「僕の名前は森崎駿。お前が見抜いた通り森崎の本家に連なるものだ。

僕はお前を認めないぞ司波達也。司波さんや四葉君は僕たちといるべきなんだ」

そこに俺も混ぜるか。それにあれだけやったのに懲りてないのか。

そんなことを思っていたら森崎君は帰っていった。

「いきなりフルネームで呼び捨てか」

「まあ、それに風紀委員長にも目をつけられたな」

「お前が言えばよかったものを」

「え、昼夜も分かったの？」

「俺も一応特異魔法は光だからな」

それと、こういう話をしても・・・

「昼夜？」

俺は後ろを見る。

「七草会長が言ってた家に挨拶に行くとはどういう意味かしら？」

深雪の謎の怒りは避けられないんだな。

入学編 四節

あの後、深雪の説得には時間がかかった。

理由はただ、四葉として東京に引越したので、

挨拶に行かなければならいだけなのだが、何故か『特別な関係』ではないのかと、しつこく聞かれた。そもそも特別な関係がわからん。

何をもって特別と言うのだろうか？

それでも説得には成功して家に帰った。

家では水波が待っていてくれ・・・なかった。

どうにも近辺の散策に行っているようだ。

そう言えばお菓子が食べなくなった。なら作ろう。

因みにおなががすいたからではない。

そして再生は俺の成長のエネルギーをも奪っているのか沖縄戦から背が伸びない。

あの頃は達也と大して変わらなかつた身長差が今では15cm以上だ。

原因は分かり切っている。あのとき跳弾を胸に受けたからだ。

元々食事で得たエネルギーの一部を回収する魔法だ。

それでも達也と同じくらいに伸びてたからかなりよく伸びた方だろう。だが、あのせいで本能がより多く回復するために食事のエネルギーのほとんど、具体的には次の食事まで大丈夫な分とほんの僅かを除いて回収される。この魔法は俺の本能に焼き付けた魔法故、割合の変更は不可能だ。

回復の遺伝子をリセットするという手もあるが、

あの日の事が死の直前として本能にある以上同じことになるだろう。

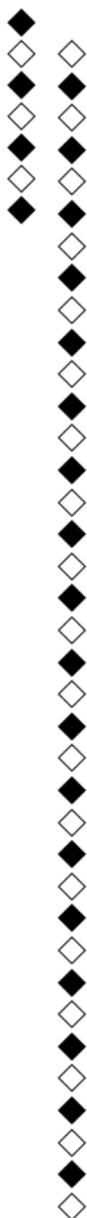
それ以上にその魔法が無くなった時情報次元のエネルギーはどうなるか。

俺の回復による安定が無くなり張り付いている情報、俺に吸収される。

結果俺はとんでもなく太る。そんなことにはなりたくないで消せないのだ。

さて、この家にはいろいろな調理器具があるのでいろいろ作れる。

取り敢えずはマカロンでも作るか。カスタードでも挟んで。



「ただいま戻りました」

「お、水波、おかえり。お菓子作っただけで食べるか？」

「よろしいのでしたらいただきます」

そうして丁度出来上がったマカロンを二人で食べる。

因みに魔法を使つて時間短縮した。

「おいしいですね、よく作るのですか？」

「一度作つてからお母様にせがまれる」

「成程」

さて、本題に移るとするか。自分で考えても答えが出なかつたし。

「水波、質問があるのだが」

「なんででしょうか？」

「まあ、その前にだ、もう少し言葉軽くしていいぞ」

「と言いますと？」

「それだ」

「でしたら、と言われますと？」

うん、ダメだこりゃ。

「ならせめて昼夜様じゃなくて昼夜さんにしてくれ」

この調子では呼び捨ては不可能だろう。

「？　まあ、出来る限り善処します」

同じことを言う政治家を聞いたことがある。

「まあ、質問なんだが『特別な関係』ってなんだ？」

この瞬間、水波の顔は真っ赤に染まった。

水波 side

(いったい何を言ってるんですかこの主人は!!)

少し今までの状況を整理してみましよう。

遠回しに敬語をやめろと言われた。

様付けではなくさん付けにしろと言われた。

『特別な関係』について聞かれた。

(まるでメイドものの恋愛小説のような事態が高速で起こっている!!)

まさか一ガーディアンである私がこんなことに!!

思い出してみれば確か猫のぬいぐるみもプレゼントされていた。

サンタクロースなどと嘘をついたが昼夜さん以外ありえない。

って、何私は様付けを直しているのです!

取り合えず、優しい人でも悪い人でも私が、

何より昼夜さん……昼夜様が見逃すはずがない!

よってこれは確実に昼夜様がプレゼントしてくれたものである。

「水波、大丈夫か? 顔が真っ赤だぞ?」

(あなたのせいですからね!!)

もう一度冷静に考えよう。今度は昼夜様の立場で。

まず考慮すべきは当主様の存在。当主様は物凄い親バカである。

ならばこれまで恋愛は……させなかつただろう。

そもそもほぼぼと本邸にいたとのことなので相手がいなかったのだろう。

可能性があれば深雪様や亜夜子様だが、私は直接会つたことがないのでわからない。

そして、関係する書物は……下手したら制限をかけられていた可能性がある。

今の時代紙の本はほとんどない。

ネットでの検索もそれらのものを制限したら見れなくなるだろう。

そして中学まで学校に行つたことがなくそういう話もしなかつた。

いや、確か十師族になる権利がある家だけの会合には参加してははずだ。

だが同時に、そこでその件に関して話されるだろう話は政略結婚のみである。

愛のない結婚、自分もするならそうなるだろう。

そして、それらの環境で育つた結果……

(まさか本当に恋愛と言うものすら知らない?)

私はその結果に唾然とした。身長は低いとはいえイケメンで、地位も身分も申し分なく、お菓子を作れるくらいに家庭的で、

あつてすぐの私と打ち解け合うくらいに社交性の高いこの主人が恋愛を知らない。

(御当主様、きつと教育を間違えてますよ)

まず思ったのはこれだった。

昼夜 side

さつきから水波は黙ったままだ。そして唾然とした顔をしたあと、こちらを向いて、「昼夜様、この漢字を何と読みますか?」

「さん付けにして欲しいんだが・・・どれどれ?」

因みに家にはメモ用紙が山ほどある。媒体がある方が便利なことも少なくないのだ。そこに書かれている文字は『恋愛』。

「・・・・・・・・」

「昼夜様?」

・・・ヤバイ、何と読むのだろう?

お母様がくれた漢字ドリルや辞典にはこんな漢字は両方ともなかった。

俺の漢字の学力は漢検一級クラスだ。その俺が知らないとなると・・・

「はあ、水波もしようもないことするんだな」

水波は矢張りかと言う反応を示す。俺の漢字力を量ったのか？

「こんな漢字、及び熟語は存在しないだ！」

恐らく『恋』は『亦』に『心』を組み合わせて字を創作したのだろう。

そして『愛』は『受』に『優』のように間に心を入れたのだろう。

だが甘いな、俺は自分で言うのもなんだが英才教育を受けてきた。

この俺に勉強で死角はない！

「昼夜様、間違いです。この漢字は実在します」

「バカなっ！」

そんなはずはない！ お母様は確かにこれで必要な漢字は全部覚えてたわね、と言った。

「そうか、普段はなかなか使わない漢字か。」

水波は漢字が得意なのか？ まさか俺が知らない漢字を知ってるとは・・・

「いえ、同年代の会話では結構出るものだと思います」

なんだと?! そんなはずはない、こともないか。俺は本邸にずっといたから。

「降参だ、俺にはわからない。まさか本邸にいたのが仇になるなんてな」

「おそらくそれが原因ではないかと・・・」

「原因は何だつていい。答えを教えてくださいませんか?」

「分かりました、正解は・・・!」

水波は正解を言おうとした瞬間に強張つてしまう。

再び黙つて、同じようにしばらくして顔を上げた。

「まさか・・・まで聞かれるとは思つてませんでした!」

昼夜様正解ですよ!こんな漢字はありません!では私はこれで失礼します!」

ご丁寧にもメモ帳まで持つて行ったのは証拠を残さなためだろう。徹底している。

もし今度四葉の任務が来た時、連れて行ってもいいかもしれない。

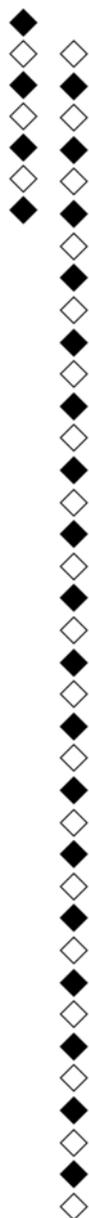
そう言つて早足に(自己加速術式まで使つて)部屋に帰つていった。

この漢字は・・・明日鋼かエイミイにでも聞いてみよう。

形は覚えたから聞けば結果がわかるだろう。

水「もしこのことが御当主様に知られたら私はガーディアン除名・・・

だけでは絶対に済まない! 一体どうしたらいいのですか!」



翌日

水波は俺が起きてもまだ寝ていた。昨日は何故か夜遅くまで声が聞こえていた。『何時来ても大丈夫なように・・・』とか『私はまだ死にたくないですから・・・』、とか聞こえてきた。大方、地震の対策をしているのだろう。

台風などはガラスの強化や建築技術の向上で最早過去の災害だが、

地震は屋内にも振動が少なからず伝わるので柵などは非常に危険だ。

水波に見習って俺も部屋の柵などの置き方を変更したが、

そう言うところに気づく当たり、さすがお母様が送ってくれたガーディアンだ。

「だけどそれで寝てるのはな・・・」

この時間になっても起きてないのは流石に問題だ。

四葉の家となると侵入を試みる輩は少なくなる。ましてや俺は戦略級魔法師だ。

・・・待てよ・・・そんなことあってはならない！

俺は急いで水波の部屋に向かう。鍵がかかっていたがマスターキーで開けた。

「水波! . . . っつて、あれ?」

そこには部屋の中心でぐったりと倒れている水波がいた。

部屋は荒らされた形跡はない。落ち着いて水波に脈があるか調べる。

「脈はある、外傷も . . . ないな」

恐らく昨日のうちに脅迫状でも来たのだろう。

俺が返ってきていなかったのは情報を集めるためだ。

その時に家から出るところを見られたのだろう。さらに外で襲われた。

それなら、昨日の夜の声も理解できる。それなのに俺はそれに気づかず . . .

とりあえず俺にできることは . . .

「水波! . . . 起きろ!」

「ひやつ! . . . 何ですか! . . . ついに私を . . . !」

「やっぱりか! . . . なんて言わなかったんだ!」

「え? . . . 昼夜様? . . . そうかきつと御当主様が . . .」

「水波、今日は一高の図書室にいる。そこならすぐに助けられる」

「え? . . . 一体何のことですか?」

「もう隠さなくていい。いいから俺の言う通りにしてくれ」

「? . . . わかりました」

それから俺は学校に理由の説明と図書室の使用許可をもらった。
因みに水波の学校は来週からなのでまだ時間に余裕はある。
それまでに水波に手を出したやつを仕留めないと。

入学編 五節

水波と早めに食事を食べて、早めに学校に向かう。

学校にはクラブ出来ている生徒以外は誰もいなかった。

水波を図書室に送った後、俺は教室に向かった。

教室にはまだ誰もいなかった。俺は人形を作ることにした。

昨日作りかけた一高制服水波だ。人形があると何かと便利だ。

暫くして生徒が何人か入ってくるが、誰も声はかけない。

昨日達也たちと仲良くしたからだろうか？そんなプライド捨てればいいのに。

そう言う意味では鋼やエイミイが差別意識が薄くて助かった。

そんなこんな話していると、俺のデイスプレイに連絡が来る。

『四葉君、今日のお昼、生徒会室でどうかしら？』

因みに深雪さんと達也君も来るんだけど、

来なければ、今日女の子と一緒に登校したこと深雪さんに伝えるわね♡

小悪魔生徒会長より』

どうにも昨日の事が根に持たれているようだ。

取り合えず、用事がなければと返答しておく。

ホントに大きな用事がなければ行くでしょう。

「おはよう、昼夜君」

「この声は、鋼か。おはよう」

鋼が来たのだし例の漢字について聞くとしよう。

「ところでだが、この漢字の読み方と、出来れば意味も教えて欲しい」

「ん？ どれだい？」

俺は持ってきたメモ帳に『恋愛』と書く。

「……、えーと昼夜君。からかっているの？」

「いや、本気でわからん。昨日俺の護衛に出されたのだが全くだ」

「えーとね、その意味は……」

「昼夜！朝一緒にいたうちの制服じゃない女の子は一体誰?!」

そう言つてやつてきたのはエイミイだった。

「待て四葉！ 女つてどういうことだ！」「しかも他校のを連れ込んだのか！」

「俺の護衛だ。訳有つて今日は図書室にいてもらつてる」

「いや、昼夜。君に護衛は必要ないんじゃないかな？」

「一人だと留守の間に家に侵入されるかもしれない。」

そうじゃなくても家の周りやうちの精銳が見張つてるが」
ここでうちのクラスは二つに分かれた。

鋼、エイミイたちの『その女子は俺の護衛だと信じる派』

その他主に男子の『その女子は俺の彼女では？派』

まあ信じてくれる仲間がいるのは有り難い。

そこで色々言い合つて、鋼とエイミイ以外は散つていった。

「で、鋼、これは何て読むんだ」

「それはね、レンアイだよ」

「それで意味は？」

「私が言う！それはね・・・」

それからエイミイの話聞いて・・・。

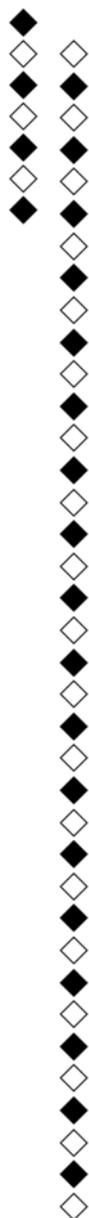
（俺は一体何をやらかした！）

昨日盛大にやらかしたことに気づいた。

水波はあの言葉をどう解釈しただろう？

いや、今はそのことは考えても仕方ない。

水波に危険が及ばないよう目を張らなければ！



二時間目の途中、俺の眼は校内に忍び込む輩を目撃した。

細目で紺の略式化された法衣を着た坊主の中年男性だ。

こんな目立ちやすい格好だが、魔法を併用している。

そのせいか意識から外されそうになるがそう言う訳にもいかない。

そして、俺に気づいたのか急遽走り出した。

魔法と走力で俺の眼から逃げるつもりか。

『見るものは見られている』言葉の通りだ。

そんなことはどうでもいい。俺は授業を中退して男のもとに行く。

「待った！」

俺はやつとのこととで男の正面を取った。

因みに魔法で声も姿も周りに見えないようにしている。

「まさかこんなに早く見つかるとはねえ」

「あんたか？ 昨日水波を襲ったのは？」

「なんの事かな？ 昨日と言えば弟子を使って少し脅かしはしたが？」

「そうか、なら弟子の責任は師匠がとらないとな」

俺は魔法を発動する。

「でも僕が襲わせたのは……っと、いつの間に？」

これほどの魔法、そして走力の持ち主だ。学校でやれば吹き飛びかねない。

だから疑似瞬間移動でこの近くの山まで俺とこいつを飛ばした。

無論、風は起こさずに。

「俺の周りに手を出したこと、後悔させてやる」

「ふむ、君は何やら勘違いしているようだが、いいよ。僕が相手になってあげる」

一触即発、どちらかが動けばそれで始まる。

だが互い動かない。いや、ほんのわずかに動いている、目だけが。

互いにそれだけで相手が動きを読んでいることを悟る。

故にどちらも動けない。

(なら！)

『光学の眼』オプティカル・サイトを発動する。と同時男は仕掛けてきた。

そう、魔法と言う大きな動きが入ったからである。

そしてそうなることも読んでいた。俺は後ろに下がる。

が、まるで距離がなかったかのように詰められる。

蹴りを受けて木に当たると。魔法を発動する暇もなかった。

そして悟る。相手は少なくともこの距離では格上であると。

近接戦に関する才能を俺は持っていない。未だに体術は型でいっばいだ。

俺がこの距離で満足に戦うためには魔法が不可欠である。

そしてそれはこの一回で見切られただろう。

今発動している魔法は『光学の眼』とあれのみ。つまり俺はもう他の魔法を使えない。

（魔法の選択を誤った！ ここまでとは思っていなかった！）

「お前、古式の術者だな。同時に体術の会得者だ」

「よく分かったね。その通りだよ」

今できるのは言葉で時間を稼ぐことだ。

初めて視認した時も、今回も『術式消失』グラム・ハイディングを発動したうえで見破られた。

それに術式消失自体は元々見えないようになっていた。

眼だけで勝つとなるとこの相手には非常に厳しい。

もう一度魔法を発動しようとする。次は愛用の『ドライブリザード』。

だが、再び発動前に俺を吹き飛ばす。

だが、ドライアイスの弾丸は生成され、男を狙う……が躲される。

「ほう、吹き飛ばされてからも魔法の標準を変更したか。君も中々のやり手だね。

それもCAD無しでこなすとは、流石は四葉だけはあるね」

「だめだ、CAD無しではこれが限界だ。校則でCADは預けているから使えない。

「・・・俺のことがわかんのか？」

「勿論だよ、初めて君の映像を見た時から怪しんではいたね。

ホントに身長の高い方が四葉昼夜なのか、つてね」

「そこからか、お前みたいなのやつがなんでこんなことをしてるんだ？」

「それは君がけんか吹っ掛けてきたからだろう？」

「成程、言うつもりはないか。それならそれでもいいや」

「いやね、君が勘違いしてると・・・」

「こっからが本番だ、覚悟しとけよ！」

俺は想子を放出する。再び男は肉薄する・・・が、直前に飛びのく。

「その気は・・・一体どういうことだ？」

「気？ お前は忍者か？」

「ノンノン、僕は由緒正しき忍びだよ」

「成程、古式魔法、体術の正体は忍術か」

「その通り、古式魔法の事も結構知ってるみたいだね」

忍術を完全に会得して置いて克法衣を着ている？

そんな男は・・・その可能性がある以上、少し試してみるか。

放出した想子を腕のように扱い男を狙う。だが男はそれを難なく避ける。

それを暫く繰り返す。

男はまるで俺の想子の事を知っているかのように当たろうとしない。

「お前、この想子のこと知ってるのか？」

「多分、君が考えている以上にね」

「ならこれは？」

男の後ろからカッターナイフを持った人形が迫る。

完成させた水波人形だ。それも躲されて確信した。

俺は攻撃をやめる。想子はただ俺の周りにだけ集まりシエルターを作る。

「おや？ もう終わりかい？」

「・・・もしかして、『今果心』、九重八雲か？」

「その名前まで知っているのかい？」

「これでも個人的に魔法関連はひたすら漁ったんだ。古式も現代もな」

「それは勉強熱心なことだね。その通り、僕は九重八雲だよ」

俺は纏っていた想子を霧散させる。

「どうやら俺が探してる相手は九重さんではないみたいだ」

「ずっとそう言ってるじゃないか。僕が昨日襲ったのは達也君だよ」

「・・・マジで？」

「大マジさ、勿論ただの相手だけどね」

襲っておいて相手とはこれ以下に。

「昼夜様!!」

そこに水波がやってきた。

彼女が得意なのは障壁魔法だ。故に魔法的にも空間把握能力は非常に高い。

だから俺が九重さんとここに飛んだことに気づいたのだろう。

「水波! なんでもここに来たんだ! 今外は危ないだろ!」

「そうですか! 昼夜様こそこんなところで何をしていますか!」

それを見て、九重さんは・・・

「うん、取り合えず君達。今自分が知ってることを情報交換したらどうかかな？」

どうにも話は複雑に込み入っているようだから」

とのことなので、俺たちは情報交換を試してみた。

その結果・・・

「／／／／／／／／／／」

互いに盛大な勘違いをしていたことに気づいた。

水波は俺に恋愛の事に関して興味持たせたので、

お母様に肅清されるのではと思っていた。

対して俺は、水波が何者かに狙われていて、

それで守らないといけないと思っていた。

もし仮にお母様が動いていればそれはそれで成功だったのではと思うが。

「君達、どうしたらそこまで勘違いできるのさ？」

「滅相もございませぬ!!」

始めの理由が特別な関係と言うワードだ。

俺は恋愛と言うものを感覚的に知っていて表す言葉が知らなかった。

理由は、深雪の達也に対する態度だった。あれはもうシスコンを超えていた。

特別な関係がわからなかったのは俺がそれを現す言葉を知らなかったからだ。

「うん、原因はお母様なのは？」

「同意です」

よし、水波の同意も取れたので本家に電話をかける。

『もしもし、昼夜様ですか?』

「葉山さん、お母様が変わってもらえる?」

『かしこまりました・・・』

それで暫く間があつて。

『昼夜、こんな時間にわざわざ電話をくれるなんてお母さん嬉しいわ。

でも、授業はサボっちゃダメよ。こんなことしてたらバカ息子つて・・・』

「お母様、恋愛つて知つてる？漢字でも意味でも何でもいいから」

『ああ、協会に祈りをささげる・・・』

「それ礼拝」

『期限内で今年中と言う意味の・・・』

「それ年内」

こんな事がしばらく続いた。

『昼夜に何かあつた時のマニュアル』はこういう時のためのものだろう。

「さて、そう言うつまらないことはもう無しね。」

お母様、俺の勉強するドリルや辞書からそういうもの抜き取つてたでしょ？」

『そんなことは・・・』

「御当主様と呼ぼうかな？」

『ごめんなさい！ まだ昼夜には早いと思つたの！』

ならなんで深雪たちと一緒に沖繩に行かせたのだろう？

「一応確認するけど、まさか水波に差し金向けて無いよね？」

『そんなこと・・・』

「御当主s」

『葉山さん！ 今すぐ彼を止めて！』

「はあ、そんなくだらないことで女の子殺そうとするなんて最低だと思うよ」

『・・・私も反省してるわ。ちよつとやり過ぎ・・・』

「御当sh」

『いや！ 間違ひなく過剰なくらいにやり過ぎたわ！』

「だからお願いもう許して！』

「て言ってるけど、水波はどう？」

「少しお電話をお借りしてもいいですか？」

「勿論、言いたいことは言った方がすつきりするぞ」

「それでは失礼します」

そう言つて水波は顔を赤くしながら、ぼそぼそと何かを言った。

「私からはこれで以上です」

そう言つて通信機を渡してくる。

「んで、そんな理由でもうこんなことしない？」

『勿論しないわ。それと、あなた水波ちゃんの事今以上に真剣に考えてあげるべきね』
「? どういうことだ?」

『分からないようならまだまだと言う事よ。じゃあ、私は仕事に戻るわ』
そう言つて電話は切れた。

「ところで君達、学校はどうしたの?」

「ああ、今の時間は・・・」

「日の向きからして十二時半過ぎだね。相当話してたみたいだ」

十二時半、うちの学校では昼休み直前だ。

「・・・まずい! 水波、急ぐぞ! って水波は家か!

九重さん! また今度!」

「うん、機会があればね」

俺は水波の手を握つて『疑似瞬間移動』を発動した。

水「はわわ・・・御当主様に言つてしまった／＼／＼」

入学編 六節

あの後、水波を送って学校に戻った。昼休みに見事にもぐりこんだのである。多分、放課後は百山校長に怒られるだろう。

そう言えば九重さんは何で学校に潜入していたのだろうか？

まああの人が特に悪いことを企んでいるわけではないだろう。

むしろこれは、何か危険が迫っていると考えるべきだ。

九重さんが干渉するほどの・・・。

そう考えながら、俺は生徒会室に向かった。

九「しかし、昼夜君のせいで可愛い女子高生が見れなかったなあ・・・」



「失礼します、一年B組、四葉昼夜です」

「どうぞ〜」

そう声がして、扉が開く。

中には生徒会の面子、そして深雪と達也がいた。

「……副会長の服部さんは？」

「ああ、はんぞーくんは昼食は部室で食べるのよ」

それは有り難い。どうにもプライド意識が高そうな方なので、

達也がいると話が進まないのではと思っていた。

「待ってください！ 彼が四葉君であることを前提に話してますが、

ホントにあの四葉君のですか!!」

中学生くらいに見える背丈に相応の童顔、リスのような雰囲気は……

「あーちゃん？」

「あーちゃんって言わないで！ って、私名乗りましたか？」

「いえ、会長に以前生徒会のメンバーを教えていただきましたから」

「会長！ 私にも立場と言うものがあるんです！

後輩に『あーちゃん』なんて言わないでください！」

「ごめんねあーちゃん、去年はまだ昼夜君が一高に来るとは思ってたから」

去年の二十八家合同パーティーで真由美さんに自慢された。

『私には優秀な部下がついてきてくれてるわ』と。

「ではそちらの方がリンちゃん、市原鈴音さんですね？」

「その通りです」

「なんで市原先輩だけ名前を呼んで私があーちゃんなんですか！」

「会長にあーちゃんはこう扱えとのことでしたので」

「会長！」

「アハハ・・・」

真由美さんは苦笑いをして目を逸らしている。

「まあ、すいません中条先輩。少し悪ふざけが過ぎました」

「うう、いいんです・・・私はどうせあーちゃんですから・・・」

「これも何かの縁ですし、俺のCAD、『プレアデス』をお見せしますよ？」

「え！『プレアデス』ってもしかして・・・？」

「はい、先輩が大好きなシルバー・トールラス作のCADです」

「あの数少ないリボルバー式でありながら、

その利益のほぼ全てを握っているというあの！」

「はい、その『プレアデス』です。これが特に手に馴染むんですよ」

「なんたって作成したのが自分だからな。名前借りてるだけで。」

「はわわ・・・いいんですか？ そんなものを見せてもらって！」

「いいですよ、先ほどからかってしまいましたし」

「いえいえ、これが見れるならいくらからかわれても・・・」

さつきの立場がどうかはどうかどうなったのだろう？

「君は中条の扱い方を熟知しているようだな？」

今は持てないのでまた今度と言うことにして話を区切る。

因みに今の渡辺さんの言葉は中条さんは興奮しすぎて聞こえてないようだ。

「先程も言いましたが事前に聞いていましたので」

「それでもだ、それに中条にも特に負の感情は抱いていないと見える」

「それは当然です。態度云々もありますが年上ですから」

「その言い方だと自分より年上の人間は皆尊敬しているように聞こえるが？」

「それは当然です。少なくとも自分より長く生きていることに関して。

態度はまた別に判断しますよ」

「？ どういうことかいまいちわからんが？」

そこで口をはさんだのは深雪だった。

「恐らく皆さんと昼夜では時間の重みに差があるのでしよう。

昼夜はその立場からいろいろありますから」

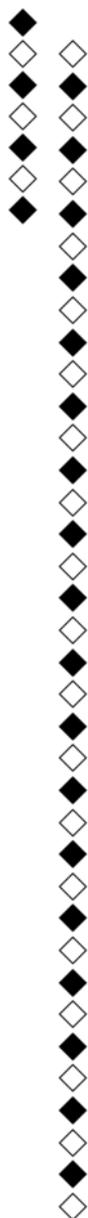
「あ、そう言う事か・・・すまない」

「気にしないでください。俺が選んだ道ですから」

「さて！ とりあえずお話は中断！ お食事にしませよ」

真由美さんのその言葉で食事を選ぶ。

肉、魚、精進があつたので魚にした。青魚だとさらにいい。



結果、出てきたのは鰻の甘辛だった。やったぜ。

まあそれでもレトルトだ。少々物足りない感はある。

因みに渡辺さんはお弁当だった。

「意外か？」

「いえ、少しも」

これは達也の反応である。質問も達也宛だ。

指を見た感じだと機械任せではなく手作りなのだとわかる。

傷があるとかではなく、料理する人特有の癖で。

同じことを達也もしたようで（もつとも文字通り次元が違うが）、
渡辺さんは気恥ずかしそうにしていた。

「私たちも明日はお弁当にしましょうか？ 昼夜の分も作ろうかしら？」

「いんや、俺は欲しいなら自分で作るからいいぞ」

「そう・・・」

深雪はしよんぼりし、達也は俺を睨みつける。待て、俺が何をした？

その様子を見て笑う生徒会組。何が面白いのか全く分からん。

「そう言えば四葉は朝うちの制服と違う女子を連れていたそうだが・・・」

部屋の気温が一気に下がる。そしてそれが一気に常温に戻る。

「渡辺先輩何地雷踏んでるんですか？」

「待て！ 今のは私が悪いのか!!」

「昼夜？ 今のはどういう事かしら？」

深雪のスマイルはものすごく怖かった。このスマイルは0・じゃだめだ。

こんなものが0・なら世界中の人類はすでに滅びているだろう。

「その子はただの護衛だ。少しいざこざがあつてここに来てもらってたんだ」

「女の子が護衛なんですか？」

「その通りです」

「昼夜は女の子に守ってもらわないといけないほど弱いんですか？」

「ここからの説得は時間を擁した。」



暫くして、吹雪警報はやんだ。後日聞くと、この生徒会室一番の危機だったそうだ。

「さて、本題に入るのだけど、昼夜君か深雪さんのどちらかもしくはお二人に、

生徒会に入ってくださることを希望します」

俺の回答は決まっている。

「申し訳ありませんが俺は辞退させていただきます」

「やっぱりね・・・一応理由を聞いておくわ」

「戦略級魔法師が生徒会役員なのは学校のイメージ上悪い結果につながるかと。」

しかも、もし万が一、生徒会長にでもなるうものなら第一高校は、

『戦略級魔法師が支配する軍人を育てる学校』と叩かれることになるでしょう。

今は少なからずではありますが反魔法主義者確かにいます。

俺を理由に反魔法主義を加速させたくないですし、俺も叩かれたくないです。

ですが一方で、風紀委員なら務めてもいいと思っています。

俺は自分の周りに手を出されたくないですから風紀を守る仕事なら引き受けます」
真由美さんを除く生徒会組は啞然とする。これくらいの思考は当然だと思うが。

「まあ、昼夜君はこの入学前から誘ってもこの調子よ。」

なので、出来れば深雪さんには入ってもらいたいのだけど？」

「……………」

深雪は少し迷っているが……

「悪いが深雪、達也は生徒会役員にはなれない」

「昼夜、どういうこと？」

「生徒会規則に生徒会役員は一科生から選ばれることになっている。」

「これはこの学校で唯一明文化された差別だ」

「……わかりました、私でよければ引き受けさせていただきます」

「ありがとうございます、深雪さん。それと、ごめんなさいね」

「いえ、気にしないでください……」

「まあ、そこで提案があるわけですよ」

全員が俺の方を向く。達也は嫌そうな顔をして。

「渡辺先輩は差別はお嫌いなのですよね？」

「無論だ」

「ならその達也を風紀委員に入れることお勧めしますよ。」

知つての通り魔法を分析する力がありますし、腕つぶしも保証します」

「成程！ その手があつたか！」

「賛成！ 生徒会は達也君を推薦するわ！」

達也にはアイコンタクトで説得した。

一つの理由に校内でCADを持てること。

次に深雪を喜ばす事が出来ること。

決め手は俺が作った深雪の人形1/10サイズだった。

「それで、昼夜君はどうするの？ 教師推薦枠があるから頼まれるかもだけど・・・」

「それは森崎用ですね。あのトラブルを起こして一方だけが風紀委員となれば、

多少なりとも叩かれますから」

「摩利、部活連推薦枠はどうだったかしら？」

「確か・・・今年の入部期間は嫌だと一人逃げ出したな」

「じゃあ、十文字君にお願いしてみよつか」

「どうにも今年の風紀委員は大収穫だな」

勝手に話しが進んでいる。克人さんか・・・。

魔法で戦えば俺が勝つだろう。俺の夜は克人さんに有利だし。だがなんだか・・・人間として勝てそうにないんだよな・・・。

中「『プレアデス』・・・シルバー様のCAD・・・」

昼「次回！ 次回お見せしますから！」

入学編 七節

生徒会室の一件の後、教室に戻ると鋼とエイミーからすごく心配された。帰った後にLONEを送ったのだが、

保健室にはいないわ、ついでに護衛の人もいなくなってるわで大慌てだったみたいだ。

大変申し訳ない。それも原因が勘違いだったなんて・・・。

端的（嘘も交えて）に理由の説明をして、取り合えずはなんとかなった。そして放課後、ここからが本番だろう。

鋼・エ「僕（私）たち出番これだけ!!」

昼「すまん、次回は出番を上げてくれ」

主「勿論だ、次回はちゃんと出番を用意している」



生徒会室に入ると、早速雨模様だった。

「こんにちは、四葉昼夜君。生徒会副会長の服部刑部です」

「こちらこそよろしく願います、服部先輩。出来れば名前で呼んでください」
それに頷いて、服部さんは再び会長の方を向く。

「話がそれましたが私はこの二科生を風紀委員にするのは反対です」

「聞いていたのか服部？彼は魔法を読み取ることができるんだぞ。」

風紀委員にもってこいの人材だろう」

「そんなのはどうせはったりです。」

単一工程魔法式でもアルファベット三万字相当の情報があるんですよー」

「そんなに言うなら試せばいいし、腕つぶしは昼夜君が保証してくれるそうだ」

その言葉に呆然とする服部さん。そこに新たなる来客が。

「実力もスキルも分からのなら試せばいい。それが一番早いだろう」

「十文字会頭！」

「遅くなつたな、七草、渡辺、それに昼夜、久しぶりだな」

「いえ、こちらこそ。やはりここでは会頭と呼んだほうが？」

「どちらでも構わん。ある程度はお前の事を理解しているつもりだ」

では呼びなれてゐるし克人さんで行こう。

「まあそう言う事だ七草、模擬戦の用意をしてくれないか。出来れば二回分」
「ええ、分かったけど・・・二回分？」

「昼夜を部活連推薦で出すのだろう？ なら俺が直々に実力を見るだけだ」
「成程ね、はんぞーくん、達也君、昼夜君はそれでいい？」

「無論です」

「構いません」

「やらせていただきます」

「では二年B組 服部刑部と一年E組 司波達也の試合。」

及び、三年C組 十文字勝人と一年B組 四葉昼夜の試合を正式に承認します」
克人さんと模擬戦か・・・流星群は使えないからな。策が必要だろう。

まあ、こういう時の切り札は必然とあれだ。



まず達也と服部さんの模擬戦、これの結果は言うまでもない。

服部さんがこの学校の五指に入るなら・・・達也はこの国の五指に入る。

「はじめ！」

その合図の瞬間に魔法を起動するのは流石だ・・・相手が達也じゃなければ。服部さんは倒れた。そして達也はその後ろのいた。

「渡辺委員長」

「あ、ああ。勝者、司波達也！」

達也は軽く礼をしてCADをトランクに戻そうとする。

「待て！ さっきのは自己加速術式をあらかじめ展開していたのか？」

「そうでないことは委員長ならご存じのはずですよ？」

「兄は忍術使い、九重八雲先生の指導を受けているのです」

古流はすごいよな。技術だけで魔法補助と同等の速度が出るのだから。

「じゃあ攻撃に使った魔法は？ 想子の波動そのものにか見えなかったのだけど？」

「あれは振動の基礎単一魔法で想子の波を作り出しただけです」

「服部先輩は想子に酔ったんです。魔法師は想子を可視光のように知覚します。

その副作用で予期せぬ波動を浴びると揺さぶられたなどの錯覚が生じるんです」

「魔法師は普段から想子に晒されていますけど、

その魔法師が倒れるほどの想子波動を発生させた理由は波の合成です」

達也、深雪、俺とリレーをつなぐ。

「成程、振動数の異なる波を三つ作り出して服部君の位置で合成、

三角派のように強い波を発生させたのですか。

よくもそんな、緻密な計算ができるものですね」

今の説明で理解できる市原さんも流石だ。

「でも、あの短時間にどうやって三回も振動魔法を？」

それだけ処理速度があれば実技の成績が悪いはずがないんじゃないか？」

正面から成績が悪いと言われて達也は苦笑する。

そしてその疑問の答えは中条さんの目線の先にあつた。

「もしかして司波君のCADは『シルバーホーン』では？」

「お、よく分かりましたね中条先輩」

「やっぱり！ FLT専属。その本名、姿、プロフィールの全てが謎！

世界で初めてループキャストを実現した天才プログラマー！」

「そう！ そしてそのシルバーホーンと言えは!!」

「トールラス・シルバーがフルカスタマイズした特化型CAD！

ループキャストに最適化されているのは勿論、

最小の魔法力で魔法を発動できる点でも高い評価を受けています！

しかもそれ、銃身の長い限定モデルですよね！

どこで手に入れたんですか！」

「あらあら、昼夜君見事にあーちゃんの大暴走をコントロールしてるわね」

「ああ、いつもならもつと言うところを見事にカットできるタイミングをバツサリだ。お前よりも中条の扱いが上手いんじゃないか？」

「ところで、シルバーホーンだとしてループキャストでは生み出せる波は同じでは？

波の合成となると座標、強度、持続時間に加えて振動数まで変数化しなければ・・・

まさかそれを実行しているというのですか？」

「多変数化は処理速度、演算規模、干渉強度としても評価されませんから」

「まあ、そう言う訳でこれが実技試験が本当の能力を示していない理由です。

服部先輩」

俺の声に反応して服部さんは半身を起こす。

「初めから気を失ってはいませんでした。

ただひどい酔いで朦朧としていただけですね。

話しはちゃんと聞いてましたね？」

「ああ、申し訳ない」

「一応、これで俺等が言っていたことは分かっただけですか？」

「ああ、司波さん、昼夜君、目が曇っていたのは私の方だ、許してほしい」
「俺は勿論です」

「私こそ、生意気を申しました。どうぞお許してください」
（自信のある人ほど負けを認めるのは難しい。）

真由美さんの言う通り、服部先輩が副会長なら確かに頼れるだろう）

服部さんは達也には何も言わずに中条さんの隣に立つ。

だが、これには自分でだけじめをつけるだろう。

「では続けて、十文字克人と四葉昼夜の模擬戦を始める。開始は十分後だ」
十分あれば最終調整はできる。あとはルーティンもしておくか。

「中条先輩・・・プレアデスはもう少し待ってください」

「うう、前回からずっと先延ばしにされています」

俺の愛機、プレアデス二丁まずは見れる範囲で点検する。問題はない。

次に一度ホルスターに入れる。そして・・・

高速で抜き空打ちする。これを何度か繰り返し返す。

普段は一回で充分だ。だが相手はあの克人さん、制限ありでどこまでやれるか。

「よし」

克人さんは既に中心で待っていた。

「両者、準備はいいな？」

「無論だ（勿論です）」

「では、はじめ！」

バックステップと同時にドライ・ブリザードを発動する。

ドライアイスの弾丸の雨が克人さんを襲うが、その前に展開された障壁に防がれる。

ドライアイスを防いだからには対物障壁、なので次の魔法はスパークだ。

左CADのハンマーを一度倒す。魔法は加重系統から放出系統に切れ代わる。

基本的に右が複合系統で左が単一系統の魔法だ。

ドライブリザードを発動した状態でスパークが発動する。

が、これも絶縁障壁に防がれる。

スパークのループキャストを実行して左のハンマーをさらに倒す。

魔法は放出から振動に。音波と光波を発生させる。

しかしやはり、それらは防壁に阻まれる。

流石十文字家のフアランクス、鉄壁の名は伊達じゃない。

攻撃を実行したまま再び左のハンマーを二回倒す。系統は加速。

そして十文字先輩はフアランクスを纏ったまま突進してきた。

それを予期して仕掛けていた加速魔法。それによって避けるが……

「こりや劣勢だな．．．」

九重さんの時と同じだ、追加で魔法発動の余地はない。

となると、対策法も同じであって．．．

突進してくる十文字先輩が俺の前で止まる。

俺の想子が障壁魔法とぶつかっている。この想子は魔法である限り干渉する。

魔法も想子で構築されているためなのだが、克人さんの魔法はあまりにも固い。

森崎の情報強化は一瞬で定義崩壊したが、この障壁はそうもいかない。

再び分が悪い。

この想子は一見とどまっているように見えるが、確実に霧散している。

そして実は魔法の維持以上に想子を消費する。

このままでは克人さんの魔法がいくら多重障壁でも、俺が想子切れする。

やはり、カードを切るしかないようだ。無論、見せない手もある。負け確定だが。

九重さん相手も、これを使えば勝率はあった。まあ、先に正体がわかって止めたが。

残り想子は全体の七割、対して克人さんは八割と言ったところだろう。

残り想子の四割を放出する。それらはただ空気中に存在する。

まるで、『光』のように。

白と黒の光は球状になる。

「！」

この意図を克人さんは理解したようだ。

そして、加速魔法の出力をあげる。俺の想子を突破する気のようなだ。

だが、気づくのが遅すぎた。放出した時点で気づけば俺の負けだっただろう。

白黒の光条は、ファランクスに備えられた想子ウォールも破る。

この光条は通過線上の想子を押しのけると言う形だ。

想子で想子に干渉する。他人の想子は人体に有害なのは何度も説明している。

そして、この場合俺の想子は克人さんを穿つ。

ラインは最小限に絞ってダメージは少なくなるように選んだ。

何故なら、さっきのサイオン酔いと同じことが起こる可能性があるからだ。

もしこれで穴が開いたと非常に強く感じてしまったら、ホントにそうなりかねない。

だが光条は、克人さんの皮膚に軽く触れて霧散した。

「ふう、俺がもう少し想子制御できなかつたら大事故だったかも」

克人さんは光条の当たった左腕を軽くさする。

「大丈夫ですか、克人さん」

「ああ、渡辺、俺の負けだ。昼夜を部活連会頭として風紀委員に推薦する」

「あ・・・ああ、わかった」

「先程の魔法は何なのですか？　と言うより白黒だったのは？」

服部さんは不思議がっている。

「服部、他人の魔法を聞くのはマナー違反だ」

「別にいいですよ。想子に関しては俺はよくわかりませんが・・・

光条についてですね。克人さんは何か分かりました？」

「あれは恐らく多重障壁の天敵ともいえる『流星群』ではないか？

媒体が可視光か想子かと言うだけで」

「大方正解です。今のは無系統魔法『フアントム・ミューティア幻影流星群』。

要するに『フアントム・ブロウ幻衝』と流星群をかけ合わせた感じですかね？

『幻影流星群』は想子を押しつけるといった感じですが。

因みに、初めて委員長とお会いした時に魔法消した光条もこれです。

魔法式を撃ち抜くことで不安定になって魔法は霧散します」

因みに対人で撃てば先ほど言った通り流星群と同じ結果になる。

これの利点は想子を押しつけるという性質から、

キャストロジャミングを押しつけながら使う事が出来る点だ。

波であっても想子である以上例外ではない。

「取り合えず、私たちは生徒会室に。摩利たちは風紀委員室に。」

十文字君は部活連本部に戻りましょう」

真由美さんの提案でその場は解散になった。

風紀委員室は・・・汚かった。

まあ、俺と達也であらかた片づけたが。

説明も受けながらでやったため、片付けが終わったら許可をもらいすぐ帰った。

実は結構疲れているので今日は早く寝よう。

達也に後日聞いたところ、あの後真由美さんが来てひと悶着。

それから、風紀委員の先輩が来てひと悶着あったらしい。

家については覚えてない位にすぐ睡眠に着いた。

入学編 八節

目を開くと、そこは俺が昔いた四葉本家の子供部屋だった。

そして俺の前には、俺と同じほどの身長の子供の少女と思しきものがいた。

思しきというのは、顔が見えないのだ。ただ、すこし長めの髪は女性っぽい。

「おい、お前は誰だ？」

「私？ 私は□▲×♪※★、あなたの\$#%&よ」

少女の言う言葉は、何故かノイズがかかって聞こえる。

「すまないが、名前とあなたの後が聞こえなかった」

「あら？ また会ってくれたから今度こそ思って思ったのにな・・・」

「？ 俺はあんたに会ったことがあるのか？」

「知らないって顔だね。その様子じゃまだ@・*+Φ▽も思い出していないね」

またノイズだ。その裏に何が隠れているかわからないが、何故か知りたくないと思う。

「それじゃあ、始めようか」

「何を」と聞く暇も与えられなかった。俺を襲ったのは白い想子だった。

反射的俺も想子を放出して受け止める。だが、俺の想子はいつもの白と黒じゃなかった。

ただの黒。白い想子は一粒さえも混じっていない。だが、迷ってる暇はない。

少女の白い想子からは、普段の俺の想子と同様のものを感じる。強大なまでの威圧感。

それらとはまた別で感じる異常なまでの同族嫌悪。そして懐かしさ。

「まだここに来るのは早かったようね。昼夜は向こうに帰りなさい」

その言葉とともに、俺の意識は白に飲み込まれ、その空間から消滅した。



.....外からカラスの声が聞こえる。それから雑音。

目を覚ますと、俺の部屋の窓の外にはカラスが止まっていた。

「おはよう、ナル」

このカラスは俺のペット(?)のナルだ。主に情報偵察をしてくれる。

因みに名前の由来は某怪物狩猟ゲームのナル○クルガだ。

あのゲームは今の時代でハードが変わっても愛されている。

昼に仕込んだカメラで情報偵察して、朝に持ってきてくれる。

夜はミミズクのホロに頼んでいる。名前の由来は同ゲームのホロ○ホルルだ。

朝はナルの集めた情報の吟味、ニュース、本家からの連絡の確認と大忙しだ。

情報料として用意している餌をやる。それにしても外が騒がしい。

するとドアの方から足音が聞こえる。

「昼夜様、お目覚めでしょうか？」

「おう、起きてるぞ。聞きたいことがある。入ってこい」

「!! は、はい」

そうして、ドアを開けて水波を入れる。

「ここが昼夜様のお部屋・・・って、何故カラスが!!」

「ああ、俺の情報提供相手、ナルだ。夕方はミミズクのホロが来る」

水波は結構驚いている。四葉は十師族最強の双壁の一つともいわれるが、

自由に動かせる魔法師は真由美さんの七草、克人さんの十文字と比べて少ない。

だから俺に当てられる魔法師も、家周辺を護衛している魔法師位だ。

情報収集も二十四時間眼を使えるわけではない。

そう言う事なのでこういう方法で俺は情報を集めている。

「こう見えても結構可愛げのあるやつだぞ」

ビーフジャーキーを出す頭に乗って食べに来た。

「水波も、ほら」

ビーフジャーキーを渡す。そして恐る恐る手を伸ばして・・・

「ほらな？」

その手からナルは器用にビーフジャーキーをくちばしでつまんだ。

「んで、外が騒がしいのは？」

「あ、それがどうにもマスコミが家の前で騒いでいるようでした」

矢張りか、よくこれまで情報を隠せたもんだ。

入学翌日に押しかけてもおかしくなかったんだが。

「じゃ、今日は裏口だな」

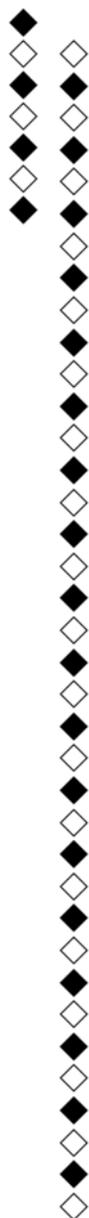
このあたり一帯の家四軒はそれぞれ別名義で購入しており、

それぞれの家が地下通路でつながっている。

今日はこの家の裏の家から出ることになれば捕まらないだろう。

なんやかんやで、食事などをとった後裏から登校した。

(尚、ニュースでは俺がいると思われる家の前に待機している旨の番組ばかりだった)



時は過ぎて昼休み、俺は生徒会室に来ていた。理由は・・・

「中条先輩、昨日見せれなかったプレアデスです」

「はわあゝゝゝ!!」

昨日試合の後見せる予定だったのが、うやむやになってしまったからだ。

「おう、昼夜君。朝は大丈夫だったかい？」

「委員長、あれ位どうとでもする方法はあります」

「あ、昼夜君。狸親父が土曜日の夜でいいかって？」

「会長も一応女子なんですから言い方は気を付けてください。時間は構いませんが」

「ちよつと！ 一応って何よ!! 私はれっきとした女子よ！」

「いや、泉美と比べるとその差は歴然でしょう」

「な！ もしかして泉美ちゃんを狙ってるの？」

「狙う？ 何故狙う必要があるのですか？ 俺は手当たり次第に殺したりしませんよ」

会長たち（―あずさ）は頭を抱えて溜息を吐いた。

「はあ、泉美ちゃんもなんでこんな子を・・・」

何のことだかわからないが、泉美も苦勞しているのだろう。

「あ、あの、昼夜君！ プレアデス触らせてもらってもいいですか？」
「電源はオフにしているので大丈夫です」

その後、中条さんは満足するまでプレアデスを返してくれなかった。

そして放課後、今日から始まるのは各部活には重大行事、そう。新入部員狩りだ。
その期間は校内はデモ用のCADの所持が許可されるので無法地帯になる。

なので、風紀委員はしばらく休みなしなのだが……。

「何故お前がここにいる！」

「それはいくら何でも非常識だろう」

森崎と達也の再会の第一声はこれだった。

「森崎君、落ち着いて聞いてくれ。先生方や委員長も君が有能なのは知っている。

だが、問題起こしたうえでその一科だけが風紀委員に入るのは差別を助長する元だ。
だから森崎君が入るなら達也も入らざるを得なかったんだよ」

「……成程な。一理ある」

取り合えず上手く丸め込む。これで少しは静かになるだろう。

「新入りは黙ったな……よし！」

今年もあのバカ騒ぎの一週間がやってきた。

この中には去年調子に乗って大騒ぎした奴や、

騒ぎを鎮静化しようとして大きくしようとした奴もいるが、

今年は処分者を出さずとも済むように気を引き締めてあたってくれ。

くれぐれも風紀委員が率先して騒ぎを起こすことがないように」

数人が首をすくめるのを見て、俺はトラブル体質の達也を気にした。

それから挨拶の後、一年以外各自見回り向かった。

それで腕章やらレコーダーやら連絡コードを渡されて、

達也はこの風紀委員室の備品のCADを二つ使うことにした。

「おい、司波達也！　はったりが得意なようだが今回はやり過ぎたな。

二つのCADを同時に使うなんてお前みたいな二科生には……」

「いいから、森崎君行くよ〜」

俺は森崎の首根っこをつかんで引き剥がす。

「なっ……離せッ！」

「いいか森崎、お前の家は護衛の仕事をしていたな。

なら分かるな？　強い奴が守れるんじゃない。守れた奴が強いんだ。

？
戦場も仕事も失敗したら次はない。次があることがどれだけ幸せか分かってるのか

学校は戦場じゃないが、そうなる可能性がゼロがじゃない。それを覚えておけ」
そう言っただけ俺は森崎を離した。森崎は何か思ったところがあるように少し考えていた。

俺はどうしたものか・・・と適当に第一体育館に行ってみた。

そこでは鋼がマーシャル・マジック・アーツ部、

通称マジックアーツ部の体験入部をしていた。

「おお、鋼の奴結構やるな」

十三束のレンジゼロと言えば魔法界ではそれなり有名だ。

本人の核が強いため遠くに魔法を放てない蔑称であると同時に、

近距離戦では同世代で無類の強さを誇る敬称でもある。

俺が九校戦のモノリス・コードに選ばれたら、鋼に手伝ってもらおう。

鋼の切り札は三高のあいつの対策にはもってこいだろうし。

後は、森崎には入ってもらえるといいんだが・・・上手くいくだろうか。

「あ、昼夜」

そんなことを考えていたら鋼に声をかけられた。

「おう、中々やるじゃん。んで、切り札はまだ見せないのな？」

「う、それも知ってるんだね」

「俺の想子操作術も一応お前のそれに近いところがあるからな」

「そう言うのと、鋼は少し考えるそぶりを見せて……」

「……ねえ、昼夜も少しやってみない？」

「一応委員会活動中なんだがな……鋼が相手ならやぶさかでもないぞ」

「周りからは少し声上がる。」

「申し訳ないですが少し使わせてもらっていいですか？」

「勿論！ レンジゼロと四葉昼夜のマジック・アーツなんていい宣伝になるからね！」

鋼の交渉に結構簡単に許可が出た。

CADはプレアデスではなくブレスレッド式汎用型を使う。

「昼夜、いくら君が四葉でもこの距離で負けるわけにはいかない」

「そうか、なら俺もそれに答えないと。簡単に負けるつもりはないぞ」

「望むところだよ」

そして、試合が始まった。

互いに蹴りや拳を交わす。互いに魔法を使って増幅した攻撃を繰り返す。

「鋼、これじゃあ罫が明かねえぞ」

二人の実力はほぼ互角。

体術としての速度、完成度は鋼が上。それを俺は魔法速度、干渉力で補っていた。それに気づいて互いに一度距離を取る。気づけば、観客はかなり集まっていた。

「さあ、切り札を使う準備はできたか？」

鋼は静かに頷く。そして再び拳を交える。

俺の拳が鋼に当たる直前、かけられていた加速魔法が吹き飛ばされる。

(来たか!?)

俺はあえなく鋼の拳を食らい、軽く吹き飛ばされる。

「ハハハ、やっと見れたぞ、鋼の本気」

鋼の周囲には想子の装甲が発生していた。

「それがレンジゼロの切り札『接触型術式解体』か!」

いい、競技として戦闘を楽しむことがこんなに楽しいとは思ってなかった。

「鋼! 次の一撃で決着だ! あんまり時間をかけては部の人に迷惑だからな!」

「分かった!」

互いの想子が活性化する。単純だ、この一撃を決めればいい。

タイミングを合わせる必要はなかった。互いに最も集中できた状態が重なった。

繰り出すのは互いに蹴り。

近づいた瞬間に俺の魔法が無効化される以上、分が悪いのは俺のはずだった。だが、俺の足には白黒の想子が纏われていた。加速対象は体だけだった。俺の蹴り自体が触れることはなかった。

想子の装甲と想子の蹴りがぶつかり、蹴りが装甲とその主を吹き飛ばした。装甲は砕けてはいない。だが、ただの想子でありながら干渉力が違った。

結果、想子同士のぶつかり合いで勝ったのは俺だった。

「悪い鋼、立てるか？」

倒れている鋼に手を差し伸べる。鋼はその手を握った。

「うん、わざわざやってくれてありがとうね」

「おう、俺もいい経験が出来た」

鋼を立てさせてから、マジック・アーツ部に断りを入れて失礼した。

中々有意義な勝負だった。接触型術式解体も見れたし万々歳だ。

それからはまたぶらぶらと過ごしていたのだが、かなり強力な魔法を知覚した。
(これは・・・気体流動制御に・・・局所地形変動?)

確かそれらの魔法が得意な選手のデータが去年の九校戦の前三年のデータにあった。

取り合えずそちらに向かってみよう。話はそれからだ。

と言つても、結構近くで起こっているのだが。

データ通り、風祭涼歌さんと萬谷颯季さんがいたのだが・・・

「何故故雫とほのかを抱えて委員長と鬼ごっこをしているんだ？」

まあ、大方風祭さんたちが二人を攫つて委員長が追いかけているのだろう。

俺もこつそり追いかけてみたが、

風祭さんたちはバイアスロン部に二人を置いて行つたので、俺もそこで止まった。

「委員長、あの人たちバイアスロン部のOGですよね？」

「昼夜君か、一緒に追いかけてもらいたいところだがあまり人手もかけられん。

あの二人は私に任せておけ。君は別のところの見回りにでも行つといてくれ」

「了解です」

そんなこんな話している間に二人はバイアスロン部に勧誘されて、

見事に籠絡されたので風祭さんたちの目標は達成したことだろう。

「あ、昼夜」

「おう、雫にほのか」

「あれ、もしかしてさつき連れ去られていたところから？」

「最後の方からだけだな、まあ見ていたぞ」

「そう、なら助けてくれたらよかったのに」

雫は何故かジト目で見てくる。

「だけど結局バイアスロン部に入ったんだろ？ ならきつと問題ない」

「そう言う問題じゃないと思う」

「ところでバイアスロン部の部長さん、確か五十嵐さんでしたよね？」

もうそろそろ、デモストレーションだったと思いますか？」

「話を逸らした」

何故か雫がしつこいが気にしない。折角何でバイアスロン部に同行することにした。

だが、来た先では狩猟部の生徒がぐったりしていた。

「ちよつと！ 大丈夫!!」

「あ・・・五十嵐さん・・・?」

「少し失礼しますね」

俺は狩猟部の方々に軽い質問をする。

「成程、サイオン波酔いですね」

「あれ？ なんで昼夜に雫とほのか？」

そこに保険医の安宿先生を連れてエイミイがやってきた。

「安宿先生、症状はサイオン波酔いです」

「どれどれ・・・」

「ねえ昼夜、サイオン波酔いつてサイオン中毒とどう違うの？」

エイミイが聞いてきて雫とほのかも興味深そうな表情をしている。

「要するにサイオン中毒は想子そのものに対する中毒、

対してサイオン波酔いは想子の波による船酔いみたいなものだ」

服部先輩がやられた奴なんだけだな。

さつき、第二体育館で達也がトラブルに合ったそうなのであれを使ったのだろう。

「確かにサイオン波酔いね」

「治療法は？」

「船酔いとかと同じだから放置してれば治るけど・・・」

まあ、今回は達也がしでかしたことだろうし大サービスだ」

俺はプレアデスから一つの魔法を発動する。叔母様によく使った魔法だ。

「え・・・これって・・・？」

心地よい想子の波が発生する。実はこういう使い方も出来るのだ。

沖繩の時よりも改良を重ね、少し楽に発動できるようにはなっている。

ぐったりしていた狩猟部の方々も顔をよくする。

「こんなもんですかね」

それを確認して魔法を解除した。

「今のサイオン波・・・もしかして『キャストアクティベート』?」

「流石安宿先生ですね」

「と言うことはあなたが四葉昼夜君?」

「そういうことですな」

その反応を見て訳が分からないという顔をしている他の面面。

「ああ、キャストアクティベートは要するにキャストジャミングの対極だ。

ジャミングを相殺できるし、今みたいに魔法師を癒やすこともできる」

「そしてこの四葉昼夜君が世界で初めて完成させた魔法よ」

「「ええええええ!!」」

三人は心底驚いていた。

「え! 昼夜つて魔法を作る事が出来たの!?!」

「一応な、あとジャミングも作成していて軍が魔法式を握ってるな」

「もしかして達也さん並みにCADの調整も・・・!」

「俺が得意なのはどちらかと言うとハードで達也はソフトだな」

「もしかしてそのCADも・・・?」

「無論、俺がチューンナップしている」

それでいて戦略級魔法師か．．．と三人はつぶやいていた。

「まあ、もしCADの事で聞きたいことがあれば聞いてくれ。

調整に関して力になれると思うから」

それから少し話していると、今日の業務は終わった。

入学編 九節

さて、昨日は少し面倒ごとがあつたけど毎日がそうではないだろう。

今日も風紀委員として面倒ごとの防止及び解決をしますか。

「まあ、そう言う事だからエイミイたちを外まで送り届けてやるぞ」

「どういうこと？」

エイミイ、雫、ほのかは少し戸惑っている。

「いや、三人とも部活は決まったんだから早く帰りたいだろう？」

「だから、脱出を俺が手伝ってやるだけだ」

「と言うのも、正門前は各部活の勧誘がひっきりなしだ。」

「でもそれって風紀委員として大丈夫なの？」

「じゃあ聞くぞ。部活の強引な勧誘が起こる可能性がある。」

「まだ部活や委員会に所属してない人はともかく所属している人もだ。」

「なら、それらの人を問題がないよう送り届けるのは問題の防止にならないだろうか？」

「？」

「「なるほど」」

理解してもらえたようだ。と言う事なので早速仕事に移ろう。

俺はシエルター状に光学迷彩を発動した。

「じゃあ、校門前まで送り届けるぞ」

魔法の不適正使用？ 無事に送り届けるという名目がある以上不適正ではないだろう。

「昼夜さん凄いですね．．．私も光波振動系は得意ですけどここまで精密には．．．」

「ほのかなら出来ると思うぞ。ほのかは出力より精密さよりだろ？」

「なんでわかつたんですか!!」

「あー、まあ何となくと言うか想子を見るとそんな雰囲気と言うかな．．．」

「じゃあ私は？」

「雫は高出力の振動系統魔法が得意では？ 精密な操作は苦手みたいだけど」

雫はその通りと、エイミイも聞いてきたので．．．

「エイミイは移動系統の中でも大質量物質の短期移動、砲撃魔法が得意みたいだな」

「うっわ．．．私も当たりだよ．．．なに？ エスパー？」

「魔法は一応サイキックと言う意味ではエスパーが元型ではあるけど．．．」

まああれだ、家柄上いろんな魔法師を見てきたのと、

後は遺伝子が見えるのが理由なんだがな。

「おう?」

何やらもめごとが起こっている。まあ、止める必要はなさそうだけど。

「その二人、掴んでいる手を離してください!」

「あの人って確か・・・」「深雪のお兄さん?」

達也が仲裁に入ったからこの場は放置でいいと思ったのだが・・・

「あつ!」

達也の後ろで『空^{エア}氣^{ブリッド}弾』が発動する。それを俺は対物障壁で防ぐ。

「やれやれ、流石のトラブル体質だ・・・」

「え? さっきの障壁魔法昼夜の?」

「そう言う事だが・・・悪い、少し追いかけないといけないみたいだ」

達也は揉み合っていた二人に足止めされている。

「光学迷彩は三分ほどエイミィを中心に発動しとくからそのうちに脱出してくれ」

「え! わ、わかった」

俺は達也の前に出る。

「達也、追跡は俺がやる」

「分かった、任せたぞ」

犯人が誰かは分からないが、取り合えず追う。

ヒット&アウェイのつもりか、自己加速魔法を感知する。

その犯人を追うために俺も加速魔法、そして眼を使う。

犯人が剣道部の部屋に入っていくところを眼で捉える。

顔も見れなかったのは痛手だ。これでは中に入っても捕まえられない。

達也には悪いがここは見逃すことにしよう。次、俺の前であつたら容赦しないが。



さて、今日は4月9日（土）なのだ。そう、真由美さんの家にお邪魔する日だ。

とは言え、家の前にリムジンなんて止めてもらわれてはマスコミ殺到だろうし、

まあ、最寄り駅までキャビネットに乗って行くのが一番だろう。

「ホロ、これ餌な。毎度毎度情報ありがとう」

餌やりも済んだ。スーツも着た。手土産も持った。

「水波？ 準備は大丈夫か？」

「問題ありません」

さて、七草邸に向かうとしよう。

道中に何かあったわけでもなく、七草邸に到着した。

「あ、昼夜君、こんばんわ。そっちの子は……この前一緒だった？」

出迎えてくれたのは真由美さんだった。

「昼夜様の護衛の桜井水波です。以後お見知りおきを」

「こちらこそよろしくね、水波ちゃん。じゃあ、案内するわ」

「お願いします」

俺たちは一つの今に案内された。それから、今日は兄二人はいないらしい。

「やあ、昼夜君。久しぶりだね」

「弘一さん……いえ、七草殿。本日はお招きいただきありがとうございます」

俺に続いて水波も頭を下げる。

「いや、気にしなくていいよ。」

それから、外間を気にする場でもないから弘一さんでいいよ」

「ありがとうございます。こちらは俺の護衛の……」

「桜井水波と申します」

「よろしくね……しかし、君、学年は？」

「俺の一つ下、香澄や泉美と同じ年ですね」

「その年で護衛に任命されるということはそれだけ魔法の実力があるという事かい？」
「対物障壁に関しては類稀な才能を持っています」

弘一さんはなるほどと頷いた。

「ところで香澄と泉美は？」

「ああ、二人ならそろそろ・・・」

弘一さんがそう言った矢先・・・

「あ、昼夜兄い！」

「あ、ちよつと香澄ちゃん!!」

「おう、香澄に泉美、お邪魔させてもらってるぞ」

七草の双子が部屋の奥からやってきた。

因みに何故か香澄には昼夜兄いと、泉美には昼夜お兄様と呼ばれている。

「？ 昼夜お兄様、そちらの女性は？」

「フフフ、泉美ちゃん、なんとこの子はね・・・昼夜君の彼女よ！」

「「え!!」」

驚いたのは香澄と泉美と何故か顔を赤くした水波。

と言うか真由美さん、そう言う冗談いいですから。

「昼夜お兄様！ どういうことですか!!」

「ホントだよ昼夜兄い！ それならせめて何か声かけてくれたって・・・!!」

「あー、二人とも、驚いてるところ悪いが今の真由美さんの冗談だぞ」

「え!!」

再び驚く二人。水波は何やらぶつぶつ言っている。

「お姉ちゃん（様）!!」

こういう声が重なるところとかは本当に双子なんだなと思う。

「自己紹介はするべきだな、水波」

「・・・あ、はい、昼夜様の護衛を務めさせていただけます、桜井水波です」

二人は水波を値踏みするようなまなざしで見える。俺も初対面の時はそうだった。

「なるほど、どうやらそれなりに実力はあるようですね」「だね」

「・・・?」

「水波気にするな。二人なりの洗礼だ」

というか泉美、水波でそれなりじゃほとんどの魔法師が使えない判定だぞ。

「じゃあ挨拶も終わったところだし、食事にしようか」

と言うことで、部屋に食事が運び込まれてきた。





「まあ、でしたら水波さんと昼夜お兄様は同棲しているのですか？」

「同さツ・・・！」

「一緒に住んでいるという意味ではそうなるね」

まあ、特に問題になるようなことは起こってないが。

「ていうかなんで一高にしたの？ 別に昼夜兄いなら他の学校でもよかつたんじゃ？」

まあ最悪行かないという選択肢まであったけどな。

実際、達也を目立たなくするのが目的ではあったのだが・・・

お母様、叔母様、達也のトラブル体質は俺の隠蔽を高跳びしていきそうだよ。

「うーん、一つは今の状況かな？ 七草家や十文字家との交友関係もあるだろうね。」

後は・・・俺の正体のお披露目？ マスコミに捕まると時間とられるから避けてるけど」

「昼夜お兄様は日本で二人しかいない戦略級魔法師ですからね」

実際は三人目がいるのだが・・・使った順番だと俺が三人目か。

「戦略級って言われても、俺も一人の高校生なんだがな・・・」

「いや、昼夜君。君の魔法の知識やCADのカスタマイズ技術は、

高校生レベルをはるかに超えてると思うわ・・・」

「あ、そうだ昼夜兄い！ 後でボクのCADを調整してよ！」

「ん？ まあそれくらい別にいいが……」

七草家にだつて優秀なエンジニアはいるだろう？」

「いや、いるけどさあ……」

これはあれか？

俺にお願いしたいが七草の面子を壊すようなことは言えないという感じか？

「……予備のCADなら引き受けてもいいぞ」

「え！ ホントに?!」

「まあな。ただ、悪魔でも予備のだからな？」

「うん！ ありがとう昼夜兄い！」

「あの！ でしたら私のCADもお願いできますか?!」

「別に一つ二つ増えたところで問題ないぞ」

真由美さんは言つてこないが、

聞くのはエンジニアを雇っている弘一さんに失礼だろう。

「あ、そう言えば手土産を用意していました」

俺は、来る際に素材を買つておいた『生クリーム大福（巨峰入り）』を差し出した。

「おや？ お店の商品ではないのかい？ あ、嫌味じゃないんだけど」

「ああ、俺のお手製です。皮は白玉粉から作りました。

中の巨峰も最高品質品を選びましたし。あ、生ものなので早めに食べてくださいね」

「……………」

「いや、流石だね昼夜君」

弘一さんと三人娘の反応が違う。何か悪いことをしただろうか？

（昼夜様、そんなものを手作りで用意されてしまうと、

女性のプライドと言うものがですね……）

……あ、そう言う事か。もしかしてこれは失敗してしまっただか？

「………… 昼夜お兄様はこんなものまで作れるのですね！」

「え」

あれ、何か泉美の反応が思ってたのと違う。

「流石です、戦略級や四葉などと言われても、

自分を極めることを忘れないのはものすごい美点だと思います!!」

この後も泉美からは飽きることなく褒められて、

香澄には少し羨望の混じった目で見られて、

真由美さんは『なんで私よりも昼夜君が……』と小声が聞こえてきた。

そんなこんなで食事は終わり、香澄たちのCADをメンテして帰った。

明日も午後からこの周辺の十師族の家にお邪魔しないといけない。
他家との挨拶はこういう時にはしっかりとしないといけないんだよなあ。

入学編 十節

さて、他家へのあいさつも終わり今日からまた学校だ。

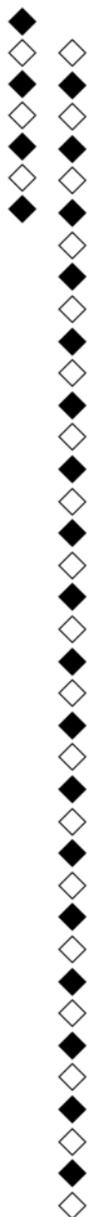
水波も近くのお嬢様学校の入学式だ。

まあそう言う事で今日からは家はひっそりと隠れている護衛の方々任せだ。

一応差し入れも渡しておいて学校に向かった。

暫く放課後は新入部員勧誘期間で風紀委員だが、

終わったら最新のCAD技術を調べてみるか。



翌日、俺もある程度学校に慣れて（ちよっかいを出されるのにも慣れた）、

達也は相変わらずのトラブル体質だ。

そんな感じで昼休みを過ごしていると・・・。

「ねえ昼夜」

「どうしたエイミイ?」

何やらエイミイが俺の席にやってきた。

「あのさ、各クラブのプロフィールを見る方法ってないかな?」

「? あるけどもう乗馬部に入ったろ?」

「え! あー・・・それは・・・」

「・・・あまり面倒ごとには首つつこうむなよ。そう言うのは俺みたいな奴の仕事だ」

俺はデイスプレイから広報委員の学内紹介ページを開く。

「授業中はロックされて気づかないかもしれないが、

部活のことや九校戦の結果くらいなら調べられる」

一応開き方も教えておく。「困ったときには昼夜に聞くから」と本人は言っていたが。

「昼夜にエイミイ、どうしたんだい?」

「おう鋼、エイミイが部活の紹介を見たいと言ってな・・・」

「この前の俺と鋼の試合も載ってるぞ」

「どれどれ・・・ホントに載ってるんだね」

鋼は少し苦い顔を浮かべる。自分が負けた試合を見ていい気はしないよな。

「んで・・・エイミイが見てるのは・・・」

エイミイの視線の先を見ると剣道部のページだった。

「・・・剣道部か」

一人の部員だけが問題を起こしているのかと思ったが、部活と言うグループで行われているなら注意するべきだ。

「まあ、多少面倒でも面白そうな相手だといいたがな・・・」

俺が呼んだのか達也が呼んだのか・・・どちらにしる面倒ごとなのは確定だ。ならせめて、楽しい事ならいいのだが・・・。

さらに日は過ぎて・・・部活勧誘習慣も終わり今日からは少しは平和だろう。

そんな日の昼休み、俺たちは生徒会室で休んでいたのだが・・・。

「ねえ摩利、交易通報窓口に届いたのだけど見てもらえる？」

それを見た委員長は、達也に端末を渡す。

「どうやら達也君に関係あることようだ」

その端末を俺と深雪も横から見ると

『匿名より』

風紀委員の司波達也さんが不当な魔法攻撃を受けています。

こちらには証拠写真になります。どうか厳正な処分をお願いします。』

との文章と、ジャージ姿の男の写真が張り付けてあった。

(これだな(ですな)(か)・・・)

わざわざ部活の事を調べていたのは犯人の目星がついていたのだろう。

「でも、こりやどうしようもないですな・・・」

「ああ、逃げの体勢に入ってる状態だけでは攻撃しているかもわからない」「それもそうね、そもそも実際に魔法使ってるかもわからないしね・・・」

分かつてて送ったわけじゃない・・・よな？

「しかし、君も色々人気者だな達也君」

「盗撮程度ならともかく、暴力的なファンは欲しくありませんね」

それから教室に戻ると、エイミーが何やら聞きたそうにしていた。

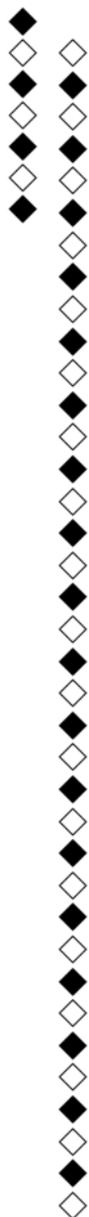
「・・・エイミー」

「な・・・何かな？」

「忠告しておくが、人気のない道や暗い夜道には気をつけろよ。なるべく近づくな」

「え、あ・・・うん、分かった」

後々思った、これ脅迫に聞こえてしまうのでは・・・と。



さらに翌日の昼休み、今日も生徒会室に訪れていた。

「ところで達也君、昨日の放課後、

カフェで二年の壬生を言葉攻めにしたというのは本当か？」

ほう、達也が言葉攻め・・・ね。

「先輩も年頃の淑女なんですから『言葉攻め』などと言う、

はしたない言葉は使わない方がいいと思います」

「ハハハ、ありがとう。私を淑女として見てくれるのは達也君くらいだよ」

「自分の恋人をレディとして扱わないとは・・・」

先輩の彼氏はあまり紳士的な方ではないようですね」

「そんなことはない！ シュウは・・・」

・・・失礼だが、委員長彼氏いたんですね。

皆も何も言わず、ただ沈黙だけが場を支配する。

「・・・何故何も言わない？」

「・・・何かコメントした方がいいですか？」

市原さんはいいつも通り・・・と言うには少し驚きが混じった顔を。

中条さんは顔を赤くしてうつむいている。

真由美さんは背中を向けて肩を震わせている。

「一応答えますが、濡れ衣です。」

後、先ほどの表現は深雪の教育にもよくありませんし」

「お兄様、私の年齢を勘違いされてはいませんか？」

さて、どうにも達也の話だと壬生さんは風紀委員に反感を持っているようだ。

風紀委員は名誉職ではないが、点数稼ぎ扱いされたりなど。

まあ裏に陰謀でもあれば不満を持つ生徒には楽だろう。たとえそれが偽りでも。

その後達也は、理念を伝えた後どうするかと言う宿題を与えたそうだ。

「あの・・・まるで思い込みが激しいというより誘導されているといった感じですが」

「その誘導している何者かは・・・『ブランシユ』のような組織ですか？」

「えー」「どうしてそれを！」「ブランシユって何ですか？」

どうやら中条さんだけご存じなかったようだ。

「俺が調べたところ、侵食しているのは下部組織の『エガリテ』では？」

俺だつてこつちに来てから何もしてなかったわけではない。

元の予定では入学までの期間に学校などの状況を捜査するつもりだった。

一応言うと、ブランシユは反魔法国際政治団体だ。

政治団体と名乗ってはいるが実際はテロ集団で、

魔法師の所得水準が非魔法師より高いことを非難している。

その実、魔法師は一部の高所得者が水準を引き上げているだけで、

魔法特性から収入に結びつかなかったり、実験体にされている魔法師も少なくない。

魔法自体も才能だけでは扱えない。俺も新しい才能を加えた後は練習している。

だが非魔法師には、魔法も一つの才能と言う事から目を背けさせ嫉妬を理念に纏わ

せ、

才能の劣る魔法師には、劣っている事実から目を背けさせ平等と言う理念を与える。

それが奴らの正体と手口だ。

さて、テロリストと言うものには必ずと言っていいほど裏がある。

活動するためには資金は必須であり、その支援者がいるのが当然である。

では、彼らの裏にしているのは一体何者か？

魔法とは良くも悪くも力だ。魔法を批判するということは力を削ぐのが目的だろう。

つまり、この国の力を削ぐことを目的としている。

なら話は簡単だ。いくつか中継しているだろうが、沖縄で交えた敵。

大亜連合の可能性が高いと俺は推測している。

……とまあここまでの内容を伏せながら中条先輩に説明した。

「……その通りよ、この学校はエガリテの侵食を受けているわ。」

青と赤で縁取られたリストバンド、あれはエガリテ信奉者の印です」

どうでもいいが、ナルやホロが持ってきた情報にもそれを付けた人物の映像があった。

「要するに、不審者には気をつけろってことですね・・・」

この場の全員が深刻そうな顔をする。その気になれば潰せる。

だが、奴等が俺の周りに手を出さない限り潰す気はない。ある程度なら忠告もやる。学校の有象無象が信仰するのは魔法の努力しないで言ってることで、

まともに取り合うつもりさえもない。

そう、俺はあいつらが手を出さなければどうだっていいのだ。

次の日は特に何もなく過ごした。

放課後は委員会も非番なので図書館に行こうと思っただが・・・

「お・・・っと」

少し外に出ていたら、頭に何かしらの重みを感じた。

「ナルか？」

鳴き声で返事が返ってくる。周りの生徒からはおかしな目で見られているのだが・・・

「それはどうでもいい。ナル、何かあったのか？」

ナルは再び鳴き、そして俺を導くかのように飛んでいく。
「どうやら研究はまた次の機会だな……」

俺はナルの後をつけていった。すると、嫌な想子波を感じる。
ここからは少し遠いが、キャストジャミングだ。

同時に、それに晒される見覚えのある想子パターンが三つ。

「チツ、そう言う事か！」

俺は一度裏道に入り、光学迷彩と加速魔法を発動する。

そうしてその場にたどり着き、まずは術式解体を放つ。

想子の爆風は想子の波を吹き飛ばした。

「「えー」」

「ふー、ギリギリセーフ。そしてお前ら、全員アウト」

そこにいたのはエイミイ、雫、ほのかの三人だった。

「エイミイ言ったろ？ 人気のない道には気をつけろって」

「あう……ごめん」

「全く、まあそれはあとでいい。」

んで、お前ら、俺の仲間に手を出してただで帰れると思うなよ」

相手はヘルメットを被った男四人。武器はナイフとアンティナイトの指輪。

「・・・一人増えたところで変わらん！ キャストジャミングだ！」

再びジャミング波が発生して、三人が顔をゆがめる。

「全く、俺の正体も知らないでジャミングが対抗手段と思いやがって・・・」

俺は、キャストアクティベートを発動する。

三人の顔が戻り、相手はジャミングが防がれたことを悟る。

「馬鹿な！ 魔法師はジャミング下では何もできないはず!!」

「そうだな、俺みたいに処理能力や干渉力が異常な奴じゃなければ」

処理能力が高ければアクティベートで防ぐ事ができ、

干渉力が強ければジャミング下でも無理矢理魔法を使える。

「さて、名乗るのもおこがましいから先に忠告しておいてやる。

今からお前らの中から一人選べ。そのうちの一人を帰してやる。

残りの奴も消しはしない。ただ暫く俺の尋問を受けるだけだ。

帰った奴は主人に一高に手を出すなど伝えればいい。簡単な取引だ」

「くっ！ ガキの魔法師風情が調子に乗り寄って！」

一人がナイフを持って突撃してくるが、途中で止まる。

相変わらず便利な魔法だ、減速領域は。

「折角だ、一つ訂正しといてやる。『戦略級』をつけ忘れてるぞ」

「『！』」

「まさか・・・こいつが！」「四葉の戦略級魔法師！」

「おお、流石にそれくらいは知っていたか。えらいぞ、よしよししてやろうか？」
「くそ！ なめやがって！」

男の一人が銃を取り出す。だが、それが発砲されても領域に捕まり地に落ちる。
「残念だ、交渉決裂」

逃げ出そうとするが、その先には対物障壁を用意しているので逃げれない。

「どうしたものか・・・滅多刺し、八つ裂き、絞殺、撲殺・・・」

つぶやくたびに、俺の前に用意した氷が、針、剣、縄、槌・・・と姿を変える。

「あ、そうだ。この前古式を調べた時の呪殺を試してみるのいいかもな」

氷は藁人形の形になる。四人の男は、もはや恐怖で何も言えなかった。

「決めた、ゴー!!」

俺が指を向けると、人形も同じポーズを取り突撃していった。

その後、人形と言う名の氷塊で三人を沈めた。

「さあ、後はあなた一人だ。君は主にただ伝えればいい。

恐怖と四葉は同義である・・・と」

俺は対物障壁を解除した。男は一目散に逃げていった。

入学編 十一節

俺は氣絶させた三人の内二人の処理を家のものに任せて、
残りの一人を九重寺に電話して八雲さんに引き取ってもらい、
雫たちと喫茶店に入った。

「で、何か反省は？」

「「ホントツツツにごめんなさいッ！」」

雫たち三人は申し訳なさそうに頭を下げている。

「つたく、特にエイミィ、面倒ごと^{ゴト}に首突つ込むなって言っただろ？」

「ウッ！」

「今回はナルが教えてくれたからよかつたものの、

もし誰も気づかなかつたらどうすんだよ？」

三人ともうつむいて答えない。

「まあ、過ぎたことを言っても仕方がない。二度と同じことするなよ、いいな？」

「「はい・・・」」

これでいいだろう。三人とも反省はしているし、

そもそもグググチ説教するキャラでもないし。お母様？ あれは別問題。

「まあ何だ、怖がらせてしまった礼としてこの場は奢ってやる」

「え、いいの？」

「いいんだよ、どちらにしろ俺も怖がられたみたいだしな。

それに、ちゃんと反省してるだろ？ ならたーんと食え」

その後は、ケーキを食べながらなぜあの状況になったのかを聞き出した。

どうやら剣道部主将の司甲を追っていたら誘導されたらしい。

腕を確認したところ、エガリテのリストバンドをしていた。

まあ一応脅しは入れておいた。これ以上手を出さなければ俺も手を出すつもりはな

い。

反魔法主義者でも、適当に潰せばそれが魔法師に向かい風になるかもしれないから

だ。

そんなこんなで今日と言う日も過ぎていく……。



翌日の放課後、昨日の夜に拷問などなかったかのように俺は過ごしていたのだが、『生徒の皆さん!』

ハウリング寸前の大音量でスピーカーから声が聞こえる。

「いったいなんだ? 今日昼寝日和だから寝ようと思つてたのに」

「いや、昼夜、学校つて寝るところじゃないと思うよ……」

鋼、学校で寝るつて背徳感があつていいぞ。もちろん授業中以外だが。

『失礼しました。全校生徒の皆さん!』

今度は程よい音量で、何かしらの連絡が再開される。

『僕たちは学内の差別撤廃を目指す有志同盟です!』

「? 差別と言つてもこの学校には一つしかないと思うが……」

わざわざ生徒会役員の制限のためにこんなことをするとは……中々やるな」

鋼とエイミィが一つの差別に対して聞いてきたので答えてやる、が……

『魔法教育は実力主義、それを否定するつもりはありません』

いい心がけだ。

『しかし校内の差別は魔法実習以外にも及んでいます。』

例えば、魔法競技系の部活は他の部活よりも予算を多めに割り当てられています!』

「まあ、そう言うわなあ……」

勝手に淡い期待を抱いてみたものの、その期待が実現することはなかった。

「んじや、鋼、エイミイ、風紀委員で呼ばれたから行つてくるわ」

「行つてらっしゃい」

その後も放送は続き、

『僕たちは魔法師を目指して魔法を学ぶものです。』

ですが同時に僕らは高校生です！魔法だけが僕たちの全てではありません！

僕たちはこの差別に対して生徒会と部活連に対して対等な立場の交渉を要求します

！』

後は大体繰り返しだ。こんなつまらないことに付き合わないといけないなんてな。

で、俺たちは放送室前にいる。さて、どうしたものか……。

「昼夜君、何かいいアイデアはあるかしら？」

「そうですね、一つ思い浮かんだものが」

「おお、それは是非聞きたい」

「委員長と会長がご所望でしたら。」

まずは放送室内の電源はカットされていますね。

次に俺の魔法で室内の気圧を低下させ、さらに室温を低下させます。

こうすれば一人くらいおなかの調子が悪くなり、

トイレに行くために出た瞬間に突撃、全員を捕縛します」

「……………」

我ながら、相手と設備への被害も少ないいい作戦だと思う。

腹痛になる人の精神への被害を除けば。

「……昼夜君、ほかに何かないかしら？」

「そうですね、なら中をサウナ状態にして同じことをするとか……

最終手段としては扉を俺の魔法で出来る限り破損なく破壊するかですね」

サウナは熱中症による生徒への被害が、

扉の破壊は設備への被害が甚大だから先ほどのを説明したのだが……。

へ？ 生徒の精神被害？ 知ったこっちゃない。

「さて、克人さんはどのように？」

丁度やってきた克人さんに尋ねる。

「要求は聞き入れていいと思っっている。もとより言いがかりだ。

しっかり反論することが憂いになるだろう」

「ではこの場は待機するべきでしょうか？」

「それについては決断しかねている。」

不法行為を許すわけにはいかんが、

設備を壊してまで性急に解決すべき程犯罪性が高い物でもない」

要するに強引な事態収束は計らないという事だ。

すると達也は、携帯端末を取り出し、電話を掛けだした。

「……壬生先輩ですか？ 司波です」

結構な視線が達也に突き刺さる。

「今どちらに？ 放送室にいるのですか……それは……お気の毒に」

その後達也は顔を顰める。大声で文句を言われでもしたのだろう。

最早完全というほどの遮音性を実現した携帯では推測することしかできない。

「十文字会頭は交渉に応じると仰っています。

生徒会長の意向は未確認ですが……いえ、生徒会長も同様です」

この場にいた会長がジェスチャーで達也に伝えた。

「と言うことで、交渉の日時を打合せしたいのですが……。

はい、今すぐです。学校からの横やりが入らないうちに……。

先輩の自由は保障しますよ。

我々は警察ではないので牢屋に入れる権限はありません……では」

達也は電話を切って委員長に報告する。

「すぐ出てくるそうです」

「今のは壬生紗耶香か？」

「いや、言葉攻めはしてないって言ってたのに手が早いね」

「誤解だ、それより態勢を整えるべきかと」

「態勢？」

なんのだという顔で尋ねる委員長に、俺は何を言ってるのだという顔で答える。

「拘束する態勢です。立てこもりまでするんですから、

CADの持ち込みは確実です。他の武器を所持している可能性もあります。

達也も保証すると言ったのは壬生先輩だけですし、

誰も達也が風紀委員を代表して交渉してるなんて言ってますんよ？」

この場で俺、達也、深雪以外が呆気にとられる。

「悪い人ですね、お兄様も昼夜も」

「今更だな、深雪」「俺は善人だなんて言っていないぜ」

「フフ、そうですね」

そんな会話もつかの間、出てきた生徒を壬生さん以外拘束する。

壬生さんはCADの没収にとどまった。委員長が達也の名誉に考慮した結果だ。

達也としてはこんな口約束を律儀に守るつもりもなかっただろうが。
「あたしたちを騙したのね！」

壬生さんの手は達也の胸元に伸びていて、その手首を達也に捕まれている。

「司波はお前を騙してなどいいない」

「十文字会頭……」

「お前たちの言い分は聞く。交渉にも応じる。」

だが、それととった手段を認めることは別問題だ」

「その通りなんだけど、彼らを離してもらえないかしら？」

達也と壬生さんの間に入ったのは真由美さんだった。

「七草？」

「だが、真由美」

「言いたいことは理解しているつもりよ、摩利。」

でも、壬生さん一人では交渉の段取りもできないでしょう。

当校の生徒なのだから逃げることもできないのだし……」

「あたしたちは逃げません！」

真由美さんの言葉に壬生さんは嘸みつくが、真由美さんはそれをスルーして、

「生活主任の先生と話し合ってきました。」

鍵の盗用及び放送施設の無断使用に対する措置は生徒会にゆだねるとのことです」端的に、彼らのおかれてある状況の説明をした。

その後、真由美さんが段取りする生徒を連れて行って、この場は解散となった。

「達也、どうなると思う?」

帰り道、俺は達也と深雪と駅まで一緒に帰ることにした。

「どうなるも何も、俺よりも昼夜の方が会長には詳しいだろう?」

「違う、俺が言ってるのは交渉の後だ」

昨日の事を俺は達也と深雪に説明する。

「成程な、なら間違はなく交渉は誘導だろう」

「同じ結論だな。深雪も気をつけろよ?」

「ええ、心配してくれてありがとう。ところで昼夜?」

美少女三人と一緒に喫茶店に入ってしかも奢ったってどういう事かしら?」

「どうもこうもそのままの意その関節はそっちには曲がらない!!」

深雪が俺の腕を取ってありもしない方向に曲げようとしてくる。

あれ? 一応力は俺の方があはずなんだけどな・・・?



翌日、クラスにつくと交渉についての話で盛り上がっていた。

「あ、昼夜、昨日はどうだった？」

「どうもこうも、くだらない理論を聞かされるだけの無駄足みたいなもんさ」

クラスでは俺の声に勘違いして賛同する奴が山ほどいた。

「昼夜は同盟の主義についてはどう思うの？」

「甘すぎる。その一言に尽きる」

鋼とエイミイは頭にはてなマークを浮かべる。

「評価して欲しいなら結果を出すのが先だ。」

魔法以外で評価して欲しいなら魔法以外で結果を出すべきだ。

平等じゃないから評価を上げるといふのは結果を出している人にぶら下がってるだけ。

才能がないなら努力するのが筋だし、努力してもどうにもならないなら諦めるべきだ。

酷いって言われるかもしれないが、それがこの世界の現実だ。

誰もが平等に扱われる世界があるとすれば、それは誰もが冷遇される世界だけだ」
現に、俺は才能がなくてもひたすら努力する人を見てきた。

達也は深雪を守るために、亜夜子ちゃんは自分の適性を見つけるために。

ここにいる鋼も、その特性から苦労してきただろうから、俺の意見に軽くうなずいた。
「でも、昼夜って意外と容赦ないんだね」

全く同意と言った感じに、鋼は再び首を振る。

「おう、誰が四葉昼夜は優しい善人だなんて言った？」

二人は笑ってくれた。冗談だと思っっているだろうが、人殺しが善人なわけがない。

さて、明日は討論会だ。まあそっちの結果は見えている。

問題はその後だ。人形は大量に用意した。せめて面白い相手が出ればいい。

「さあ、一嵐やってくるぞ……」

入学編 十二節

昨日のうちに、八雲さんに聞いてみたが何も聞けなかつたらしい。

うちの地下室でやった拷問にしても同じだ。

「後はこの討論会でどうなるかだな……」

講堂の壇上に立つるのは真由美さん一人だ。変に意見が割れなくていい。

尚、放課後にやっているので一部の生徒は部活に行っている。

ほとんどの部活で今日は参加自由だ。零たちは普通に部活を行っている。

さて、一応今回ペアを組むのは森崎君だ。

「……駿でいいか？」

「ああ、別にいいが……そんな深刻そうに言う事か？」

「いや、少し君をぼっこぼこにしすぎたかなって。」

あ、それと俺のことは昼夜と呼べ、じゃないとあの悪夢を思い出す」

「何かわからんが、お前も大変なんだな……」

きつと夏休みに帰ったらまた山ほど書類が残っているのだろうか？

『昼夜が気になってまともな仕事にならないわ！』って……。

その頃、四葉本邸では・・・

真 「昼夜が気になってまともな仕事にならないわ・・・

葉山さんには悪いけど、昼夜分を回収しに東京に・・・」

葉 「真夜様、どちらへ行くつもりでございますか？」

真 「ンギヤアアアアア!!」

想像の斜め上を行っていた。



討論会が始まった。ここまでは問題なしだ。

「生徒会長、今季のクラブ別の予算配分について質問します。

この資料によりまずと一科生の比率の高い魔法競技系クラブは、

二科生の比率が高い非魔法競技系クラブより手厚く予算が配分されています。

これは一科生の優遇が課外活動でもまかり通つてゐる証ではないのですか！」

「クラブ別の予算配分は在籍人数や活動実績を考慮した予算案をもとに、各クラブの部長も参加する会議で決定されます。

魔法競技系のクラブが予算が手厚く配分されているように見えるのは、それらの部活が実績を残しているからであり、また非魔法競技系のクラブでも、全国大会などで優秀な成績を収めているレッグボール部などは、魔法競技系のクラブに見劣りしない額の予算が配分されています。

クラブの予算配分が一科生優遇の結果と言うのは誤解です」

まあこのように、同盟が勝手に言っただけを真由美さんが論破する形だ。

まさにワンサイドゲーム、初めから勝負は決まっていたみたいなものだけだ。

「二科生はあらゆる面で一科生より劣る差別的扱いを受けている。

生徒会はそれを誤魔化そうとしているだけではないか！」

挙句の果てには詳細も何もない一方的な言いがかりをつけてくるサクラまで出る始末。

「只今、あらゆる、とのご指摘がありました、

具体的にはどのようなことを指しているのでしょうか。

施設の利用や備品の配布はA組からH組まで等しく行われていますが」

まあそんなもの、真由美さんの前では無力だよなあ。

「なあ昼夜、この討論会どう思う?」

「それはこの討論会自体か?」

「? それ以外に何があるんだ?」

・・・疑い過ぎるのも悪い癖かもな。

「なら簡単だ。問題は差別じゃなくて差別意識だ。

花冠は雑草を見下す。雑草は花冠と比べて自分を卑下する。

正直、そんな奴らと付き合うつもりはないね。少し前の駿みたいだね」

駿は頭を背ける。それなり自覚はあるようだ。

「まあ、今はましになったな。それでだ、この意識をなくさない限り差別と言われる。

だが実際、差別を助長しているのは二科生でもある。

さつきも言ったが、自分が一科生に劣っていると思えば努力を諦めることが問題だ。

学校が一科と二科を残しているのは魔法を教えらるる教員が少ないことともう一つ、

それぞれが高め合うためでもあるのに、やれ弱いだのやれ強いだの言っ

て、努力しないから一科生だけが力を持つ結果につながったんだ」

「そ・・・そうか・・・」

さて、真由美さんの話も大詰めだ。

「私の任期はまだ半分を過ぎたばかりで少々早い公約になりますが、

私は生徒会役員に関する制限を改善するため取り組んでいくつもりです」満場の拍手が起こる。生徒が同盟ではなく会長の意見を認めた証。

差別ではなく差別意識の撤廃。同盟の行動は差別をなくす方向への足掛かりとなった。

だが、革新派と言うのは常々目標の達成だけでは満足しない。

それに加え、自分の考えたやり方で達成することを望む。

——まあもとより、手を出さないなどと言う考えはなかったのだろう。

外から爆音が聞こえる。

と同時に、待機していた風紀委員が、動き出した同盟のメンバーをとらえる。

「はっはっは！ こりや傑作だ！ たかが高校に爆弾を使うか！」

「昼夜！ 笑ってる場合か！」

俺たちは新入りなので捕獲は任されてない。さて、次は何が来るかな？

そう思ったとき、窓から紡錘形の物体が飛び込んできた。

床に落ちると白い煙を発生させたが、拡散させることなく窓から放り出される。続いて入ってきたガスマスクとサブマシンガンで武装した三人は、突如倒れた。

「え！ 僕たち出番なし?!」

「まだだ、行くぞ駿。雑魚狩りだ」

駿の襟首を引つ張りながら、委員長たちにはこの体育館の防衛をお願いして、俺は校内に隠しておいた無数の人形を起動した。

雫 s i d e

バイアスロン部の活動中、突如轟音が聞こえた。

先輩の話によると、どうやらテロ組織が侵入したらしい。

私たちは部活用のC A Dを護身用に持たされた。

「見つけたぞ！ やれ！」

数人の男がナイフを持って私たちに襲い掛かってきた。

その一人が、ほのかにナイフを向ける。ほのかは足がすくんで動けなかった。

かく言う私も、かなり怯えててうまく照準が合わない。

ナイフがほのかに当たる直前、何やら小さなものがテロリストの顔を横から殴った。

他のテロリストは先輩たちが倒したみたい。

私とほのかは、テロリストを殴ったものを見てみた。

「ぬいぐるみ……だよな？」

「うん、それも昼夜のデフォルメされた？」

「おーい、無事だったか？」

その時、ちょうど本人の声が聞こえてきた。

折角なので本人に聞くとしよう。

昼夜 side

「おーい、無事だったか？」

雫たちが部活をやっていた現場に駿と駆け付ける。

「うん、このぬいぐるみのお陰で」

「うんうん、予定通り作動してるね」

「昼夜さん、このぬいぐるみは何なんですか？」

まあ聞かれるよな。別に大した魔法ではないし。

「俺が作った遅延発動式魔法『目的プレパス・マリオネットを持つ人形』。

この前あったことで敵に俺に対する敵対心を植え付けて、

俺に対する敵対心を持つ相手を想子波によって感知、突撃する半自動人形。

想子は認識などを記録するから、敵対心が記録された想子をもつ敵を攻撃する」

実際に反応するようにしたのは殺意だが……。

因みに二百個ほど用意していたが、既に半分ほどが起動している。

「「すごい（ですな）（な）……」」

「まあこんなにも簡単にかかってくれるとはな……」

「ところで、講堂はどうだった？」

すると駿は目をキラキラさせて、

「それがな、講堂はサブマシンガンを持ったテロリストに襲撃されたんだが、

撃ち込まれたガス弾は服部副会長がガスを圧縮して窓に放り返したんだ。

その後、ガスマスクにサブマシンガンのテロリストが入って来たんだが、

渡辺委員長が魔法を使った途端バタバタと倒れていったんだ！

凄いだろ！十人くらいいたのを何の魔法かわからないけど「M I Dフィールド」え？」

「委員長が使った魔法、恐らく『M I Dフィールド』だ。」

収束系魔法で窒素を操る魔法の一つ。ガスマスク内に窒素を充満させ酸欠にしたんだ。

それから、レディ相手にそう言うのはどうかと思うぞ？」

「あ……／＼／＼」

言われて気づいたのか、顔を赤くする森崎。何気に可愛いところはあるみたいだな。

まあ、そう思える中で育ったからか。

「とりあえず、雫とほのかは向こうに行くの良い。」

かつ・・・十文字会頭が守ってるからこんなチンピラ如きじゃ突破できない」

「うん、分かった。昼夜たちは？」

「俺たちは非難しそこなつた生徒の誘導があるからな、んじやまた後で。行くぞ」

再び、駿の襟をつか・・・めずに普通についてきた。

さて、次は乗馬部まで行くか。馬の脱出とか言うかもしれないし。

「おーい、エイミー、無事か？」

「え？ ああ、なんかやってきた傍からこのぬいぐるみにやられて・・・」

このぬいぐるみ、モデルは昼夜だよな？」

「そりや俺が作ったからな、魔法の媒体として何気に便利だ」

自由が利くからそのまま操り人形マリオネットとして使ってもいい。

八雲さん相手の時はそっちだったし。

「馬も非難させた方がいいな。テロリストは最終的に国力を削ぐのが目的だから、馬を殺して金かけさせれば雀の涙ほどだが負担になる。」

エイミー、また光学迷彩やるから向こうまで行け」

「あつちには十文字会頭がいるから重武装隊でも突破できないぞ」

「ありがとう、昼夜と・・・」森崎だ」森崎君」

俺は前より大きな光学迷彩を発動して、乗馬部の部員全員を隠した。

「よし、駿」「次だな？」

段々慣れて来やがった。

やつて来たのは第一体育館、まあ敵は全てマジック・アーツ部が倒してました。

「鋼、こっちは無事みたいだな」

「うん、先輩方も勇敢に戦ってくれて助かったよ」

「ここはもう籠城していた方が有利な気がする。」

「じゃあ警戒装置三つほどサービスしてやる」

「え？ これは・・・ぬいぐるみだよな？」

「魔法がかかっている俺に対する敵対心に反応する。」

分け合つて敵対心を埋め込む事が出来たから敵が来たら突撃するはずだ」

「うん、多分発動するのを見た方が早いと思う」

「なら敵に近寄るか敵が来るのを祈ればいい」

「昼夜、次だな？」

もう俺が一言も言えなくなつたぞ。

「まあ、あとの問題は図書室は達也と深雪がやってってくれるか」

「な、司波さんも出ているのか?!」

「心配する必要はないぞ。達也が近くにいる限り誰も深雪に傷はつけられない」

言い方が悪いが、達也はそういう風にできている。

「んで、俺等も最後の仕事に向かうとするか」

「最後って?」

俺は後ろから飛んできたスパークを絶縁障壁で防いだ。

「うーん、中の上かな?」

駿も後ろを向く。そこにいるのは拳銃型CADを持った男だった。

「放出系に適性を強化された強化サイキックだね。」

エレクトロキネシスってやつか。駿、後衛お願い」

「え? あ、おい!」

加速魔法で接近する。スパークはすでに絶縁障壁で見切っている。

拳を入れて終わりにしようと思ったのだが・・・男は意外と素早く攻撃をかわした。

「・・・成程、生体電流をエレクトロキネシスで操作したか」

人体強化をそのよう手でするとは興味深い。

そこに駿が発動した複数の空気弾が襲う。おあつらえ向きに回避ルート制限して。

「ナイスアシスト!」

回避ルートを先読みして、振動魔法をかけた掌底を食らわす。これで男は気絶した。
「流石だな、テクニックは十分に発動速度も十分。」

規模と干渉力は少し物足りないがそれを補うには十分だ」

「それ、褒められてる気がしないんだが・・・」

「これでも褒めてるぞ」

「ところで、なんでこいつは魔法師なのにこいつらに加担していたんだ?」

「すべての魔法師が優遇されているわけではないってことさ」

「?」

兎に角、表向きこの事件は解決した。後は裏の仕事だ。

俺の仲間に出した罰、ただで済むと思うなよ。

入学編 十三節

報告は終わって、俺は壬生さんとは会わずに、壬生さんが休んでいる保健室の裏、花壇の前には、この前達也に倒されたという桐原さんがいた。

「桐原先輩ですね？ 初めまして、俺は一年の四葉昼夜です」

「ん？ それで四葉様が何の用だ？」

「これは相当気が立ってるな……。」

「いえ、少し簡単なお話が……。」

「興味は無い、帰れ」

「……壬生先輩を洗脳した相手がいる場所がわかると言ったらどうします？」

「!! それは本当か?!」

胸元をつかみ上げられる。ちよつと待つて、身長差が10cmもあると……苦し……
「本当ですよ！ 恐らく克人さんも間もなく撃退に向かいます！

それについて行けばいいんです！ 克人さんに話は通しますから！」

手を離される……はあ、苦しかった。

「では克人さんに連絡……と」

まあ、少しは時間がかかるだろうが……って、もう来た。

「あと少ししたら車で突入するとのことですよ」

「分かった、四葉、恩に着る」

「これくらい気にしないでください」

そう言うのと桐原さんはもう一度頭を下げてから、走って行った。

何と言うか、武人なんだな〜と思った。

「さて、俺も俺で働きますか」

敵のアジトは分かっている。いつでも潰せるように調べておいた。

そして、エガリテ日本支部のリーダーは剣道部主将司甲の義兄、司一。

通りで剣道部は真っ先に汚染されていたわけだ。

加速魔法、光学迷彩、音波遮断、赤外線隠蔽などの魔法を駆使してアジトに近づく。

達也 side

俺たちは車で敵のアジトに突っ込んでいた。

「レオ！ 今だ！」

「パンツァー!!!」

車を硬化魔法で装甲車化して門を打ち破る。

その分レオはへばっているが。

「司波、お前が考えた作戦だ。お前が指示を出せ」

「分かりました。レオはここで退路の確保。」

エリカはレオのアシスト、それから逃げ出そうとするやつの始末」

「捕獲じゃなくていいの?」

「余計なりスクを負う必要はない。安心確実に、始末しろ。」

会頭と桐原先輩は右に迂回して裏側に回ってください」

「了解した」

「俺と深雪はこのまま踏み込みます」

それを合図に、全員が自分の役目を果たすために進む。

昼夜 side

うんうん、みんな来たね。俺は窓からガラスを割ってダイナミック登場しようか。

「せーのっ!」

窓ガラスを割ってそのまま相手にドロップキックを食らわせるつもりだ。

「ようこそ、初めまして、司ベギリアー！」

「ふう、四葉昼夜、華麗に参上」

「おい昼夜、ただでさえこのボスは出番がないのに出オチ属性までつけてやるな。

ましてや出番がないんじゃないや出オチも大してできないだろう？」

「達也・・・俺そんなこと全然考えてなかったよ（感動の眼差し）」

しまった、これはやらかした。

「と言うことで一さん、

やり直すからもう一度最初からセリフ言つて貰つていいですか」

「バカにしやがつて！ ガキ風情が！」

全員が銃を俺たちに向ける。

「先に言つておいてやる。CADを棄てて俺たちの仲間になれ！」

「そうだな、時間をもらえるなら返事をしないと。」

俺たちの返事はこうだ、武器を捨てて手を頭の後ろに組んで投降しろ。

達也も深雪も、これでいいよな？」

「問題ない（ありません）」

さて、ちゃんと答えたし相手にも時間を与えないとな。

「言つておくがな、今回の作戦にはこつちもかなりコストをかけたんだ。

だから割に合う報酬が欲しいんだよ、その四葉が考えた欠陥品ではなく、
司波、貴様のキャストジャミングがな！」

「え、達也のジャミングは特定魔法のみだろ？」

「いや、昼夜のジャミングはかなりの演算能力がないと……」

「話を聞けエ！」

お、いいね。司一のススキル『ツツコミ』のレベルが上がっていくぞ。

「はあ、で？ キャストジャミングもどきを調べたのは褒めてやるが、

俺の周りにまで手を出されたんじゃねえ……」

「ふふ……そうか、ならば二人まとめて……俺たちの仲間……！」

司一は頭に右手を添える。そして少し苦しそうな顔をして……

「貴様……一体何をした……？」

「何って、雫たちの分のお返し。」

キャストジャミングって言ってな、魔法師が聞くと気分が悪くなるんだよ。

そう、今のあんたみたいにな」

今回はこいつの想子パターンを見て最悪な相性に僅かながらいじつたが。

「使おうとした魔法は意識干渉型系統魔法『邪眼』^{イビル・アイ}と称しているが、

実際はただ催眠効果のある光信号を明滅させ、網膜に投射する光波振動系魔法」

「洗脳技術から派生したただの催眠術。精々意表を突きやすいのがメリットか。

確か新ソ連設立前にベラルーシが熱心に開発してたっけ」

「この様子だと、壬生先輩の記憶もこれですり替えたな？」

「……ほう、そうやって俺の通う学校を汚染してくれてたわけと。

「この下種ども……！」

深雪もご立腹だ。逃がしたら明日の天気は吹雪になりかねない。

「眼鏡を外す右手に注意を向けさせるつもりだったんだらうけど、

多分戦う相手間違ってると思うぞ。俺等には通じん」

「いざとなれば起動式を部分的に抹消すれば十分だ。」

催眠パターンの記述が抜けていては邪眼もただの光信号だ」

「な……バカな……そんなこと……生け捕りはやめだ！ 撃て！」

はあ、短気だなあ。武器ももう少し複雑な構造のものを選ばないと。

「じゃないと俺にも分解されるぞ？」

銃は全てパーツに戻る。これくらいなら俺にもできる。塵にしたりは無理だけど。

「な……くっ！」

司一は逃げ出す。それを俺と達也が追う。

後ろに一人、ナイフで突進してくるが足元が凍っていた。

「愚か者……」

「程々にな、お前が手を汚すまでもない相手だ」「いざとなったら呼べよ？」
「わかりました」

ここに居るのは深雪に任せて、馬鹿リーダーを追う。

さて、俺は今その馬鹿リーダーと愉快な仲間たちと対面しています。

ジャミング波がすぐくうるさいです。

(多分深雪はもうニブルヘイムで終わらせただろうな)

「ハハハ、どうだ魔法師？ 本物キャストジャミングの力は！」

「昼夜、この世でキャストジャミングを無効化できる魔法を初めて作ったのは？」

「……はあ、了解したよ」

俺はキャストアクティベートを発動する。

「ふん、こつちは十人以上でやってるんだ。いくら対抗手段があっても無駄だ！」
「えーと、その想子波系だと確か大亜が使ってるアンテナイトの波形だな。」

ベラルーシ再分離独立派の提供でスポンサーが大亜連合つてことだね」

産出地域、加工によって僅かにアンテナイトのジャミングの波形は変わる。

この波形は忘れない、二年前に沖縄で受けたのと同じものだ。

「今更気づいたところでどうもなりもしないよ……」

「じゃあ達也あとはよろしく」

達也は愉快的な仲間たちにCADを向けて引き金を引く。

その銃口の先にあつた肉は、想子の波ごと貫かれた。

「体組織の一部を穿つた、そいつらはもう使えないぞ」

「先に言つておくと俺がいようといまいと達也には関係なかつたと思うぞ。

今頃、規格外イレギュラーなんて思つてももう遅いぞ」

その時、馬鹿リーダーの後ろの壁から剣先が出る。

「お、桐原先輩！　そこであつてますよ！」

「任せろ！」

壁越しだつたが返事があり、次の瞬間には壁に大きな穴が開いていた。

「よお司波兄に四葉、こいつらはお前らが？」

「いいえ、全部達也が。」

で、そこに転がってる生ごみでまだ生きがいいのがリーダーの司一ですよ」

「なに……？」

桐原さんは馬鹿を睨みつける。

「こいつか！　壬生を誑かしやがったのは！」

「ひいひいひい!!」

一際強いジャミング波が発生する。

普段なら桐原さんの高周波ブレードは効果を失うほどに。

「テメエーの所為で壬生がああ!!」

「ぎやああああ!!」

だが、高周波ブレードは効果を失うことなく、その刃で馬鹿の肘から先を切り取った。そこに来た克人さんは、馬鹿の手を焼いてを焼いて止血した。

馬鹿は泡を吹き、失禁し、失神した。

この後の処理は克人さんとい十文字家がしてくれるそうなので・・・

「達也、深雪、お疲れ様々」

取り合えず二人に挨拶。それから・・・

「えーと、こんばんわ・・・でいいのかな? 千葉さんに西城君」

「エリカでいいわ。こつちも昼夜でいいかしら?」

「その方がむしろありがたいな」

「俺もレオでいいぜ、よろしくな昼夜」

「こちらこそ、よろしく頼む」

何気に仲良くなれて助かった。食堂の時の事があるから何か言われるかと思つたが、さしてはて、これからもにぎやかな学園生活が遅ればいいな。面倒ごととも面白さと釣り合うなら許してやろう。

九校戦編

九校戦編 一節

俺はテスト結果を見る。まあ中間と同じだ。

文句はない。それは達也が努力した結果だからだ。

憤りはある。なければ諦めたことになる。それは魔法師が最もしてはいけないことだ。

「昼夜、流石だね」

「これでもシヨックは感じてるんだぞ」とでも答えれば嫌味だろう。

「まあ、思ったよりはできたからな」

さて、一学期期末テストの結果はこうだ。

総合

一位 四葉昼夜 1—B

二位 司波深雪 1—A

三位 光井ほのか 1—A

四位 北山雫 1—A

五位 十三束鋼 1—B

一位と二位、三位から五位は僅差だ。他には駿が十位、エイミイが十二位。

続いて実技

一位 四葉昼夜 1—B

二位 司波深雪 1—A

三位 北山雫 1—A

四位 森崎駿 1—A

五位 光井ほのか 1—A

鋼、エイミイは惜しくも六位と七位だった。

さて、問題の理論だ。

一位 司波達也 1—E

二位 四葉昼夜 1—B

三位 司波深雪 1—A

四位 吉田幹比古 1—E

五位 光井ほのか 1—A

因みにだが僅差だ。あの、あの問題さえ正解できていればせめて同率一位だったの

に。

他にも、十七位にE組の柴田美月、二十位にエリカの名前もある。

まあ俺はいい。鋼やエイミイも中々の成績を残している。

だがクラスメイトと来たら・・・。

「嘘だろ、ありえないだろ!」「絶対ズルしてやがる」

とまあこんな感じである。普通は実技がある程度できないと魔法理論も理解できない。

だがそれは普通だ。当然例外も生じる。

「お前等さ、ズルとか言ってる暇があれば勉強したらいいじゃないか」

このクラスのほとんどの視線が俺に集まる。

「そうやって優秀な人をけなしたところで何も変わらない。

変わりたい、変えたいならまず努力をしろ。

直接指導の授業の機会がなかった二科生に負けたことは、

けなす前に自分の努力の足りなさを反省しろ。俺を含めてな」

クラスは静まる。これで黙るくらいならそんなこと言うな、っていうのが本音だが。

「でもさ、昼夜は悔しくないの?」

エイミイが尋ねてくる。

「悔しいに決まってる。だから次は負けないように努力するだけだ。

例え中間に続いて理論で二連敗でもな」

ホントに……達也を超えてやるからな。



「さて、九校戦のメンバーだけ……昼夜君と深雪さんは期待してるわよ?」

「無論です」

「私でよければ務めさせていただきます」

ある日の昼休み、俺たちは生徒会室で九校戦の話をしていた。

放課後は風紀委員長引継ぎのための資料作りを達也と任せられている。

「で、今年の本命は一高とは言われてるけど、問題は三高ね」

「三高は今年、十師族の一条将輝選手と十八家の一色愛梨選手を確保しましたからね。

他にも基カキ本ホンコードコードを発見した吉祥寺真紅郎選手もいます」

「と言うことで昼夜君、三人はどの競技に出ると思う?」

俺が呼ばれたのは主にこれが目的だろう。

「まあ将輝はピラース・ブレイクは確定、もう一つはモノリスだと思っています。爆裂はピラースに適してまずし、新人戦が点数半分とは言え、

三高が勝つには新人戦のモノリスは俺が出ることと推測しても出るべきでしょう」「うんうん、それは私と同じね。で、一色さんは?」

「愛梨の『稲妻』^{エクレル}の適正から、クラウドとミラージだと思います」

「ちよつといいかしら、昼夜? 愛梨つて、一色さんよね?」

「因みに今部屋が氷点下ではないのは、俺がこつそり加熱魔法を使っているからだ。」

「ああ、そうだけどき。別に怒ることでもないだろう?」

「あら? そうかしら?」

「十師族の直系つて言うのはいいもんじゃないよ。」

家のしがらみは押し付けられるしね。だから子供の内は名前で呼んでるだけだ。

少しは家のしがらみを忘れられるようにね」

「・・・はあ、そういう事にしておきます」

しておくも何もそういう事なんだけどな。

ついでに深雪も四葉の血を引いてるわけだが、それを言う訳にはいかない。

「カーディナル・ジョージ、吉祥寺真紅郎はスピード・シューティング。」

後は、将輝と組んでモノリスだと思えます」

「それが順当でしょうね。」

で、出来ればその三人を抑えたいのだけど……」

「将輝は俺が相手をします。ピラースは魔法の制限がないですから。」

モノリスもメンバーを選ばせてもらえればカーディナルが出ても勝ってます」

「じゃあ一条君は昼夜君に丸投げするとして、

後は一色さんと吉祥寺君だけど……」

「愛梨はミラージなら深雪が相手でしょうが、クラウドは厳しいですね……。」

俺も稲妻の正体は分かりませんし……加速系統なら可能性があるのは……

Dクラスの里美スバルさんなら可能性ありですね」

生徒のデータを見て選手の算段を立てる。

「で、吉祥寺君は？」

「俺が補助すれば駿が勝つかと。射撃なら駿自体それなりに適性がありますから」

まあ、本線に出る可能性も無きにしても非ずだが。

「じゃあ新人戦の方はそれで十文字君に提案してみるわね」

真由美さんも生徒会長の仕事は忙しいのだろう。

「で、選手はそうとしてしてエンジニアはどうするんですか？」

「あ……」

「どうやら三高対策を考えていたら忘れていたようだ。」

「そうなのよね、うちは実技方面に優秀な人材が偏っちゃてるからね……」

「特に今年の世代は……二年生はあーちゃんや五十里君がいるんだけど……」

五十里……確か刻印魔法の権威だったか。

「私と十文字君がカバーすると言っても限度があるしなあ」

「お前たちは主力選手だろ。自分の試合がおろそかになつては笑えんぞ」

「せめて摩利が自分のCAD位調整できればな……」

「いや……本当に深刻な事態だな」

「どうやら委員長はCADメンテがあまり得意ではないみたいだ。」

「昼夜君はどうなの？」

「自分のを除いて5、6人分くらいはできるかと」

「へえ、5、r……って5、6人!!」

「一応自分のCAD複数を管理して余りあるくらいですからそれくらいは」

「もういつそのこと昼夜君をエンジニアに……」

「血迷うな真由美！ 昼夜君はうちの主力選手だぞ!!」

「どうやら計算高い小悪魔が悩むほどエンジニア問題は深刻らしい。」

「あの、だったら司波君がいんじゃないでしょうか？」

そう声をかけたのは中条先輩。

「深雪さんのCADは司波君が調整しているようだし、

一度見せてもらいましたが、一流メーカーのクラフトマンにも負けず劣らずでした」

「盲点だったわ……！」

「……一年生がエンジニアに指名されるのは前例がないのでは？」

達也は諦め気味に会長たちに聞く。

「なんでも最初は初めてよ」「前例は覆すためにあるんだ」

それから俺に目で助けを呼ぶが……。

（達也、これを引き受けることはお前にメリットがある）

（……それはなんだ？）

（まず、無料で深雪の九校戦を観戦できる。

次に、それを理由にFLTの命令をある程度スルーすることができる。

最後に、深雪のCADを誰にも触れさせない事が出来る）

（……それだけか？）

むむむ、これではまだ押し切れないか？ 最後のは決定的だと思ったのだが。

（なら仕方がない、九校戦後俺が深雪のミラージュ衣装のぬいぐるみを……）

「引き受けましょう」

おい！ まだ最後まで言っていないぞ！ 作ってやるとは一言も・・・

まあ、消されるのは嫌だから作るしかないのだが。

「あ、ああ、そうか・・・？」

委員長も突然の掌返しに困惑している。

このシスコンある限り、深雪は恋愛すら自由にできないのではないだろうか？

さて、教室に戻ってまずはスカウトだ。

「鋼、頼みがある」

「なんだい？」

「お前にモノリスのメンバーを頼みたい」

「え、僕？」

「この学校にお前以外鋼の名前を持つ生徒はいないぞ」

鋼は結構悩んでいる。

「僕の魔法特性は知っているよね？」

モノリスは物理攻撃禁止だから大きすぎる欠点だと思うけど・・・

「安心しろ、その点は考慮している。武器は俺が用意する」

「・・・わかった、引き受けるよ」

因みに駿は簡単に引き受けてくれた。

達也のエンジニア入りも一波乱あったが、

意外にも服部先輩の援護（言葉の刺々しさから必死に認めているのが分かる）があり、
克人さんの決定でエンジニア入りは決まった。

九校戦編 二節

選手やその他諸々の確認が進んでいる昼休み、適当に生徒会室に寄ってみた。そこには課題に取り組む先輩方と達也と深雪がいた。

「あ、昼夜君、折角何で昼夜君のプレアデスも見せてもらえますか?」

状況を推測しよう。今さっき達也にシルバーホーンを渡したということは、恐らく達也が見せたのだろう。それで中条先輩は興奮状態にあるのだろう。

「いいですよ、どうぞ」

「ああ、いいです! 魔法の使い分けがしやすいようになっていて、

ハンマーも押し倒しやすくなる仕組みがあり、グリップも握りやすい!

照準補助システムのマズルだけでは無くフロント、リアサイトも完備!

CADでありながら実銃をモデルに拘ってるのが分かる一品!

そして忘れないユーザビリティへの配慮! 流石シルバー様!」

流石のデバイスオタクだ。しかし自分の作ったCADをここまで褒められるのは照れるな。

「昼夜君はトールス・シルバーってどんな人だと思えます?」

因みに司波君は自分たちと同じ日本人の青少年かもしれないって言っていましたよ」

「そうですね・・・もしかしたらグループネームかもしれませんよ？」

数人でシルバーを名乗っていて、他のメンバーはそれを支えているのかもしれないかもしれません」

実際、シルバー・達也と牛山・トーラスの二人なのだが。

ところで、さつきから深雪の操作ミスの音が所々なっている。

「あ、そうです昼夜君。次の日曜日、一緒にCADを見に行きませんか？」

「！！！！」

何故か驚いたのは会長と委員長、それから深雪だった。

俺は手帳を確認する・・・

「午前中は予定が入ってますが、午後からでしたら問題ないです」

「そうですか！ 出来れば実際にCADも見てみたかったですよ！」

「ちよつと昼夜さん？ あなたは一体何をしているのですか？」

どうでもいいが、部屋が氷点下ではない（ry

「何って、休日の過ごし方を考えているだけだけど？」

「女性と一緒に・・・ですか？」

「まあそうなるな。俺たちの年では珍しい事ではないんじゃないか？」

深雪の笑顔が怖い理由が分からない。この際読者でもいいから教えてくれ。因みに、何故か中条先輩は顔を真っ赤にしている。

「昼夜さん、少し向こうでお話ししましょうか」

何故か俺は首根っこ掴まれて生徒会室から連れ出された。

「・・・要するに、男性と女性が二人きりでいる状況はデート言い、

主に恋愛関係、夫婦関係のもので行われる行為であると。

さらに俺の立場から異性と一緒にいる状況は世間的に見てよくないという事か？」

「そう言う事です」

成程、理解した。だが、深雪はよく達也といたり、俺を誘ってきたりするのだが・・・

「血縁の間では例外です」

と、聞いたら返された。俺と深雪が従姉弟なのは極秘事項なのだが。

「ではこれからは深雪と一緒に外食したりはできなくなるのか」

「え！ それは困ります!!」

「だが、俺たちの関係は極秘事項だろ？」

それに男女が二人きりでいる状況は恋愛関係以上でなければ認められないんだろ？

増してや俺の立場まであるなら完全に不可能だな」

「え……あ……う……」

深雪は戸惑っている。それが普通なんじゃないのだろうか？

「し、仕方ありません。変装さえしていれば問題ないと思います」

「成程、その手があったか。これで中条先輩との約束を果たせる」

「え、ちよ……それは」

「ん、まだ何か問題があったか？」

實際恋愛関係ではないのだが、変装しているなら気にすることでもないだろう。

「うう、分かりました。でも、今度は私とも一緒にどこか行ってください」

「それくらい大丈夫だぞ。」

ところで、変装は男女二人きりは避けた方がいいなら女装の方がいいのか？

深雪は『ナニイツテンダコイツ』と言う顔で俺を見てきた。

だってさ、性別を誤魔化せばそれで終わりの話じゃん。

この後、ちよっぴりの間、濃密な説教された。

「で、中条先輩、日曜日の午後からでいいですか？」

「え？ ふあッ！ 〃〃〃」

中条さんは顔を真っ赤にしている。約束してきたのは先輩だろう。

「あらら？　もしかして昼夜君の好みはあーちゃんみたいな子？」
好み？　しばし思考する。

「・・・いいえ」

「「え？」」

驚いたのはまたしても委員長、会長、中条さんの三人。

中条さんは少し残念そうにしている。

「ただ俺は約束を守るだけです。厄介ごとの解決でもなければ、

口約束であっても俺の決定には四葉や戦略級の名前が付きまとうのですから」

「ほ、本当に昼夜さんって高校生なんですか・・・？」

安心してください、多分達也の方が（常人離れも含め）高校生離れていますから。

「まあそう言う訳で、俺はよっほどの事がないと約束は破れません。立場上」

「なんだか大変なんですね・・・」

深「ハッ、つまり既成事実を作ってしまったえば昼夜はそれを覆せない・・・!!

いや、ダメよ深雪。私は正々堂々昼夜を・・・」





さて、今日は日曜日、中条さんとの約束の日だ。

「では水波、行ってくる」

「確か、FLTに行くのでしたよね？」

「おう、んで午後からは中条先輩とCADを見に行く予定だ」

「・・・待ってください。中条先輩と言うと女性ですよね？」

「ん？ そうだが」

「二人きり・・・ですか？」

「二人きりだが、そもそもあの人のシルバーに関する情熱に、

ついて行けるのは俺くらいだと思う」

本当に底なしのシルバー愛だ。牛山さんもそう言う人がいると知れば喜ぶだろう。

「昼夜様、女性と二人きりでいることを・・・」

「世間一般でデートと言うのだから？ 深雪に教えてもらった」

「もしかしてそう言う関係なのですか？」

それは断じて違う。今まで、恋愛というものを一切したことがないと神に誓おう。

「ウーム、この年の男女が一緒にいることにそこまで理由が必要だろうか？」

「あ、いえ！ そう言う事ではないのですが……」

「あ、もう時間だな。話の途中で悪いが行ってくる」

俺はFLTの本社に向かった。先週、達也の完成させた飛行魔法を試験したらしい。

俺は飛行魔法用のハードを作るアドバイスをくれと頼まれたのだった。

俺はFLTの開発第三課に足を運んだ。

「あ、御子息殿！ どうも」

「おう、暫く出てなかったけど順調みたいだな。」

早速で悪いが牛山主任を呼んでもらえるか？」

御子息殿と言うのは重役である父のコネで出入りしていた達也が御曹司なので、

さらにそれをコネにして入って来たのでじゃあ御子息？ みたいなノリでつけられた。

「あ、御子息殿！ よく来てくれました」

因みにそれで固定されてしまっているのもう否定もしない。

「……ところで御子息殿ってこの前情報が更新された戦略級魔法師と似てませんか？

確か……四葉昼夜、でしたっけ？」

……この名前は白爪中也で通していたのだがもういいだろう。

「俺がその四葉昼夜です」

「はあ．．．え！　じゃあホントに御子息殿だったんですか!？」

どうにも俺の写真が更新された後、俺なのではと騒いでいたらしい。

因みに、世間では本当にその写真が本物か真偽が疑われている。

「まあそうなりますね．．．で、既にある程度デバイスはできているのですか？」

「あ、はい。こちらに」

俺は牛山さんに渡されたハードと、魔法以外のソフトを見る。

「．．．．．はもう少し削れるのでは？」

あと、本体ももう少し軽量化できるのでは．．．」

ほんの細かい部分だが指摘を入れていく。俺にできるのはこれくらいだ。

「やっぱり御子息殿がトールラスになってくれませんか？」

「やめてください。四葉に戦略級にトールラスなんて荷が重すぎます」

達也の名前を隠す他、権利の管理などもあるので未成年の俺より牛山さんが適任だ。

「では俺は食堂使わせてもらって帰りますね」

注意点はできる限り修復した。後は第三課の人たちの仕事だ。

「おや？　普段は結構残りがるのに．．．さては、これですか？」

牛山さんは小指を立てる．．．が。

「なんですかそれは？」

「あれ？　もしかしてこれって古いんですか？」

「どうやら彼女とか彼氏などと言う意味らしい。違うとは答えた。」

さて、約束の時間の一時間前に駅に着いた。

今の時代、長距離移動と言えば基本電車だ。

大きな駅は百年前と変わらず賑わっており、この駅にはCAD専門店もある。

約束の時間の十五分ほど前、中条さんがやってきた。

俺は手を振る。変装と言っても眼鏡をかけているくらいだ。

それで結構俺は雰囲気が変わるらしい。

「あ、昼夜君先に来てたんですね」

「いえ、俺も今さっき来たところですよ」

張り込みで一日見張るのとは比べたらこんな程度待ったうちに入らない。

それから、どうやら中条さんは小悪魔たちを連れてきてしまったらしい。

かく言う俺も護衛を連れてきてしまったらしいが。

「では行きますか」

「はい！」

俺たちはCAD専門店に足を運んだ。専門店と言うだけあって種類は豊富だ。

「わあ、昼夜君見てくださいよ！」

マクシミリアンのシューティングモデル！ それからローゼンのFクラスですよ！」

マクシミリアンにローゼンと言うと今CAD業界でトップ抑えている二社だ。

中でも中条さんの言った二つは上級者向きだが慣れれば最高性能と言われている。

「ああ、でもやっぱりシルバー様がいいです！」

シルバーアーティラリーにシルバーフロンティア！

シルバーシリーズはやっぱりほかの追隨を許しません！」

つい先程までそのトラスに会っていたのだがな。

「アーティラリーとフロンティアは比較的に女性に人気がありますからね。」

小型で携帯しやすい点も含めて女性用使用にしているのかもしれないね。」

「昼夜君もそう思います!!」ならきつとそうですよ！」

「ごめんなさい、俺答え提示した形になりました。」

「ですがシルバーシリーズでもホーンは矢張り値段も格別ですね。」

シルバーがフルチューンナップしてループ・キャストに最適化しただけではありません」

「ですよね！」でも、昼夜君のプレアデスも同じくらい値段張ってますよ？」

リボルバー式は正直需要が少ない。」

弾丸型ストレージも改良を重ねて一系統七種を記録できるようにはしたけどな。

完全な特化型に速度は負ける。汎用型に魔法保持数は劣り、系統制限もある。

だが、俺みたいなデリケートな魔法師には意外と好まれてるようだ。

そしてその中でトップの売り上げを誇っているのがプレアデスだ。

他者のはと言うと愛国心からとコレクターくらいしか買わない惨状だ。

まあ「あれは実は俺がチューンナップしてるんですよ」なんて言っても信じんだろう。

「大体見て回りましたね」

「そうですね．．．あ、カフェにでも行きませんか？

実は少し教えてもらいたいところがあつて．．．」

「先輩の方が年上なんですけど．．．俺にわかる範囲なら」

とまあ、カフェに入った。

取り合えず飲み物とケーキでも頼んで中条さんの疑問を聞いた。

「えーと、汎用的飛行魔法がなぜ実現できないか．．．ですか？」

「はい、重力に逆らう魔法は現代魔法初期から確立されていますよね。

加速、加重系統が得意な魔法師は物凄い高跳びや素飛びを成功させた人もいます。

なのになぜ、定式化された自由に空を飛ぶ魔法が実現されないのでしょうか？」

うん、中条さんと会うまで取り組んでいた奴だ。

「終了条件が満たされるまで魔法は作用し続けます。」

他の作用を加えるならそれを上回る干渉力が必要です。

飛行中に加速、減速などをするなら魔法を重ね掛けする必要があつて、

重ねる度干渉力は強くなり、すぐに魔法師の切り替えられる数をオーバーしてしま
う。

・・・では納得できないという事ですか？」

中条さんは頷く。

「それならば終了条件の鍵の魔法式を用意してそれで終了させれば出来るのではと」

「魔法式は魔法式に干渉できません。 Eidos を書き換えるだけですから。」

一つのEidossに複数の魔法式を投射しても干渉力が強いものが発動して、

干渉力の弱い魔法を消去しているわけではありません。

魔法式を完全消去できる対抗魔法はありますが、

超高難度の魔法で実用的に使える魔法師は存在しません」

達也以外な・・・。

「成程、つまり魔法完全消去する方法がなければ同出力で同じ魔法を発動できない。

だから次々に必要干渉力が上がって行って限界に達するということですね？」

「満点です。また、領域干渉も飽く迄干渉力を持つ魔法で消去はできませんから、あとから領域干渉しても逆にしらない時より手間が増えるだけです」

中条さんは真面目に端末にメモを取っている。

「実用できる形にするならば、短時間で魔法を切り替えを繰り返す方法ですね。

始めから持続時間を例えば一秒として、一秒ごとに魔法を切り替えるようにすれば、細かい切り替えなのでかなりの体力を消費しますが可能だとは思っています」

「ありがとうございます！　これで疑問が解けました」

そこからは共通の話題（真由美さんの陰口）で盛り上がった。

さて、そろそろ日も暮れるころ。先輩も女子なのだから親が心配するだろう。

さりげなく時間を話題に出して買えるように促した。そこで俺は思い出す。

俺はバックから一つのペンダントを出す。六芒星をかたどったものだ。

「これ、俺からのプレゼントです。試作品ですけど」

「え？　これは・・・？」

「ある意味魔法補助具ですね。CADとは違いますが。

六芒星には『霊体と肉体の結合』という意味もあります。

これはその意味を強めたものです。先輩の『梓弓』が強化されるみたいなのです。

精神干涉系魔法は肉体から情報次元の精神、霊体に繋がりますからね」

「それを一人で作っただんですか!?!」

これでもいろいろ刻印術式や象徴シンボルについて調べて作った。

「作ったはいいいんですが俺は精神干涉が碌に使えませんから」

「はわわ／＼／＼．．．ありがとうございます! 大切にしますね!」

これにて今日の予定は終了した．．．のだが、家に帰ると何故か水波に拗ねられた。

翌日は会長と委員長に生暖かい視線を浴びせられ、

生徒会室が氷点下になるのを防ぐのに必死だった。

九校戦編 三節

発足式も終わり、もうすぐ九校戦の舞台である富士演習場に向かう日が来る頃。

『やあ、白爪特尉』

「お久しぶりです、風間少佐。本日はどのような要件で？」

電話をかけてきた相手は一〇一旅団、独立魔装大隊隊長の風間さん。

『事務連絡はほとんどないんだが、君の家のセキュリティは固すぎでは？』

お陰で藤林君に手伝ってもらうまでだったんだが』

うちのセキュリティをどう破ったかと思えば藤林少尉のハッキングか。

「うちは色々見られてまずいものがありますからね・・・家の関係で」

『我が隊としても君の詳細な情報が外に出るのは避けたいから理にはなっている』

「で、態々ここまでしたというものは何かしらの忠告でしょうか？」

『ああ、君たちの行く富士演習所だが、該当エリアに不穏な動きがある』

「九校戦絡みの厄介ごとですか・・・」

富士で不穏な動きなどこの時期は九校戦しか考えられない。

「国際犯罪シンジケートですか？」

『察しがいいな。こちらの調べでは香港系の『無頭竜』と思われる』

「情報、ありがとうございます」

『富士では会えるかもしれん』

「楽しみにしています」

それで回線は途切れた。と、思ったら。

『昼夜、こんばんわ』

「お母様、こんばんわ」

誰かと思えばお母様か。こちらは一体何が飛んでくる。

『九校戦に出場するようね？』

「はい。で、実力はいかほど出してよろしいのですか？」

『そうね、最後の切り札と『常闇』さえ見せなければそれでいいわ』

それはほぼ自由に戦っていいという意味と同義なのだが。

『それから、富士にて国際犯罪シンジケートが動いているわ』

「無頭竜ですか？」

『四葉が掴んでいる限りはね。風間さんにも教えてもらったかしら？』

「肯定です」

『・・・さて、言う事はこれくらいね』

ならばと俺はすぐに電話を切ろうとしたのだが・・・

『お話ししましょう、昼夜♡』

いう前にきれなかった。いった後じや復讐が怖くて夜も眠れない。

因みにお話しても夜はほとんど眠れないだろう。諦めよう。

結果、気づけば翌日の昼になっていた。葉山さんがお母様をメてくれて助かった。



8 / 1、今日は会場に向かう日だ。その朝なのだが・・・。

「ナルはともかく何故ホロまで？」

俺のペット兼諜報員がまるで連れて行けというかのように窓の外にいる。

昨日のうちに今日からは来なくていいと言ったはずなのだが・・・。

「取り合えず餌やらないとな・・・」

焦るな、いつも通りの行動をすれば落ち着くものだ。

それから、用意していた大きめの鳥籠を用意する。準備はしておくものだ。

「ほい、入れ入れ」

この二羽はものすごく賢い。下手したらオウムみたいに話すんじゃないかって位に。今回はちゃんと話を聞いてくれて、鳥籠の中に入ってくれた。

「水波、後からこいつら連れて行って・・・」

食事の時に言おうとしたら、二羽が鳴きだした。

「うーん、朝と言い一体なんだ？」

「もしかしたら何か危険が近づいていたりするのでは？」

確かに動物は危機察知能力が非常に高いというが・・・。

「そう言えば四月、雫たちの危険を教えてくださいましたのはナルだったな」

他にも色々助けてもらったりしてくれている。

「しょうがない、俺が連れていくか」

「私は後から参りますので」

水波も、魔法の使い方を学ぶいい機会なので向こうで合流する予定だ。

水波は既にかなり魔法の使い方を習得しているのだが。

他にも濡さんも九校戦の常連なので向こうで会えるかもしれない。

「よし、じゃあ行ってくる」

食事も済ませ、準備はすでに済んでいる。俺は集合場所に向かった。

「やあ昼夜、おはよ．．．って、なんだい？ その鳥籠は？」
始めに会ったのは鋼だった。

「俺のペット、こつちが鳥のナルでこつちがミミズクのホロ」

最近知ったが、ホロはフクロウとの雑種だ。遺伝子まで見てないから分らなかった。
「普段は片方だけで頭にのせるんだが二羽じやそうもいかない」

「その前にミミズクはともかく鳥ってペットにするような動物だっけ？」

「意外と飼ってる人っているんだぞ。賢いからある程度命令聞くし」

鋼はかなり意外という顔をする。他のメンバーにもそう言う顔をされた。

「私たちを助けてくれた時、昼夜を呼んでくれたのがそのナルってこと？」

雫の質問にナルは鳴いて返事する。

「賢いんだね」

「ナルもホロも俺の指示は結構こなしてくれるぞ．．．そうだな」

俺はナルを籠から出し、まずはナルの足にカメラを取り付け指示を出す。

「行け！」

そう言うとなルは大通りの方に飛んでいき、暫くして戻ってきた。

足のカメラから、情報を確認する。そこには．．．

「達也と深雪が来てるな．．．よくやった、ナル」

撫でてやると結構喜ぶ。ていうか達也、うちのナルに睨みをいれるな。

「「すいん．．．」」

ホロも同じ事が出来る．．．が、夜行性なので寝させておいてやろう。

やって来ると達也にナルについて尋ねられた。ちよつと見ただけじゃないか。

で、どうにも真由美さんが家の用事で急遽来るのが遅れているようだ。

「で、達也が外で待機してるんだが．．．」

バス内は少し肌寒いくらいになっている。深雪の魔法が無意識に発動している。

え？ いつもは俺が止めてるって？ なんだか面倒くさいんだよ。

とは言えこれで選手が風邪をひいても困るし、俺も寒くなつて来たし温めよう。

「深雪、達也は凄いやな。出欠確認なんて正直どうでもいい仕事を、

文句の一つも言わずにこなしてるんだからな。

こういうことを手を抜かず当たり前前にあり遂げるのはそう簡単なことではないからな」

室内の寒冷化はやみ、俺は少し室内を温める。

「そうよね、流石お兄様よね」

どうでもいいけど、俺と達也の立場が逆だと吹雪が吹いていた気がする。

後ろから皆のグッジョブと言う声が聞こえていた。

途中、服部さんを小悪魔が遊んだり、

五十里先輩の彼女、千代田さんが委員長を困らせたりとあったが他は特に問題はな
い。

強いて言うなら……

「四葉君、何か趣味はあるの?」「四葉君、九校戦が終わったら一緒に遊ばない?」

「司波さん、御趣味は何ですか?」「司波さん、会場でお茶しませんか?」

俺と深雪が主に一年、それに交じって二年三年の異性に話しかけられてるくらいだ
な。

それを見て委員長が俺たちを克人さんと委員長の間に隔離した。

そんな時……ナルとホロが俺を見て鳴きだした。ホロ至つては急に起きてだ。

俺は視界を広げた……。

「市原先輩ブレーキを! 克人さん前方に障壁! 深雪鎮火の準備をしておけ!」

俺の声にただ事じゃないじゃないと判断した三人は俺の指示を実行した。

前方から飛んできたのは宙返りして炎上している大型車だった。

「吹っ飛べ!」「消えろ!」「止まって!」

数人が大型車に対して魔法を発動する。

「チツ、邪魔な魔法は俺が!」

術式解体を使い、その魔法式を吹き飛ばす。

車の炎は消化され、前方の障壁に受け止められた。

「……ふう、一件落着だな。委員長、俺は車を見えます」

「あ、ああ、わかった」

「昼夜、お供するわ」

「深雪はバスにいろ、追撃があってもまだ安全だ」

「ツ！……わかりました」

俺は大型車に向かう。達也も後続の作業車両から出てきた。

「達也、悪いがここを少し頼む」

「？ わかった」

俺は崖を重力の向きを操作して走る。

そこにいたのは双眼鏡をもってフードを被った人間だった。

「？ 稍等！ 我不想打架！」

「悪い、何言ってるかわからない」

俺はすぐさまこいつを『ファイグスト・スター恒星』で消し去った。

俺は崖から（無論、魔法を使って）飛び降りる。

「昼夜、殺ったか？」

「達也なら見ればわかるだろ？ 大丈夫、死体も装備も残ってないよ」

「・・・ならいいが」

「んで、俺は直接視たが・・・魔法を使ってたな」

達也は頷く。魔法は最低限の想子で発動すれば兆候はほとんどない。

俺は想子光にも多感だが、このレベルは普通ほとんど気づかないだろう。

「使い捨てには惜し過ぎるね。俺なら毎日三食おやつ付きで雇ってやるのに・・・」

「どちらにせよたかが高校生の行事でここまでとなるとはな・・・」

「この時、互いに達也（昼夜）のトラブル体質か・・・と思っていたそうだ。

「取り合えず車をどけたいけど・・・」

「警察が来るまでそう言う訳にはいかないだろうな・・・」

家の名前でごり押すのも考えたが、それはお母様の事を考えると癪なのでやめた。

俺たちはそれぞれバスに戻る。

「昼夜！ 大丈夫!!」

「深雪、俺はただ外に出てただけだぞ」

「そうじゃなくて・・・殺したでしょう？」

「こんな程度、問題の内には入らないって。俺を誰だと思ってるんだ？」

相手もこんなこと公にしたくないだろうしな。

「昼夜？ 大丈夫だった？」

鋼にエイミー、雫にほのか、他にも駿や委員長もやってきた。

「なくに、大したことないただの事故だよ」

どうにも俺の作り笑いの効果は多少あつたらしく、少しは皆落ち着いた。

九校戦編 四節

俺たちを乗せたバスはやつとのことので会場についた。

「は、面倒ごととも休み休みならいいんだけどな……」

作品には書かれてないが、実は結構な頻度で面倒ごとに会っている。

前回の血の匂い云々もあながち嘘じゃない。

実際、数日前も皆を攫う計画をしていた奴らを皆殺しにした。

どうにも、無頭竜が裏から手を回して俺を抑える駒にしようとしたらしい。

「昼夜、まるでいつも面倒ごとで巻き込まれてるみたいだね」

「鋼、言っておくが四葉にいと毎日が面倒ごとのフィーバーだぞ」

特に今はお母様が撒いたモンペ菌のせいで俺たちの世代はな。

「ん？ あれは……？」

「あ、昼夜君！」

「見覚えがあると思ったらエリカか」

「しばらくぶりだね、元気にしてた？」

雫たちとは深雪と一緒によく会っていたそうだが、

俺は最近、休み時間は家からの連絡、放課後は競技の練習などと忙しく会ってない。何故か最近俺に回る仕事の量が多いんだ。葉山さんもお母様を走らせてるのだから。どうにも、俺が本当に表に出たので諸外国が嗅ぎまわってるようだ。矢張りナルとホロの反応は皆と同じだった……。

「美月も……向こうにいるのはレオと……あと一人は？」

美月は時間が空いてる日に達也たちと一緒にいたので何度かあっている。

もう一人は……顔を見たことがあるような気がする。古式を調べた時……。その少年がこつちにやってくる。その間に達也たちも合流した。

美月のファッシュョンについて現代のドレスコード云々と言う話をしていた。

「柴田さん、チェックイン混んでたから荷物持ってきたよ」

「エリカ、荷物くらい自分で持てよな」

「……思い出した、古式の精霊魔法、古式の言い方では神祇魔法か？」

その名家、吉田家の神童、吉田幹比古か」

「ん？ おう、昼夜か」

「しばらくぶりだな、レオ。んで、そつちの君は期末試験理論四位の吉田君？」

「ええと、四葉昼夜君だよな？ その通りだよ、呼ぶなら幹比古でお願い」

「幹比古だな、分かった。俺も昼夜でいい」

エリカたちはその後ホテルに向かっていった。部屋は家の名前でごり押ししたらしい。後は水波とも会った。深雪と達也以外とは顔を合わせるのは初めてだったので挨拶も。



さて、懇親会の時間になった。要するにただの顔合わせだが……。

「はく……あんまりこう言うパーティーは嫌いなんだよな」

何が好きでこれから牙を向け合う相手の顔を見ないといけないんだ……。

俺は鋼と駿と行動している。取り巻きがいる方が近寄られにくいと思っただからだ。

実際俺には誰も話かけてこない。将輝の姿はまだ見てないけれどどうなのだろうか？

エリカや幹比古はウエイトレス及びウエイターをやっていた。

家の名前だけでごり押しできるのかとは思っていたが、そう言う事か。

徐々に人満ちていく。他校の生徒も集まって来たみたいだ。

そう言えば深雪はどうだろう？ あの美貌なら人も集まると……

「さぞかし名家のご出身とお見受けするわ。私は三高一年の一色愛梨。

こっちは同じく十七夜葉と四十九院沓子よ」

ありやりや、いきなり愛梨に噛みつかれてるな……。

「第一高校一年、司波深雪です」

「……あら、一般の方でしたか。

名のあるお方と思つて声をおかけしましたが、勘違いでしたか。

「ごめんなさい、試合頑張ってくださいね」

「おーい、愛梨〜」

俺の声を聴いて、愛梨は少しばりとする。

「……四葉君、なにかしら?」

周りからざわめきが起きる。どうにもあれが本当に、とか聞こえる。

「先に忠告しておいてやるよ。そっちと同じくこっちも一年は粒ぞろいだ。

俺は勿論だが、後ろの鋼と駿、その深雪、その後ろにいる雫とほのか。

数字付きは俺と鋼だけだが実力は十分匹敵する」

「……あなたが言うからには嘘ではなさそうね」

「それから……何度も言うが昼夜にしてくれ、四葉は肩がつかれる……」

愛梨はどこか呆然とする。

「そこから言う事じゃないでしょう・・・？」

「俺にとつては重要なんだよ。家の名前が出るとお母様の事を思い出す・・・」

「あく・・・確かにあの人は魔王の以前にね・・・」

愛梨も何度かあつているので思うところはあつたらしい。

「んじやあ、宣戦布告はこれくらいで充分だろ？ 俺ももうちよつと回りたいし失礼」

煽るのはある程度成功しただろう。さて、次のお相手は・・・

「やあやあ、真紅の王子様。おやおや、我が校のレディに執着しているのですか？」

「・・・ああ」

「・・・えーつと、君がカーディナル・ジョージ？ 君の相棒どうしたよ？」

普段なら突っ込んでくるところだぞ。真紅の王子様は毎回言ってるし。

「君が四葉昼夜君かな？ 将輝はさつき一高の女子に目を向けて動かなくね・・・」

俺は暫く考え・・・そして放棄する。

「目を覚ませ！」

俺は将輝をピンタする。くそ・・・ここでも身長差が・・・。

「お〜い、目覚めたか〜？」

「うう・・・つて、なぜ昼夜がここに！」

「なぜつて・・・今懇親会だからだろ」

しかし将輝の奴、ガチでその女子、つまるところだが深雪に御執着のようだ。

「はあ、深雪に手を出すなら半殺しになる覚悟位はしておいた方がいいぞ」

「? どういう・・・もしかしてお前も?!」

「俺じゃねーぞ。深雪を守ることのスペシャリストがいるからな」

「もしかして既に彼氏が・・・」

「安心しろ、そう言う目的で近づく奴を排除するのがそいつの仕事だ」

将輝はますますわからないといった顔をしている。

「要するに、スーパーシスコンの兄がいる。」

その力を解放した時の戦力は俺もやられかねない」

「・・・冗談か?」

将輝と俺は実際に戦ったことはないが魔法力、干渉力は多分俺が少し上くらいだろう。

手数及びバリエーションに関しては俺が遥かに上回るだろうが。

「その話はこれくらいにして、出るのはピラースブレイクとモノリスか?」

「・・・ああ、そうだが」

「成程・・・今その二競技での一高の優勝がほぼ確定した。」

将輝、俺に勝ちたいならあつと驚くような奇策を用意してみろ。

じゃないと俺に勝つことはできないぞ」

この場での勝利宣言、なぜなら……

「将輝の爆裂では俺に勝てないぞ」

確実に爆裂を防ぐ手段が俺にはあるからだ。

そして、モノリスも対抗手段はすでに用意している。

将輝は元々奇襲に弱い性格だ。俺は奇襲を迷わない。将輝からは相性は最悪だろう。

「では、競技で闘うのを楽しみにしてるよ」

俺は将輝に手を振って離れていく。

「……昼夜、正直モノリスの肩の荷が重いんだが……」

「駿、先に言っておくが将輝が、ジョージが奇策を考えても俺を出し抜けないさ」

その自信はどこから……と言う眼差しを向けられたが。

「決まっている、この三人なら誰にも負けない。そう思っ二人を選んだんだ」

直接魔法に対して絶対の防御を誇る鋼、

テクニクと速度に秀でた実戦経験のある駿、

自分で言うのもなんだが、眼による偵察、攻撃力、防御力と隙の無い俺、

これだけ揃えて勝てない敵はほとんどいないだろう。

「いけないな……どうにも俺は思ってる以上に楽しみにしているみたいだ」

鋼曰く、この時の俺はすさまじく獐猛な笑みを浮かべていたようだ。

暫くすると会場の光が消える。どうやら閣下のお出ましのようだ。

(ん？ 何か違和感を感じる・・・精神干渉か？)

壇上にスポットライトが当たる。

そこにいるのはパーティードレスに身を包み、金髪を揺らす女性だった。

「ねえ、昼夜？ 九島閣下って女装趣味でもあるの・・・？」

「さあ？ 九島閣下ともなれば年齢も性別も操れるんじゃない？」

適当に返して少し眼ではなく、感覚を広げる。

俺はその網にスポットライトとは真逆に俺たちとは雰囲気の違いを感知した。

俺は光波振動系の魔法でその場所を照らした。そこにいたのは案の定・・・

「おっと・・・見つかってしまったか」

老師、最巧、トリックスター、いまだに他国に畏れられる九島閣下のお出ましだ。

「まずは、悪ふざけに付き合わせたことを謝罪する」

閣下の目は俺を見ていた。術式消失で隠したはずなんだがなあ・・・

「今のはちよつとした余興、魔法と言うより手品の類だ。

だが、手品のネタに気づいたのは私の見たところ六人だけだった」

俺、達也、真由美さん、克人さんは間違いないだろう。

特殊な眼を持つ三人と、魔法的な空間把握の力の高い克人さんだ。

後の二人は分からない。摩利さんはそちらに強いとは思えないし、将輝や愛梨も同じ。

深雪も魔法感覚の強い触覚を備えているが、勘はないので怪しいところ。

まあそんなことはどうでもいいだろう。どちらにしろ少なすぎる。

「つまりもし私が君たちの毆殺を目論むテロリストで爆弾やガスを仕掛けたとしても、

それを阻むため行動できたのは六人だけと言う事だ」

閣下の言葉に会場は静寂に覆われる。

「魔法を学ぶ若人諸君。

魔法とは手段であって目的ではない。

それを思い出してほしくて私はこのような悪戯を仕掛けた。

私が今用いた魔法は規模こそ大きくても低ランクの魔法だ。

私が言いたいのは、使い方を誤った大魔法は使い方を工夫した小魔法に劣るのだ。

若人諸君、私は諸君の工夫を楽しみにしている」

会場は拍手喝采。ほぼ全員が手を打ち鳴らす。

しかし、ランク主義の現代魔法社会に異議を唱えることだ。

魔法は使い方次第。魔法を道具と割り切った考え方。

成程、これが『老師』か・・・。

最近思うが、案外高校生と言うのも退屈しないかもしれない。

九校戦編 五節

「あゝ、面倒だった……」

「昼夜、第一声がそれかい？」

俺たち……正確には俺と鋼と駿は部屋に戻って休憩中だ。

因みに俺たちがモノリスのチームなので三人での部屋割になっている。

「だって、姓の『四葉』二文字だけでじろじろ見られるんだぞ？」

あこがれる奴も駿とか駿とかいるかもしれないがいいもんじゃないぞ」

駿が何故例が俺なんだ！ と突っ込んでいたが華麗にスルーする。

「と言うか宣戦布告はいいとして俺たちまで巻き込む……」

カーディナルジョージ相手じゃそう簡単には勝てないだろ……？」

「何言ってる？ お前なら少し余裕を持つくらい十分で勝てる。」

いくらカーディナルが策を積んでもお前の経験は計算外だ」

策を立てるには相手の力量を図る必要がある。

速さ、力、耐久などは調べる事ができるが、経験は同じ時間でも個人差が大きい。

増してや多くの人が経験の詰む速度は変則的だ。

そして俺も駿が使いやすいようにCADをお膳立てしたんだ。

将輝のブレイン、訓練だけで詰める経験も少くないが本番に対する耐性はこちらが上だろう。

「約束しよう。俺たち三人で出られる競技は全部優勝総なめだ」

二人はやれやれと言った感じに頷いた。なんだかんだで信用はしてくれているようだ。

「つと・・・悪い、ちよつと夜風に当たってくる」

理由はない。本当に何となく外に出たかっただけだ。俺は部屋を後にする。

「うくん・・・部屋に残ってもよかったけど出たくなつたつてことは・・・」

俺は視界を広げてみる。

「・・・生ごみは出荷できないんだよな。ここだと生ごみの回収は何曜日だ？」

「昼夜君、君は一体何を考えてるの？」

「幹比古、気づいているか？ 鮮度拔群の肉塊に」

声をかけてきたのは幹比古だった。

「・・・まあ精霊たちが教えてくれたからね」

精霊って便利だな。俺も使えるようになれるか？

「じゃあ俺が補助するから気絶でも何でもさせさせてくれ」

「君がやった方が早いと思うんだけど・・・？」

「面倒くさい」

そこまで堂々とよく言えるという表情を浮かべられたが了承してくれた。

「仕掛けるぞ。3・・・2・・・1・・・今だ！」

幹比古は札を発動する・・・現代魔法で言うところの放出系のスパークが近いか。

だが、札に仕組まれた魔法に余分な箇所が多い。敵はすでにこちら気づき銃を向けている。

俺は障壁を展開した。『常闇』のために多くの障壁魔法を調べたのは結構役に立つ。

弾丸は防がれ、幹比古の魔法は賊の意識を刈り取った。

「・・・ふう、昼夜君助かったよ。僕一人じゃ確実にやられていた」

「いや、幹比古の魔法も最適だ。殺さずに意識を一撃で刈り取る。これ以上ない戦果だ」

「でも君の補助がなければ僕は・・・」

「何言っている。重要なのは結果だ。お前が賊を全員倒した。」

それが今の結果だ。過ぎたことに仮定を立てても意味がない」

「でも・・・」

なんだこいつは？ まさかとは思おうが・・・。

「幹比古、お前相手の数や練度関係なく勝つ事を基準になんてしてないよな」
幹比古は凶星を突かれてか黙り込む。

「はあ、達也、そこにいるんだろ？」

俺は物陰で隠れている従兄を呼ぶ。

「達也は幹比古をどう思う？」

「阿呆だ」

綺麗なままでな即答。これまた幹比古はショックを受けている。

「幹比古、一つ言っておくが俺だって相手の数や練度関係なく勝つことはできない。

戦略級と言われても体はただの高校生だし体力や魔法力にも限界がある。

俺だってそう言う理想は抱くがやることやるたびその結果とは程遠いもんだ」

時には任務を果たせず逃げ帰ったこともあるしな。

「それから、幹比古が感じている悩みも案外どうにかなるかもしれないぞ」

「何を分かったようなことを言ってるんだい・・・」

「魔法の発動速度、相手が銃を握りしめた時お前の顔は焦りに飲まれていた。

あれは自分の魔法発動速度に嫌気でも指してたみたいだが・・・

お前の魔法展開速度自体は遅くない。むしろ平均水準より高い」

俺は達也に説明を譲る。

「問題があるのは起動式だ。魔法が自分の思うようにいかないのはそのせいだ」
「なんでそんなことが分かるんだよッ！」

幹比古は叫んでいた。まあしょうがない。

俺たちがしているのは吉田家が改良してきた術式の否定、強いては努力の否定だから。

「・・・達也、お前が幹比古に合わせてCADと魔法を用意してくれ。

幹比古、明日からの夜、ここの訓練所で相手になる。この期間中ならいつでもな」

そう言った俺の頭に二つの飛行物体が迫る。

「つと・・・ナルにホロか？　なんでこんなところに？」

まあばれないように鳥籠を隠して外に置いておいたが・・・。

「？　ねえ、昼夜君？　今気づいたけどその二羽つて式神？」

「は？　一体どういうことだ？」

「二人とも、話のところ悪いが先にこいつらをしかるべきところに届けるぞ」

「ああ、そうだった。生ごみの廃棄所はどこだったっけ・・・？」

いや、死んでないからと幹比古は突っ込んでくれた。ある程度は整理できたようだ。

「んで、ナルとホロが式神？」

肉塊をしかるべき場所に連れて行った後、俺は幹比古と話していた。

「うん、古式魔法の中には使役状態の精霊を鳥獣に入れて使役する術があるんだけど、精霊化は分から無いけどその二羽に何かしらの精神体が憑依してる・・・と思う」
やけにあいまいだな？ 一体どういうことだ。

「でもそれをするには術の行使が必要で、君がやってないのに憑くとは思えなくて」
「う〜ん・・・幹比古って一応精霊と会話できるんだよね？」

それで聞くこととかできないのか？」
「精霊って言うのは自然そのものに宿る者なんだ。」

僕らは声を聞くという体を取っているけど、実際はただ想子波を合わせているだけ。
与えられる波から何となくこうだと感じ取っているだけなんだ」

ふむふむ、つまり言葉で会話をしているわけじゃないと。

「それに、僕の一族は昔山奥の村で雨ごいなどをしていた。
だから僕も得意な精霊な属性は水や風なんだ。」

でも多分その精霊は二羽とも火、一応雨だから蒸発の過程で火属性も入るけど、
僕が見た限り、得意じゃない僕が合わせられるほど甘い霊格じゃないと思う」

「そんなのが憑いてるのか・・・」

適当に拾った烏とミミズクだぞ・・・。

「……幹比古、精霊との交信は基本想子の波を合わせるんだよな」

「うん……やってみるなら僕が簡易だけど祭壇を組み立てるけど?」

折角なので頼むとして、属性が合わないとはいえその道の神童が無理と言ったものだ。

だめで元々、成功したなら万々歳つてところでやっていくか。

で、本当に簡易な祭壇だと思った。

贅は普段から餌あげてるなら必要ないだろうと、

水は空気中から餌あがるべく水蒸気のみを集めたかなり純粋な水。

何処からか持ってきたろうそくを数本立てて、

神社などでよく見るひらひらを備えた感じだった。

「実際これって効果はあるのか?」

「少なくとも、大規模な精霊を呼ぶには環境も合わせないと難しいから」

精霊魔法使いも苦労しているんだな……。

「じゃあダメもとでやってみますか」

俺はまず眼を合わせる。始めはナルだ。

眼に入る可視光線に霊子光を加える。

『光学の眼』の性質は光媒体の遠視だけではない。

眼に入る光を完全に制御する。霊子はデフォルトではoffなのだが、今回は交信する相手を見た方がよさそうだ。

因みに、赤外線などもonにすると視界がぐちゃぐちゃになる。

この眼を通して移るナルには、確かに何かが憑いている。

いや、ナルそのものが何かに変わろうとしているように見える。

俺は波を合わせてみる。ジャミングやアクティベートより複雑に感じる。

かれこれ2〜30分ほど粘ったか。何かが自分に流れ込んでくるのを感じた。

それを一気に手繰り寄せる。波が完全に適合した。

《お待ちしておりました、我が主よ》

そう聞こえた。幹比古は感じるだけで精霊と事を交わすことはできないと言ったはず。

《昼夜様、わたくしがナルでございます。

そして人の言う精霊としては、八咫鳥の霊魂を持っております》

八咫鳥、神武天皇を大和まで導いた神鳥、導きの神であり太陽の化身。

三本足で描かれることが多いが古事記や日本書紀にその記述は無い。

名前の由来は咫が親指から中指までの長さ約18cm、その八倍144cmとなる。

が、八はつまり八百万と同じくものすごく等の意味で、この場合は大きいという意味。頭の中から分かる限りの知識をひねり出す。

《流石我が主、御博識にございます。しかし、それらはすべて伝説でしかありません。

元の八咫鳥はただの鳥、その羽ばたきを導きと解釈した人がおりました。

その鳥はまつられ、霊格を持つようになり転生している次第です》

まあ神話などそんなものだろう。政治利用するためのものなのだから。

《しかし、その靈魂も時と共に弱まり消滅しかけておりました。

私たち精霊、独立情報体は物理次元におけるダメージを負いませんが、

情報次元においては情報の波に飲まれるまで。

何時までもその波にあらがうことはかないません》

成程、魔法だけではなく情報は些細なことで変化する。

元が精霊ならそれが当然な環境だろうが偶然霊体となった場合はどうだろう。

恐らく変わりゆく情報の波にあらがい続けるために物理次元の依り代が必須だ。

そうして何度も転生していると。もみ消されないように。

《私が新たな依り代としてこのナルに付いたのは生まれる前でした。

そして、依り代を持っても抗いきれなくなっただけだと思つたときに現れたのがあなたです。

あなたの気は特別です。私どものような場合の霊は誰かの想像で霊となります。

あなたはその霊を生み出せる気の持ち主。想像して創造できるもの。要するに、その俺の気に触れて再度安定した状態に戻ったわけか。

《そしてその気を、『覇気』。ほんの一部が持てる王者たるの気質》

そういや八雲さんも僕の気がどうか言ってたな。

《その気質は味方を鼓舞し、敵がひれ伏す。

他の気質を押し返し切り開く唯一無二の気質》

そんなヤバいもんだったのか……。まあ結果としてナルを守れたならそれでいい。

《私こそ、この命を助けていただいた恩は忘れません。

今後とも力にならせていただきます》

そこで交信は切れた。

九校戦編 六節

ナルとの交信が切れた後、ホロともやろうとしたが幹比古に止められた。どうにも精霊と接触するのはかなりの体力を消耗するらしい。

実際俺もかなり疲れた。ホロは明日まで持ち越しだな。

しかし・・・ただのペットと思っていたら霊鳥が憑いているとは・・・。

世の中不思議なことがあるもんだ。

俺は漸くの事で部屋に戻った。

「おかえり、昼夜」

「よーお、いったい二人そろって何してるんだ？」

駿と鋼は部屋の防音性能が高いのにわざわざ固まって話をしていたようだ。

「アハハ・・・ちよつとね・・・」

「丁度良い、お前って許嫁とかいるのか？」

「許嫁？　なんでそんな話が？」

どうやら恋バナとやらを二人でしていたようで、そこで俺の話になっていたそうさ。

「許嫁はいないな。彼女もいないし」

「ほほう……じゃあ好きな人はいるのか？」

「好き……ねえ……」

少しばかり考える。恋愛として好きな相手……。

「……いないな」

「は？ てつきり昼夜なら恋した経験ぐらいあると思つたが……？」

「そもそも話だ。恋したところで何になる？」

俺は十師族四葉に名を連ね、戦略級魔法を操る魔法師。

どうせ国とか民衆はとつと結婚して次の世代を作れとでもいうんだろう」

「……なんかすまん」

恋に理想を抱いてはいけない。想像すれば絶望する。

恋という感覚に気づいていた時からわかつていたことだ。

「ま、そんなこと考えてたら誰かを好きになることなんてできやしないしな」

俺はナルとの交信でも疲れていたもので、とつと寝ることにした。

たまには一日中とか眠つてみたいものだ。



目を覚めると色あせた空間。この部屋は昔自分が暮らしていた部屋。

そしてそこにある椅子に座り本を読んでいる、顔の見えない少し長め髪の少女。自分は……この少女を知っている。

なにか、凄いい切なことを忘れてる。

「あら、また来たのね」

これは夢だろう。そして俺は何度もこの夢を見た。

僅かに記憶にかかる霧が消えていく。

「これで何度目かしら？ あなたは何度も私を忘れていたけど……」

「……あなたは？」

「あら？ いつもより幾分か態度が柔らかかね？」

少女に感じるのには理由のわからない同族嫌悪、そして懐かしさ。

「私は四葉。昼夜^{ひるよ}。四葉が目指した完全調整体1号。

いや、彼女を含めれば2号ね。まあ、彼女は半分偶然の産物だけど」

四葉……ヒルヨ？ そんな名前どんな記録にも残っていない。

「とは言えあなたは私を覚えていないでしょうね……」

私の力を羨み私の魂を自分の中に内包したなんて思い出したくもないでしょうし」俺が、この少女の魂を内包した？　だとして一体どうやって・・・？

「それと、私は別にあなたを嫌ってないわ。同族嫌悪はしちゃうけどね」何故俺は彼女に同族嫌悪を感じる？　それは彼女も同じ？

「私は自分と言う檻から抜け出せた。」

結局あなたと言う檻の中だけどここも悪くないわ」

彼女は自分を完全調整体と呼んだ。そしていま彼女の魂は俺の中に？

次々に湧き上がる疑問符。だが、世界は止まることを許さない。

「まあ、気になったのならお母様に聞きなさいな」

彼女の周りに白い細かい粒子が舞う。

「チツ・・・！」

考えるのは後でいい。彼女は俺を攻撃するつもりだろう・・・。

白い粒子は机の上に集まり・・・クッキーが入ったバケツトが現れた。

「はっ。」

「昼夜も疲れているでしょうし、話くらいでよければ聞くわよ」

「・・・」

なんか緊張して損をした。と言うか夢の中のはずだけど何故クッキー？

そこから何を話したは憶えていない。
人の夢は・・・儚く消える。



目が覚めた。夢の記憶はうつすらと残っている。

「四葉ヒルヨ・・・彼女は一体・・・？」

名前を憶えていても、その存在を思い出すことが出来ない。

なにか、自分と大きなつながりがあったはずなのに・・・。

夢の通りであるならば、彼女は俺の中にいるわけだ。

「考えても仕方ない。今日は九校戦初日、確か会長のスピードシューティングに、委員長のパトルボードが見ものか・・・」

あのお二人ならそう簡単には負けないだろう。

食事も済ませてスピードシューティング会場に向かう。

会場はすでに満席。まあ、一番が会長だ。黄色い声援も飛んでいる。

因みに今は水波と二人きりだ。

「別に俺と一緒に行動しなくたっていいんだぞ」

「いえ、私は昼夜様のガーディアンですから」

「とは言え、席もほとんど空いてないな」

さつきも言ったが文字通り満席だ。空いてる席なんて・・・。

「もしかして昼夜お兄様ですか？」

後ろから声をかけてきたのは・・・と言うかそう呼ぶのは一人しかいない。

「泉美に香澄か。真由美さんの競技を見に来たのか？」

「それもそうですが、せっかくなので昼夜お兄様の競技も見れたらなと」

「そりゃあ負けるわけにはいかないし楽しませてやらないとな」

モノリスはともかくピラーズは飽きさせはしないだろう。

あと、さつきまで少し上機嫌だった水波が少し不服そうだ。

「でも席はいっぱいだぞ」

「大丈夫、お父さんがわざわざ指定席用意してくれたから」

指定席なんかはお金を払う必要があるので一般客は使わない。

「実は丁度二席余っていますので一緒にどうですか？」

正直願ってもない提案だ。立ち見も悪くないが座れるにこしたことはない。

「じゃあ遠慮なく使わせてもらおうよ」

指定席もほとんど埋まっていた。この人気は流石エルフエン・スナイパーだ。そして本番が始まった。

真由美さんが使うのは『魔弾の射手』と『マルチスコープ』。

「スピードシューティングは予選と本戦で作戦を使い分ける選手が多い。

予選は一人だから広範囲を巻き込む魔法を使えるが、本戦は敵のクレーも混じっている。

その中、真由美さんは予選本戦ともに魔弾の射手で突破するので有名だ」

生成されたドライアイス弾が空を飛ぶクレーを一つ残らず撃ち抜いていく。

結果はパーフェクト。本戦出場確定だろう。

「凄いですね・・・」

「真由美さんの先天的スキル『マルチスコープ』があるとはいえ、

クレーを一つ残らず破壊するのは簡単なことじゃない。

あんな悪戯好きで性格でもちやんと一高の三巨頭なんだよな」

泉美と香澄が頷く。正確に関してはあの小悪魔はどうにもならない。

「では次は渡辺様のバトルボードですね。行きますよ昼夜様」

「え、あ、ちよつ・・・ひっばるな・・・」

何故か水波は俺の腕をつかんで引っ張って行く。

水波に連れられてバトルボードの会場についた。

「まあ当然ボクたちもついて行くけどね」

「腕を握って・・・羨ましい・・・」

まあ、せつかくなんだからみんなで見たらいいだろう。

「いやあ・・・しかし委員長堂々と立ってるな」

「私からすれば昼夜お兄様も何時も堂々としてますよ」

「私（ボク）もそう思います（うな）」

なんだかさつきから三人とも妙に張り合ってる気がする・・・。

何か仲が悪く様なことでもあったのか？

「三人って何か接点ってあったのか？」

「私に通っている学校は香澄様、泉美様と同じ学校です」

「え、マジで？」

それは聞いてなかったぞ・・・。別に言わなければならぬことではないけど。

「学校では仲良くやってるのか？」

「はい、私は素性が割れてるので変に気になんかなくていいですし」

「私も（昼夜お兄様の事とか）よく聞きますし」

「ボクたちでよくお昼ごはん食べたりにしているよね」

「そうだったのか……。学校で問題がないとかは聞いていたが、ちゃんとやってるんだな。」

「なんだか安心したな」

「え？」

「いや、水波が学校でもちゃんと暮らせてて安心した」

「そ、そうですか／＼／」

「泉美と香澄もありがとうな」

「い、いえ……。私もよく（話）してくださいますし／＼／」

「むう……。こう言うところがずるいよね／＼／」

何がずるいのだろうか？

そう思った矢先、スタートのホイッスルが鳴った。

「始まったか……」

始めに行動起こしたのは四高、後方の水面を爆発させ波を作った。

妨害としてはよくある手だが、自分も動けなくなるようではな……。

「早くも委員長と七高の一騎打ちか」

この波を制したのは委員長と海の七高。

「これは・・・どうなのでしょう？」

泉美はどちらが有利かまいちと言った所だ。

「身体技術では委員長、魔法技術では七高の選手が余裕があると思う。」

委員長は移動魔法と硬化魔法を使っているが七高は移動魔法のみだな」

「硬化魔法？」

疑問符を頭の上に浮かべる三人。

「じゃあヒントだ。硬化魔法の基本は？」

「えーと・・・物質の相対位置の固定だよね・・・あー」

どうやら三人とも気づいたようだ。

「委員長はボートと自分をオブジェクトを形作るパーツとして固定している。」

それだけじゃないな・・・さっきの坂の逆流ではベクトル反転の加速魔法。

それに加えて振動魔法で波の影響を少なくしている。

これで本当にあの人が二十八家どころか百家でもなく、

有名な古式や外国の家のものでもないんだよな・・・」

他校がうじうじ言うのも分からんでもない。

七高は委員長の後ろについてコーナーに入る。

「七高が仕掛けた！」

声が上がると、七高は大きく余裕を取った委員長とは逆に内側に入る。

「……いや、オーバースピードだ」

七高は速度を制御できていない。このままでは壁に、最悪委員長にぶつかる。

(……上手く出来すぎている?)

何となくそう思い、眼を向ける。魔法発動の予兆は委員長たち以外は見えない。

委員長は七高の選手を受け止めるための魔法を発動していた。

しかし、魔法発動の予兆が委員長の足元に発生する。

魔法の効果は水面の下降。そして俺はそれに対する打つ手がない。

委員長の魔法はその変化で不発に終わり、七高の選手にぶつかりコース壁にぶつかる。

俺はすぐさま硬度をクッションレベルにした障壁魔法を発生させる。

そして俺自身も疑似瞬間移動でその場に向かう。

周りからは悲鳴が上がる。だがそんなものは今はどうでもいい。

「係員！ 救急車と救急箱を早く！」

係員はすぐに俺の指示に従って連絡および救急箱を持ってきた。

委員長たちは気絶している。真由美さんたちも駆けつけて応急処置を施す。

俺たちにできるのはそこまで。後は救急隊員に任せるしかない。

九校戦編 七節

俺は病院の外で考え事をしていた。

真由美さんたちに来るように言われたがどうもその気にはならなかった。

「人のいないところからの魔法・・・遠隔用のデバイス？」

いや、そうだとしてもあんなに突発的ではないはず・・・。

となると考えられる線は・・・」

すると病院から真由美さんたちが出てくる。

「あ、昼夜君。律儀に待ってたのね」

「いえ・・・で、委員長の容態は？」

「一週間は安静、ミラージは欠場よ」

・・・それはそれで受け止めるしかない。だがそれ以上の問題がある。

「昼夜、気負い過ぎるな。今回の事はお前の責任ではない」

「分かっています克人さん」

だが、違和感に気づいていたのは俺だけで、行動できたのも俺だけだ。

そして、推測通りなら俺は阻止できた。

しかし昨日幹比古に言ったように最高の結果を後から求めても仕方ない。俺の頭は氷の世に冷え切っていて、感情は炎のように熱くなっていた。

委員長の努力を侮辱するような妨害に怒りを、

怒りに身を任せないための冷静さを。

いつもの事だ。

俺は自分の欲望が強い方だと思う。

だから、それらを押さえつけるために理性をひたすらに鍛えた。

四葉としても自分の感情を隠すために、理性と言う仮面をかぶり続ける。

「昼夜君、今回の事で何か心当たりはあるの?」

「少なくとも手口に関しては」

「じゃあ後でうちの会議室に来てくれる? 原因を一刻も早くつかみたいから」

会議室はホテルに各学校ごとに設けられている。

取り敢えずはまずはホテルに戻ろう。

考えたりしている間に今日の競技は終わっている。



俺はホテル戻り、会議の時間までに今後の対策を考える。

「取り合えず、こんなことをするからには何かが動いているはず。」

金か権力かはわからないがそれに加えて春と同じく国力の低下も目的のはずだ。

無頭竜・・・香港の組織は比較的大亜の影響を受けていないはず・・・。

湾岸は多くの国の人が来るから犯罪シンジケートは放置できるはずがない。

なのに香港に隠れ家を用意できるということは国から鼻屑されてるといふ事だ。

もしくは別口で支援を受けている可能性があるが・・・」

考えているだけでも時間は過ぎていく。会議の時間は差し迫っていた。

ひとまずは会議室に向かおう。今考えても有効な手は現時点ではないだろう。

「昼夜君と達也君、出来れば二人の意見を聞かせて欲しいわ」

会議室には生徒会のメンバーと克人さんに加え、五十里先輩と千代田先輩、

それから何故か達也と深雪、幹比古と美月までいた。

「ではまず俺から。前置きはともかくとして精霊魔法が使われたと俺は睨んでいます」

そこから、違和感に気づいて魔法発動の予兆等を確認していたことを話す。

「自分も同じ意見です。水面の変化は不自然なものでした。」

そこでこの二人を呼びました。吉田は精霊魔法を得意とします。

また、柴田は霊子光に対して非常に鋭敏な感受性を有しています」

それ二人を呼んできたよ。

「幹比古、専門家として聞きたい。数時間単位で特定の条件に従って水面を陥没させる魔法は精霊魔法によって可能か？」

「可能だよ」

幹比古の返答は即答で肯定であつた。

「今回の場合なら第二レースの時間を第一条件、

水面上に人間が接近することを第二条件にして、

波や渦を生み出すように指示を出せば式神でも可能だろう」

幹比古自身も半月の期間があれば会場に忍び込まなくても可能だそうだ。

「でもそんな何時間も前に仕掛けた魔法じゃ大した効果は出ないよ。

精々侵入者を驚かすのが関の山だと思う」

「あの状況がなければな」

俺の一言に空気がピリピリしたものに変わる。

「そこで美月、先輩の事故の時S B魔法の兆候は見れなかったか？」

「眼鏡をかけていたから……ごめんなさい」

「いや、そうだな。俺がうっかりしていた。昼夜はどうだ？」

「俺の目は指定した光を見る事ができるが・・・精霊魔法は予想外だ。」

霊子光は完全に切っていた」

先日見たばかりと言うのに失念していたのは明らかミスだ。

「ただ、七高選手の暴走は明らかに不自然です。」

あんなミスをするような選手が九校戦の代表に選ばれるとは思えません。

恐らく・・・CADに細工をされていたのだと思います」

先程の精霊魔法があるなら、このタイミングほど最適などころはない。

「そして、細工したのは間違いなく大会委員に忍び込んだ作業員かです。」

恐らく大会委員に引き渡されたときに細工をされたのでしよう」

達也も俺の意見に同意する。

会議は苦しい空気でお開きになった。

俺は部屋に戻らず、幹比古を連れてここの演習場を貸してもらおう。

昨日言っていた相手になってやると言うやつだ。

結果は・・・まあ、俺の圧勝だった。

「だけど魔法の発動は早くなっただんじやないか？」

「まだまだだよ・・・全盛期ならもつと早かった・・・」

この一辺倒。俺から見たら画期的なくらいに早くなってるのだが・・・
「少なくとも昨日よりは格段に早い。でも少し早さに戸惑いがある。

まずは今の感覚に慣れる。それからもつと早くなるように努力しろ」

今の早さで充分一科で充分通用するのだが望むなら止めるのは無粋だ。

「じゃあ悪いがまた簡易神殿設置してもらえるか？」

「うん・・・」

ネガティブに考えても仕方ないんだがなあ・・・。

それから準備してもらって、今日はホロに宿る精霊を活性化させる。

ナルでやった分慣れは多少あるがどうだろうか・・・。



《む、来ましたか》

「どうやらホロも話す事ができる口らしい。」

《ああ、まあ私たちのような場合は特にですね》

どうにも普通の精霊はべらべら話したりしないらしい。

《それはそうですね。主様は特に靈子にも敏感。べらべら話してては大層うるさいかと》

そう言えば靈子に対しても一応比較的に敏感ではあったがな……。

《私もが對話可能なのはその生誕過程にあります。

自然そのものに根付く純精霊に対し、私もは多くの人にみられ誕生した。

主様は言っておりましたね。見るものは見られている。

多くのものに見られることは多くのものを見返しているのです》

つまり、多くの人間に信仰された＝見られたということとは、

見てくれたもの生活を見ていた。故に意志を理解するに至ったという事か？

《ご慧眼、恐れ入ります。私は精霊としての格は天日鷲命。アメノヒラシノミコト

まあ、司るのは一応豊漁や商工業の繁栄、開拓開運や殖産などですが……》

それらは押し付けられたもの……なんだっけか？

《まあそう言う事ですな。それでも多くの人を見て得た知識で主様の力になります》

……ところだ、日本はほとんど無宗教だが今でもお前たちは多くの人を見ているのか？

《それは間違いですぞ。この国の民が信仰を一切していないなどあり得ますまい》

ますますわからないな・・・。

《ふむ、確かに意識は低いかもしれませんが主様は年明けにどこに行きますか？》

そりや神社・・・成程、そう言うことか。

《お気づきなられた模様ですな》

要するに、信仰が文化として根付いているってことだな。

つまり俺たちは無意識にお前たちを見ていて、そこからお前たちが見ているわけだ。

《その通りでございます。この国は多くの宗教が争う事がない。

見事に調和され、それらの信仰を文化として取り入れた。

故に我らも常に多くのものを見て知識を蓄える事が出来るのです》

日本の文化にそんな力があつたとは・・・。

正直、それによる眼と脳がついてくれたのは本当にうれしい誤算だ。

《私こそ、主様と出会えたのは天恵。

純精霊と違い生物の本能も持ち合わせている私どもは死を恐れます。

故に主様のお陰で生き延びる事が出来たのは歓喜の至り》

覇気・・・だっけか？ そんなもの持つてるとは思わなかったが。

《少なくとも持つているだけ悪いことは起きますまい。

歴史上、持つていたのは聖徳太子や中大兄皇子、

源義経や足利尊氏、それから織田信長に武田信玄と上杉謙信と戦国時代は多かったですな》

環境が荒れると覇気持ちが増えるのか？

《私が見たのはこれだけです、聞けば伊達政宗も持っていたそうですし、

江戸幕府が成立してからは末期まで現れませんでしたな》

西郷隆盛や坂本龍馬なんか？

《まあそうですね。さらに後だと東郷平八郎や東条英機なども持っていました。

大東亜戦争が終わってからは日本には現れませんでしたし》

じゃあそこから予想されるのは少なくともこれから一波乱起きるってわけだ。

《主様にはかたじけないですがそうなるかと。覇気持ちは時代の移り変わりに現れます。》

主様も時代の荒波に飲まれるやもしれません。》

時代の荒波か・・・そんなものに飲まれるのは勘弁したいが。

だが少なくとも俺は生まれた時はこんな力なかったと思うが？

《覇気と言うのは正直何時発覚するかわかりませぬ。

生来より持っていることもあれば成長の過程で得ることもあるまさに天恵。

ただ、人生の転機ともなる場で覇気に目覚めることが多いと言われております》

外国なんかだとあれか？ ジャンヌ・ダルクが神の声を聴いたとか？

《それが一番わかりやすいでしょう。無論、そこまでわかりやすいとは限りませぬが》
 覇気持ちも楽じゃないんだな・・・。

《まあ主様は主様の道を進めばよいかと。》

私もはいいつ何時も主様の傍にありますが、困れば頼ってくださいませ》



「あ、昼夜君。で、このホロは何の精霊がついてたの？」

「天日鷲命だだよ。しかも結構な博識だった・・・」

「うん、この二日で僕の精霊に対する知識が大きく変わったんだけど・・・」

まあそりゃ死んだら魂は普通のこらなからな・・・。

増してや鳥獣の類が精霊になるとはふつう思わないだろう。

？ なんて俺は死んだら魂が残らないと知ってる？ 魂を見たことがないのに？

叔母様が何か言っていたか？ ・・・まあ考えても仕方ないか。

「幹比古、今日はもう寝るぞ」

俺はもう疲れてのでシャワーを浴びた後とつとと寝た。

九校戦編 八節

あの後には問題は起きずに、新人戦の期間に突入した。

いや、問題がない訳ではない。先輩方の予測より点が取れてないと平和なものだが。そして、ある程度裏の事情も分かった。

今回の九校戦でかなりの金額での賭けが行われている。

そして、三高に妙に規則的に票が集まっていた。

数は一高が多いが、三高はまるでほとんどの名義から同数票入れられていた。まるで何かが統率を取っているように。

かけるの事態が犯罪だがそこは言っても仕方ない。

もう問題は起こさない。そう決めたから。

それから、深雪が渡辺先輩に代わって本戦のミラージュに出ることになった。

深雪の実力なら十分問題ないだろう。優勝も夢じゃない。

俺も自分の作業に戻るとしよう。

「昼夜、CADの調整終わった？」

俺が使わせてもらっている作業車両に雫とエイミイと駿が来た。

この三人は今日のスピード・シューティングに出場する。

「最終調整もばっちりだ。練習通りにやれば予選敗退は確実にないな」

これに対し、女子二人は自信满满と、駿は少し呆れ気味に返事をした。

「それから、アドバイスだ。」

もしもスコアが伸び悩んで焦ったら射撃を止めても深呼吸をしろ」

焦って次々とはずれるのでは本末転倒だ。

一度落ち着く時間は競技なのだから十分にある。

まあ間違いなくこのメンバーは本戦に出場するだろう。

まず始めは雫だ。とは言え予選に一番向いてるのは彼女だから問題ない。

俺はライフル形状のCADを雫に渡す。

「で、トップバッターだけど心配は？」

「ない。出来るなら他のCADの調整もお願いたいくらい」

「その感想は嬉しい限りだね・・・」

「ここで俺は抱いていた疑問を一つ聞くことにした。」

「なんで雫は達也じゃなくて俺に調整を任せただ？」

ハードに制限がある今回なら、達也に任せた方がお得だ。達也が俺よりもソフトに向いていることは以前話したはずだ。

「特に深い理由はないけど・・・単純にお願ひしたかったから・・・？」

何となく誤魔化してるのが分かるが、誤魔化すということは聞かれたくはないだろう。

何より・・・

「それは引き受けて正解だ。達也が大変そうだとかならがつかりだったし。

信用して任せてくれたなら信用分の働きは約束する」

この考えが気に入った。自分が思った通りに動いたなら大きな後悔はないだろう。

「じゃあ、絶対にパーフェクトを取ってくる。そして優勝する」

「いいね、そう言うの大好きだ」

雫はこれに何故か顔を赤くしたが、すぐに落ち着きを取り戻した。

「クレールがフィールドに入った瞬間破裂した!」 「次々にクレールが・・・!」

「空中に機雷でも仕掛けているのか!」

起きてる現象は観衆の言う通りだ。

得点が入るエリアに入ったクレールは次々に碎けていく。

そして最後のクレールが打ち砕かれ……。

「文字通り、百発百中か……」

本戦ではこうはいかないが、これは自信につながる。

雫の性格なら自信過剰になることはないだろうからまさしく最高の結果だ。雫はステージから戻ってきた。

「とりあえず予選突破おめでとう。最高の滑り出しだ」

そしてこれは全体的に追い風につながるだろう。

そこにはほのかたちがやってくる。

「お疲れ様！　すごかったよ雫！」

「ありがとう。みんな昼夜のお陰だよ」

「なーに、俺は雫が戦いやすいように道具を整えただけ。

パーフェクトを取れたのは雫の実力到他ならないよ」

「昼夜は練習の時からそう言うね」

実際、他の選手に同じ芸当ができるかと言うと難しいだろう。

あれ……振動魔法『アクティブ・エアーマイン能動空中機雷』は雫に合わせて作った魔法。

他の選手がホイホイ出せる魔法じゃない。

正確には発動できても速度や範囲、破壊力は雫に劣る形になるだろう。

「さっきの魔法はインデックスへの登録申請が来るかもって」

「え！ インデックスって魔法大全の？！ 魔法史に名が残っちゃうレベルじゃん！！」

あー、そういうやこういう魔法を見たことがなかったな。

いくつかの魔法式をうまく組み合わせる無駄を省いたくらいだが……。

「まあまだ申請段階だ。今から気にしても仕方ない。

それより、次の選手が少し気になるが……」

丁度、次の準備が整って新たな選手が入場している。

視線を集めているのは三高の十七夜選手。

雫たちと同じく前評判はかなり高い。

競技が始まった。始めのクレーが振動魔法によって割られる。

その破片が移動魔法によってさらに別のクレーを破壊する。

そして破壊されたクレーの破片が再び次のクレーを破壊する。

「こりや凄いな……秒に満たない時間で破片とクレー把握と認識を行ってる。

スーパーコンピューター並み……いや、下手したらそれ以上だぞ……」

「これもインデックス登録並みじゃないかって声が上がってるんですけど……」

「あーいやいや、これは無理」

皆の頭上に疑問符が上がる。

「この魔法『アリス・マテック・チエイン数学的連鎖』はほとんど固有魔法だ。

十七夜選手の空間把握能力あつての魔法だから汎用化するのは無理だろうな」
特有の能力を突き詰めた結果、金沢魔法理学研究所のやり方だけか？

結果はパーフェクト。まあ評判通りと言った所か。

「まあ、だからと言って雫たちが負けるとはみじんも思つてないが・・・

つと、エイミイ、準備しに行くぞ」

エイミイを連れて控室に行く。

「んで、雫にも聞いたが心配事は？」

そう言いつつ、シヨットガン形状のCADを渡す。

「流石にあの十七夜選手の見た後だと緊張するよ・・・」

「なに、比べる必要はない。そもそもあの選手とエイミイじゃテリトリ場が違う。

エイミイは自分の得意な分野で闘えばいい。本戦でもそれは変わらない」

「緊張してるのにもう本戦の話するんだね・・・」

「競技始まる前はもつと自信満々だったのになあ・・・」

まあ深呼吸すれば大丈夫だ。今は目の前のことに集中するんだぞ」

「すう・・・はあー・・・よし！」

深呼吸した後のエイミーの顔はいつも通りだった。

「じゃあ、行つてくる!」

「おう、頑張れよ!」

エイミーに与えた魔法は『インベンシブル・ショットガン散弾型不可視の弾丸』

魔法の効果は文字通り、カーディナル・ジョージの不可視の弾丸をアレンジした。

エイミーは狩猟の経験もあるらしいので、ショットガンのようにしたのは正解だった。

結果はパーフェクトには一步届かなかったもの、充分本戦圏内だ。

「お疲れさん、これなら問題ない。ちゃんと落ち着いてたし最高の結果だ」

「いや、案外やれるもんだね」

「まあ、エイミーのショットガンへの慣れも大きいけどな」

他の選手じゃこうはいかない。経験も立派な実力だ。

何より、不可視の弾丸を使うことである程度向こうのブレインを動揺させただろう。

これは後々大きく響いてくれると思う。

「じゃあ次の駿の奴を見ないといけないんでな。

雫たちと合流してほのかの競技を見たらどうだ?」

「そうさせてもらうね、ありがとう」

俺は駿に拳銃型CADを渡す。

「お前なら分かかってると思うが、お前のルーティンはクイックドロウだ。

クレールが出たらまず行って、撃ちつくしたらもう一回しろ」

「分かっている」

正直、こいつが一番言う事がない。

実戦経験済みで自分の癖も分かっている。逆に何を言えという。

魔法自体は空気弾エアブリッドだが、コントロール技術は高いので、

先に五弾ほど作りそれを撃っていく、装填式空気弾エアブリッド・リロードと言うシンプルなものだ。

要するに撃ってから作るのじゃルーティンをする余裕はあまりない。

先に弾を全弾を作るからルーティンする余裕が生まれる。

些細な変化だが、少なくともこいつはこの方が余裕があった。

「落ちるはずがないが、しっかりな」

「了解だ」

結果、まさかの全弾命中。パーフェクト。

クレールはランダムに発射されるが、そのタイミングも偶然リロードする余裕があった。

「俺が一番信じられない・・・」

本人もこの様子である。

「まあ、運にも助けられたが運も実力の内。対して・・・」

同じタイミングだった吉祥寺真紅郎は予想よりもスコアが低い。

「動揺するなどは言わないが動揺は隠さないとな」

「それ同じ意味じゃ・・・？」

まあそれでも本戦に出るのは十分なスコアなのだが。

「まあ、うまくいったようで何よりだ。あと、自意識過剰になるなよ？」

「分かっている。春はそれで痛い目見たからな・・・」

これなら問題ない。少なくとも駿は優勝もおかしくないだろう。

女子の方も十分に優勝争いができる。

「これは本当にもらったかもな」

九校戦編 九節

まあ予想通り、俺が用意したCADを使った三人は余裕で本選進出。

しかし三人ともちゃんどやってくれるから、こつちも作り甲斐があるものだ。

エイミイと駿はともかく、雫は準々決勝からCADが変わるので最終調整に向かう途中。

「第一高校の北山さん？」

後ろから声をかけてきたのは、三高の十七夜選手と愛梨。

「ちよつと待つて、なんで四葉君がいるのかしら？」

「雫のエンジニアが俺だから」

愛梨はパンフレットを確認する。そこには『司波達也』とは書かれているが。

「頼まれたから引き受けた。ただ、多分その名前の奴でも同じ結果だぞ」

下手しい今より結果がいいかもしれん……。

「愛梨、悪いけど少し黙つてて。三高の十七夜です。

予選を拝見しました。大変いい腕をされてますね。

あなたと準決勝で対戦するのが楽しみです」

そう、雫と十七夜選手が当たるのは準決勝。次はあくまで準々決勝だ。「そっか、次の試合は当然勝つ自信があるってことなんだね。」

「わかった、私も準決勝楽しみにしてる」

ここで次勝てるかもわからないなど言うなら少し小言を言うつもりだったが、しつかりと返したので言う必要はないだろう。

「さあ雫、準決勝までの準備をしに行くか」

雫がその気なら、エンジニアである俺もそう答えるべきだろう。

結果として互いにトラブルはなく、準決勝は矢張り雫と十七夜選手だ。



『矢張り準決勝注目カードはこの二人！』

予選では新魔法『アクティブ・エアーマイン』で会場を興奮の渦に巻き込んだクールビューティー！

準決勝でも圧倒的魔法力でライバルを制圧するか!?

第一高校、北山雫選手!!

なんと本大会パーフェクトを二度記録！

その正確無比な起動予測に並ぶものはない！

連鎖を奏でる『アリスマティック・チエイン』は準決勝でも炸裂するのか!!

第三高校、十七夜栞選手!!

早くもこの二人が激突します！ 両選手の活躍をお楽しみください!』

「どうやら相当注目されてるみたいだな」

雫に声をかけてみるが・・・

「大丈夫、正直勝つ未来しか見えない」

「それは頼もしいな」

「どうやら緊張はしていないようだ。エイミイの相手は一高の選手なのでもう大丈夫と
のこと。」

「序盤は多少リードを許すくらいでもいい。重要なのは・・・」

「後半戦、だね」

「分かっているなら言う事はないな。じゃ、絶対勝って来いよ!」

「うん」

雫がステージに上がる。

そしてまた、十七夜選手も上がっている。

ホイッスルの音とともに、新人戦女子 スピードシューティング準決勝が始まった。

『準決勝と同じく十七夜選手の赤いクレアの起動が逸らされている!』

『北山選手の必勝パターンだ!』

『いや違う! 軌道を逸らされたのにも関わらず白いクレアの連鎖が続いている!!』

『あの北山選手の戦術を覆したぞ!』『なんて高度な戦いだ!』

現在、ほんのわずかに十七夜選手が優勢ではある。

「準々決勝を一回見ただけで合わせてきたか。

雫に使わせた魔法は中心に高出力振動魔法の機雷を置き、

収束魔法により白色のクレアをその中に、敵色のクレアを外に追い出す仕組み。

収束魔法の効力を分けて起動式を数種類用意した。

そのどれもに対応できる構築できるのは流石の空間把握能力だが・・・」

映像を見た時、ほんの一瞬だったが、雫が確かに笑っていた。

そして逆に、十七夜選手は疲労と何か毒づくような表情を浮かべていた。

「気づいたな。予想通りだ。

あれを特化型だと思ひ込んで作戦を立ててきたな。

だが、残念だがあれは照準付き汎用型CAD、ハードは俺の分野だ。

それ用のソフトを組むのは少々手こずったが、あれ位なら大したことはない」

三高 side

「馬鹿な！ 照準付き汎用型CADなんて聞いたことがないぞ！」

「いや、去年の夏にデュツセンドルフで発表された新技術だよ」

その場にいた全員が、吉祥寺の方を向く。

「ただ、デュツセンドルフで公開された試作機は実戦に耐えるレベルじゃないんだ。

動作は鈍いし精度は低い、本当に『ただ繋げた』の技術的意味しかない作品なんだ」

「待てよ！ だが現に北山選手が使ってるのは速度も精度も特化型と同等だぞ！

しかもちゃんと系統の異なる起動式を処理するなんて……そんな実験あったのかよ

！！」

「……なあ一色、まさかとは思うが……」

そこで声を上げたのは、新人男子のエースである一条だった。

「ええ……彼女のCAD四葉君が用意したものよ……」

「CADをいじるのは趣味とか言ってたが……これは趣味の範囲じゃないぞ……」

「私もここまでとは思ってなかったわ……」

だが同時、一色は昼夜の言っていたことを思い出す。

『司波達也でも同じ結果だと思うぞ』

その言葉通りなら……いや、昼夜はくだらない嘘はつかないと一色と一条は知っている。

現に、エイミイではないもう一人の選手滝川と言う選手は達也が担当しており、魔法力は他の選手と変わらないが、危なげない勝利を手に行っている。

つまり、一高は化け物エンジニアが二人いるという事だ。

「と言うことは、先ずその司波達也がエンジニアを務める競技。

それから何処かわからない四葉昼夜が引き受けている選手の競技は、デバイスで2，3世代分分のハンデを負っていると考えるべきだ……！」

雫 side

(昼夜はカードディナル・ジョージに対抗するにはこれくらいしないとって言ってたけど、まさかこんなものを用意しているなんて思いもしなかったな)

しかし、それが恐ろしいほどに手に馴染む。

まるで、自分のためにだけ用意したかのように。

(……いや、それが当然か。昼夜なら使用者に一番合う道具を用意するだろうし) 現にエイミイと駿も文句を言うどころか絶賛だったので、

その評価は間違っていないだろう。

雫の相手である十七夜は、連鎖は続いているが所々ミスがあり、それをふさぎこんでいる状態だ。

(対策されてる可能性もあるかもって言ってたけど・・・対策されてないなら)

そしてついに、十七夜の連鎖が止まってしまった。

「私の、勝ち」

逆に雫は機雷の範囲に入ったクレールを逃すことなく、最後まで問題なく事が運ぶ。

『試合終了！ 北山選手、決勝進出!!』



昼夜 side

「雫、お疲れ様」

壇上から戻ってきた雫に労いの言葉を贈る。

「ん、昼夜、ありがとう」

「まあ雫なら俺がCAD用意しなくても勝ったと思うが」

「うんうん、昼夜が用意してくれたCADだから頑張れた」

「それは嬉しいことを言ってくれてくれるが・・・達也でも同じ判断だったと思うしな」
再び雫は首を横に振る。

「昼夜が用意してくれたことに意味がある」

褒められるのも悪くはないのだが・・・。

「つと、悪いが駿のところに行ってくる。相手はカーディナルジョージだし」

「うん、行ってらっしゃい」

昼夜はまだ気づいていない。気づかないようにしているのかもしれない。

気づいてしまえば・・・ヒルヨでもない鏡像ホンモの自分を見てしまうからか？



「駿、準備は万端か？」

「勿論だ」

「女子の方はトップスリー独占みたいだし、お前だけでも表彰台に乗れよ」

雫たちが三人とも四位以上確定に対して、

男子はそもそも決勝トーナメントに上がったのが駿だけだ。

「？ 十七夜選手の実力なら滝沢さんは危ないんじゃないのか？」

「まあ実力を出せればの話だな。心が折れかけてるんじゃないや、滝沢さんでも勝てる」

あの精神状態ならそれこそどんな相手にも勝つことはできないだろう。

「まあなんだ、俺が用意してやったCADを使って負けるなどと言う結果を残すなよ」
「なんかすげープレッシャーだが・・・まあ負ける気はしてないが」

「最初と、余裕があるなら一つ回せよ。それで大きくジョージの力を削げる」

決勝で使うのは同じ拳銃型ではあるが、俺のよく使うリボルバー式のものだ。

「分かってる、じゃあ行ってくるぞ」

駿はステージに立つ。カーディナル・ジョージも同じ。

ただ、駿のCADを見て、少し悩んだような顔をした。

解説の後、あつという間に始まった。

その瞬間、先に仕掛けたのは駿だ。

発動した魔法は光波振動系魔法。効果は部分的な暗転。

クレーを見て左に駿、右にジョージで並んでいる。

隠したのは右側、クレーは壊す色の選手側からよく出る。

つまり、ジョージの方から敵色が出やすいのだが、

隠してしまえばそこから出るまでの軌道を読む事が出来ない。始めの奇襲に焦り、ジョージは反応が遅れる。

その後すぐに領域干渉ではがされるが、では上場。

それでも大きな差が出来ていないのは流石だろう。

一応ルールだが、相手への直接の妨害を禁ずるとはあるが、

直接妨害しているわけではないのでこのルールでの失格にはならない。

そもそも同じ範囲に魔法を発動する以上、干渉力による妨害は避けられない。

互いのスコアが70近くまで来たところ、駿がハンマーを倒した。

そして同じく振動系魔法が発動する。

効果はジョージのクレーの色である、赤のカーテンを発生させる。

効果は靦面で、ジョージのクレーは奥に設置した赤い幕と被り非常に見えづらい。

逆に、駿の撃ち落とす白のクレーはよく目立つ。

そして幕は、撃ち落としていい範囲のかなり奥に設置されている。

これにより、幕を消すには奥に意識を向けなければならぬ。

駿の場合、距離に関する感覚が非常に敏感なので貼るのは簡単だった。

恐らく、家業で敵との位置関係に関する感覚を鍛えられたのだろう。

結果として、ジョージは幕を壊す余裕がなく、不利な状態での戦闘を余儀なくされた。

スコアは、93 vs 81で森崎の勝利だった。

九校戦編 十節

「二三」新人戦好成绩おめでとう!!「二三」

早撃ち女子でトップ独占した雫、エイミイ、それから滝川さんに、

同じく早撃ち男子で唯一トーナメント入りして優勝した駿、

さらに、(描画は省かれたが)波乗り予選突破したほのかへのお祝いだ。

無論、達也に深雪、鋼もここにいる。

そもそも食事の会場でやっていて、他にも何人か集まっているのだが。

「新人戦開始には良いスタートだな」

まあ男子の方は駿以外ひどい結果になったが。

「男子の結果は駿以外芳しくないが、女子はかなり好成绩だな・・・」

男子は克人さんのでこ入れ入るか・・・?」

そう言うと、男子の一部がビクツツと震える。

そうなってほしくないなあ・・・克人さん何気に厳しいし。

まあ連帯責任で押し付けられることはないだろうけど・・・ますます負けられなくなっ

た。

「ていうか、四葉君のCAD使ってる時点で勝ち確なんじゃないの?」

男子生徒の一人が声を上げる。

「そりや俺だつてあれだけハイスペックなCADを使いりや優勝狙えるわ」

そこからどんどん飛び火していく。因みにこっち組はものすごくワナワナしている。

「おい、そりやどういう事だ?」

無論、怒っているのは俺も同じなので売られた喧嘩は大安売りで買ってやる。

「四葉君さ、なんでそいつ等ばかりに手を貸すの?」

「そんだけCADいじれるなら俺等のぶんだつてくれればよかつたじゃん」

「・・・ふ、自分の努力不足をCADの所為にするような奴に俺のCADは使いこなせな

い」

それを聞いて、また騒がしくなる。

「そもそも、そんなに言うなら自分でCADを作ればどうだ?」

「そんなに先輩たちの実力が信用ならないならそうすればいいだろう?」

「・・・四葉君さあ、ちよつと自惚れ過ぎてない?」

「何を言おうと結果が全てだ。そもそも皆は元々優勝できるだけの実力があつた。

俺はそこに些細な手を貸しただけだ。エンジンアつてのはそう言う仕事だ。

それも理解できずに先輩たちを侮辱しているお前は一体何様のつもりだ?」

結局、どんなCADを用意しても最後に試されるのは本人の実力だ。

「別に先輩方を馬鹿にしているわけじゃないけどさ、

実際君の方がCAD作ってるの上手いじゃん。

そもそもなんでそんな君が先輩を気にかけてるのは僕にはわからない。

その雑草ワイルドを気にかけてるのもね」

向けた指先にいるのは勿論達也だ。

「別に尊敬すべき項目は魔法やメンテ技術だけじゃないだろう？

先輩達は俺たちよりも一年長く生きている。それこそ敬うべきことじゃないのか？

そもそも、それを抜きにしてもお前の実力は先輩たち以上か？

少なくともお前より強い、お前が雑草と蔑む先輩を俺は一人知っている」

俺は桐原先輩に目を向ける。

四月の事件の渦中にいた壬生先輩は間違いなく、こんなやつよりよっぽど強い。

「はつきり言ってる。二科生の先輩方も花冠ブルームを誇ってるお前たちより充分強い。

その判断もできない時点でお前たちの方がよっぽど格s・・・」

「そこまでだ」

しつかりとした重い声上がる。

「かっ・・・十文字会頭」

「折角の食事の場で騒ぐな。それに、雑草は校則で禁止されている差別用語だ。

それでも言うというならば、お前を棄権させてでも俺と渡辺で教育することになる」
先程から俺たちに声を上げていた集団に目を向ける。

その後ろには、怪我はほとんど治った渡辺先輩や、風紀委員のメンバーが控えている。
「ツ……すいません」

「お騒がせして申し訳ありませんでした」

無論、上が文句を言つてた輩で下が俺だ。

「それから、昼夜」

克人さんがこつちに寄ってくる。

「ホテルのスタッフからお前に渡せと……確かに渡したぞ」

渡されたのはワインレッドの封筒、この色はお母様のお気に入りだ。

「悪い、少し席を外させてもらおう」

もしかしたら重要な内容かもしれないので、人目に付かないところで開けるべきだ。

食事会場から出て、内容を確認したところ……

「うツ……これはこれは……」

電話から、克人さんの番号を選んでかける。

何気にこういう話は小悪魔より克人さんに話した方が楽だ。

「あ、克人さん。少しお呼ばれしたみたいなので抜けさせてもらいます」

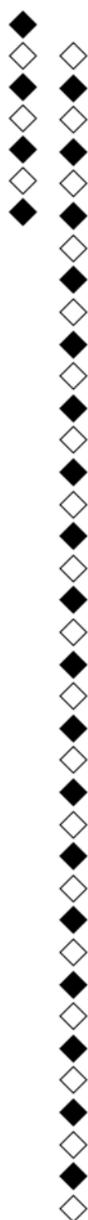
『そうか、わかった。気をつけるよ』

「ありがとうございます」

(・・・まったく、本当に気を付けないと・・・俺の胃が持たないかも)

内容は、

『昼夜、老師と五輪滯さんとこのホテルの最上階で待つてるから来てね♡』
 と言うシンプルなものだった。



このホテル、最上階は一部屋しかない。

最上階フロア丸々使って一部屋用意されているのだ。

当然、そこは極上スイートルームなのだ・・・。

「失礼します」

まあ家の都合上そう言う部屋を使う事も少なくないので気にしない。

扉を開けると、黒服にベランダまで案内されそこには、

老師、九島烈。極東の魔王、四葉真夜。深淵^{アビス}、五輪滯。

と、かなりの豪華メンバーに加え、九島閣下の傍に一人の少年と、滯さんの弟で傍付き役の五輪洋史さんがいた。

「お母様、本日も大変お美しいです。」

滯さん、洋史さん、四月はありがとうございます。

九島閣下とはこの会場以外では初対面でしたね。

四葉家次期当主候補、四葉昼夜です。よろしくお願いします」

お母様はとりあえずあ言っておけば機嫌がよくなる。

滯さんたちの四月の件は、他家への挨拶の件だ。

滯さんたちは東京の五輪家別荘に住んでいるので、挨拶に行った際に歓迎してくれた。

そして・・・まさか九島閣下にお呼ばれになるとは、もう少し先だと思っていたが。

「ふむ、君が昼夜君か・・・。矢張り・・・いい目をしている」

この感覚、覚えがある。達也の精霊^{エレメンタル・サイト}の眼と同じような感覚。

だが、少なくとも老師にそのスキルはないはずだ。

なら、技術と勘だけでそれと同じようなことを行っている？

「ええと、失礼ですがそちらの方は？」

話題轉換に、閣下の傍にいる少年について尋ねる。

「そうだったな。光宣、挨拶しなさい」

「はい、九島烈の孫の九島光宣です。四葉昼夜さん、以後お見知りおきを」
閣下のお孫さんとな。現当主の真言さんの息子だろうか？

遺伝子配列は・・・？ 少し不自然なところがいくつかあるな・・・。

「四葉昼夜です。昼夜で構いません。こちらこそよろしくお願ひします」
聞くと、俺より一つ年下らしく、昼夜さんで落ち着いた。

それから、よく体調を崩し外にはなかなか出られないそうだ。

まあそれだけ強力な“力”を持っているがコントロールできていない。

・・・いや、コントロールしようとしてもしきれないのか。

「失礼ですが、なぜ自分がここに呼ばれたのでしょうか？」

「何、単なる古いぼれの好奇心よ。君の用意した魔法、CADはどれも面白かった。
明日はどんなものが飛び出るか楽しみでたまらん。

光宣も毎年九校戦は楽しみにしてるのでな、君の工夫を期待している」

「私も昼夜君がどんな魔法を使うかは気になるわ？」

「昼夜、話していいなら軽く話してくれないかしら？」

滯さんに頼まれたのなら少しくらいは話すか。

お母様？ 知らない。まあ見に来れるだけ仕事こなした分で払ってやる。

「まあ多分、飽きないと思いますよ。毎回手は変えるので」

ピラーズブレイクのために作者がどれだけ考えもげフンゲフン、いくつもの魔法を用意した。

CADのお披露目は前菜オードブルに過ぎない。

ピラーズも所詮魚料理ポワソン、矢張りモノリスと言う肉料理アントレが一番楽しみだ。

まあ、魅せる戦いはピラーズが一番だろうが、俺は少し戦闘狂気質だからな。

そこから軽いつまみが出され光宣と話をしたり、九島閣下もそれを微笑まし気に眺めたり、

滯さんに『滯姉さん』と呼んでつてせがまれたり等、中々有意義な時間を過ごした。

その後は相変わらず幹比古と訓練して眠るだけ。

幹比古の方も中々仕上がってきている。と言うより感覚を取り戻してきている。

これなら九校戦期間中に問題なく仕上がるだろう。

裏で動いている奴らも、ある程度情報は集まってきた。

ナルとホロも情報をしっかりと集めるどころか、不審者を一人仕留めたそうなの。

で、二羽に呼ばれた水波がうちの奴を動かして尋問中。

もう少しで厄介者を払う事が出来そうなの。

そのころ、四葉家本邸では・・・

深夜「真夜のやつ、賭けに勝ったかからって仕事丸投げはないでしょ！」

葉山「深夜様申し訳ありません！ 私めがついていながら逃がすなんて」

穂波「仕方ないですよ。」

賭けの翌日いなくなつて『仕事丸投げ』つて書かれてたんですから・・・」

深夜「確かに勝つた方は何でも言う事聞くつて言つたけどなんで真夜のやつてない分まで！」

以上が、真夜だけが九校戦会場にいる理由である。

尚、深夜さんの甥のY・C氏は「そんなことだろと思つていました」と証言しています。

九校戦編 十一節

昼夜様の朝・・・明け方は早い。

現在時刻は午前4時半、寝たのは1時くらいである。

「うん、よく寝れた」

本人はこういつているが、実際自分の家でもなきや安心して眠れもしない。

意外と繊細なのだ。現に東京の別荘や本邸では早くて6時起床である。

因みに8月7日の日では大体5時前である。

すぐさま着替え、軽く顔を洗いランニングに出かける。

曰く、『才能は存在するが、努力しない才能は努力した非才に劣る』だそうだ。

ただ普通のランニングではなく、加重魔法で重力を強く、収束魔法で低酸素運動している。

すると二羽の鳥、鳥とミミズクがやってくる。

昼夜様のペット、鳥のナル、ミミズクのホロである。

ただの鳥ではなく、精霊が憑いているいわば霊鳥だそうです。

二羽は昼夜様を慕っていて、目となり武器となります。

……大丈夫、昼夜様の家事は私の仕事だし、ちゃんとガーディアンとして護衛している。

私の仕事が多少奪われはしたものの、ちゃんと私は昼夜様の役に立っている。

「お、水波。もう起きていたのか？」

私はおはようございますと答える。

昼夜様は私を奴隷のように扱わない。元々ガーディアンとは実際奴隷のようなものだ。

その理由をこの前聞いたら、

『一緒に住んでるのにそんなきすぎすぎした関係じゃしんどいだろう？』

と、昼夜様は答えた。

使えた当初こそ、護衛なんてあっても変わらないからそう言う態度をとるのかと思っ
た。

しかしその直後、それは違うと思ひ知らされる。

まあ勘違いの交錯ではあったが、本当に家族のように心配してくれたのだ。

少なくとも、家族の記憶がほとんどない私の感覚だからあっているかはわからない
が。

無論、上下関係は確かに存在するが、普段は気楽にやっていけている。

私はそんな昼夜様が大好きだ。一人の女として昼夜様と言う男性が好きだ。だけど、多分私では昼夜様と結婚することなど不可能だろう。

どんなに関係を深めても、私たちは所詮上司と部下であり、通常のそれ以上に大きな壁が間に入っているのである。

それに、昼夜様の周りには魅力的な女性がたくさんいる。

それこそ私は霞んでしまいそうなくらいに。

そもそも、私は調整体の血を引いているので寿命が安定している保証はない。

だからせめて、昼夜様を安心して任せられるようなお方を見つけれれば……。

「？ 水波、何か悩み事か？」

しまった、表情に出ていただろうか？

「氣質が大きく揺れていたぞ。まあ確かに人生なんて悩んでばかりかもしれないが……」

昼夜様は人の想子を見てある程度相手の感情を読み解く事ができる。

大きくと言われたからには、私は相当悩んでいたのだろう。

そこで私は、もし自分が正しい事と客観的に見て正しい事どちらがいいのかを聞いてみた。

昼夜様の答えは、

「他人に押し付けられた正義と自分の正義、どっちに価値があるかって言うの後者だな。」

たとえそれが自分だけの意見でも、自分を信じれるのなら信じるだけ」と言うものだった。

まあこれも俺の意見だから、水波がどう思うかは勝手だけどと付け足して笑っていた。

そうだった。昼夜様はほとんど迷わない。

迷ってしまったなら自分を信じて、自分の思う通りにする。

ですけどね昼夜様・・・私は・・・きつと他の方もすでに気づいてるんですよ。

昼夜様はずっと私たちの想いに悩んでいることに・・・。

私だけでなく香澄さんに泉美さん、中条様に深雪様や雫様など女性の想いには、どうすればいいかずっと悩んでいることに。

だから近づきすぎないように、気を付けていることも・・・。

そして、多分自分のその行動にも気づかないふりをしていることも・・・。

だけど、それはきつと仕方のない事なのだと思います。

昼夜様は戦略級魔法師。ましてや四葉の直系。

誰かを愛する余裕などきつとない。だから誰にも気づかれないようにしているのですよね？

「昼夜様、愛しています」

「ん？ 何か言ったか？」

またそうやって・・・この声も昼夜様が聞こえないはずがない。

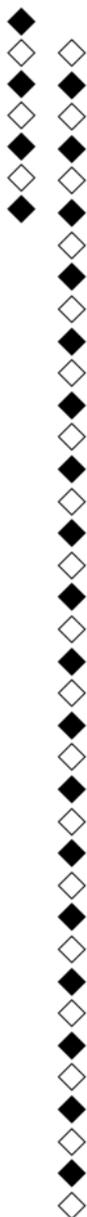
「いえ、昼夜様も迷う事があるのだなと・・・」

昼夜様はそれとなく返したが、私には昼夜様の想子が一瞬震えたのが見えた。

今はそれでも構いません。でもいつか、昼夜様がそれに答えを出せますように。

『桜井水波の日記よ

り』



昼夜 side

なんだか今日の水波は妙に考えていた。心配ではあるが、今は自分の競技が優先だ。

「昼夜君、大丈夫ですか？」

一応エンジニアは中条先輩がやってくれている。

エンジニア陣ではかなり仲がいうえに、技術も把握してもらってるので気楽なのだ。

「大丈夫です。不覚はとらせません」

「それって普通はとらないじゃないですか？」

まあ正直そんなのはどうでもいいのだ。将輝以外とは勝利前提なのだから。

(いや、将輝ともか……)

自分の考えの甘さに気づき、修正する。

「しかし、本当にそれで出るんですか？」

それ、とは衣装の事だ。

ピラーズブレイクは服装の指定が公的良俗に反しないことだけなのだ。

「まあ、雰囲気ですよ雰囲気。観客を楽しませるための……」

「雰囲気って……私も作戦は聞いてないのに……」

「それなら先輩も観客ですよ。ピラーズブレイクは楽しませてモノリスは圧倒する。

俺のプランはそれだけで十分ですから、楽しんでください」

中条先輩は少し頬を膨らませて、そのあと頑張ってくださいと言ってくれた。

まあ初戦で負けるなんてことは絶対に起こしませんよ。

相手に続き、自分もフィールドに上がる。

すると、会場から声上がる。

『おおっと！ 四葉選手、まさかの武将のような具足を纏って登場!!』

登場と同時に観客を楽しませてくれます！」

それから選手紹介も済み、遂に初の九校戦での試合が始まった。

「先手必勝！」

相手が魔法を発動する。その効果は振動。しかし……

『よ……四葉選手圧倒的防御力！ 七高選手の攻撃をもともしません!!』

情報強化（座標・温度・形状・etc）でどんな攻撃ききほしない。

俺からはまだ攻撃をかけない。10分の時間が3分になってからだ。

相手は何度も攻撃するが、その全てに俺の情報強化は対応している。

そして、一本も倒れることなく残分が3分を切った。

「時は満ちた！ 我に齒向かう愚者どもよ、この剣閃の前に藻屑と化せ！」

左腰に下げていた刀型CADに想子を流し居合で一振りする。

「秘剣『斬鬼烈風神』！」

発動する魔法は暴力的改造をした《カマイタチ》であり、

鋭利な細かい無数にある空気の刃が文字通り、敵の左端一列の氷柱を藻屑にする。

さらにそのまま切り返しを加える。同時、右端一列も同じ運命をたどる。

「とどめだ！ 『斬鬼烈風神』空亡ソラナキ」!!」

刀を両手で上段に構える。

同時、敵エリアの頭上に巨大な球体の魔改造カマイタチが発生する。

このカマイタチは要するにミキサーだ。細かい刃で大量に攻撃を加える。相手もそれを理解して、防御に全力を注ぎこむ。

俺は刀をゆっくり降ろしていく。

ミキサーも徐々に下がり、範囲に入った氷柱から粉々に砕かれた。

敵の全ての氷柱はまさに藻屑にとなって消えていった。

解説を聞き流し、礼をしてからとつと控室に戻る。

「昼夜君、これまたぶっ飛んだことしましたね……」

中条先輩は半分呆れて声をかけてくる。

「個人的な感覚ですが、ピラースブレイクは魅せる競技ですから」

「だからってあれはやり過ぎよ……」

控室にやって来たのは、うちが誇る三巨頭だった。

「でもまあ上の方好みでしょう？ 後はいかにアピールするかですよ」

「ふむ、確かに昼夜の言う事にも一理ある。

勝つことばかりではなく観客を楽しませるのもまた選手の役目かもしれん」

「おい十文字、冗談で言ってるんだらうな？」

「いや、結構本気で考えている」

こういう天然なところがなんか十文字先輩凄いですよね。

「昼夜兄いっ！ 勝利おめでっ……って、なんでお姉ちゃんがここに!!」

勢いよく入って来たのは香澄でその後ろには泉美と水波もいる。

「香澄ちゃん、それはこっちのセリフのはずだけど……?」

「申し訳ありませんお姉さま方、一応止めたのですが……」

水波の表情を見るに、止める気はないけど止めた形をとったという事らしい。

「昼夜派手にやつっ……って、なんかすごいっばいいる!!」

雫を筆頭に深雪や達也たちもやってきた。

「おいおい、まだ1勝したただぞ」

なんかそれだけでこれだけ集まられるのも大変だ。

因みに女子予選は男子の後にあるので、ちゃんと後で雫とエイミイのエンジニアもする。

気づけば2回戦が始まる時間、着替えとCADの調整もしないといけないので退出してもらおう。

次は……あれで行くか。

観客席には、1回戦より多くの客が集まっていた。

俺もステージに上がる。そしてまたもや声上がる。

今度は打って変わって西洋の装飾にマント付き騎士鎧に簡易な王冠である。

そして、隣には巨大な箱と背中に下げている一本の剣。

『四葉選手、今度は中世ヨーロッパを思わせる衣装で登場！

これには相手である四高選手も驚きを隠せないか!?

おっと・・・競技委員からメツセージが届いております。

えーと、どうやらあの箱もCADらしく『CAD以外の所有物の使用』には当たらない

ようです』

ああ、確かに勘違いされるかもしれないな。

と言っても物凄い簡単な魔法式しか入れてないが。

そして、アナウンスもおわり試合が始まる。

背中から剣を鞘ごと抜き、鞘を握りしめ想子を流す。

一回戦と同じく強力無比な情報強化が張られる。

それを相手はなんとかして突破しようとする。だが、それは全て無駄に終わる。

爆裂のように情報強化を抜く仕組みがなければ並みの魔法史では突破不可能だ。

そして、矢張り氷柱は全て健在のまま時間はのこり3分になってしまった。

鞄に仕込んでいた次の魔法式も発動する。無系統の想子波を発生させるだけの魔法。だが、それだけで箱は開く。モノリスコードのモノリスと同じ仕組みだ。

「時は来た！ 立ち上がれ！ 円卓に座することの許された騎士たちよ！

剣王アーサーの名のもとに命じる、敵を打て!!」

箱から十二の剣が飛び出る。

それ全てが定位置である氷柱の前に浮く。

これは硬化魔法によって、俺の持っている剣との相対座標を固定した。

そしてもちろん、アーサー役の俺の持つ剣は美しく彩られた・・・

「エクスカリバーよ！ 我とともに戦うものに力を与えよ！」

鞄から抜き、鞄は腰に下げる。

エクスカリバーはどんなものも斬る事ができる聖剣。

その鞄は、所持するものを傷を受けなくする。

そして、座標固定された剣たちから僅かな高音が聞こえる。

桐原先輩お得意の、高周波ブレードだ。

これは、飛ばした剣の方に仕込んであった。

座標固定と振動のバランスが難しいが、そこはなんとかうまくいった。

因みに飛ばした剣も結構な装飾を施している。

「行くぞ！ 『レジェンド・サーガ』！」

高周波ブレードによって強化された十二本の剣は、難なく氷柱を切り裂いた。

九校戦編 十二節

「ふう．．．まあこんなものか．．．」

正直な話、余裕である。

高校生の大会ではあるがもう少し骨のある相手と戦いたいところだ。

俺はそう考えつつ控室の扉を開け．．．

「あら昼夜、おかえりなs．．．」

た気がしたが、どうやら部屋を間違えたようだ。

見えなかった！ 俺は部屋で怯えている中条先輩なんて見えなかった!!

再度部屋を確認し、間違いないのを調べ扉を開ける。

「昼夜、お母さんが出たとたん閉m．．．」

気づけば俺は扉を閉めていた。

「ふむ」

現段階であり得る可能性を考える。

①すべて幻覚。最近疲れてるんじゃないか？（何故疲労の原因であるお母様の幻覚を見る？）

② 誰かが変装している。(間違はずなくあれはお母様だ)

③ 本当にお母様が俺の控室に来ている。(考えたくない)

「・・・・・・・・」

③ しかありえねえ!!

「くっ・・・・・・・・」

俺は渋々・・・・・・・・扉を開けた。

「さつきから扉を閉めたり開けたりしてどうしたの昼夜?」

「中条先輩、次の準備ですが・・・・・・・・」

コウイウトキハムシニカギル・・・・・・・・オレハナニモシラナイ・・・・・・・・ナニモコエカケラレ

テナイ!

「昼夜君、自分の親にその態度はどうかと思うわよ」

声をかけてきたのは滯さんだった。ナンデアナタマデココニイルンデスカ?

「はあ、滯さんが言うなら仕方ありませんね。」

で、滯さんですが、なんでお母様が控室にいらつしやるのですか?!

ホントなんで居やがるんだこの親バカ!!

「簡単ね、そこに昼夜がいるなら私はそこに現れるのよ」

「んなこと聞いてないですよ! 夏の書類その他諸々はどうしたんですか?!

「そんなもの、賭けの対象にして深夜に押し付けたわ」

「そんなんで四葉の当主が務まりやがるんですか?!」

やべえ、何がヤバいつて俺の口調が崩壊していつてる。

「昼夜、いいこと教えてあげる。自分の子ほど尊いものはない」

「知るかツ?!」

ああ・・・胃がヤバイよ・・・俺の胃がマツハで逝くよお・・・。

「しくじった・・・必要ないと思つて胃薬部屋に置いたままだ・・・」

そこに第一試合後にもやってきたメンバーが一気にやってきた結果、混沌と化した。

曰く「え! もしかして四葉真夜に五輪滲?!」

曰く「なんでこんな人たちがここに?!」

曰く「あら? 昼夜の友達? それともこのうちの誰かが彼女?」

「うああああああ! いったん黙れえええええ!」

はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・お前と出会えてよかったよ。

「じゃねえな・・・取り合えず落ち着いてくれ。じゃないと俺の胃が・・・」

「それで昼夜、結局誰が彼女なの?」

「ああもう! 息の根止めてでも黙らせてやろうか?!」

「いいわよ! その代わり昼夜が誰が好きなのかくらいは・・・」

「本当に黙れえええええ!!」

お母様の頬を思いつきり引つ張る。

「ねえ達也さん。来ない方がいいって言つてたけど」

「・・・まあ真夜様がいればここまでがテンプレだ・・・」

「あれが四葉家の当主で昼夜君のお母さんなんだよね・・・」

「昼夜君も大変ねえ・・・」

ああ、待つてくれ・・・胃よ、俺を置いて先に逝くなんて許さないぞ。

「ふとおこふろおふえ・・・」

「ッ!」

この部屋が《夜》に塗り替えられる。それすぐさま《夜》で塗り返す。

だが、そのすきにお母様は俺の拘束から抜けていた。

「ふう、発動速度は上がってるけど反応はギリギリ及第点ね。」

ドッキリだったからよかつたものの、もし襲撃されたらどうするの?」

流石に皆の前じゃやしないと思っていたが・・・やりますか普通?」

「もう何でもいいから休ませてください・・・」

「ならしようがないわね。私は他の子達と誰が昼夜のお嫁さんに相応しいか・・・」

「御当主様、いい加減になさらないと私ものすごく怒ることになりますよ・・・」

「ほ、ほう、私に何をすするって言うの？」

「そうですね・・・やはりいつまでもお母様と呼ぶのはうちの他の方にも申し訳ないので、御当主様と呼ぶことにしましょう。」

それから電話も多いと他候補の方に対して優遇していると云われる可能性もありますね。

週2でかけてくる電話も月2回しか応答しないようにしましょう。

もしくは毎度無駄話が永いので、長いを通り越して永いので、

電話の連続通話時間に制限を設けましょうか」

「待って、私が悪かったから・・・だからそんなこと・・・!!」

(((あれが・・・四葉の現当主？ 当代最強？)))

悲しきかな。あれが四葉の当主で俺の母親なんだよ・・・。

「じゃあとりあえずこの部屋から出て行ってください、御当主様」

「分かったわ、次の試合も楽しみにしてるから！」

そう言つて早足に出ていった。

「えーと、あれでよかつたのかしら？」

七草先輩が・・・と言うより皆が疑問符を浮かべているが・・・。

「水波」

「いちいち」

水波が手にしているのは、俺の指揮下にいる仲間には指示を飛ばすための通信機だ。

「お前ら、聞こえるな？」

防衛隊はそのまま、調査隊の半数は今御当主様が来ているのだが、

いかんせん仕事終わりに無理に来たため体も心もボロボロだ。

いいか、多少手荒な真似をしても本邸に送って差し上げろ。

繰り返す、疲労困憊の御当主様を多少手荒な手を使っても本邸に送って差し上げろ」

通信機からは頼もしい声が返ってくる。

「よし、これで何もかも問題はない。コンプリートだ」

無論、この連絡の意図にも仲間は気づいているだろう。

それでも指示を聞いてくれる当たり、俺の部下は本当に優秀だ。

「で、なんで滞りさんまでいるのですか？」

一番の疑問がそこだ。あの親バカはともかく何故この人が？

「さあどうかしらねえ？ 滞りさんと呼んでくれたら答えてあげようかしら？」

「はあ……滞りさん、どうかこの俺にその真意を教えてくださいませんか？」

「うーん……まあ及第点ね。正直な話、昼夜君のお友達に興味があったのよ。」

それに、ここなら克人君や真由美ちゃんとも少し話せるかなと思ってね」

その結果が先ほどのカオスだよ……。もう少し自分の価値を考えて欲しいものだ。

「で、滯さんから見てこのメンバーはどうなんですか？」

「うんうん……。なかなか面白い子がそろつてると思うわ。」

昼夜君が仲良くするのもうなずけるいい子達ね」

なんだかんだで滯さんもこの国のトップクラスの魔法師である。

ふと見れば魔法師としての実力を無抜くことくらいは容易だ。

「さて、私も失礼させてもらうわね。あなたたちの競技、楽しみにしてるわ」

そう言うと、車椅子で滯さんは出ていった。

「……。はあ、やっと静かになった。水波、胃薬ある？」

「ここにはないのですぐにとつてきます」

水波はすぐさま控室から出ていった。

「うう……。胃が痛いよお……。なんなんだよお……。」

「大丈夫、昼夜？」

「正直ヤバイ……。ストレスで次の試合手加減できそうにない……。」

それはヤバイのか？　とと言うのがこの場の全員の総意である。

「もういい、ありたつけのストレスぶつけてやる。そのうえで勝つ」

次に使う予定の作戦はこうだ。

相手の氷柱四本を魔改造カマイタチで砕いてからその破片からゴーレムを作る。後はゴーレムで相手の氷柱をすべて打ち砕く。

四本ではいささかサイズが足りないと思っていたのでこっちの氷柱一本も捧げよう。

そうだ、それでいい。まさに胃を穿かせて母を討つてね．．．なんか違う？

「昼夜様、胃薬をお持ちしました」

「ありがと．．．」

新しいのを買ったらしく、新品だったのだが丁度いい。

中の胃薬をぜんぶ一気に放り込む。大量の水でそれを流し込む。

「ああ．．．生き返る．．．胃が返って来たよお．．．」

因みに俺は特殊な状態故異常な飲み方をしているが、

閲覧者の皆様は薬品を用法、用量を正しく守ってお飲みください。

「なんだか昼夜の奴が麻薬やってるかのように見えるぞ．．．」

「失礼な、俺は死んでも麻薬には手を出さないって決めてるんだ」

しかし最早胃薬に依存し始めているのを考えると、麻薬と大して変わらないかもしれ
ない。

「えーと．．．まあ、あんな親でよければ仲良くしてやってくれ」

俺はそれ以上精神を乱さないために準備に取り掛かった。

本番、氷の巨人は最早相手の氷柱を蹴散らしていた。

はは・・・少しはストレス発散になったか。

次は女子だから零とエイミイのエンジニアしないとな・・・。

そのころ、会場のある場所にて。

部A 「見つけましたよ御当主様」

真夜 「あら？ 確か昼夜の部下の・・・？」

部B 「一体なんて無茶をなさってるのですか!! 昼夜様も心配してましたよ」

真夜 「え？ ちよつと？ 何のこと!!」

部C 「早く本邸に帰りますよ。疲れてるときは無茶をしてはいけません」

真夜「あ？ え？（ガシツ）あ、ちよつと離して：：今帰ったら深夜に：：昼夜アアア
!!」

部D「昼夜様がこのミッション達成したらご褒美をくれるつてよ」

部A・B・C「二おっしや！ 何が何でも連れ帰るぞ!!二」

真夜「なんでスタンガンなんて向けてるの?! あ、いややめて・・・ギャアアアア
素晴らしき閲覧者様への教訓『悪いことをしたらきつと自分に帰ってくる』」

九校戦編 十三節

「女子も全員今日での敗退はなかったな．．．いや当然か」

俺と達也のデバイスを使っておいて負けはほとんどあり得ないだろう。

ほのかも、

食事も終わり、ホテル近くにある訓練場を借りて幹比古と勝負する。

「．．．くツ！ また負けた．．．！」

「よし、魔法の発動は早くなっている。それは実感できてるか？」

「それはまあ．．．今までとは段違いに早くなってるけど．．．」

こちらとしては幹比古自身が鍛えられているのもあり、俺の特訓と、

古式魔法のノウハウも入ってきて非常に利益のある訓練だ。

幹比古としては格上と戦うことで魔法の訓練になると言った所か。

「じゃあ次の段階に行くか」

「次？」

「ああ、魔法の発動速度は既に一科生と同等くらいだ。」

次は魔法発動までの隙間、要するに反射自体を早くする」

魔法と銃、どちらが早いかと言うと銃に軍配が上がる。

銃は発見、引き金を引く、発砲で終わりだが、

魔法は発見、(特化型なら) 引き金を引く、起動式をインストール、発動となる。

そして、それを埋める方法は魔法師本人の能力だ。

「反射が早くなればそれだけスタートダッシュできる。

それだけじゃなくて、魔法の演算自体も僅かばかり早くなる。

魔法は意志の力とよく言われるが、演算するのは無意識領域だから、

無意識の一部である反射が早くなれば演算自体も早くなる・・・と、俺は予想してい

る」

「何となくだけど意味は分かったよ。じゃあ今までののは?」

「発動速度を上げたいなら魔法式を略式するほかには、

シンプルに強敵とぶつかって魔法演算領域を魔法にならす必要がある。

お前の演算領域は少し鈍ってたんでな、その二つでも結構早くなる」

「鈍る? それっていったいどういう事?」

「さつきも言ったが魔法は意志の力だ。

自分の力を信用しない者の魔法は怖くない。だが、その信用が空回りしても意味はな

い。

まず幹比古は自分ならもつと・・・と言う考えが後者だ。

だから俺と言うバカみたいな強さの奴とぶつかってブレーキをかける。

幹比古は俺と戦ってから『僕なら絶対に勝てる』とは一回も言っていないだろ?」

それを聞いて幹比古は頷く。

「・・・正直な話、昼夜には勝てそうにもないよ」

「これで空回りは解けた。演算速度もお前が体感できるほどに早くなった。

じゃあ後は反応速度を鍛えれば、一科生として十分な速度になる」

「成程・・・昼夜は挫折することはないのかい?」

「まさか・・・つい先日心折れそうになったださ」

「先日? 今日のあの四葉真夜の奴じゃなくて?」

「ソナナコトナカタ、イイネ?」

「あ、うん」

幹比古は物分かりが良くいい。こういうことに限らず工夫法もよく聞いている。

因みに心が折れたのは・・・まあ、いくら身体ハンデがあってもあの才能はなあ・・・。

「?」

俺は借りてる部屋から、『俺が仕掛けた』魔法が発動するのを感じた。

「ああ・・・あいつらやりやがったか?」

幹比古、悪いが今日はお開きだ。後で反射速度の訓練法は携帯で送る」
 「うん、わかったよ」



森崎 side

食事も終わり、俺と鋼は部屋に戻っていた。

昼夜の奴は訓練があるとかで出っ張らっついていて部屋にはいない。

「ん？ これは？」

俺の目に映ったのは、昼夜のぶんの机にある分厚い本である。

「おい、鋼。これって……」

「どうしたんだい駿？ ……これって確かか？」

これは毎晩昼夜が寝る前に何かしら書いているもので、俺は日記と睨んでいる。

「これが日記としたら……気にならないか？」

「まあ気になるけど……ヤバいこと書いてたらどうするの？」

そう、昼夜は四葉のものだ。もしかして殺人計画でも書いてたら……とか考えたが……

「それならここにはおかないだろう。気になるし開けてみないか？」

鋼は非常に悩んでいる。

「毎晩書いているのを考えると日記っぽいのが確かだけど・・・」

「昼夜の恋愛事情・・・この前は好きな人はいないとか言っていたが・・・
本当はどうなんだかな・・・」

あれだけ周りに美女がいるのに気にならないってのも・・・な、おかしな話だろ？」

俺たちも男子とは言え高校生だ。周りの人物の恋愛事情は当然気になる。

ましてや昼夜は四葉のプリンスで気にならない方がおかしいだろう。

「もし鋼が開けるのに協力しなくても、俺が犯人と言われたら巻き込んでやる」

「うーん、昼夜がそれに引つかかるとは思えないけど・・・わかったよ」

本の表紙に手を当てる。

「開けるぞ・・・」

「うん」

そうして表紙を開けてみると・・・

「な!!」

その次のページから、紙が凄い勢いで燃えていく。

「まずいよ駿!!」

俺はすぐさま魔法で水を発生させたが、それでは消えてくれない。炎は立ってないのだ。ただ紙が燃え広がるように消えていくのだ。

「そうだ！ 本を閉じれば!!」

「それだ！」

これは普通の発火ではなく、魔法によるものだろう。

情報強化なども試したが消えない以上、本を閉じるしかない。だが……
「やばい！ 本を閉じてても消えない!!」

結果、本のページを構成していた紙はすべてなくなつた。

「つたく、お前らやってくれたな」

「!!」

その声は俺たちにとって死刑宣告よりも怖く聞こえた。

だってあいつがモノリスのために用意した練習……くそツレエもん。

昼夜 side

「つたく、お前らやってくれたな」

俺は部屋に入る前、中の様子を確認してから犯人を特定して言った。

「ちゅ……昼夜……」

俺は二人を無視して、俺の机から紙の束をとり本に挟む。

インク入れを開け、本から魔法を発動する。

本は自動で開き、傍に置いたインク入れからインクを使い紙に文字を記し始める。

「見たいなら見たいって言えば見せてやるのに」

「え？」

「それって日記じゃないのか？」

「は？ 日記とか興味ないんだが」

もしかしてさつきからびくびくしてたのはそれが理由か？

「今時紙なんて日記くらいしか使わないんじゃないの？」

「日記でも使うかわからないが・・・まあ俺なら紙を使うか」

個人情報データをデータで保存などしようものなら何時盗まれるかわからないし。

「再生も終わったか。これは『Grimoire de Quatre feuilles』だ。」

直訳すれば『四葉の魔術書』だが・・・まあ俺専用だ。

魔法に関する知識を凝縮したまさに『グリモワール』だな。

かなり危険な魔法から魔法の基本、魔法理論の仮説など俺が知る限りの知識がある。情報漏れを防ぐため正規の方法外で開けると紙は全て燃え尽きるようになってる。

そして本のカバーはCADになっていて、

俺の隠しているもう一冊から情報を読み取り間に挟んだ紙に複写する事ができる。気になるなら読んでみるか？」

二人は頷いたので、俺は正規の方法で本を開く。

「うげっー」「これは・・・」

「ははは、まあそうなるよな」

この本は開けるのさえパスワードが必要な上、文字自体も暗号みたいなもんだ。複数の文字を組み合わせて、かつ数ページごとにパターンを変えている。

「そりゃ、何かのはずみで開けられたら困るからな。」

「そうだな・・・面白い話だと・・・ああ、これなんてどうだ？」

俺は一つのページを開ける。そこにはやはり暗号と、2枚の古い絵がある。

「ええと・・・これは？」

「これは壇ノ浦の戦いと元寇の資料だ」

二人は頭に疑問符を上げる。関連性が分からないという事だろう。

「この二つに直接の関連性はない。だが、俺としては気になることがあってな・・・と言つてもとんでもなく仮説の域を出ないんだが・・・」

壇ノ浦の戦いで一つの宝剣が失われている。草薙剣・・・天叢雲剣だ」

「あれ？ 僕も昔気になつて調べたけど沈んだのはレプリカじゃなかった？」

「確かに沈んだのは本体じゃないが、あれは本物だ。」

「そうだな・・・ややこしいから本体を天叢雲、本物を草薙とするか。」

天叢雲はスサノオがヤマタノオロチの尾を切つた際に見つかった。

天孫降臨のさいにニニギノミコトに渡されて地上に降りたとされる。

そして草薙は天叢雲の御霊を分けて作つたものだ。

つまり、草薙にも天叢雲の力、御霊が宿っていると解釈できる」

「えーと・・・つまりは草薙はレプリカとされるが実際はそうじゃないってことか？」

「その認識で構わない。で、仮にそうだとして天叢雲の力は何か？」

これを所持していたヤマタノオロチの上には常に雲がかかり、

また被害にあつたのが川沿いの一家だったので洪水の化身だったり水神だったり。

この雲、そして洪水、これらは台風等によつてもたらされる」

「ここで二人は納得がいったようだ。」

「そして、元寇を追い返したのは神風と呼ばれる二度にわたる台風。」

壇ノ浦と対馬では距離が離れているが、少なくとも奈良なんかよりはよつぽど近い。

もし神風が、対馬に集まつた者の意志に反応した草薙のものとしたら？

何となくだが、つながりはしないか？」

「よくそんな仮説が立てられるな．．．」

「仮説はいくらでも立てられる。大事なのはそれが真実かと言う事だ」

遠回しに研究チームを組み立てたが、いい結果は得られてないからな．．．。

「まあ、そんな魔法があれば間違いなく戦略級認定されるだろうが．．．。

暇潰し程度に調べてみると面白いことはあるもんだぞ」

俺は本を閉じる。今日はもう書く時間はなさそうだ。

「話していると遅くなったな．．．とつとと寝るぞ」

俺はそのままベットに入って眠りについた。

「やっぱり昼夜って．．．」「規格外だよなあ．．．」

九校戦編 十四節

朝起き、ランニングをはじめ、水波に会う。ここまではいつも通り。

「調査の方はどうだ？」

「おおよその検討はついています」

「ならよし。あと2日で徹底的に洗わせる。新人戦が終わり次第仕掛ける」

「ではそのように手筈を整えておきます」

俺から直接連絡を入れてもいいが、俺も今そこまで余裕があるわけじゃない。

こういう時に頼れる部下がいるのは非常にうれしい限りだ。

「じゃあいつもみたいにランニングついてくるか？」

ここからはいつも通りだ。他愛のない話をしてランニングするだけ。



「さて、今日はピラーズの準々決勝から決勝か」

女子は三人とも決勝リーグに進出しているが、男子は俺と一人、だが準々決勝で将輝と当たつてるのでまあ負けだろう。

「昼夜君、調子はどうです?」

中条先輩の問いに答える。

「優勝以外、ありえませんが」

さあ、決勝リーグが始まるぞ。

まあ波乱もなく、決勝のカードは俺 v s 将輝となつたわけだが……。

「昼夜君、本当に一条君あいて大丈夫ですか?」

「そこまで心配ですか? 俺そこまで弱っちく見えませんか?」

先程から中条先輩は相当心配しているようで、何度も確認を取ってくる。

「だって、さつきまで相手を弄ぶような戦いしかしてないじゃないですか……」

「ははは……流石に将輝相手に手は抜けませんよ。」

いえ、何処まで手を抜けさせてもらえるんですかね?」

「もー、そんなこと言ってひどい目見ても知りませんよ」

「それは困ります。ひどい目にあつたときは中条先輩に泣きつこうと思つてたのに」

中条先輩は「え?」と言って顔が真っ赤になり、煙(?)を発していた。

「まあ、勝ち以外ありえないので冗談ですが」

中条先輩は再び「え？」と言い、頬を膨らませて……

「何を考えさせてくれてるんですか?!」

「何を考えたんですか?」

「え……そ、それは……／＼(プシユ)」

いや、中条先輩のこういう反応は本当に面白い。小悪魔が楽しむのもよく分かる。しかし本当に何を考えればあんなに顔を赤くするんだらうか?

「中条先輩のお陰でいつも通りで挑めそうです」

「むー、いいですよ……どうせ私はおもちゃなんですから……」

「この大会で俺が使ったCAD、全部試作品なのでよければ差し上げようかと……」

「え!、いいんです……って、騙されませんよ?!」

ありやりや? 簡単に引つかからなくなった。ちよつといじり過ぎたか?

「ごめんなさい……これらのCAD大会終わったら上げるので許してください」

「うー……わかりました。許しますから、もう出番ですよ」

「みたいですね、じゃあ行つてきます」

ステージに上つていく。会場は全て観客で埋め尽くされていた。

『男子ピラースブレイク! 矢張り決勝はこの二人になった!』

爆裂！ 氷の花を咲かせるクリムゾンプリンス！

紅いコートと特化型C A Dを身につけた一条の跡取り！ 一条将輝選手！！

対するは、様々な魔法で観客を見せ！ いや魅せたトリックスター！！

無数の武器を携える天界の番人！ 四葉の跡取り候補！ 四葉昼夜選手！！

二人の十師族の血を引く少年同士の闘い！ 非常にハイレベルなものと予想されま

す！！

それは今までの二人の試合を見ても明らか！

一条選手は爆裂によりすぐさま敵の氷柱を砕き！

四葉選手は余裕綽々と攻撃を無効化し残り時間が少なくなつたところで打ち砕く！』

解説も終盤に近付き、頭の中で作戦を整理する。

俺に爆裂は通用しないとは伝えたが、将輝はどんな手を使ってくるだろうか？

俺の作戦はただ一つ、速攻などつまらん真似はしない。

しっかり爆裂を見て、その要素とノウハウを奪ってやる。

カウントダウンが始まった。10から0に近づいていく。

3・・・2・・・1・・・0！

ホルスターからリボルバー式C A Dを抜き氷柱全てに魔法をかける。

俺の前列左端の氷柱に将輝の爆裂が発動。

氷柱を気化させるエネルギーは、将輝の前列右端の氷柱に転移された。

「なに!」

誰もが驚く。爆裂は一条の代名詞であり情報強化では防げない。

その爆裂を防いだうえで、将輝の氷柱には爆裂と同じ結果が残る。

グロリアス・レイ
《永光熱線》を局所的に発動する魔法、オロラコート《極光膜》。

爆裂は熱を用いないが、個体を気体にするからにはエネルギーが発生する。

そして、エネルギーである限り俺の魔法でそれを飛ばすことは可能だ。

「言つたろ? 俺に爆裂は効かないと」

将輝は爆裂を再び発動する。しかし、それは返される。

それほどのエネルギーを転移しようとすると空間がゆがむのか一瞬虹色が発生する。

ゆえにオーロラの膜。永光熱線ならすぐさま爆発が起こるのでこの現象は見れな

かった。

将輝は魔法を切り替えた。爆裂は分が悪いと判断し範囲加熱魔法で俺の場を焼こう

とする。

しかし、それは情報強化に阻まれる。

「工夫はそれまでか? あっけないものだ」

事前に忠告してやったのに……これでは興ざめではないか。

箱に手をかけ刀を取り出す。予選一回戦で使ったものだ。そしてここで、将輝は守りに転じてしまった。

俺が武器を握ったのを見て情報強化を発動してしまった。

俺の切り札を知っていながら、別の札に目が向いてしまった。

刀はブラフ、本命は右手に握るリボルバー式CADから繰り出される。

「さあ、幕引きと行こう」

世界は夜に包まれる。無数に光る星は将輝の氷柱目掛け落ちていく。

《流星群》^{ミステイアライヴ}を防ぐすべないのに、防御に回った。

将輝は俺に光の分布率に対する干渉度で勝つことはできない。

光に対する反射、遮断、屈折のそのどれもが意味をなさない。

俺が持つ最高の攻撃手段はやすやすと将輝の氷柱に穴をあけていく。

残ったのは俺の氷柱12本だけだった。

「そんな・・・!」

「将輝、言っただろ? あつと驚く奇策がないと俺には勝てないって」

圧倒的であった。見ていたものにはそれしか伝わらなかつたのかもしれない。

だが将輝だつて弱くなく、むしろ強いことを知っているものがここにいるからか、

それゆえに試合終了の合図もなく、実況も止まり、観客の反応もない。

「……まであっさり行くと思ってたが、お前もこの程度だったのか」
それは俺から送る『失望』の念であり、ある意味親友としての『応援』のつもりであった。

こいつがこの程度で終わるわけがない。

モノリスには間に合わないかもしれないが、来年は楽しめるかもしれない。

その程度には将輝の実力も人間性も理解しているつもりだ。

将輝の闘い方まさには『王道』であり、王道を倒すためのものが『邪道』。

速攻を防ぎ、フェイントかけた攻撃で一気に切り崩す。

まさに将輝の性格を考慮したうえでの手であり『邪道』である。

将輝ももう少し柔軟な考え方が出来ればいいものを……。

優勝はもらったが、あまりいい気分ではない。

(拍子抜けが過ぎる……)

エンジニアとして参加の方がよかったかもしれないと後悔しつつ、

次からは雫とエイミイのエンジニアを務めないといけない。

まあこれで楽しめたらそれはそれでいいか。

所詮高校生同士の競技など、四葉昼夜からすれば遊びに過ぎないのだから……。

九校戦編 十五節

「で、次は雫とエイミイのエンジニアだな」

戻ってきてそう言うと、二人は首をかしげていた。

「ん？ 何か顔についてたりするか？」

「うんうん、ただなんか無感動だなって」

「もう少し勝利の余韻に浸ったままでも罰は当たらないんじゃないの？」

なんだ、そんなこと。

「だって拍子抜けだったんだぞ。」

将輝とやるまで飽きないためにいろいろ用意したのに……。

モノリスではもつと血沸き肉躍る闘いをしたいものだ」

雫とエイミイは思った。『やっぱり昼夜つてどこかおかしい』と……。

「まあ魔法を自由に使って競える場所なんてほとんどないんだからお前たちは手を抜く

なよ」

夏休みは帰省して訓練しなくてはと考えつつ、二人の試合のことを考える。

「雫の相手は油断さえしなければまず負けない。」

問題はエイミイだ。十七夜選手の攻撃は振動系魔法の波の合成。

パワー型のエイミイに対して制御型だから向こうの出方次第だな」

「え、何かいい作戦とかないの？」

駄々をこねるかのように聞いてくる。作戦も何もなんだが……。

「いいか。今までの相手にも制御型はいたが、エイミイのペースで倒せただろう？

だからペースさえ奪わせなければ負けることはない。

それから、制御面で張り合おうとするなよ。それはエイミイの持ち味を殺す」

言えるアドバイスはそれだけだろう。最後に蓋を開けるかは本人次第だし。

「ねえ、私にはアドバイスないの？」

「なんだか拗ねたように雫は聞いてくる。

「雫は深雪に勝つつもりだろ？」

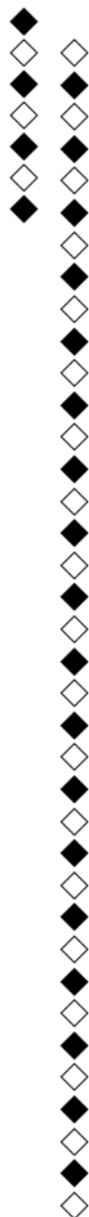
「え？ まあそれはその通りだけど」

「じゃあアドバイスは決勝まで持ち越しだな。

と言うか、決勝まで負けるようなことはないように！」

そういうと、雫は渋々と言った感じではあるが頷いた。

さて、ここからピラードズ女子はどう動くのやら……。



達也がエンジニアを務める深雪は当然、雫も難なく準決勝に駒を進めた。そして問題のエイミイの試合が今から始まる。

エイミイがCADを係員に渡すところで眼を使ってみる。

特に怪しいことはない。CADに細工もされていないだろう。

こういうことに関しては達也の精霊の眼が上回る。

CADに関しても情報を改変されたという情報を感じできるのである。

兎に角、CADに問題はなくエイミイもいい感じに集中できている。

これならば問題ない。少なくとも一方的に負けることはあり得ない。

「エイミイ、勝つて来いよっ。」

「モチロンッ！」

ステージに立つエイミイと十七夜選手。

パワー型同士ならよりパワーに優れた方が、

制御型同士ならより巧く制御した方に軍配が上がる。

ならパワー型と制御型なら？ 答えは簡単。

押し通し、上回った方の勝ち。

(エイミイは蓋を開けるか？ その中はどれくらい大きいのか？)

思考してる間にも時間は進み、エイミイの戦いが始まった。

まずエイミイが自分の氷柱を横倒しにして、それを相手の氷柱に突撃させる。

エイミイ得意の『砲撃魔法』を応用した形だ。

それに対し十七夜選手は振動魔法で対抗しようとするが、それは届かない。

「ピラーズブレイクでエイミイに用意した魔法は『柱を動かす』と定義されている。

形状の固定をしているため、生半可な攻撃じゃ崩せないぞ」

エイミイの氷柱はそのまま転がっていき最左列全てを倒すことに成功した。

その勢いで、エイミイは次の列の氷柱を一つ倒し転がしていく。

しかし、それが当たる度同時十七夜選手の氷柱はカーリングのように滑り、

前から2列目も同じように滑り3列目で綺麗に止まったかと思うと、

エイミイの氷柱を受け止めた。

「・・・なるほど。摩擦係数をゼロにして1、2列目は受け流し、

3列目にその二本が当たる時その三つを一つの構造体として摩擦係数を上げたのか」

そこにエイミイの氷柱が当たっても、

一体となった質量と増幅された摩擦によって受け止められたわけだ。

「流石の計算能力。確かにこれは綺麗に受けられた形になったが・・・」

そこから始まる十七夜選手の反撃。波の合成により次々とエイミイの盤面は制圧されていく。

エイミイは手を打とうと考えるあまり後手に回り続け、氷柱は気づけば残り四本。

（手を打とうと考えるのは制御型のすることだ。）

エイミイ、お前の持ち味はなんだ？ まだ四本もあるんだ。しつかり自分の技で決めろよ）

一瞬、諦めのが目によぎったが・・・むしろそれが発破剤になったのか？

エイミイの想子が活性化し、氷柱の一本がロケットのように飛び相手の一列を粉碎する。

「よし、蓋を開けたな」

エイミイには無意識に力を抜いてしまふ癖がある。

その癖は恐らく自分より弱い相手ばかりと戦ってついてしまったもの。

自分の実力に蓋をして、自分が弱いから負けたというための優しい嘘。

しかし、魔法師は嘘を現実にするもの。

その優しい嘘さえ、今となっては実力を縛る枷か封じる蓋にかなりやしない。

「容赦できる相手なんかじゃないぞ。思い切りやってやれ！」

もう一本飛ばして残りの本数は3対2。

そして最後の三本は先ほどエイミーの攻撃を受け止めた三本の塊。今のエイミーなら十分チャンスはある……が。

『おっと！ 明智選手膝をついた!! 大丈夫でしょうか……!!』

「ツ！ もう想子切れ!! 消耗が早すぎる!!」

これは想定外だった。蓋の自身が大き過ぎたのだ。

俺は才能を見る事が出来ても、それはあくまで遺伝子から推測される範囲に限る。

この短時間で動けないほど消耗が大きいとは思っていなかったのだ。

(……いや、まだエイミーは諦めていない)

そこにとどめを刺そうと十七夜選手が合成波で攻撃を仕掛けるが、

エイミーは移動魔法で辛うじてそれを避けている。

「時間切れに持ち込んでも相手の方が氷柱が多いのでは負けだ。

発射しただけでも物理的に考えれば三本並んだあの氷柱は破壊できない。

後はエイミーがどれだけ魔法で現実をねじ伏せるか」

エイミーが攻撃しないなど考えることはない。そんなことはあり得ない。

だって、そんな奴なら俺がCADを用意してやるはずがない。

「この前の食事ではあんなこと言ったが、

実力だけで渡せるほど六連装式CAD開発の親お手製のCADは安くないぞ」

エイミイside

氷柱は波の余波で少しずつ崩れている。もう猶予はなかった。

一本を残る力をもって発射する。

「これが・・・これが最後・・・いつけ——ッ!!」

(魔法師にとってイメージは現実。そうだね、グランマ)

エイミイは何度も何度も相手の氷を破壊するビジョンを脳裏に描いた。

「届いて! 最後の一撃・・・!!」

昼夜side

「これは!!」

想像以上、その一言に尽きる。

十七夜選手の氷柱にもものすごく強度な・・・言うなれば情報圧とも言うべきものがある。か。

何度か自分も経験もあるこれは、物理的な現象をはるかに超える変化が起こる予兆。

魔法にかける想子の量などではなく、意志によつてもたらされる強力な改変。それを感じたのか、十七夜選手も防御に全ての想子を回して受けようとする。それもまた、強力な情報圧を発生させていた。

二人の強固な意志がぶつかる。

エイミイの放った氷柱は、正面から当たつて碎けてしまった・・・が、その三本は、亀裂が入り上半分が割れてずれた。

これを審判は大破と判定した。つまり結果は・・・

『明智選手一本、十七夜選手〇本で明智選手の勝利です!』

そしてその戦いをした二人は、想子の枯渇で倒れていた。

「これは・・・将輝ともこういう勝負が出来ればよかったのに・・・」

そう思つてしまうほどに、白熱した試合だった。

二人は医務室に運び込まれ、次の試合まで様子を見ることになるだろう。

(あれほど強力な情報圧を見れる機会は滅多にない。)

それこそ、九校戦でさえ情報圧が発生するのは年に一回二回あるかどうか。

(ここで二回・・・まだまだ見れるかもしれない・・・)

「まあその前に、エイミイに劳いの言葉をかけてやらんとな」

俺は個人に用意された待機室から出て、医務室に向かった。

九校戦編 十六節

エイミイは動けるようには回復したが、次の試合である雫戦には出られないだろう。

しかし、深雪の相手も同じ状態で準決勝を棄権するとの事なので……

「戦わずに同時優勝でどうかって運営が行ってきてるのだけど……」

「取り合えずエイミイは棄権するべきでしょうね。想子の枯渴が回復してません」

「わかったわ。じゃあ皆提案を受け入れるってことで……」

「待ってください!!」

会長の声をさえぎったのは雫であった。

「私は……戦いたいと思います。」

深雪と本気で戦えるこんな機会を私は逃したくないです」

それでこそだ。力は挑戦するためのものだ。雫が本気だから、俺は最高の得物を用意した。

「雫が私と戦いと言うなら、私にそれを断る理由はありません」

「そう……じゃあ大会委員会に伝えておくわね」



「雫、CADの調子はどうだ？」

「ばつちり・・・昼夜はさ、私が勝てると思う？」

勝てると思う・・・か。

「少なくとも、勝つのをイメージしないと負けるな。

魔法師は現実をイメージで上書きする。特に相手は深雪だ」

「・・・うん、そうだね。私、絶対に深雪に勝つよ」

「その心意気だ。勝ってこいよ、雫」

「じゃあさ、勝ったら何かお願い聞いてくれる？」

お願いか・・・まあやる気が出るならそれくらい安いもんだらう。

「俺にできる限りの事なら聞いてやるよ」

「ふふ、わかった。じゃあやっぱり絶対に勝たないと」

そこまでしてのお願いなのか・・・。いったいどんなお願いをされるのやら。

雫 side

(絶対に勝って・・・それで昼夜に・・・)

雫は軽く約束のことを考え、かぶりを振り、それから集中モードに入る。

深雪が相手では、余計なことでは断じてないが、雑念は振り払わないと勝てないのだ。

深雪に勝つためにわざわざ昼夜に頼んだのだ。(雑念があつたのは否定しないけど・・・)

実況に名前を呼ばれステージに上がる。

対面には既に深雪が立っていた。

(深雪、初めて見た時は圧巻の一言だった。

だけど私も今まで頑張ってきた。その成果すべてをこの一戦に賭ける！)

ブザーが鳴り響き、ピラーズ女子の決勝の幕が開いた。

深雪が発動したのは『氷炎地獄』(インフエル)。

指定エリアの運動エネルギーを別のエリアに移動させ灼熱と極寒を発動する魔法。

大して雫の魔法は『共振破壊』。

周波数を無段階に変更し、対象と共鳴したところで周波数を固定し増幅する魔法。

雫はさらに、情報強化で氷柱を熱から守っていて互角に見えるのだが・・・。

(だめだ。情報強化じゃ直接の改変は阻止できても上がった気温のせいで氷が溶かされる)

その上、雫の魔法は氷炎地獄の余波で振動を抑えられている。

このままでは、雫の氷柱が先に崩れるのは火を見るよりも明らかであった。

(なら!!)

雫は振袖から、もう一つの得物を抜いた。

「な!!」

一瞬、深雪の目に驚きが浮かぶ。

雫の手に握られていたには僅か二発しかないリボルバー式CAD。

その1弾目から新たな魔法が紡がれる。

その魔法は『フォノンメーザー』。日本語にすれば『音量子増幅機』だろうか。

文字通り音が質量を持つまで増幅させ、それを熱線として照射する魔法である。

その威力は絶大で、深雪の氷柱の一つが見る見るうちに解けていく。

・・・だが、粉碎判定が入る前に深雪も新たな魔法を紡ぎだす。

その魔法は『ニブルヘイム』。

領域内の物質を均一に冷却し、時には液体窒素すら発生させる広域冷却魔法。

(やっぱり来た! 昼夜が言っていたけどこれほどだなんて・・・!)

昼夜は深雪がピンチになればこの魔法を使うと予想していた。

そして、これにはフォノンメーザーも通らないであろうとも。

途中まで解けていた水中の溶解が止まり、発生した冷気にフォノンレーザーが阻まれる。

そして、液体質素を含む巨大な冷気が迫りくる。

(これを食らえば次の氷炎地獄で窒素の気化した際の膨張で壊される！)

雫はハンマーを倒す。昼夜が託した最後の切り札の引き金を引いた。

放たれるは一見先程と同じ、強いて言うならば少しばかり太いフォノンレーザー。しかし、深雪の途中まで溶かされていた氷柱に届き、溶かしきったのであった。

「ありがとう、昼夜。これでまだ戦える」

仕組んだ魔法は『フォノンレーザー・殻弾』。

シェルバレット

一回り大きなフォノンレーザーで、一つのフォノンレーザーを包み込む魔法。

その仕切りを作るのが非常に難しいのだが、今回のような場合では効果が大きい。包み込んだ方が冷気をそれなりではあるが奪い去り、

本命の自身が高威力に設定されていて対象に届かせるといふ力技でもある。

深雪のニブルヘイムを以てしても止められないほどの威力を出すのは至難の業だ。だが、方法がない訳ではない。そして、それがあれば勝機は十分にある。

ニブルヘイムに直接の攻撃力はほとんどないため、魔法を切り替える必要がある。対して、一つの魔法で突破できるのならその間に深雪の盤面を壊す事ができる。

互いに盾を貫く矛を手に入れたが、それを踏まえると有利なのは雫であった。

・・・しかし、キャパシティで劣っているのは雫であった。

「えっ！」

深雪は冷気塊を二つに分け、その上で氷炎地獄を発動するという離れ業を見せた。

フォノンメーザーを防ぐ冷気には液体窒素を混ぜず、

雫に向かう冷気には液体窒素を混ぜ氷炎地獄で発破させる。

広範囲を飛ばせる深雪に、雫は線でしか攻撃できない。

有利はあつという間に覆る。キャパシティというのは大きな要素なのだ。

F M・殻弾も二つのフォノンメーザーと仕切りの処理と言うハードな魔法。

雫は持続していた共振破壊を諦め、情報強化と氷柱の周りに僅かな障壁を用意する。

そのうえで攻撃を続行する。もとより不利な勝負なのだ。この程度でへこたれはしない。

雫の一撃が、冷気塊を貫き氷柱を五本奪う。

深雪の液体窒素の爆発が障壁を砕き氷柱を六本奪う。

そこまだった。

(あ・・あれ？ 眩暈が・・・)

雫は不意に酔ったような感覚と脱力感に見舞われる。

エイミイと同じ想子切れによる症状である。

そしてそれを悟った時に雫の視界は暗転し、体は横に倒れていつていた。

「昼夜・・・ゴメン」

それが声に出たかはわからないが、そう言った瞬間に雫の意識も途切れた。

昼夜 side

「雫!!」

急いでステージに向かおうとするが、救護班がすぐに対応し医務室に運んでいた。

先回りして医務室に向かってみると、雫は目をうつすらと開けていた。

「大丈夫か、雫?」

「あ・・・昼夜。ゴメンね、負けちゃった・・・」

確かに結果は雫の退場により深雪の勝利となっている。

「何言ってるんだ。これまで誰も深雪の氷柱を割れなかったんだ。勲章ものだ」

そう。深雪は氷柱にそれこそ傷ひとつつけず決勝まで来たのだ。

決勝もあわや完封勝利ではないかと言われていて程だ。

その深雪の氷柱に傷どころか粉碎判定を取れたのは本当に凄い事なのだ。

「それでも・・・負けは負けだよ」

「確かに負けだ。だけど次がない訳じゃないだろう？ 次は勝てるようにしないとな」

雫は今にも泣きだしそうな顔で頷いている。

「ねえ、二つだけお願いしてもいい？」

「こういう時に断るのは野暮なものだろう。」

「ああ、勿論」

「じゃあ、もつとこっちに寄って。昼夜の胸で・・・泣かせて」

「・・・わかった」

近づくと、雫は頭を俺の胸に押し付けて、泣き出した。

「がちだがっだよおおおお！ ぜっがぐちゆうやにいろいろいじでもらっだのに！

あどすごじでがでるとおもっだのにいいいいー！」

暫く雫は泣き続けた。余程勝ちたかったのか。

悔しいのはチャレンジしたからだ。努力したからだ。

これだけ悔しいと思えるなら、きつとすぐにまた挑戦を始めるだろう。

心だけでは意味がない。力だけでも意味がない。

二つを持ち合わせたものだけに、僕は力を貸そう。



◆◆◆◆◆
「想い人の恩恵」北山 雫

少年は己が信じ、誠の強さを持つものに恩恵を与える。

静かで時に大胆な少女への恩恵は壁を貫く矢であった。

少女は少年の恩恵を受け、決勝で大波乱を起こすのである。

攻撃スキル：共振破壊（振動）

発動までが遅く、敵を捕捉し続けなさいといけなさが威力は高い。

また、情報強化の効果を10%軽減する。

防御スキル：情報強化+抑振

発動中、指定した系統に対する耐性が30%上昇します。

また、常に振動系に対して15%の耐性を得ます。

特殊スキル：勝つたらお願いを聞いてね？

敵を倒すたびに攻撃力が3%ずつ上がります。（上限30%）

必殺スキル：フォノンメーザー・シエルバレット 殻弾（振動・炎）

前方の広範囲に小ダメージの防御支援を無効化する攻撃。

途中から前方の小範囲に大ダメージの攻撃が追加されます。

「スノウクイーン」司波 深雪

行動はそこまで派手ではないが少女は少年を愛している。

だが、少女は他の者より少年を知り過ぎていた。

それはときに、大胆さを奪う枷になってしまっている。

攻撃スキル：氷炎地獄・灼熱（インフェル）（振動・炎）

自分の周囲の中範囲に炎の攻撃を行います。

発動中、氷を含む攻撃に対し10%の耐性を得ます。

防御スキル：氷炎地獄・極寒（インフェル）（結界は振動・氷）

自分の周囲の中範囲に氷の結界を発生します。

発動中、全攻撃に耐性15%を得て結界内にいる相手に微ダメージを与えます。

特殊スキル：あなたが望むなら受けて立つわ！

体力が少ないほど攻撃力が上がります。（最大体力の30%で上昇倍率最大の40

%）

必殺スキル：ニブルヘイム（振動・氷）

敵一体を支点に冷気の竜巻による広範囲攻撃。

発動後、暫くの間相手に炎攻撃をした場合追加ダメージが発生する。

九校戦編 十七節

今日の試合が終わった。

心に残るのは本気で戦えない虚無感である。

(そりゃ、みんなの試合の手助けをするのも面白い。

だけど、血が沸く程の戦いは自分で味合わない面白くない)

「昼夜？ どうかしたの？」

声をかけてきたのは深雪だった。

「ああ、何でもない。少し疲れが出ただけだ」

こんな程度で疲れは出ない。イクラキノウオカアサマガキタノダトシテモ。

(強くなりたいと願った結果、面白くない戦いをする羽目になるだなんて……)

遊びであるなら楽しみたい。それは四葉の王子であろうと同じ事。

「昼夜は試合の結果が気に入らなかつたのかしら？」

(あゝ、深雪にはお見通しか)

「まあね、みんなの試合を見てるのは楽しいけどさ、

俺自身ももっと楽しい試合ができると思ってたからな……」

まあ恐らくもうすぐ楽しい殺戮を楽しめそうだけど……。

「楽しくない争いはやる気にならないな……」

「私としては昼夜が頑張ってるのを見るのは楽しいけど？」

……そう思われても俺が楽しくないならな。

「……悪い、俺はもう出る」

食事の部屋を出て、少し夜闇の中をさまよう。

「水波、ナル、ホロ、来い」

一人と二羽はすぐさまここにやってきた。もとより近くのいたのだ。

「お呼びでしょうか？」

「情報はもう集まってるんだろ？」

「はい、既に」

取り押さえるつもりなどもとよらない。邪魔者は無理矢理どけるだけ。

「水波、部下に休みの許可を通せ。ナルとホロもしばらく休んでいいぞ」
情報が集まっているなら偵察班の仕事は終わりだ。

まあいつでも戦えるように準備をするのは忘れるなと付け加える。

「これから暇だ、少しづらづらするつもりだがついてくるか？」

「私は是非」《我々はまたの機会にさせていただきます》

結果、ナルとホロは帰っていった（何か気を使われた気がする）。

「いや、つまらんかったわ」

「あれはむしろ少し一条様がかわいそうまであるかと・・・」

まあそう思われたって仕方ないかもしれない。

「ははは・・・こう素直に話せるのも水波のいいところだと思うけどな」

同じ学校の仲間にも流石につまらなすぎるとは言えやしない。

「明日からのモノリスもつまらないのは嫌なんだがな」

モノリスだけは本当に楽しめると思っていたのに・・・。

「昼夜様、わたくしでよければいつでも相手になりますよ」

「・・・」

自分が俺に勝てないことは分かっているはずだ。

それだけ心配してくれてるのだろう。

「なに、ストレスが溜まればギャングでも探して潰しに行くさ」

俺は部下を自分で潰すようなくだらない人間ではない。

「さて、幹比古との訓練に行ってくる。俺も古式の知識が入って面白いし」

現代魔法とは違う知識は非常に興味深い。



「あら、今度は覚えているかしら？」

幼いころの部屋、前に立つ顔の見えない少女。

「・・・四葉昼夜、四葉の完全調整体を名乗る者」

覚えている記憶の糸をたどる。そして、少しづつ思い出していく記憶も頭に入る。

「そして俺も四葉の完全調整体の一人だったか。」

そんでどうにも『生体構造干渉』が俺の魔法じゃないのも正しいらしい」

記憶だけではない。最近この魔法を使うたびに僅かな違和感があるのだ。

「あなた、結構魔法にも敏感になったものね」

「・・・そりやどうも」

何となく同族嫌悪の理由は分かった。互いに同じものから作られたのだろう。

「生憎、あんたの精神を俺の中に組み込んだ魔法までは思い出せないんだがな」

「ええ、そうでしょうね。あれはあなたの本来の力でああなた固有の力。」

「他者に見せてもらう事も出来ないのだから思い出せるはずがないわ」

そんな特殊な魔法なのか？ そんな魔法が記憶に残らないとは思えないが。

「だってあなた固有の魔法は精神構造干渉の一部だもの。記憶を封じること容易よ」
「精神構造干渉？ それって叔母様と同じ？」

唯一世界で精神構造干渉魔法を使えるのは深夜様だけだ。

精神干渉を使っても構造に干渉するのは、深夜様でも負担大なのだ。

「そこまで思い出したならお母様に聞けばいいのに」

「あなたと話してやっと思いい出したんだよ」

実際、お母様と会っていればストレスデソレドコロジヤナイノダ。

「あ、なんか胃が痛くなった気が・・・」

「・・・うん、ちよつと申し訳ないと思うわ」

「ここつて精神世界の類なのになんで胃が痛くなるんだろう・・・」

「あなたと話してるのは無意識な嫌悪感以外ストレスないからあなたが教えてくれ」

「まあ・・・わかったわよ」

少女はこの部屋にある椅子に腰かける。

俺もそれに習い対面の椅子に座る。

「あくまで話すのは過去の時点での話。」

あなたは無意識にこの魔法を使ってるからどれだけ成長してるかはわからないわ。

あなたの魔法は精神構造干渉魔法『精神統合』。

人の精神を肉体から剥離し、他社の肉体に封じ込める魔法。

ただ余程の精神の持ち主じゃなければ閉じ込められた精神は溶け合ってしまう。

私たちは特殊だったみたいね。あなたがその魔法を使う事。

私たちが互いに完全調整体であったこと。

そして、互いに嫌悪感を持つていたこと。

いくつか考えられるのだけど答えは分からないわ」

そんな魔法を使えたのか？ 正直記憶が思い出してこない・・・訳でもない。

「確かに何となく使った記憶があるが・・・」

確かに使った記憶がある。俺は一体何に使った？

ダレニツカッタ？ オレハナンノタメニツカツタンダ？

「昼夜ッ!!」

頭が痛い。

頭が痛い頭が痛い頭が痛い頭が痛い頭が痛い頭が痛い頭が痛い頭が痛い

アタマガイタイアタマガイタイアタマガイタイアタマガイタイアタマガイタイアタマガイタイ・・・!!

幸か不幸か、少年の記憶の霧は晴れていく・・・。

少年が思い出した記憶の中には彼を道具として利用するある人が映っていた。兵器であることは望んだはずだ。だが、惨い扱いを受けることを許容したことはない。

「オカアサマ、ナンデ・・・？」

少年の脳裏に映っていたのは、一番最初に守れるように願った母親であった。



本日のキャラは忠実なるもの一人と二羽。因みに二羽はセットで登場。

主のための護衛スキルや支援スキルを搭載しています。

(支援効果は同じキャラの効果は重ね掛けしても支援時間がリセットされるだけです)

「忠実なるメイド」 桜井 水波

少女は四の王子の盾である。王子のためにその身を捧げる守護者である。

しかし王子は強く、時に少女は自分が守る必要があるか疑問になる。

王子曰く、自分の信念を押し通せとの事なので、少女は自分の信じる道に行く。

攻撃スキル：対物障壁・プレス圧（物理・移動）

相手に対して対物障壁をぶつけて物理ダメージを与えます。

飛ばした障壁は相手の攻撃をある程度押し返します。

防御スキル：対物障壁・フォート岩

四方に対物障壁を展開して外からのダメージを20%軽減します。

さらに範囲内の仲間に防御力20%上昇のバフを1秒間付与し続けます。

特殊スキル：お呼びでしょうか？

戦闘開始から30秒間、全スキルの効果が10%上昇します。

必殺スキル：反射障壁・ボイダー境界

10秒間受けるダメージを無効にし、無効にした50%を相手に与える。

さらに10秒間攻撃スキルの障壁強度を50%上昇する。

「忠実なる二対翼」ナル&ホロ

その翼は導きの証。その翼は神の威光。その翼は道を開くもの。

二羽は主のためにその翼大きくをはためかせる。

主のために振るわれる翼は魔を纏い、拒むものを退ける。

攻撃スキル：導きの黒翼飛翔（物理・加速）

ナルが相手に対して突撃から往復して物理中ダメージを二回与えます。

さらにチーム全体に攻撃力5%上昇のバフを7秒付与します。

防御スキル：金剛陽翼の威光

ホロが光を放つて、付近に微ダメージ+盲目を付与します。

さらにチーム全体に防御力5%上昇のバフを7秒付与します。

特殊スキル：《我らが翼は！》《主様のために！》

最大体力の80%以上あればこのキャラが発生するバフ時間を5秒追加します。

必殺スキル：黒金神翼の光道（竜巻／収束・移動 連撃／物理・加速）

ホロが大竜巻を起こしてナルがそこに連撃を繰り返す。

さらにチーム全体に攻撃力防御力ともに10%上昇のバフを15秒付与します。

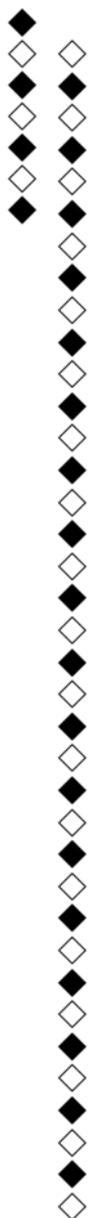
九校戦編 十八節

「ッ!!」

目が覚めていた。頭痛がする。消したはずの記憶が脳を焼く。

「・・・だめだな。今考えるべきことじゃない」

時間は何時も起きる時間と同じであった。ならばここからはいつも通りだ。



「今日はいよいよモノリスだな」

駿がわくわくと言った表情で話しかけてくる。

「僕としては緊張の方が大きいんだけどね・・・」

対しておどおどしているのは鋼である。

「なんであろうと変わらない。俺たちは優勝するだけだ」

「・・・?」

二人は何故かきよんとしている。

「どうかしたか？」

「いや、なんか昨日までと比べて冷たい気がしてな・・・」

・・・いかん、表に出ていたか。

「いや、なんでもない。さあ、今日も勝ちに行くぞ」

ただまあ、取り繕うのは慣れているおかげかこの一言で丸く収まった。

「とか言つて、昼夜も緊張してるのかしら？」

そう聞いてきたのは深雪であった。

「緊張も何も必要ないさ。基本は制圧作業なんだから」

周りのメンバーが苦笑いする。

だが、将輝との差を見せつけた故に冗談だと誰も言えなかった。

(将輝、さつさと立ち直つて俺を楽しませてくれよ・・・)

最早今の思考の中に夢と過去のごとは一切排除されていた。

「鋼、駿、ここも勝利して綺麗に新人戦の花形は頂くとしよう」

ここで言う花形とは要するに新人戦勝利であり、完全な状態で勝利するという事である。

二人は「なんでそんな自信があるんだ・・・」と言う視線を向けているが痒くもない。

「昼夜君、相当な自信ね．．．空回りしなければいいけど．．．」

一方、三年の集まりでは一高のトップ勢たちが少しばかりひやひやしていた。

「なに、昼夜であれば問題ないだろう」

「まああの昼夜君が試合程度で緊張することはないだろう。真由美の考え過ぎだ」

生徒会長を含むひやひやしているメンバーに対し、巨頭が二人は気にしていないようだ。

「少なくとも．．．あいつはくだらない問題を起こさないだろう」

克人のその一言に一同は頷く。それは彼の信頼か、少年の態度故か。



「そろそろか．．．緊張してきたな．．．」

「女子は二人ともミラージュ決勝進出したそうだ。くだらん負けは俺が許さんぞ」

二人に活を入れる。勝つしかない戦場ではないとはいえ、目的は勝つことだ。

であれば俺にとって勝たなければ、力を証明しなければ生きていく気がしない。

「お、ステージが決まったぞ．．．都市部ステージみたいだ」

相手は四高、都市部ステージはビルが乱立していて地下には排水管もあり水が流れている。

「都市戦闘か．．．まあ作戦通りにやれば負けない。行くぞ」

ステージの発表は準備ができてからなのですぐに入場となる。

俺に二人がついてくる。

俺は両腰のホルスターにリボルバー型が2つ、腕にブレスレッド型が2つ、

他にはナイフ形が後ろ腰に数本、腕のポーチにも数本挿されている。

「そんなに持つて行つて大丈夫なのか？」

「正直言うところでも足りない。他にも色々持つて行きたかったのだがな．．．」

無意識に試合であっても戦場に行くつもりで武器を選んでしまうのは俺の性だ。

入場すると周りから声上がる。とっととモノリスの場所に向かう。

四高も準備ができたようで30からカウントダウンが始まる。

最後に装備の点検をする。視た限りではどのCADにも問題がない。

カウントが10まで進んだ時．．．頭上に違和感を感じた。

「．．．鋼、駿、すぐさましやがめ」

二人はその言葉に冗談ではないと感じたのか、戸惑いながらしやがむ。

頭上のコンクリートが崩壊する。会場から悲鳴が上がる。

それに対して俺が放ったのは僅か一言。

「光よ」

俺の頭上に巨大な光の塊が発生する。瓦礫は光に触れると灰燼となった。

「愚者よ恐れよ。俺に．．．四葉に手を出すことがいかなる意味か思い知れ」

光はただ瓦礫を飲み込んでいく。会場は静まり返っていた。

瓦礫が完全に消え去った時に、光も消え去った。

試合中止のコールが響く。

「は、暴れられないのか．．．とつとと戻るぞ」

発動したのは恐らく加重系魔法『破城槌』。面に対して圧力をかける魔法。

本来はそこまで危険ではないが屋内に人がいる状態なら殺傷性ランクAに格上げされる。

まあ俺が発動した『フアイクスト・スター恒星』はそれどころじゃないが。

この調子では四高は違反で敗退だろう。そうなるように発動してから対応したのだ。何もなかったかのように歩く少年を見た観客は主に二つに分かれた。

一方は、国を守る戦力として頼もしいと思う者たち。

もう一方は、先ほどのことに無関心に対応したことに恐怖を感じた者たち。

正しいのは後者だろう。彼は国に言われたままに従う人形ではないのだから……。

「よく対応できたな……」

「こんな程度よくあることだ」
実際、他国に限らず自国にさえも監視していて時に暗殺者までやってくるのだ。無論、余すことなくひっ捕らえて拷問しているのである。

まあそんな彼にとつてこの程度は文字通り日常茶飯事だろう。

「はあ……やる気が失せた。次は任せただぞ」

飢えていた争いも行われず、ただ瓦礫を消し去っただけで終わってしまった。

少年は常に飢えている。争いに……力に……。

力がなければならなかった。示すために争わないといけなかった。

故に求めているのだ。奪っているのだ。集めているのだ。

力も知も血も……すべてを以てして強者であろうと……。

「くだらんことで気を落とされるのはこりごりだ……」

「だからと言ってあんな派手な魔法使う理由はないでしょ……!」

小悪m……もとい生徒会長が俺に拳骨を食らわ……ないように躲す。

「別に怪我がなかったんですからいいでしょう……」

こちらとしては気分も落とされたのだ。裏から手を回されてるなら今日決行しよう。「それよりは雉を打ちに行つてくるので……」

とつとと退散する。先ほど感じている不信感を確かめに行くとしよう。

不信感の発生源は……会場の中でも人通りのない裏口であった。

そこにいたのはヘッドマウントディスプレイをつけている男であった。

「その男、何者だ？」

俺の後ろには水波をはじめ俺の指揮下にいる兵士がそろっている。

男は顔を上げると、機械室な声を上げだした。

「警戒対象と、接触。逃走を優先しての、戦闘態勢に、移ります」

「水波、障壁魔法で退路は防いでおけ」

「了解しました」

逃げるような相手に対してはまず逃げられなくしておくのが当然だ。

「成程……兵器としての魔法師のなれの果てか……」

それを聞いて、周りの兵士が少し苦い顔をする。

彼等も四葉に通じるものだ。兵器としての魔法師の自覚があるのだろう。

「拘束も難しそうだ……仕留めるぞ」

意思を奪い去り、感情を破壊し、雑念が起こらないように調整されたモノ。

魔法を発生させる道具に改造された魔法師。

男は高速で動き出す。どうにも魔法だけではなく身体強化・・・要するに改造人間だ。「お前に指示は出してない。俺の部下には手を出させんぞ」

俺の周りの夜に浮かぶ光は線となつてジェネレーターを撃ち抜いた。

「関節が動かんように消し飛ばしたが・・・魔法で無理矢理動かすか・・・」
できる限り生きた状態で仕留めたかったのだが・・・。

「もういい、眠れ」

意思なき者との戦いはつまらない。

何故ならこいつは安定して魔法を発動できるが意思による限界以上の力は出せないからだ。

光はその脳天を貫き、モノは永久的に使えなくなつた。

「記憶は覗くなよ。こいつが意思がないだけで呪いの痛みとかはあるだろうからな」
死体に近づく部下に声をかける。こういうのは渡すべき場所に渡さないと。

「でことで風間さん、お願いしますね」

「魔法の気配をたどつてきたら・・・これまた・・・」

物陰にいた風間さんが出てくる。やれやれという表情ではある。

「それから、今夜こいつらのアジトを叩きます。亡骸が欲しければどうぞ」

それだけ言つて部下も撤退させる。大した時間はかからなかつた。次の試合には十分間に合う。

「・・・はあ、彼にも困つたものだ」

ため息をつく風間に真田が声をかける。

「あはは・・・彼は私たちで抑えられる玉ではないですからね」

呆れたような真田の声に対し、柳は静かに問答する。

「今夜叩くと言つてましたがどうしますか？」

藤林はそこに付け加える。

「一応、大方の場所までは絞り込めてます。最も、死体が残るかはわかりませんが」

「仕事が増えたようだ・・・四葉と言うのはどうにも面倒ごとを引つ張る質みたいだ」

九校戦編 十九節

あくびをしながら待機部屋に戻る。

「む、戻って来たか」

そこには鋼と駿のほかに十文字会頭を初め我が校を代表するもの達が集まっていた。

「皆さん揃ってどうしたんですか？」

「どうにも厄介なことになってな」

厄介事……試合も出来ず、意思ないモノと戦ってただでさえテンションは0に近いのに。

「昼夜君の対応が冷静過ぎたためか、お前が仕組んだものと言われているようだ」

「なんですかそれは？ 俺としては試合できなくてやる気も失せてるのに……」

ちよつと暗殺しに行くか？ まあそれは冗談として。

これも裏から手を回しているのだろうか？ であれば次の手は捨て身かもしれない。

「俺はそんな回りくどいことしませんよ。面倒でも正面から叩き潰しますし」

それはここにいる全員が理解していた。ただし『こいつは根っからの戦闘狂』と言う形で。

「私たちはそれで納得するけど昼夜君を知らない人たちはそうは行かないのよね」

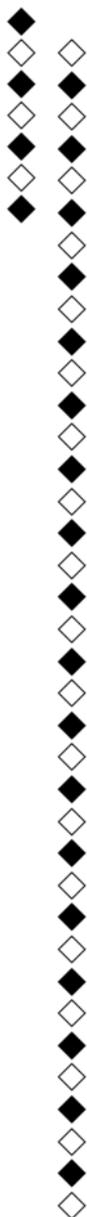
ため息をつく。とりあえずは勝ち上れるみたいだが次の攻撃が予測されているのに面倒な。

「まあ気を付けます。手を出されたらどうなるかわかりませんが」

「その時は構わん。やり過ぎないようにだけ気をつけろ」

忠告を受け取り次の試合に向かう。

この話のせいで将輝の試合は見れなかったが、勝ち上がったてはいるみたいだ。



CADを渡して検査機を通す。エラーはなくCADは返却される・・・が。

「鋼、駿、今すぐCADを捨てろ」

先程とは違い、二人は今度は少し悩んでいる。

「いい加減にしろ、俺の堪忍袋はそこまで大きくないぞ。CADに何を仕組んだ？」

一人の検査員に文字通り人を殺せそうなほどの視線を向ける。

「な・・・なんですか？」

「俺は何を仕組んだと聞いたんだ。聞き返せとは言つてない」

検査員は何も言わない。ただ怯えていることしかできなかった。

「……だんまりか、なら仕方ない。この手は好まんが……」

カウントは4だ。1ごとにお前の四肢は俺が奪う。0で首を切り落とす。

何、全て話せば四肢は返してやる。痛みも気を失わないように調整する。

さて、始めようか」

「待つてくれ！ 本当に俺は何も……」

検査員は声を上げるが……

「そんなことは聞いてない。カウント4」

指を鳴らすと同時に、男が駆けまわり悲鳴を上げる。

右足がないと叫びます。だが、周りの者も恐怖に包まれる。

それは四葉昼夜に対してであり、未知への恐怖でもあった。

残虐な行為を行う少年、そして足があり触れているのに無いと叫ぶ男に。

「この痛みはお前の罪だ。カウント3」

鳴る指、男は再び叫ぶ。次に奪われたのは左足のようでそれを叫ぶ。

だが、ここにいてはすべてのものが四葉昼夜に発言する勇氣はなかった。

「頼む！ 返してくれ！ 俺の両足を返してくれ！」

「であればやることは分かっているだろう？ カウント2」

三度鳴る指、男の悲鳴。男の目には両足が、右腕が眼前の少年の前に浮いていた。

男の眼前に映る少年は、氷などよりもっと冷たい視線を向けていた。

男の背筋を犯した罪がつつたう。肩に罪がのしかかる。喉を罪が絞め始める。

「さあ、死は既に目前だぞ。カウント1」

鳴る指は男の罪悪感を増幅させる。痛みは罪悪感に基づいて与えられる。

男は気づかず自分で自分を苦しめていた。自分で幻を生み出していた。

男には既に四葉昼夜に歯向かう意志はなかった。

「残念だが、これで終わりだ。カウント」 「助けてくれ！ 全部話すから助けてくれ！」

・・・それでいい。さあ、話し始めろ」

男は話し始める。脅されて何者かに協力されていたことを。

仕組んだのが何かはわからないが、CADを使えなくするものだという事。

「お前のほかにも協力者はいるだろう？」

「知らない・・・いることは聞いているが誰かは知らない・・・」

「カウントは1まで進んでいる。話さないというなら・・・」

右手を上げて指を指を鳴らすためにゆっくりと指を・・・。

「本当に知らないんだ！」

「……どうやら本当に知らないようだ。もっと情報を握れると思ったが。いいだろう、お前の体は返してやる」

俺が手を下げると、男ははっとして自分の体を抱きしめていた。

「なんだ？ 急にこんなところに呼びおって」

そしてここに来たのは老師……九島閣下であった。

「四葉のせがれ、状況を説明せい」

「私たちのCADに何か仕掛けられ、尋ねたところこの男が自白した次第です」

周りの人間は「自白？」と疑問符を上げている。

「どうやら他の者はその言葉に疑問があるように見えるが？」

「見解の相違ですね。彼が私の前で罪悪感に押しつぶされただけなんです……」

俺が使ったのは聴覚から精神に干渉して感情を反芻させただけだ。

精神干渉は今ほろくに使えないが、音から干渉するならどうにかなる。

「成程……罪悪感から自分で幻を見たか。」

CADに仕掛けられたのは……『電子金蚕』だな。

有線回路から侵入し、電気信号を改ざんして技術兵器を無力化するSB魔法」

SB魔法は精霊などの非物質存在を媒体に発動する魔法。特徴として奇襲力が高い。

「その性質ゆえOSやアンチウイルスプログラムの有無にかかわらない遅延発動術式。」

四葉のせがれよ、お前は電子金蚕をしっているのか？」

「いえ、全く。ただ私は^{フシオン}霊子体もその気になれば見れるので。

すこし事件が続いているので警戒したらこの通りです」

やれやれとモーションをつける。それを見て九島閣下はにやりと笑う。

「予備のCADはあるだろう？ それを使え。検査はかける必要はない」

それに対し声をかける者がいる。曰く「自作自演ではないか」と。

「これはそんなことする奴じゃない。私が保証する。それでも信用できんか？」

どうにも閣下は俺についてくれるようだ。お陰で問題なくやれそうだ。

それから委員の洗い出しが行われるようで、ここからは問題なく出来そうだ。

「さて、行くぞ。閣下の時間をもらったんだ。無様な試合は見せれないぞ」

試合は鋼と駿が二人で圧倒した。

駿が実戦テクニクを使って翻弄して、鋼が移動要塞と化し叩き潰した。

因みに俺は疑似瞬間移動で二人を送り出して二人への簡単に攻撃を防いでいた。

「はあ・・・やる気も出ないしな・・・」

そこで将輝の試合が流れているのを見た。そこに映っていたのは・・・。

「お？ なんだなんだ・・・結構立ち直ってるじゃねえか」

将輝は一人で相手を圧倒していて、吉祥寺の表情もしっかりしていた。

「くふ．．．くはは．．．これはこれは楽しめそうだ」

「僕等としてはお手柔らかにお願いしたいんだけどね．．．」

鋼の言葉に駿は「全くだ」と同意していた。

「やる気が出た、次の試合は俺がやろう」

ここからの試合、すべて俺が圧倒した。そして明日の決勝の相手は将輝達で決定した。

とは言え楽しい試合は全然なかったが．．．。

そして今日の晩御飯。まあ俺は愚者を消しに行こうとしたのだが．．．。

「昼夜？ 用を足しに行くのか？」

「いえ、少し仕事に」

その言葉に会頭はため息をついた。

「明日は決勝なんだ。仕事をするなどは言わんが食事くらい仲間で食え」

そう言われ首根っこを掴まれて鋼たちのもとに連れていかれた。

忘れられてるかもしれないが160cmしかない俺は軽々と持ち上げられた。

まあ程々に食事を楽しんだ後、仕事に向かう。





「じゃあやるぞ。もう厄介事は御免だ」

部下に簡単に指示を出す。部下たちは返事をしてくれた。

「じゃ、作戦開始」

一言そう言つて、散開する。やる気の出ない相手だがまあ遅らせるの面倒だ。

標的は横浜グランドホテル、その最上階に潜む無頭竜。

夜逃げの準備をしているそうで、逃げられる前に叩き潰すとしよう。

壁に魔法で無理矢理風穴を開ける。中にいるのは中年男性ばかりだった。

「やあ皆さん、あの世への夜逃げの準備はできているか？」

男たちの顔が引きつる。俺がそれに付き合う必要はないが。

「くッ！ 十四号、十六号、殺れ！」

加速魔法でモノが二つ突撃してくる。

「無駄だ。人形が俺に触れることなど許されん」

加重系魔法で天井に叩きつける。他の魔法で攻撃しようとするが、届きはしない。

「そうそう、電話はかけられないぞ。結界で電波が出ないようにしているからな」

有線も斬られていることを説明すると、電話機を握っていた男たちの顔は絶望に歪

む。

「さて、処分を開始しようか。まずはこの人形から・・・」

物凄い勢いでジェネレーターが壁に何度も打ち付けられる。

最後に圧縮して肉球が完成したのち焼き払った。

「壁も何もかも魔法で強化されているから逃げられないぞ。」

お前たちはどうしたものか・・・？」

「待ってくれ！ 我々は九これ以上九校戦に手を出さない！」

「何言っている？ 俺がその気になった以上もうお前らは手を出せない。」

そもそもお前たちの人形はもうないだろう？ あったとして俺が叩き潰す」

「我々は明朝にもこの国を出ていく！ 二度とこの国は戻ってこない！」

「黄泉の国へは片道切符しかないんだ。申し訳ないな」

「我々は日本から手を引こう！ 西日本支部も引き揚げさせる！」

「お前にそんな権限があるのか、ダグラス・・・だったか？」

名前はすべて覚えているが、消す奴の名前など本気で覚える気も出ない。

「私はボスの側近だ！ それに私はボスの命を救ったことがある！」

命を救われれば救われた数だけ望みをかなえることで返すのが我々の掟だ！」

「そうやって自分だけ生き残るつもりなのか。いや、お前の仲間がかわいそうだ」

他のメンバーがダグラスに憎悪と殺意の視線を向ける。

「仮にそうだとした、いかにお前の影響力を信じるか？」

お前たちの無頭竜の由来はリーダーが部下にも姿を見せないからだだったな。

部下の粛清さえも意識を奪って自分の部屋に運ばせるほどと聞く」

ダグラスは四葉に手を出すのがどういふことか思い知らされた。

何もかも調べつくされ、ただ目の前には死しか見えない状況。

「私は拝謁を許されている」

「そうか、では首領の名前は？」

ダグラスは口を閉ざす。長年にわたり刷り込まれた恐怖と忠誠が目の前を恐怖を凌

駕した。

もつとも、四葉昼夜の前でそれが長く持つはずもない。

モノクロの影が幹部の二人に襲い掛った後、昼夜の隣に控える。

「紹介しよう、俺の罪だ。何よりも力を求め、そのために全てを食らう獣」

かつての俺をコピーして理性を奪ったもの……だったはず。

狼の姿をしているそれは、昼夜の想子サイオンにて形作られていた。

「こいつは悪食だ。俺も抑えるのが結構大変でな、制御を放せばお前たちを食うだろうな」

生き残りが襲われたメンバーを見ると、姿があるが獣が動き出しそれを貪り始める。想子体であるはずなのに、食われた部分は消滅している。

仲間が死ぬに足りず、食われる様を見せられたダグラスはもう抵抗できなかつた。

「ボスの名前は・・・リチャードⅡ^{スズ}孫だ」

「表の名前は？」

「・・・孫公明」

「住まいも含め洗いざらいお願いしようか」

その後、ダグラスは全てを話した。

「・・・私を知っていることはこれで全てだ」

「こちらの質問も終わった。ご苦労だったな」

「信じてもらえたか？」

「ああ、お前は紛れもなく無頭竜首領の側近のようだ」

ダグラスは僅かに喜びを顔に浮かべる。そして、その取り戻した希望は・・・。

「食いつくそう」

「グレゴリー！ ジェームズ！」

獣はダグラス以外の幹部を食い散らかす。

「何故だ！ 我々は誰も殺さなかつたではないか!？」

「そうだな、人形を俺が処分しなければ。他にもバスの事故もか。

まあ、そんなことはどうでもいいが……」

「何……?」

「お前は俺を怒らせた。お前は四葉の領域に手を出した。俺にはそれで十分だ」

そう、理由などどうでもいい。俺を怒らせたことだけがこいつらの失敗である。

「……悪魔め!」

「そうだな、その悪魔の罪にお前も加えてやろう」

獣は姿を消していた。振り返っても見えはしない。

獣は床から巨大な口を広げ、ダグラスを飲み込んだ。

「ヴォルフリート咎人の貪狼……と便宜的に言っておくか」

何もかも食い尽くし、求める獣に名を与える。

自分の内側にあるもの故、精神構造干渉魔法を試して使ってみた。

結果、かなり操作できていた。それでも使うとき以外は封じておくべきだろう。

「罪からでた所業は、ただ罪によってのみ強くなる。

であれば、罪によって得た俺の力は罪を負う事で強くなる……かもしれない」

全ての情報の録音完了を確認、それを近くにいた風間大尉に渡してホテルに帰った。

九校戦編 二十節

「いやあ、よく寝た。今なら国一つ吹き飛ばせそうだ」

「冗談・・・だよな？」

駿に「どうだかな」と答えて食事に向かう。新しい力も試せて邪魔も排除した。

そしてその途中、三高の集団に会う。その中には将輝もいた。

「よう将輝、調子はどうだ？」

「・・・最高だ、今日ならお前を倒せそうだ」

いい目だ。殺す気・・・とまではないが本気の目だ。

「クフ・・・クハハ」

不気味な笑い。世界が変わるほどの幻覚を周りに見せるほどの圧力を与える。

「よかった、俺の思った通りの意志力だ。」

おかげで本気でやれそうだ。退屈させるなよ？」

黒い影が四葉昼夜の後ろで暴れだす。

「その余裕、必ず叩き潰してやる。」

もう負けはしない。覚悟しろよ、四葉昼夜」

その影を一条将輝の後ろの赤い影が押さえつける。

二つの影がぶつかり合い、その幻覚は全て消え去る。

「クハハ、いい気だ。その目に嘘はないな。」

安心しろ、もう邪魔者は現れない。全て食い尽くしてやる」

最早空気がこの世界のものではない。

二人の王子の間には魔界があるとすればそのものと言える空気が張り詰めていた。

誰も動けない。まるで巨大すぎる重力で押しつぶされているような感覚。

「さ、じゃお腹が減ったし飯に行くか」

その空気を破ったのはほかならぬ四葉昼夜本人であった。

一条将輝以外は皆「何故こんな空気の中余裕でいられるのか？」と言う疑問に襲われた。

それほどまでに異様ともいえる雰囲気。それ故に強者であることを知るものは少ない。



「いや〜！ あれは実に暴れ甲斐ありそうだな！」

食事も終わらせ、準決勝の九高の試合の準備をしている。

「……………」

駿と鋼は何も言わない。あるいは何も言えないのかもしれない。

「あれ？ もしかして鋼たちビビってる？」

エイミイが聞くと二人はびくつとして……。

「だつてさっきの見たら……ねえ……」

「一条の奴、こいつが起こした圧力の中でそれを気にしてなかったんだぞ……」

「加重系魔法は使った覚えがないが？」

そう言う事じゃねえ、と言う視線から皆が「あ……」という目をする。

「なに、ビビるのが悪い事とは言わないさ。危険を理解できてるってことだからな。

だが、野暮なミスは許さないことだけ頭に入れておけ？」

そう。だからこそ恐怖で押さえつけることも可能なのだ。

もつと恐れる。俺と言う存在を恐れ、永遠に禁忌に踏み入るな。

俺の家族に、仲間に出すことは許さない。四葉の恐怖を忘れるな。

「安心しろ、怪物の相手は怪物で事足りる。任せておけ」

王子などとは思わない。俺は真正の怪物で、あいつもまた怪物だ。

「さて、試合に行くか。お前らは休んでいい、緊張をほぐしておけ」

真由「なんだかんだで気遣い出来るのも昼夜君のいいところよね」

克人「だがそれは諸刃の剣だ。時に孤立することを迷わないと言う事だからな」



「じゃあ悪いがこれで終わりだ」

渓谷ステージの池から霧を発生。そこに二酸化炭素を溶かして電気を流す。

ただでさえ霧と魔法で発生した鏡でモノリスの位置も隠しているため余裕であった。

テンションは昨日と違い、最高潮であった。

(ようやくだ……。本気で暴れる事ができる……。)

「緊張はほぐれたか？」

二人は頷く。それを見て堂々とステージを後にする。

「勝者とはこの俺のための言葉だ」

三位決定戦に興味は無い。ただただ集中して勝つことを考える。

「ちゆ、昼夜の奴凄く集中してるな・・・」

「気をつけなさい。多分あれに近づくと斬られかねないわよ・・・」

「それは酷くないか、レオ、エリカ？」

俺の声を聴いて二人は体を震わせる。

「安心しろ、俺がいくら狂戦士でも敵味方の区別はつく」

集まっているメンバー全員の前から力が抜ける。

「・・・そんなヤバい空気出してたか？」

「まあ・・・動けば仕留めるくらいだな・・・」

達也から聞いて「やってしまったか」と声に出す。

「皆、次の試合会場が決まったわよ」

そこに真由美さんがやってくる。会場は平原、水はないから爆裂でごり押しはされない。
い。

「要するにエース戦だな。」

障害物がなく、互いのエースを他のメンバーで止めるのは困難だ。

勿論、エースを有利にするためには他のメンバーが援護するべきだが・・・」

委員長が分かる範囲で戦況を予想する。確かにそうなるだろう。

「俺は勿論、あいつも相打ちなんて望まないからそうなるでしょうね」

「王子つてのはどこもかしこも戦闘狂なのか？」

「その理論だと克人さんも戦闘狂になるぞ？」

「・・・俺はそんな風に見られていたのか？」

「いや克人さん、真に受けなくて大丈夫です」と誰もが思ったが誰も言えなかった。

負けないだろうと余裕の表情の者が多数。

朝の光景を見て少しひやひやしている者が少数。

そうでもなくても警戒している面持ちの者がごく少数。

「クフ・・・クハハ・・・」

少年の笑いを聞く者はいなかった。ただその表情は一種の狂気に満ちていた。

「さあ行こう。俺の前に勝てる者はないことを思い知れ」

試合が始まる。本気で争える相手なんだ、思い切り楽しもう。

会場のモノリスの前まで集合する。相手のモノリスもすでに視界に入っている。

「文字通り平原だな・・・」

「シンプルでいいだろ？ 非常に楽しみだ・・・」

もう既に空気は緊張に包まれている。迷いなく立っているのは王子だけである。

試合開始の笛が鳴る。俺はまっすぐ相手のモノリスに突っ込み始めた。

モノリスを開けてもコードを打つのは一苦労だ。なら叩き潰すのが手っ取り早い。将輝も同じ判断をしたようで正面から向かってくる。

「吹き飛ばせ！」

即刻無数の空気弾を発生、加えて歯を削ったナイフを浮遊させ攻撃する。

将輝は加速魔法を用いて回避を行う。行動のキレがピラーズの時と全然違う。

「いいねえ！ もつと楽しませろよ!!」

障壁魔法を多数生成、それを攻撃に追加する。

「チッ！ 舐めるなよ！」

普通の魔法師であれば回避で精いっぱいでの攻撃のはずなのに反撃をしている。

やはり将輝は他の魔法師と全然違う。本気でやるつもりなら一等級だ。

偏倚解放と言う空気砲だが、その一つ一つが正確で強力な一撃である。

こちらも多少回避に意識を向けないといけないか。

鋼 side

隣で自分たちのエースが行っている戦闘は、自分たちの知るものではなかった。

「よそ見している余裕があるのか?！」

自分が相対している敵も気が抜けない相手である。

技術相性は有利ではあるが、それだけで勝てるほど甘い敵ではない。

カーディナルジョージの代名詞である『不可視の弾丸』。

「そうはさせない！」

鋼は鎧を展開する。接触型術式解体プラムデモリッションは非常に相性がいい。

不可視の弾丸は視認した相手にしか当てられず、かつ標的の表面が対象。自分の身の回りに展開する術式解体は表面に張り付く弾丸を無効化した。

ただ、魔法技能自体の相性はよかったとしても・・・。

「十三束鋼、君の鎧は確かに僕の不可視の弾丸の天敵だけど、

君には有効な攻撃手段がないだろう？」

確かに鋼はその防御力から駿とペアで攻撃するときには盾に、

あるいはモノリスのコードの打ち込みをしていた。

レンジゼロの異名も合わせて攻撃手段がないと見てもおかしくはないだろう。

だが、うちのエースが防御力だけで採用するはずがない。

攻撃手段も教えてもらい、鍛錬も怠らなかつた。

ポーチに入れているナイフを抜く。加速魔法をかけて発射する。

「別に手元のを放つなら僕の欠点は関係ない！」

しかし、これでは昼夜の操作と違い使い捨てなため手元のものが無くなれば負ける。仕掛けるなら予想外の攻撃に動揺している今しかない。

加速魔法を使い接近する。そして掌に障壁魔法を生成し掌底打ちを行う。

当たる直前に、障壁を発射して吹き飛ばす。それは加重魔法などでないが。

「これでモノリスでもレンジゼロの戦い方ができる！」

ゼロ距離に接近し、直前で障壁を放つことで質量体を魔法で放つルールに準拠する。

これで攻撃できないとは言わせない。

(ここで勝って、出来損ないではないと証明する！)

それはある意味甘い蜜。昼夜が与えた打ち破るべき壁。

駿 side

鋼の掌底打ちでジョージの体勢が崩れたところに空気弾やスパークを打つ。

相手の最後の一人がモノリスの前から動かないのはもしもの時のためだろう。

いままでこちらが行った戦法は疑似瞬間移動を用いた奇襲ばかりだ。

故にモノリスを警戒せざるを得ない。

だが、昼夜が一条との戦いに夢中になるのであれば……。

「ッ！ 鋼、三人目が来た！ 俺が引き受ける！」

当初の予定通りである。相性のいい鋼とジョージを戦わせるために時間を稼ぐ。

このメンバーの中では一番平凡だが、他のメンバーが尖り過ぎているせいだと思う。自分も悪くない実力だと思っし、仲間も自分の実力を買ってくれている。

初めに司波達也や他の二科生にやられたせいで弱いと思われがちだが、

一科生でもトップクラスの實力を持っている・・・深雪さんや昼夜は例外として。

自分でもプライドが高いのは認める。だからそのプライドのために戦う。

多分自分はそれが一番性に合うと思うから。

昼夜 side

「やるじゃねえかやるじゃねえか！　だがまだ足りんぞー！」

空気砲をよけながら次々と攻撃を繰り返す。

現状は攻撃数ではこちらが有利、にもかかわらず仕留めきれない。

「本当にお前はやりがいがある！」

「くッ！　簡単にやられるわけにはいかないッ！」

攻撃が変わる。空気砲ではなく氷の弾丸・・・ドライブリザードの用法だ。

「こんな程度で俺が倒せると・・・？」

氷に何やら魔法がかけられている。

「いやこれは・・・ッ！」

氷を障壁で押し返す。その後氷が蕾のように花開き、破片が飛び散った。

「お前どんな勘してやがんだ!!」

・・・なるほど、爆裂の対象を水に限定することでレギュレーションを通過。

内部に水のある氷を生成、それを射出後爆裂で発破したわけか。

「成程、いい腕だ。だがその程度ではまだ足りてないぞ。」

万策尽きた・・・なんてことはないよなあ？」

「・・・もちろんだ。どんな手を使ってもお前を負けさせてやる！」

九校戦編 二十一節

鋼&駿 side

「クハハア！ そんなもんかあ！！」

最早向こうで行われている戦闘はこちらとは比べ物にならなかった。

だが、それに視線を向けるほどこちらの戦場も生ぬるくはない。

駿は空気弾などを用いて合流させないようにする。

鋼は直接の魔法を鎧で無効化、体術で他の攻撃を回避し接近し攻撃する。

負けず劣らずと言うには迫力に欠けるが、プロ目線で見れば高次元な戦いであった。

互いが上位の者だから起きる拮抗に至っている。

確かにこの勝負はエース対決だ。圧倒的なまでのキングが勝負を決める。

だが、互いのメンバーがこの二人ずつならそれだけで戦況を変えかねない。

それが分かるほどに、同世代でも圧倒的な実力者たちだった。

昼夜 side

「その程度で俺を負かせるとは、片腹痛いぞー！」

「この怪物めッ！」

いや、お前も十分怪物だと思いつつ、こいつを仕留める手段を考える。

こちらも同じ手段を用いれば仕留められる可能性は高い。

だがそれでは意味がない。奴の手をまねて勝つてもその勝利に価値はない。

とは言えこれ以上の破壊力はレギュにかかりそうだし、数を増やすのも芸がない。

結果、選んだのは停滞であった。要するにじつくりと味わつてやると言う事である。

「どうした？ 態度のわりに攻撃が甘いぞ！」

「最悪、俺の方が想子保有量は多いのだから持久戦は俺有利なのを忘れるな？」

まあ最悪・・・致命傷にならないければいいだろうし多少本気を出しても大丈夫かもしれん。

れん。

しかし、持久戦はこちらに有利なのは将輝も理解しているはずだ。

なのに一向に仕掛けてくる気配がない。

何を企んでいるのかが分からない。仕掛ける緊張を隠す技術も流石でどこに罠があるか。

るか。

(そうなるか勝手が変わってくるか・・・)

下手な罠の介入を防ぐには最速で仕留めるに限るが、

しつこいが互いの防御技術がレギュを上回っていて決定打を出す事が出来ないのだ。

そこでうまくダメージを出す方法を考えていたが、違和感に気づく。視界に白い靄、否、霧が発生している。

いや当然だ。水を気化させているなら霧は発生するだろう。だから気に留めなかった。

戦闘に支障の出るほど濃くはないし停滞を破る手段が最優先だと考えたからだ。

そう、害のないほどで戦闘上自然発生するものだから気づかなかった。

それが罠であることに。その攻撃事態が布石であることに。

将輝 side

着々と準備は整っている。見ている限りではまだ昼夜は気づいていない。

あいつなら気づいていないふりをしている可能性もなくはないが、その時はその時だ。

少しずつ、氷内部の水に二酸化炭素を混ぜていく。

自然と霧に二酸化炭素が混じり始める。未だに感づいた気配はない。

霧にはすでに十分な二酸化炭素が混じっていた。

頃合いである。これ以上は昼夜に気づかれる恐れがあった。

昼夜が先ほどの試合で見せた手ではあるが、仕込みはうまくいったらしい。

ダミーとしていくつものドライブリザード、そして偏倚解放を発生する。流石にこれには驚いたようで、対処のために奴の判断が数瞬遅れる。それを逃がすほど、一条将輝は甘くない。

昼夜 side

(チッ！ 無理矢理数を増やして仕留める気か!?)

数も力を量る値の一つだ。だが、それもこちらが上回っているわけだ。

全てを一瞬のうちに弾き返す。だが、その直後の魔法には反応しきれなかった。

『スパーク』、それだけではただの電撃で性質上方向性もあるので防ぐのは容易である。

だが、そこで気づいた。霧には二酸化炭素が混じり非常に電気を通しやすくなっている。

それに加え、霧をこちらに収束し俺だけを確実に仕留めに来ている。

「成程、これは一本取られたか・・・」

実にいい腕である。才能も言わずもがな、努力に執念、何より意思。

間違いなく同世代でトップクラスで俺のライバルを名乗る者としてとしてふさわしい。

自分の中で鳴る鼓動は、この敗北を否定していた。まだレギュ内では上があるわけだ。

その鼓動に答える。俺の前に勝てるものはあつてはならない。

「力だけは貸してもらおう。『試作^{ゾールド・ネメア・レブリカ}く貪狼の毛皮』」

観客 side

歓声が上がった。今までの試合で四葉昼夜に反撃を食らわせたものはいなかったのだ。

そしてこの一撃は間違いなく、四葉昼夜に当たっていることを誰もが確信した。

そう、一高生徒を含む誰もが……。

「嘘ッ！」

誰が言ったか、少なくともその驚きに否定する声もない。

その驚きすらも、誰もが同感していた。誰もがその結果を気にしていた。

収束された霧が薄れていく。観客だけに限らず、選手までもがそこを見ていた。

霧の跡地には……誰も存在しなかった。

再び驚きの声上がる。だれもが四葉昼夜の所在を疑問に思った。

その答えは、すぐに帰ってきた。

「後ろだッ！」

昼夜 side

地中から将輝の後ろに回り込んでいた。

『試作^{ヴォルド・ガルム・レブリカ}の猛爪』 ツ！』

腕に纏った想子による手甲は、将輝の情報強化にぶつかり弾き飛ばした。

現れた俺の見た目は白と黒の毛で彩られた狼の皮を被っているように見えるかもしれない。

「全方位に加え上空まで警戒したのは流石だが、地下は予想外だったみたいだな」

「く・・・ッ！」

以外にもまだ意識はあるようだ。今のでノックアウトかと思ったのだが。

「いやはや流石だ・・・俺もこれを使うとは思っていなかった」

「くそッ！ やつぱりお前は怪物だ・・・！」

「安心していい。その怪物が、お前も怪物と認めてやったんだからな」

鋼 side

「お、おい・・・あれは一体何なんだ？」

駿の質問だ。恐らく、みた限り形状が一番近い僕に尋ねたのだろう。

だが、僕の答えは・・・。

「分からない……。少なくとも僕の鎧とは全然違う」

そう思った理由は分からないけど、形状だけでも類似したものを使う故の勘かもしれない。

最早こちらの誰もが戦闘を忘れていた。だれも、何も言えなかった。

昼夜 side

「お前はよくやった。誇ると良い、この四葉昼夜が認めてやる。

この世代で俺の次に強いのは間違いなくお前だ」

「くそオツ！」

爪で腹を殴り、将輝の意識を吹き飛ばした。

「さてジョージ、まだやるかね？」

相手の参謀である吉祥寺に尋ねる。

「将輝は降伏しなかった。だから僕も最後まで戦う」

「とても賢い選択とは言えんが……どうせならその君も楽しませたまえ」
蹂躪であった。味方さえも何も言わずに、出来ずに立っていた。

それを臆病と言うものはいない。勝者は四葉昼夜ただ一人であった。

少年は言う。自分の最大限で暴れられて最高の試合であったと。

連れの二人は言う。最後は味方と言う事も忘れ身構えてしまっていたと。誰も否定するものはいない。彼は最恐であり最凶であると。

九校戦編 二十二節

「あゝ！ 最ツ高の気分だ！」

モノリスが終わってからも熱は冷めてなかった。

あれほどの試合はそうそうない。これほどの試合が全部なら最高だったのに！
勿論気分も最高だが、俺の力も示したわけだからそうは手を出されないだろう。
手を出せるのは余程の馬鹿か命知らずだ。

「お前らも思う存分飲み食いしろよく！ こういう時は景気よくだ！」

言つた通りのモノリスの優勝に加え、勿論新人戦も優勝した。
なら当然小さな宴会くらいは開いてもいいだろう。

一応自分が祝杯を挙げて、皆がドンドンと食事を勧めていく。

矢張り新人戦優勝と言うのはそれだけで皆喜んでいうようだ。

気を抜きすぎないように・・・と言うのは、先輩たちに言うまでもないだろう。

モノリスとミラージの選手だ。そう簡単に油断するような人たちではない。

「昼夜君、あまり調子に乗り過ぎないようにね？」

「当然ですよ会長、この程度で油断できるほどいい性格してないですから」

いつものような苦笑い。ある意味十師族としての関係は長い方だから呆れてるのか。まあそれでも少し気が抜けてるのは否定しない。何時までも緊張を保てる人間はいない。

「ただ俺小食だから対して食えないんですけどね」

それを聞いた真由美さんは笑みを浮かべた。それを見た俺は嫌な予感がした。

「……会長？」

「安心していいわ。ちゃんと昼夜君もしっかり食べれるようにするだけだから」

(あ、これダメな奴だ)

真由美さんは何か、ニヤニヤしながら女子の集まるところに向かった。

そしてしばらくすると……。

「「昼夜(君)、あくん」」

どんどんと口の中に大量の食べ物が入り込まれる。苦しい……。

「ちよ……グルジ……ゲホ……」

あの小悪魔、どうせ「遠慮するから無理矢理位がちょうどいい」とでも言いやがったな。

「昼夜、あくん」「昼夜、はい、あくん」「昼夜さん、あ、あくん」

「昼夜様、どうぞ、あくん」「昼夜お兄様、あくんです」「昼夜兄い、あ、あくん」

前から深雪、雫、中条先輩、水波、泉美、香澄である。

後ろの三人？ どこその悪魔が連れて来やがったよ・・・権限の乱用だ。

因みに大体この六人に怖気づいてこなくなった。

後来てるのは、半分遊びでやってる感じの奴等だ。（主にエイミイ&真由美）

「あ・・・ちヨ・・・コレ・・・ダメダ・・・」

そこから暫く気を失っていた。目覚めれば腹は非常に痛かった。

だが、こんなことになってあいつが黙っているわけがないだろう・・・。

「昼夜、ずいぶんの良いご身分だな」

・・・そう、深雪がこんなことをした以上達也が静観しているはずがないのだ。

「安心しろ、嫌でも俺がまだまだ食わせてやる」

「や・・・やメろ・・・コレ以上はモウ・・・アッ」

今度こそ完全に、意識が途切れた。もう起きる気力も残ってなかった。

てか・・・別に俺が望んだことじゃないのに・・・。

鋼&駿 side

「ソーキそば・・・ゴーヤチャンプル・・・海ぶどう・・・

デザートにサーターアンダギー・・・」

三人の部屋にて僕らのリーダーは寢言を話し出していた。

「おい、こいつ夢の中でも飯食ってるぞ・・・」

「どちらかと言うと、うなされてる感じだけど・・・?」

「や、やめろ・・・それ以上食つたら・・・腹が破裂・・・スル・・・」

「・・・・・・・・」

どうにも先程のことでトラウマか何かを思い出したようだ。

「俺ももつと家柄があればあんな風になるのかね?」

「どうだろ? 昼夜はどこかカリスマじみたところがあるし・・・」

ただまあ、あれを見て羨ましいと思わない男子はいないだろう。

正直、僕だつて羨ましい。駿の気持ちはよく分かる。

「まあ昼夜は確かに強い。正直俺たちとは比べ物にならないと思う」

「それには同感・・・どんなにやっても勝てそうになさそう・・・」

ついでに言うとな練習のメニューも正直異常であつた。

昼夜の凄さが分かっている僕等でさえ疑問に思うほどに。

「僕等の体力が尽きるような訓練を毎日僕らの倍の時間してるらしいからね・・・」

体力とかも自信があるつもりなのに桁外れだ。

「あいつただ鍛えているだけであそこまでなるもんなのか・・・?」

「どうだろう・・・鍛えるのレベルが違う気がするけど・・・」

その差は才能か努力か。どちらにしろ大きすぎる。

「追いつきたいなら僕等もひたすら努力するしかないだろうね・・・」

「なん十年努力したら追いつけるんだろうな（呆れ）」

呆れるほどなのはよく分かる。多分、何もかもが違うのだろう。

くだらない話をして時間を潰して僕たちも眠りについた。



昼夜 side

「うう・・・腹が痛い・・・」

朝起きたのだが、半端なく腹が痛い。それ以外考えられない。

「達也の奴もとどめさせる必要はないだろ・・・」

あの時点で死の淵に立っていたのに・・・昨晩はあの世との狭間を歩いた気分だ。

風に当たりに外に出るが正直あまり気分は改善しない。

達也が俺の食生活を知っていることを考えると底知れぬ宇宙的恐怖を感じる。

san値は普段から狂ってるから何の問題もない。

自分は常に狂っている。正直碌な奴じゃないとは自分も思う。全く、なんで皆こんなろくでもない奴のもとに集まるのかね？

夜風に当たっていると、後ろから人の気配。間違うはずもない。

「将輝か、少し付き合え」

「はっ?! なんてお前がここに……」

「何、異常なまでに食わされて腹痛がヤバいんだ……」

将輝は黙って何も言わない。その目からは呆れがあふれ出ている。

「食わされたんだ……。どこかの小悪魔の策略にかかってな……」

「真由美さんか……。悪戯好きなあの人らしいが……」

小悪魔は共通認識である。年下で男子故に昔多少遊ばれたのだ。

「あの人にはそう言うところじゃかなう気がしない……」

「同じくだ……」

戦闘なら負ける気はしないのに……。

「しかし……お前まだあの鎧のこと説明してないだろ?」

「ん……。ああ、『貪狼ヴォルド・ネメアの毛皮』か。興味があるか?」

将輝は頷く。まああれの種明かしはあまりしてないが。

「効果としては鋼の装甲と同じだ。毛皮は直接じゃない魔法も無効化するが……」。

「仕組み自体が全然違うからな。装甲も力技だが、毛皮はそれ以上だ」

「術式解体をそんな簡単にバンバン使われても困るんだが・・・」

「仕組みが違う」と念を押す。あれは力技なのかも悩みどころだ。

「言うなればあれは拒絶の衣だ。ただ何もかもを近づけないだけの」

それ以上の仕組みは言わない。なんでも教えるほど甘くはない。

「まあ碌な魔法じゃないから興味があるなら自分で考えな」

まあこんなのは余程の意志力がないと再現不可能だろうし。

正直に言っ、俺でも相当テンション上がってないと発動できない。

「あれを使う程俺を本気にさせたんだ。誇っていいんだぞ？」

「お前何様だよ・・・」

俺様だとかは答えない。まあ考えないわけではないが。

非常に楽しかったぞ。来年は何の競技になるかはわからんが楽しませてくれよ」

「はいはい、まあお前が失望しない程度にはやってやるよ」

とか言ってるが、こいつも負けたままにするはずがない。

「じゃあ・・・」

俺は一言、

「俺は腹痛がヤバいんで部屋に戻るわ・・・」

「お、おう・・・お大事にな・・・」

今度あの小悪魔絶対に苦しめてやる・・・。

九校戦編 二十三節

将輝との会話の後、部屋に戻ると何故か胃腸薬が用意されていた。

直感的に毒物ではないことを察して飲むと効果絶大、かなりましになった。

「ふむ、充分体調がよさそうだな」

「克人さんですか・・・昨日そんなにひどい顔してました？」

「一言で言うと・・・瞳に絶望が満ちていた・・・」

「おい、なら助けるよ」と口をつきそうになるが、何とか丁寧に聞くことに成功した。

「女性が食わせてくれるのだから、止めるわけにもいかんだろう？」

「ああそうですね克人さんはそう言うお方でしたね」

天然紳士って怖いよね。いや、この人の性格分かったうえで小悪魔はやりやがったな。

「で、今日予選でしょう？ コンディションはどうなんですか？」

「いや、流石に昨日のお前たちの試合を見たら恥じない試合をせねばとな」

昨日の試合はネットにて全世界で既に数万以上の再生数だそうだ。

俺は楽しめたから正直どうでもいいが。

「いや、出来ることなら克人さんともやり合いたかったですね」

「練習では何本もしただろう？」

「練習じゃなくてもっと本気の、風紀委員の推薦の時なんか最高でしたね！」

あの時は調整も面倒だったが、あれだけ本気を出せることは滅多にない。

まあ、今回も相当本気だったが。強者との戦い程湧き上がる物はない。

「そう言えばあの時は負けてそのままだったな。どこかでその借りは返さんとな」
負けっぱなしと言うのは世間体もよくはないが、今回は私怨だろう。

ただ、俺と克人さんが本気でやり合えばこの会場くらいは吹き飛びかねない。

「やる時にはしっかりと場所をやらないとすね。

表面を凍らせて海上でもやらないとどうなることか・・・」

「そうなると思うが氷が割れてお前が沈むことになるがな」

あ、うん、結構本気でやり合うつもりだこれ。

「まあ、見てて楽しい試合をお願いしますよ」

戦いはやるに限るが、見ていても楽しい試合は矢張りある。



「はく、もつともつと楽しい試合をしたかったなあ〜」

そう、命を奪い合うくらいの本気の試合……考えるだけで震えそうだな。

「昨日の試合も相当ヤバかったと思うが……」

昨日のも楽しかった。あんなに血沸き肉躍る試合はそうそうない。

ただもつと……血の雨が降り、肉片が舞い踊るような殺し合いもしたい。

「実力のセーブって面倒くさいんだよ。全力で壊せるモノが欲しいくなるんだよな」

モノが『物』なのか『者』なのかは言わない。やっぱり後者が好きだが。

「で、深雪は今日のコンデションはどうなんだ？」

ミラージの試合は体力をかなり消費する。まあ深雪なら問題ないだろうが。

そうじゃなくても、愛梨を相手にするのはかなり大変だ。

コンデションがいいにこしたことはない。

せっかくあれだけの猛者とやり合えるのだ。最高のテンションでやるべきだ。

「問題ないわ、お兄様が忠告してくれたしね」

流石シスコン、妹の体調管理はばっちりであったか。

「昼夜、何か失礼なことを考えなかったか？」

「チョットナンノコトダカワカラナイデスネカンチガイシテルンジャンイデスカ？」

確かに強いやつとは戦いたいが達也と殺り合うのはごめんだ。
まだ分解を防ぐ手段を見つけてはいないのだから殺り合うのは分が悪い。

「まあ、深雪なら愛梨相手にも遅れはとらないだろ。」

他にも上級生とやり合えるんだ、しっかり楽しめよ」

無論、負けるなどとは思っていない。楽しむうえで勝つものだ。

つまらない戦いはやりたくもないし見たくもない。

何より、経験にもなりにくい。楽しめてこそ記憶に残る。

だから、殺し合いも全力で楽しむのがモットーだ。

そもそも、俺に歯向かう様な愚者の命に価値などないのだから、

俺が遊んでやって価値を与えてやってるわけで、感謝してほしいくらいだ。

「ま、問題が起ころうし、安心して全力をだすと出すといい」

「そうさせてもらうわ。何かあっても昼夜が助けてくれるでしょうし」

「その何かが起きないって言ってるんだが・・・」

それに俺より先に達也が助けるだろうし、俺の出る幕はもうないだろう。

内側にいたやつらは閣下が消してくれたし、外部の奴らは俺が消した。

それを理解したうえで今更介入できる奴はいないだろう。

やるならやるで大バカ者だから駆除には困らんだろうし。

既にそういうやつがいはいかは部下に目を光らさせている。

役に立つ部下ほど、手に入りにくいものはないがそこは苦勞せずに済んでいる。

さて、少しやらないといけないことがある。せめてミラージの決勝までに終わらせよう。



「昼夜様？ 深雪様の試合を見なくてもよろしいのですか？」

「見たいのはやまやまだが、気になることがあつてな」

水波を連れて、部下に用意してあつたホテルの一室を使う。

気になるのは今回の騒動に関してだ。いくつか不自然なところが思い当たつた。

『四葉家』アンタツチャブルは魔法に関連の仕事をするものからは禁忌だ。

ましてや、あの人形みたいな物を扱うや奴らはよく理解してるはずだ」

俺からすれば、何故こんな相手が手を出したのか本気でわからん。

「ただ力を過信したのでは？ あの人形、確かに戦力としてはそれなりのものかと」

「馬鹿言え、ここは日本、つまりは四葉の陣地だぞ。」

文字通りに鬼の居ぬ間に洗濯なんてできると思うか？」

本家の位置もほぼ隠蔽してゐるのに、俺のいる場所で工作などリスクが大きすぎる。

まあ今回のようになるのが関の山だ。故に決行に至る理由を発見できないのだ。

「てことでこの資料、今日の晩までに整理するぞ」

机には山ほどの書類があつた。それを見た水波は青ざめる。

「えつと……昼夜様？ 私以外の部下はどちらに？」

「それがだな……昨日の仕事の後、処理すれば自由にしていいと言つたらな……」

どうにも飲みまくつたらしい。そして現在二日酔いだ……

少し制裁を加えたがこういう仕事ができる状態じゃない。

悪いが、水波だけが頼りだ。一山でいいから手伝つてくれ……」

正直、流石に10個弱の山は俺一人じゃ整理しきれない。

あの馬鹿ども、偽造書類とかもたくさん用意しているらしくこれほどの量になつた。

本当に頼れるのは水波だけの現状、一山処理してくれたら儲けものなのだが……

水波 side

「……悪いが水波だけが頼りだ。一山でいいから手伝つてくれ……」

（わ……私だけが頼り……！ つまり二人きりで……）

いや、普段から結構二人きりですけどいつもの場所とは違って・・・」

水波の頭の中は混乱状態だった。自分だけが頼りという言葉を何度も復唱する位に。「わ、分つかりました！ この桜井 水波、全力をとって頑張らせていただきます！」

「元気なのはいいことだがこういうのに根詰めすぎるなよ・・・」

ただの整理に集中しすぎたら心がすぐく疲れるから」

それも聞かずに水波は仕事に没頭していた。

ただ頭にあつたのは「昼夜様のために」だけであつた。

九校戦編 二十四節

「はあ．．．やつと六山片付いた。水波、そつちは．．．つておい！」

見ると、残りの四山弱が終わろうとしていた。

しかもこちらの声が聞こえていないようだ．．．。

「えつと．．．次の山は．．．」

「もう終わったぞ。よくやつてくれた」

「え？ ほ、本当ですね．．．流石昼夜様です」

水波はキョトンとして言った。

「水波、お前が四山程やつたんだぞ。」

軽く見たが、ミスの一つもない。よくやった、マジで助かった」

「え．．．そんなにですか？」

．．．水波はたまに周りが見えなくなることがあるのだろうか？

「頑張ってくれたからには褒美をやるのが道理だが．．．何か欲しいものはあるか？」

「い、いえ！ そんな恐れ多いこと．．．」

「恐れ多いって事は欲しい物があるんだな。遠慮は無用だぞ？」

顔を真っ赤にする水波。それを昼夜は言いにくい事と判断した。

「そもそも、半分以上は昼夜様がやったのですから私の努力など些細な……」

「俺の2/3以上のペースでやれて些細とは……案外に強欲なんだな」

言葉に詰まる。昼夜とて退く気はない。

ガーディアンは道具である。だが彼は努力と結果を等しく評価する。

褒美をやらないのは彼の主義に反しているのだ。

「言わないなら適当に見繕うが？」

「そ、それで結構です！」

バッグの中をあさる。彼のバッグには大量の魔法具とも言えるものが入っている。

曰く『暇つぶし』なのだが、明らかに暇つぶしの域を超える代物も少なくない。

「ああ、これなんて良さそうだ」

そう言って取り出した物を、何かしらのパーツに取り付ける。

「水波、今回の褒美だ。受け取れ」

「あ、はっ、はい！」

投げ渡された物は、桜のヘアピンであった。

「桜の花言葉は『純潔』『優美な女性』『精神美』でな、

精神防御の効果目的で作ったんだがどうにも俺とは相性が悪いらしい。

水波なら十分に効果が発揮すると思う。お前の起源も込みでな」

水波は首をかしげる。昼夜に使えない物を自分が使えるとは思えないといった様子だ。

「女性に向けた言葉、水波の姓。

そうじゃなくても純潔や精神美は考えれば俺と相性が悪すぎる。

取り敢えずつけてみる」

おどおどとした感じで前髪に付ける。

「ふむ、よく似合ってるぞ」

「あ、ありがとうございます／＼」

「効果としては精神干渉に対する耐性や、ジャミングの不快感くらいは消せるはずだ」

さて、想像以上に早く終わったので深雪の試合を見に行かなくては。後ガ怖イカラナ。



言うまでもないが深雪は快勝を重ねていた。

飛行魔法を用いてである。

「深雪の決勝入りは確定だな」

「ほかの魔法師も使っていて、ほとんど差が無いように見えますが？」

「なら聞くが水波、お前はあれを続けられるか？」

「・・・無理ですね」

その答えは目の前で実証された。

飛行魔法を使っていた選手の一人が緩やかに高度を下げていき着陸したのだ。

「安全装置も問題なく作動、いい宣伝の機会だな」

想子出力が低下すれば自動で1/10Gに変数を固定して着陸する。

そもそも短時間で魔法を何度もかけ直すわけだから想子消費量は莫大だ。

加えて進行方向、重力制御、発動時間と複雑な魔法式でもある。

『誰でも使える魔法式』だが、『誰もが同じように使える魔法式』ではないのだ。

となると当然、目は別のステージで行っている難敵に向かう。

「一色様は飛行魔法を使っていないみたいですね・・・」

「懸命だな。愛梨なら使わずとも決勝に進出は容易だ」

愛梨は飛行魔法を使う選手を尻目に、一方的に点を稼いでいく。

古代ローマの英雄、カエサル名言として『来た、見た、勝った』がある。

これは要するに勝利した事を簡潔に述べたわけだ。

それに合わせるなら愛梨は『来た／見た／勝った』である。

反射などではない。すべてが同時といっても差し支えない。

「さて、達也の奴は一体どうやってあれに対応させるつもりだろうな？」

仕組みを何となく昼夜に理解できる以上、達也が理解できないことはあり得ない。

対策を打つのか、或いは押し通すのか。

「これは楽しいことになりそうだ」

試合が終了して、昼夜は達也たちと合流していた。

「深雪はさすがだな。あれだけ飛行魔法を使っただけでいいのか」

「ええ、決勝までは時間があるし、最高のコンディションで挑むわ」

そこで声を挙げたのはエリカだった。

「でも一色選手の『稲妻』^{エクスセル}も凄かったよ？」

あれって結局どういう魔法なのかな？」

達也が昼夜の方を見る。自然と皆も昼夜のほうを見ていた。

「初めの仮説は一色のお家芸である神経への干渉で反射速度を挙げていると思ったが、

あれは反射の域じゃない。即ち、見てからの反応じゃない」

達也を除き一同は首をかしげる。

「神経で間に合わないなら可能性は一つ。」

あれは精神で見て精神で動いてる。一種の精神干渉魔法だろうな」

神経系を無視して知覚するなら、目で見るとより早く理解できる。

神経系を無視して動くなら、反射より早く動ける。

四葉の魔法式でも精神干渉をこのように用いる手法は見たことがない。

流星群や爆裂と比べ派手さには欠けるだろう。

飛行魔法に比べ華やかさには欠けるだろう。

だが、それらを補って余りあるほど速さを得ている。

『エクレール・アイリ』は地味に見えるかもしれないが、確かなほどに鬼才だ。

「何よりも驚くべきは、天性の才能じゃなく努力で神速の域に至った事だな。」

達也、深雪、これに対してどう出るつもりだ？」

それに対して達也は不敵に笑い、深雪も薄らと笑み浮かべるだけであった。

九校戦編 二十五節

ミラージの決勝まであと少し、昼夜達は既に会場で席をとっていた。

「昼夜、深雪さんは一体どんな方法を使うと思う？」

駿の言葉は、ほかのメンバーの言葉を代弁したものでもあつた。

「難しいな。妨害ができるなら兎も角……」

「跳躍ルートを妨害するのは？」

「稲妻エクレールの説明を忘れたか？」

愛梨は俺たちよりも先に理解して動く。

ルートの妨害は現実的じゃないな」

今まであらゆる事を理解しているように余裕綽々だった彼が、

穴を見つけられないというのが皆を押し黙らせていた。

「それって、深雪に勝ち目が無いってことですか……？」

ほのかは恐る恐る訊ねた。もし彼が頷いたなら誰も否定できない。

「まさか？ 俺には思いつかないだけで、達也なら思いつくかもしれないし、

それに深雪が愛梨に劣っているわけじゃない以上、互いに勝機はある」

「でも、このルールだと一色選手の稲妻は最適だよ？」

こんな事言いたくないけど、深雪が飛行魔法使っても勝ち筋が見えないんだよね」
エリカの言葉は、再び皆を落胆させた。

それだけ愛梨の稲妻の恐ろしさを理解しているのだろう。

「正直驚いたな。エリカがそんな悲観的推測をするとは思ってなかった」

エリカはムスツとした表情を浮かべたが、ひとまず続く言葉を待った。

「まあまずは訂正を幾つかすべきだな。」

1に、稲妻は最適でなく模範解答だ。ミラージュで先に知れるのはそれだけ大きい。

次に、愛梨も飛行魔法を使える。あれは誰でも使える事に重点を置いてる。

愛梨なら使えないなんてことはないだろうな」

「否定的な意見しかないんだけど？」

「落ち着け。まず敵に関して正確な情報が必要だったただけだ。」

さて、以上がマイナス方面の訂正だ。ここからは深雪の有利点だ」

安堵したメンバーを見て、昼夜は続ける。

「まず愛梨はフルで飛行魔法は使えない。あいつの想子量は普通より少し多い程度だ。」

稲妻だけならともかく、飛行魔法と併用では最後まで持たない。

次に・・・まあ深雪が愛梨より遅いとは限らないってところか？」

これに関しては見たほうが早いと、昼夜は選手が出てきたフィールドに視線を向けた。

言うまでもなく、矢張り注目選手は愛梨と深雪だった。

開始と同時に全選手が動き出す・・・のだが。

「まあこうなるよな」

深雪と愛梨の二人だけがスコアを重ねていた。

いや、他の選手も点は取れているのだが、たまたま近くに発生しただけだ。順調に点を重ねられているのは二人だけだ。

「深雪の触覚、或いは嗅覚とでもいうべき感覚は世界からの寵愛と言っていい。

感知してからだから稲妻には追いつかないが、

愛梨から届かないボールをとる程度は容易だな」

「それでも、やっぱり深雪が遅れをとってる」

「まあどんなに言っても後手だからな。とは言えここからだろ」

加えて愛梨はまだ飛行魔法も使っていない。このままなら負けは必至だろう。

「この状況、昼夜君ならどうする？」

「会長達がいっつの間にか来たのかは、まあいいとして。

「一つの手段としては、こちらも稲妻を使うとかですかね？」

『ナニイツテンダコイツ』という視線が昼夜を突き刺す。

「別に効果がわかれば魔法式の構築自体は可能でしょう？」

「そこから余分な式を除いたり慣れるのは使わないとわかりませんが」

「この程度なら達也であれば容易だろう。だが、この手は無しだろう。」

「そうなる」と経験の差が出てしまう。達也はそんな手段を選ばない。

「そうなる」と、まあこうなるか」

「昼夜が言うと同時に、会場で声上がる。」

「深雪のスコアが愛梨に追いついたのだ。」

「えっと、どういうことでしょうか？」

「見たとおりですよ」

「中条先輩の質問を昼夜はその一言で返した。」

「愛梨は確かにボールをとったのに、スコアが加算されない。」

「いや、空中に浮くボール自体が増えている。」

「もしかして……ダミーを作成したんですか？」

「流石ほのかだな。光波振動に関してはこのメンバーでも頭一つ抜けている。」

「稲妻は確かに誰よりも早く視て動けるが、逆に言えばそれまでだ。」

「ダミーを判別する効果は勿論、空中機動が自由になるわけでもない」
結果として、早いだけならダミーでほぼ封殺が可能だ。

「ギャンブル要素もあるし、飛行魔法で空中機動を上昇されると厳しいが、
そうなればスタミナ勝負で負けかねないしな」

発生させた深雪にはダミーがわかる以上、深雪が有利なのは言うまでもない。

ダミー自体は相手に対して害は無いのでルール違反にはならない。

一定の期間でダミーはランダムに再発生する。

愛梨も量子量の差については理解しているはずだ。

それを考慮すれば飛行魔法はまだ使いにくいだろう。

結局第一ピリオドは深雪優勢で終了した。

「第二ピリオドはどうなりますかね？」

「恐らく中盤から飛行魔法を使ってくるでしょうね。」

それを考えるとスコアがあまり開いてない現状は不利とも言えますが」

稲妻と跳躍魔法しか使ってなくて優勢がやっとな。

やはり稲妻はミラーズで最強と言って差し支えない。

ダミーにできるのは、その優位を誤魔化すのがせいぜいだ。

それで追い越せるのは深雪の才と努力のなせる技だ。

そうこう言っている間に第二ピリオドが始まる。

矢張り深雪はダミーを発生させた。だが、予想外は常としてあるものだ。

「飛行魔法を短時間発生、一定範囲のボールを纏めて処理したか」

「でも、ダミーの量を増やせばまだ・・・」

「ダメだな、飛行魔法のだけじゃなくて投影魔法もかなりの連続処理をしている。

これ以上下手にダミーを増やせば、深雪の魔法外処理に支障が出る」

スコアはみるみるうちに巻き返される。

深雪も頑張っているが、スコア差はどうしても縮まらない。

「あれ？ スコアが開かなくなった？」

「ダミーの発生個所を纏めただけだ。」

範囲内に多い場所狙うなら、ダミーをまとめれば誘導できる。

とは言え傷口を防ぐのがせいぜいだがな」

「それなら孤立しているのを狙えばいいんじゃない？」

「そうならないように、ダミーだけじゃない郡も用意してるんだ。」

逆に孤立していてもダミーのだったてある。

それなら纏めてチェックできる群を狙ったほうが効率がいい」

第二ピリオドは愛梨優勢と、一高としてはうれしくない結果だ。

「これって不味くない？ 第三ピリオドは迷いなく飛行魔法使うでしょうし」

「不味いかと聞かれれば、まあ九死に一生を得られるかといったところか。

差をつけたかったが、むしろつけられてるからな」

「まだ一生の余地はあるの？」

「あのびつくり箱から何が飛び出すかは俺にも分からないからな」

その時、昼夜の電話がなった。

「悪い、少し出る」

「達也、こんな時電話なんて悠長だな？」

観客席からでて確認した電話相手は、絶賛深雪のメカニック中の達也であった。

『頼みがある。深雪の封印が変わってもらえないか？』

「待て、すぐそっちに向かう」

文字通り神速といえる速さで（魔法も使って）選手控えまで向かった。

「来たぞ。そして達也、お前の頼みじゃ聞けない。

これは深雪の戦いだ。決めるのは深雪だ」

時間がないので色々と言葉は略されていた。

二人は昼夜の言葉の意味もこれだけで理解できる付き合いだった。

「私は・・・負けたくありません！ 何より、自分の全力をもって戦いたいです！」
達也も頼むように昼夜に向けて目を伏せている。

「深雪、手を貸せ」

深雪は一瞬驚いたように、そして直ぐに笑みを取り戻し手を差し出した。

昼夜はその手を握り、目を閉じる。ただ集中するためだけに。

（魔法式『誓約』^{オース}、照準完了。これより発動者の移行を開始する。

移行用魔法コード認証・・・成功。

続いて起動中魔法『誓約』を一時凍結・・・成功。

『誓約』発動者移行式、起動・・・発動・・・移転完了。

凍結状態の『誓約』を解凍・・・成功・・・起動・・・成功。

（これより『誓約』の発動者は四葉 昼夜が代行する）

「今日だけだ、ここまですらせたんだから勝て」

「ええ！ 絶対に勝つわ！ ありがとう昼夜」

「では俺は戻るぞ」

さて、これは愉快的な試合になりそうだ。